百周年記念誌

くすの木

埼玉県立川越高等学校

智を耕して
徳を教く

校歌

古谷喜十郎 作詞
内田 条太郎 作曲

一、紫匂う武蔵野の
天与も深き川越に
教えの庭の規模広く
礎据えし学舎は
秩父の嶺の揺るぎなく
入間の水の末長し

二、師弟の情思濃かに
切偲の友誼亦厚く
華美にはしらず実に著き
智を耕して徳をしく
我校風は三芳野の
社頭の梅と薫るなり

三、螢に捜る鳥の跡
雪に尋ぬる文の道
大和心に西の才
雄飛の翼養いて
高き誉を初雁の
城址の月と輝かせ

川越高校77代目の門、いま新たな歴史が開かれる

1940年頃の校舎全景（西側から）
当時としては珍しい航空写真

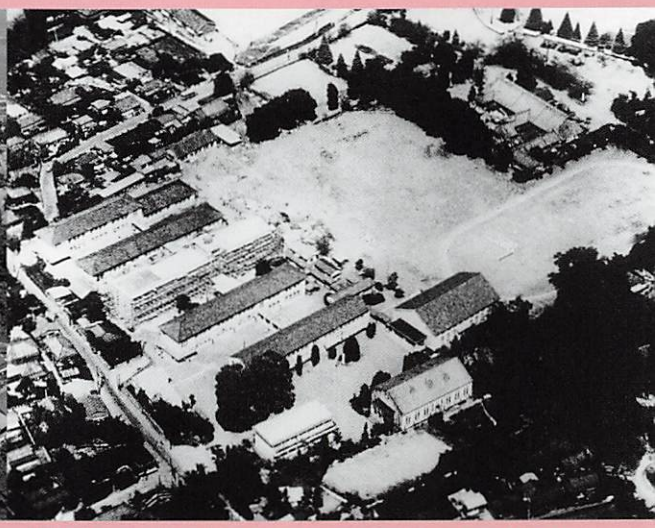
空から見れば…

講堂西側の植え込みは、奉安殿
建立の際に取り除かれた

1958年３月独立図書館完成直後。同年12月に正門が大谷石で改築される。構内西北隅の建物は校長校舎。通用門入って右手は物置兼写真部の暗室

1955年頃。独立図書館はまだない。右上に川越商業高校(現川越市立博物館の地)も見える

1970年70周年の頃。理科棟四階増築工事は1965年９月に完成。プールは翌1966年６月に完成。重層式体育館は70周年記念事業の一環として1970年３月に竣工した



1962年三階建理科棟建築中。かつての第四校舎と校長公舎が撤去され、その跡へ第二校舎が移築されている。通用門南側には給食室(1960.４完成)が見える

1998年建設工事中の新体育館。図書館建築はまだ始まっていない

1989年、大きく変貌した校舎全景。本館は鉄筋五階建となり、通称〝谷間の新館〟も完成。校地北側では川越市立博物館の建設が進む

1999年５月現在の川越高校全景。
右上隅に伊佐沼も見える

百周年記念校歌碑「未来の手」

1993年に新しくなった校旗

校庭より望む新体育館と校舎

百周年記念誌

くすの木

埼玉県立川越高等学校

百周年記念誌・目次

[フォト]智を耕して徳を敷く―― 1

[フォト]空から見れば―― 4

挨拶―― 18

連綿としてたぎる質実剛健の気風　百周年記念事業実行委員会委員長　渋谷　健

百年の伝統と新たな礎をもとに　校長　橋本　恭明

「生徒憲章」の精神を後輩に　PT会会長　槇田　幹夫

川越高校創立二百周年に向けて　後援会会長　川西　一紘

新時代へ向けて益々の発展と貢献を　定時制PTA教育振興会会長　大塚　昭三

計り知れない川高生のパワー　全日制生徒会会長　稲葉　一良

先輩方の築いてきた伝統を守りながら　定時制生徒会会長　青柳　和由

祝辞―― 25

文武両道の全人教育を　埼玉県知事　土屋　義彦

社会の変化に対応しうる自己の確立を　埼玉県議会議長　谷古宇勘司

幅広く個性豊かな人材の育成を　埼玉県教育委員会教育長　桐川　卓雄

伝統ある校風に期待する　川越市長　舟橋　功一

百年・そして明日

29

開校前史―百年史プロローグ―― 30

百年を歩く

36

●コラム

明治期、卒業できたのは半分だった……51

実業教育を切り離した中学校―明治・大正期の中学校―52

明治期川中生の進路……61

川越中学の大正デモクラシー―同志会の三十年―……62

特別大演習は地元住民に何をもたらしたか？……70

大正デモクラシー期の社会と教育政策……82

同窓会の歩み①―創設から一九四五年まで―……98

寄宿舎の精神―家族主義、規律遵守、自治……116

太平洋戦争勃発と川中の戦争体制……136

皇国民の錬成から工場への動員へ―決戦体制下の学校教育―……142

全学年にわたった勤労動員―死者二名、重傷者二名―……146

福森校長教職追放と復職・再審請求運動……152

川越中学校から川越高等学校へ……156

学園紛争に揺れた川越高校……210

同窓会の歩み②―一九四六年～一九九八年―……232

●川高フォト歳時記

校内駅伝・マラソン大会……166

文化祭・くすのき祭……190

修学旅行……198

運動会・体育祭……214

KAWATAKA一〇一年目の顔……272

百年目の川高生「ぼくらの夢と提言」……274

[フォト]川高の一年・当世川高生気質……289

部活動に燃えた青春

313

旧制中学時代の部活動……314

それぞれの黄金時代……318

裸足でボールを追い、勝ち取った全国制覇―庭球部……318

甲子園への夢を実らせた青春と〝場〟の力―野球部……320

川中から川高へ、赫々と連なる戦績の誇り―剣道部……321
自分と闘った時代、それが黄金時代―陸上競技部……323
春高バレー16ベスト忘れられない監督の「ありがとう」―排球部……325
千の和音が響く、三十有余年の「人の和」―吹奏楽部……326
今も響き続ける黄金のハーモニー―音楽部……328
明日に向かって発言し続けた青春群像―弁論部……330

最近の部活動……332

部活動の変遷……367

四十四年前のビデオテープ　米山大恵……370

初雁から翔く

371

小川地区……373
東松山地区……375
川島・桶川地区……382
坂戸・鶴ヶ島地区……385
毛呂・越生地区……391
飯能・日高地区……395
狭山地区……404
入間地区……413
所沢地区……417
上福岡・富士見・大井・三芳地区……424
志木・和光・新座・朝霞地区……430
大宮地区・その他……435
川越地区……439
「初雁から翔く」地区割り……475

●コラム・「くすの木物語」……389～471

各地区初雁会の歩み……476
はつかり人物誌……489
岡田恒輔―初のOB校長にして「明治文庫」の創設者……489
安部立郎―「同志会」「図書館」を設立、はつかり文化の礎を築く……490
佐藤隆房―詩人宮沢賢治の主治医「S博士」……491
山崎嘉七―「熱い郷土愛」が支えた「すべてに親切」の人生……492
国崎定洞―社会衛生学の研究から革命運動の道へ……493
伊藤泰吉―市長在職一九年、大川越市実現のため献身……494
藤野忠次郎―洗練された国際人にして三菱〝中興の祖〟……495
打木村治―郷土を舞台に描きあげた児童文学の傑作『天の園』……496
石川信夫―詩の深さ・歌柄の大きさで知られた鬼才歌人……497
鈴木聞多―白いスパイクで青春を駆けぬけた名スプリンター……498
小林斗盦―篆刻界で初の日本芸術院会員、文化功労者……499
家村相太郎―名選手は名監督となり「甲子園への夢」を果たした……500
浅見紳太―「アメリカ港湾鉄道の父」への『人生・夢航路』……501
岡村了一―博識とさわやかな弁舌の人・元同窓会長……502
加藤　進―日本学士院賞に輝く国際的地球物理学者……503
長沢英俊―世界へ飛躍した芸術活動を支える「東洋の心」……504
関根伸夫―「モノ派」の旗手―環境美術のパイオニア……505
奥泉　光―「純文学」に揺さぶりをかける芥川賞作家……506

感動は甦る

追憶百年—我が師・我が友

第一回入学式における校長「告辞」と生徒総代「誓約ノ辞」……508
増野悦興論の試み……児島康夫……508
母校創立当時の思い出……岩沢新平……513
一片の思い出……打木村治……516
大震災の日……岡田萬雄……518
講堂の思い出……山内　勤……520
日本の軍国化と川中……佐々木考輔……522
出陣から復校まで……大久原秀雄……523
動員の思い出……赤田健一……524
中学一年の夏……阿部新一……526
巻頭言……学校長　日新義虎……528
創立五十年を迎え高校生となって……12A　山崎榮作……528
全日本高校庭球選手権大会優勝……芹沢良三……529
甲子園大会と私……横田芳明……531
NHK全国学校音楽コンクール優勝……音楽部……533
川越高校の思い出……岩田文夫……534
〔フォト〕和田亀之助写真帳……537

回想　紫匂う武蔵野の　575

古谷圭一（高4）
山本　明（高4）
宮島秀夫（第25代校長）
小室英夫（第26代校長）
深谷正雄（第29代校長）
大沢幸夫（第30代校長・高9）
竹内康雄（第19代ＰＴ会長）
小林茂雄（第20代ＰＴ会長）
北村　平（第22代ＰＴ会長）
道祖土武（第23代ＰＴ会長・高7）
北沢紀史夫（第25代ＰＴ会長）
金子建二（第28代ＰＴ会長）
岡村了一（第16代同窓会長・中43）
佐々木忠一（第17代同窓会長・中32）
石川正明（旧職員）
斉藤彰勇（旧職員・中47）
横田　洋（旧職員・高4）
森江　進（旧職員）
萩原秀雄（旧職員）
宮根七郎（旧職員・高12）
石井正雄（旧職員・高7）
内河輝臣（旧職員・高10）
小泉　功（旧職員）
長根愛之亟（定旧職員）
松永利男（定旧職員）
吉田　正（定旧職員・高10）
増田佳子（定旧職員）
説田三佐子（定旧職員）
嶋田勝郎（中22）
山田勝利（中26）
小室勝男（中42）
内田康夫（作家）
落合栄一郎（高7）
高野昇一（高14）

定時制の五十年　597

グラマンから眺めた　一九四五　戦中明治校舎　松岡章次……596
定時制教育の変遷と展望……前教頭　大澤克彦……598
川越高校定時制五十年の歩み……601

定時制分校の歩み …… 624

朝霞分校の二十一年……黒沢光二 …… 624

入間川分校想望抄撮……木村市郎 …… 627

所沢分校雑観……大舘右喜 …… 631

定時制三つの改革……竹内忠好（元教頭）・松本喜作（元教諭） …… 636

［フォト］定時制今昔物語 …… 641

素晴らしき仲間―輝きの刻（とき） …… 649

野球部―一九六五年夏、神宮に燃ゆ！ …… 649

テニス部―一九八七年、小川・二宮組全国大会で第三位に輝く！ …… 650

バスケット部―一九九四年、汗と涙で勝ちとった全国ベスト16！ …… 651

「今、新たな決意で」―第三六回全国生活体験発表会文部大臣賞受賞― …… 652

忘れえぬ日々―定時制50年の懐かしい想い出がいま… …… 655

開校当時の定時制……原田節二 …… 655

感謝……吉住　登 …… 657

忘れえぬ「丘の灯」の仲間たち……森　蘊 …… 658

創立のころを想う……大舘右喜 …… 659

朝霞分校が私の「大学」だった……船田光一 …… 661

学ぶことの楽しさを知った四年間……鈴木セツ子 …… 663

生徒とともに歩んだ事業主と教師の会……福井孝夫 …… 664

学校給食―空腹から飽食へ―……田中むつみ …… 666

開校三年目／先輩たちの生活と意見……座談会（一九五二年三月） …… 667

資料

〈全日制〉

校内刊行物一覧 672
生徒会報／同窓会報／創立五十年記念誌／創立七十周年記念誌／創立八十周年記念誌／研究紀要／くすの木（図書館報）／かわたか（PT会報）

旧職員等一覧 711
教育課程の変遷 743

歴代クラス担任一覧 721
大学別合格状況 753

校舎・施設の変遷 732
現在の川越高校 756

生徒憲章・生徒規約 742

〈定時制〉

校内刊行物一覧 766
「生徒会報」（中心校）／生徒会報「霞」（朝霞分校）／生徒会報「丘の灯」（入間川分校）

生徒会会則／生徒会クラブ細則／むさしの文庫細則／風紀委員会規程／開設時、生徒募集要項 781

分校校舎配置図 784
旧職員等一覧 792

教育課程の変遷 786
歴代クラス担任一覧 796

年度別生徒数一覧 789
現在の川越高校定時制 800

年度別卒業生数一覧 791

校歌・応援歌 806

埼玉県立川越高等学校創立百周年記念事業の概要 810

編集を終えて 814

連綿としてたぎる質実剛健の気風

創立百周年記念事業実行委員会委員長
同窓会会長
渋谷　健

川越高校創立百周年にあたり、ここに記念誌を刊行するはこびとなりました。

一八九九(明治三二)年埼玉県第三中学校として設立され、川越中学校・川越高等学校と名称は変わりましたが、連綿としてたぎる質実剛健の気風は、いまも健在であります。

創立当時を振り返れば、明治維新から三十年、日清・日露両戦争の狭間という、いわば近代国家としての基礎固めに邁進していた時期、ついで第一次世界大戦を挟み、大正ロマン・自由思想の芽生えが見られた時代、そして昭和を迎え恐慌・満州事変・第二次世界大戦と目まぐるしく変化する動きに、終始翻弄されたのが前半の五十年でありました。その間多くの前途ある先輩が戦禍などに倒れられたのも痛恨の極みであります。後半の五十年は終戦、学制改革、学校規模の拡大、進学率の上昇などを背景に県下屈指の進学校に、加えて部活動などにも素晴らしい実績をあげ、社会に有為な人材の輩出、平和国家構成の一員の育成にと情熱を傾けております。一九九三(平成五)年五月、百周年準備委員会、ついで実行委員会を結成し記念事業を計画する中で、二万九千余名の同窓各位の過ぎ去りし二〇世紀を回顧し、希望に満ちた二一世紀を展望する記念誌の発刊が計画されました。過去の記念誌を基礎にしながらも、さらに斬新なアイディアを取り入れ、後世の方々の評価に耐えられるものをと考えました。ここに所期の目的が達成され、創立以来の各時代を忠実に再現し、同窓各位のご活躍を追いご功績を偲び、往時を彷彿とさせると共に、日本教育史の一頁を飾るに相応しい史料として価値のあるものが完成いたしました。ぜひ座右に置かれご活用いただければ幸いに存じます。

この間、編集委員各位をはじめ、各地区代表、各回期代表、その他多くの方々の献身的なご協力に心からの感謝を申し上げご挨拶といたします。

校長
橋本恭明

百年の伝統と新たな礎をもとに

本校創立百周年に当たり、県知事土屋義彦様をはじめ、県議会議長谷古宇勘司様、県教育長桐川卓雄様、関係の皆様から御祝辞を賜り「百年を振り返り、百年を見通す」記念誌『くすの木』が発行できますことは、本校にとりまして、この上ない喜びであります。

顧みますと、本校は明治三十二年四月埼玉県第三中学校として歴史ゆかしい川越城址に開校して以来、校名を埼玉県立川越中学校と改称、さらに埼玉県立川越高等学校として、現在に至りました。

この間、我が国は、世界史の発展過程の中で、近代化と両世界大戦など難局と激動の時代を経て、急速かつ複雑に変化を遂げつつ、二一世紀を迎えようとしております。

このような時代の変遷にあって、本校における教育も幾多の試練と困難を克服し、文武両道・質実剛健の気風、自由・自律の校風を築きあげ、歴史と伝統の継承と変化への対応を果たし、二万九千人有余の有為な人材を世に送り、「教育立県　彩の国」における揺るぎない伝統校として県民の期待に応え、発展してまいりました。

百周年を迎えた今、防災拠点としての重層体育館、記念事業としての正門・図書館など、教育・学習環境が新設整備され、二一世紀の本校教育の新たな礎となりました。

これらは、歴代の教職員・生徒の努力はもちろん、県当局、同窓生、保護者、地域の方々ほか関係の皆様の御支援・御協力の賜物であり、心より感謝を申し上げます。

来たるべき二一世紀はすべてが共存・共生する時代として期待されますが、本校校歌に「智を耕して徳をしく」とありますように、知・徳・体の調和のあるしかも輝く個性をもって国内外でたくましく活躍する人材育成を目指し、百年の伝統と新たな礎をもとに教職員、生徒、保護者が一体となって本校の発展に努力していくことを決意してご挨拶といたします。

「生徒憲章」の精神を後輩に

ＰＴ会会長
槇田幹夫

川越高校創立百周年おめでとうございます。一九世紀末創立の川越高校は、激動の二〇世紀を時代とともに歩み、各々の時代で活躍する多数の人材を育成してきました。ひとえに歴代の校長先生や教職員の皆様そして同窓会・後援会・ＰＴ会の諸先輩の御尽力の賜物です。改めて敬意と感謝の意を表します。

創立百周年を記念し、当記念誌の編集刊行、情報化に対応した新図書館の建築、オーストラリアの学校との姉妹校提携などを進めて来ました。これらが今後川越高校で学び次の百年の歴史を作る生徒たちに有効に活用され、国際人の育成の一助になる事を期待します。

川越高校では四半世紀も前に、高校生としてどうあるべきかを生徒自身で考え、自主・自律の理念に基づいた「生徒憲章」を制定し、その精神が脈々と後輩に受け継がれています。自由な校風の下、優れた資質を持った生徒が集い、情熱と信念を持った教師に恵まれ、学業にスポーツに伸び伸びと高校生活を楽しみ、為すべき事は徹底的に頑張った経験は大きな自信と財産になるものと思います。

高校教育に求められるものはその時代によって変化するものですが、普遍的には「人の育成」であり、学問や知識だけでなく社会に貢献する知恵と人間としてより良く生きる力を育てることが重要です。高度な学問を修め社会の責任ある立場で活躍する事を目標に努力する事は大切です。しかしそれと共に、今後の日本の社会や世界にとって必要な事は何か、人としてどう生き甲斐を見つけ社会にどう貢献していくか、など今の日本で見失いかけているものを、百周年の節目にあたり、改めて教師・生徒・父母が一緒になって考え模索していきたいと思います。

創立百周年を迎え、今後も「かわたか」で学んだ生徒たちが日本や世界各地で活躍する事と併せて川越高校が益々発展する事を祈念してお祝いの言葉と致します。

川越高校創立二百周年に向けて

後援会会長
川西一紘

埼玉県立川越高等学校創立百周年のお祝いを申し上げます。

一九九一(平成三)年からPT会に参加し、一九九四年からは後援会の一員として川越高校に係わらせていただきました。大きな区切りの年に、たまたま後援会長を務めさせていただき、百年の伝統の重みを感じています。その伝統を次の発展に結びつけるのが、私たち後援会の役割です。「百年を振り返り、百年を見通す」川越高校創立百周年記念事業のなかでも海外交流事業の創設は、正に「百年を見通す」事業です。

海外交流事業は、川越高校生徒の視野を広げるとともに、生徒を相互に派遣することによって、相互理解を深めることを目的としています。

このたび、埼玉県が姉妹提携をしていますオーストラリア、クイーンズランド州にあるケアンズ市のセント・オーガスティンズ・カレッジと話がまとまり、大澤幸夫校長を団長に訪問してまいりました。

学校については詳しい報告に譲りますが、八年生(中学二年相当)から十二年生(高校三年相当)までの、学生数八〇〇人のこじんまりとした私立男子校です。暑い地方らしく半袖シャツに短パンの制服で、テキストやノートを入れたリュックを背負ってキビキビと教室を移動する姿が、私たちの眼には新鮮に映りました。また、ケアンズ市は安全そうな街です。おおいに市民と交流を深めてほしいものです。

創立二百周年の際に、新築された体育館や図書館は残っていないでしょう。ところが国際交流事業は後輩たちによって守り育てられて、さらに発展する可能性を秘めています。北沢前会長をはじめ後援会の前・元役員の熱意によって生まれた海外交流事業の百周年を、川越高校創立二百周年記念式典で祝う。なんて素晴らしい夢ではないでしょうか。

新時代へ向けて益々の発展と貢献を

定時制ＰＴＡ教育振興会会長
大塚昭三

川越高校創立百周年おめでとうございます。

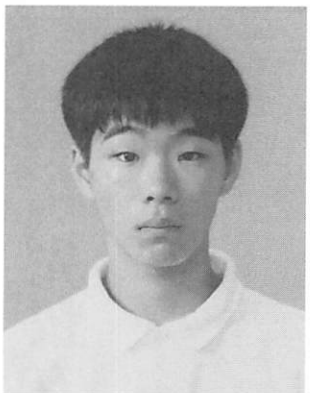
皆様方ご承知のとおり、川越高校は明治三十一年、埼玉県第三尋常中学校として設立認可され、明治三十二年第三中学校として開校、そして明治三十四年には埼玉県立川越中学校と改称されました。また、昭和二十三年には学校教育法により埼玉県立川越高等学校になりました。同年秋九月には川越高校定時制が併設されました。

我が川越高校がこの百年の間に立派な人材を多数世に送り出していることは、周知のとおりでありますが、川越高校の名をいっそう広く世間に知らしめたのが川越高校定時制の併設でありました。

川越高校定時制は中心校のほかに、入間川、所沢、朝霞に分校を持ち、生徒数は約千三百名と、大盛況でした。十八歳から三十歳を超える男女生徒が集いました。戦時中は、小学校低学年以上は農作業や軍事工場への勤労奉仕で、勉強は出来なかったのですが、そのように勉強の機会を奪われた人、旧制中学校卒業生で新制高校で学んだあと大学へと考えている人、等々多様な人々の集まりでした。

私は昭和十八年四月陸軍に入り、昭和二十年の終戦時には満州の海浪飛行場（ハイロー）に居りました。そして、昭和二十三年、川越高校定時制に入学しました。勤務先から夕食を取る間もなく駆けつけ、給食もなく、空腹を抱えて十時に下校する生徒。風が入って来る教室で、襟を立て外套を着て教壇に立つ先生。苦しい中、みんな勉学に励んだものでした。

我が川越高校で約三万名の人達が学び巣立ちました。そして国内各地はもとより海外にまで雄飛して、それぞれの分野で活躍しています。川越高校が百周年記念を機に、新時代に益々発展・貢献することを祈念し、お祝いの言葉とさせて頂きます。



第53代生徒会会長
稲葉一良

計り知れない川高生のパワー

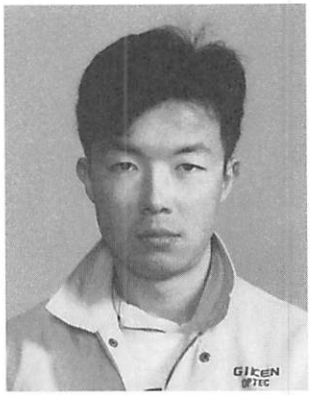
川越高校が開校してから百年がすぎた――この紛れもない事実に私はただただ圧倒されるばかりです。私は生徒会長ですが、まだ一年生です。この川越高校に通い始めてからほんの二か月ほどしか経っていません。しかし、二か月の高校生活からでも伝わってきたものがあります。それは創立百周年の川越高校の伝統と、自由な校風、そして何事にも真剣に真正面からぶつかっていく姿勢です。これらは新しい高校には決してみることのできない伝統校ならではのものだと私は思っています。

入学以来、特にすばらしいと思った事が二つあります。一つは、生徒全員がそれぞれしっかりとした自分自身の意見を持っているということです。特に先日行われた生徒総会で様々な意見が飛び交い、ついには日を改めて継続審議となったことには大きな衝撃を受けました。もう一つは応援団による校歌指導等に見られる川高生のパワーです。私は大声で校歌や応援歌を歌う応援団の先輩方を見て、川高生の何たるかがほんの少しだけわかったような気がしました。

百周年という言葉に、私は言葉では言い表せない大きな期待のようなものを抱いています。今にして思えば、生徒会長に立候補した本当の理由は、多分その大きな期待のようなものだったのでしょう。漠然とした動機で会長になった私ですが、私はこの大きな節目の年に、川越高校の生徒会をこれまでに例を見ない活発な生徒会にしていきたいと思います。そして、私達の手で、川越高校の伝統を守り、また、新しい伝統を創っていきたいと思います。

この川越高校から私達が学ぶことのできるもの、いえ、学ばなければならないものは計り知れないほどあるのではないでしょうか。百年という重みのある伝統を、また、川越高校を巣立っていった諸先輩方の創りあげた川高魂を私達は正しく受け継ぎ、実践していかなければならないと、私は確信しています。

先輩方の築いてきた伝統を守りながら



定時制生徒会会長
青柳和由

川越高等学校は、今年で創立百周年を迎えます。そして、戦後まもない一九四八(昭和二三)年に定時制課程が設けられてから五十二年目を迎えました。

学校が出来てから百年、定時制課程が出来てから五十二年というと、非常に長い歳月です。明治・大正・昭和・平成というそれぞれの時代の中で、困難や苦しみ喜びを感じつつ、先輩方ならびに本校に携わってこられた諸先生方のご支援やご努力があったからこそ、今年百周年を迎える事ができたものと思っております。そして、その中で、一九四八年に定時制課程が誕生する際には、苦労が絶えなかったものと推測します。戦後まもなくと言いますと、食べ物に困り、学校へ行って勉強をしたくても、家が貧しくて学校へ通えない人もいた時代だったと、いろいろな方々から聞いています。おそらく、聞かされている話以上に苦労があったのではないかと思います。今日、これだけ物質的に恵まれていて、何の不自由も感じられない今の自分達には、想像出来ない事でもあります。

このような自分達ではありますけれども、定時制生徒会では、先輩の方々が築かれてきた伝統を守りながら、学校をより良く過ごしやすいようにしていくために、日々頑張っていくつもりです。そして、最大の行事である文化祭では、全日制と協力しあい、盛り上げようと皆、精一杯頑張っています。また、クラブ活動でも良い成績を残すために日々励んでおり、活気にあふれています。このように、行事等が行えるのも先輩方が土台を築いてくださったおかげだと思います。これからは後輩達のために、川越高校の素晴らしい面を伸ばしながら、より一層の発展を目指して行きたいと考えています。

文武両道の全人教育を

埼玉県知事
土屋義彦

埼玉県立川越高等学校が創立百周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

貴校は、明治三十二年、歴史もゆかしい川越城址に埼玉県第三中学校として開校いたしました。以来、百年にわたり県民の期待と信頼に応え、本県西部の中等教育を代表する伝統校として、二万九千余名の有為な人材を世に送り出し、これらの方々が県内はもとより国の内外の幅広い分野においてめざましい活躍をされておりますことは、誠に喜ばしいかぎりであります。ここに歴代の校長先生をはじめとする教職員、ＰＴ会、後援会、同窓会並びに地域の関係者の皆様に対しまして、心から敬意と感謝の意を表する次第であります。

教育は国家百年の大計と申します。私も、「教育は国家存立の基盤であり、瞬時も忽(ゆるが)せにできない。国づくりの基礎は人づくり、人づくりの基礎は教育にある。」との観点から、知事就任以来、「教育立県　彩の国」の実現を目指し、教育の充実を県政の重点施策として進めてまいりました。

こうした中にあって、貴校が自主・自律、質実剛健の校風のもとに、文武両道の全人教育を実践されておりますことは、誠に心強い限りであります。教職員をはじめとする関係者の皆様には、輝かしい百年の歴史を生かされ、人類の繁栄と世界の平和に貢献できる人材の育成に、一層御精進いただきますようお願い申し上げます。

終わりに、躍進めざましい貴校が、この記念すべき百周年を契機に、今後とも多くの若者に夢と希望を与え続け、益々発展されますよう祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。

社会の変化に対応しうる自己の確立を

埼玉県議会議長
谷古宇勘司

埼玉県立川越高等学校が、創立百周年を迎え、記念式典を挙行し、併せて記念誌を刊行されますことに、心からお祝い申し上げます。

貴校は、明治三十二年に埼玉県第三中学校として誕生し、以来百年間、我が国の歴史の中でも、最も困難な時代を経験しながらも、本県西部地区を代表する高等学校として、多くの成果をあげて来られました。この間二万九千余名の卒業生は、国内はもとより海外におきましても各界でめざましく活躍されて参りました。これもひとえに、歴代校長先生をはじめ教職員の皆様の御尽力と、高い志をもった生徒諸君の努力と、保護者の皆様や地域の皆様の御支援・御協力の結果と深く敬意と感謝を申し上げます。

県議会は、六九〇万県民の幸福を願い、県政の充実、発展に努めております。

特に青少年の健全育成につきましては、社会が大きく変化を遂げている今日、変化に即して自己を確立できる環境整備が望まれるところであります。

自主・自律と質実剛健の校風のもと、文武両道の全人教育を伝統として有為な人材を輩出されて来られた貴校は、来るべき二一世紀においても本県を代表する高等学校としてますます飛躍が期待されるところであります。

百周年の記念すべき年に、防災拠点としての重層体育館の建設、図書館の完成などの施設の充実や、姉妹校提携など新しい世紀にむかうにふさわしい教育環境が整備され、これからの百年にむかって着実な成果を重ねて行くものと思われます。

伝統は常に創造の連続の中にこそ、培われるものであります。生徒の皆さんは、この時にめぐりあわせた意義を深く受け止められ、未来に向かって精進されますよう期待いたします。

結びに、貴校のかぎりない発展を祈念し、祝辞といたします。

埼玉県教育委員会教育長
桐川卓雄

幅広く個性豊かな人材の育成を

埼玉県立川越高等学校が創立百周年を迎え、記念式典を挙行し、併せて記念誌を刊行されますことは、誠に意義深く、心からお祝い申し上げます。

貴校は、明治三十二年、埼玉県第三中学校として開校され、我が国が近代国家として発展する歴史の中で百年の伝統を刻み、本県中等教育を代表する学校の一つとして大きな役割を果たしてまいりました。

この間、二万九千余名の有為な人材を輩出し、貴校の卒業生が国の内外において、めざましい活躍をされておりますことは、誠に喜ばしい限りであります。これもひとえに、歴代校長先生をはじめとする教職員の皆様の御尽力と保護者、同窓会及び地域の皆様の御支援・御協力の賜物と深く感謝申し上げます。

新しい世紀を目前に、国際化、情報化、少子・高齢化など社会の変化が激しい中で、変化に柔軟に対応し創造力豊かな人材を育成することは、我が国の存立に係ることであり、教育に寄せられる関心と期待は、ますます高まっております。県教育委員会といたしましては、「個性を伸ばし生きる力をはぐくむ埼玉教育」の実現を目指して、「生涯学習社会の構築」、「創造性と豊かな心の育成」、「ゆとりと生きがいの創造」という基本理念のもとに、「二一世紀いきいきハイスクール構想」の策定を進めるなど、諸施策を積極的に推進しているところであります。

貴校におかれましても自主・自律、質実剛健の校風の中で、知、徳、体の調和のとれた豊かな人間性をはぐくむ教育により、幅広く個性豊かな人材の育成にめざましい成果をあげてこられたことは、誠に心強い限りであります。生徒の皆さんには、創立百年の記念すべき年を節目に、貴校の百年の歴史と伝統の重みを継承されるとともに、次の百年に向かい、貴校の新たな伝統の創造を目指して一層精進されることを心から期待いたします。

川越市長
舟橋功一

伝統ある校風に期待する

埼玉県立川越高等学校が創立百周年を迎えられ、このようなすばらしい『百周年記念誌』が発行されますことは、たいへん意義深いことであり、心からお喜び申し上げます。

貴校は、明治三十二年、旧川越城の地に埼玉県第三中学校として創立されました。以来、戦後の学制改革により現在の川越高等学校と改称し、激動の時代とともに歩み続けて、今日の隆盛たる地位を築いてこられました。

これは、第一に、歴代の校長先生をはじめ諸先生方の教育への情熱のたまものであり、その時々のご父母の皆様のご協力、在校生並びに卒業生、同窓会の皆様のご努力の結果であります。また、長年にわたって地域に愛され、地域社会に果たされてこられた多大なご貢献にあらためて深い感謝と敬意を表したいと思います。

貴校は、一貫して「真理と正義を愛し、勤労と責任を重んじる、自主的精神に充ちた生徒の育成」を教育目標に掲げ、社会の要請にこたえ得る数多くの有為な人材を各界に送り出されてこられました。卒業生は、国内はもとより海外においても大いに活躍され、川高の名声を揺るぎないものにしておりますことは、万人嘱目の的であり、地元川越の誇りであります。

現代社会は、少子高齢化、高度情報化、国際化などに伴い、大きく進展しています。このようなときこそ、創造力あふれる若い人の育成が求められておりますが、伝統ある校風を受け継がれ、勉学はもとよりしっかりとした人間形成に努めておられる貴校に対する期待はきわめて大きいものがあります。

どうか、埼玉県立川越高等学校が、百周年を節目として、きたる二一世紀に向け、ますます発展されますとともに、あわせて校長先生、教職員並びに関係者の皆様のご健勝とご活躍をお祈り申し上げまして、お祝いのことばとさせていただきます。

百年・そして明日

一八九九（明治三二）年、埼玉県第三尋常中学校として設立された母校が、
なぜ川越城址に建設されたのかを明らかにするプロローグ。
時代を切り取る出来事を中心に、解説と年表と写真で悠久な百年の歴史を歩く。
そこには多くのOBたちの汗と涙の青春があった。
文化活動に、部活動に、そして校内の民主化運動に燃える——。
時代を先取りして誕生した「同志会」、時代と共に歩んだ「同窓会」、
さらに「寄宿舎」生活の思い出など、百年をリレーで綴るコラムの数々。
エピローグでは百年目の在校生たちに未来をみすえつつ
自由闊達に語ってもらった「夢と提言」。

なお、見開き二頁の年史部分の「年」は年度を、
「回」はその年度の入学生の卒業回期を表します。
ただし、日本・世界の出来事はその年のものです。

開校前史

――百年史プロローグ――

川越高校の発掘調査

創立百周年を二年後にひかえた一九九七（平成九）年、本校の体育館は防災施設を備えたものに改築されることになった。その際、文化財保護法に基づき、埼玉県埋蔵文化財事業団による敷地内の発掘調査が実施された。

調査区域は、江戸時代の川越城の絵図によると〝八幡曲輪〟の一部にあたる。川越城は、一六四〇年代に松平信綱によって大改築される。発掘されたのは、それ以前の一六世紀前半から一七世紀初頭の地下式壙、土壙墓、堀跡、井戸跡など、多くの遺構である。

本校の敷地に河越城を築いた先駆者は、上杉持朝の命を受けた太田道真、道灌父子で、一四五七年、江戸城とともに構築したといわれている。築城の目的は、古河公方足利氏に対抗するためであった。その後、小田原を本拠とする北条氏の支城となり、北条綱成、大導寺政繁が城将を務めた。一五九〇年には、豊臣秀吉の家臣、前田利家により、大導寺隼人が守る河越城は、無血開城となる。

一六〇三年に江戸幕府が開かれると、川越城には譜代の有力大名である酒井重忠、忠利、忠勝三代が川越藩主として在城する。

諸遺構は、おおよそこの時期に相当すると考えられる。川越城の中世及び近世初頭の遺構が確認されたことで、そのころの川越城は、規模も小さく、本校の校門に近い一帯を縄張りとしていたことが想定できる。発掘された擂鉢や釜などの遺物もこれを示している。今後の調査に、さらに大きな成果を期待することができよう。

家光遊猟と富士見櫓

一六一八年、三代将軍家光は酒井忠利の川越城本丸に宿泊し鷹狩りをした。一六二六年二月にもふたたび川越で猟を行っている。その様子は『徳川実紀』や『寛永記』に記され、これを基に『江戸図屏風』（国立歴史民俗資料館蔵）の絵図が描かれている。江戸時代初期の川越城本丸（一部本校敷地内）をはじめ、富士見櫓・二の丸（現市立博物館）などが、鹿狩りや漁労の様子とともに、詳細に描かれている。また川越城の拠点が現在の本校校庭及び体育館の周辺であったこともわかる。

二月十日、家光一行は川越城に宿泊、『徳川実紀』によれば、その日富士見櫓に登楼している。本校校庭の南西側から梯子伝いに登楼したのである。その折、幕政に関与した最高の儒学者、大学守林羅山は、家光の命によ

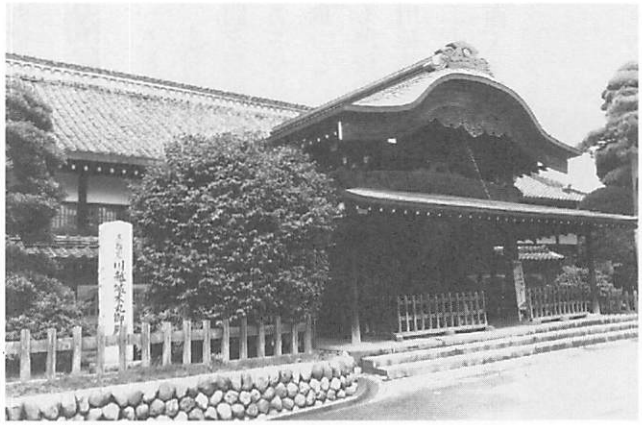
体育館前庭校庭側の堀跡（1998.5発掘）

り、眺望した情景を漢詩に認めている。（『羅山文集』所収）当時の武蔵野の自然が、いきいきと想起される作品である。

家光は二十四日江戸に帰城するが、川越街道を風雷の如く馬を走らせ、家臣は一人もこれに従うことができなかったとのことである。

松平信綱の川越城再建

一六三八年には川越大火があり、城をはじめ、町の三分の一が焼失したといわれている。その翌年城主となった松平信綱は、城の規模を拡大し、本格的に城下町を整備している。


川越城本丸御殿

本丸、二の丸、三の丸、八幡曲輪に加え、外曲輪、田曲輪、新曲輪、さらに西大手門、南大手門を設け、総面積四万六千一四三坪。その内、本丸が約八千二五坪、二の丸が約二千七四坪、三の丸が約五千九七〇坪であった。

天守閣の代わりの富士見櫓と虎櫓、菱櫓の三基が備えられ、一三の城門が設けられた。

本校の校舎が建っている所が、八幡曲輪に相当する。体育館及び図書館のある位置が馬場の南側にあたり、堀を隔てて東側に富士見櫓を望み、城門が設けられた。また、体育館の南側の地にも、堀を隔てて大きな田曲輪門が構築された。

西大手門は、現在の市役所前の位置に相当し、南大手門は川越市立第一小学校の校庭の位置にあたる。その規模は西大手門が桁行五間一尺、梁間一間三尺であった。櫓は改築された富士見櫓がもっとも大きく、縦八間三尺、横八間、三層で高さ五一尺の規模であった。この時期に城内の建物はこけら葺きから本瓦葺きに変わったことが考えられ、本校校庭から当該期の瓦が多量に収集されている。

川越城は、松平信綱の修築後は幕末まで、部分的な修築はあったにせよ、基本的には大きな変更はなかったと考えられる。

川越城炎上

一八四七年四月十五日夜半、二の丸の台所付近から火災が発生し、火は強風に煽られ、たちまち城主の住居である二の丸、馬小屋、中間部屋、二の丸門、さらに本丸門、長屋一棟が全焼した。川越藩では、さっそく城の再建にとりかかり、これを機会に城主の住居を二の丸から本丸に移している。火災から二年半弱の期間で、大工事は完成した。このときに再建された建物で、現存するのは本校校庭の東側に隣接する本丸御殿のみである。

しかし、今回も含めた数度の発掘調査によって川越城炎上による膨大な焼土灰が確認されており、それによると井戸跡、大堀、掘立柱建物跡など一七世紀から一九世紀前半の遺構が密集していたことがわかる。今回の県事業団の調査報告によると、染付や天目茶碗など、肥前系、瀬戸美濃系の陶磁器など、一八世紀前半の遺物が体育館の敷地内からも大量に出土している。また、川越城炎上当時の瓦、カワラケ、「泉州麻生」銘の焼き塩壺、土人形、碁石、寛永通宝、煙管、鉄釘、飯能焼などの在地産の陶磁器なども検出されている。

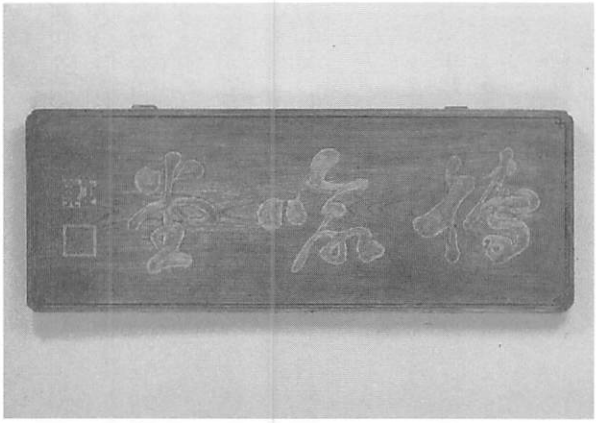
新装なった川越城は、明治維新によって、一八七〇年、藩より城郭破却願いが出され、

本丸御殿を除き、その殆どが壊された。

藩校、博喩堂・長善館

一八世紀初頭、川越藩主柳沢吉保は荻生徂来、志村楨幹、細井広沢などの儒学者を迎え、学問を奨励している。徂来は「十万石以上ノ大名ニハ其在所ニ学校の様ナル物ヲ立サセ度事也」といっている。当時七万五千石の川越藩も藩校の必要性を認めていた。

川越藩に藩校が最初に設立されたのは、一八二七年である。時の藩主松平斉典が、川越城西大手門の北側（現市役所）に、講学所「博喩堂」を創設したのである。



博喩堂額複製（川越市立博物館所蔵）

保岡元吉、石井良平らが教授となり、朱子学を中心とする儒学が教えられた。受講者は、与力大役人から下級武士に至るまで、範囲を広げたが、講学所の収容能力から、約一〇〇名の者が入学した。藩士の子弟は、八歳で入学し、朱子学、漢学などを学び、儒教的精神を重視するものであった。

講学所の運営は、藩財政の窮乏、凶作、相州海防警備、川越城炎上などがあって、しばしば休校している。しかし、松平直候が藩主になると財政にも力を入れ、講学所は職員が六名程に増え、運営も順調になった。一八六六年、直候の子、直克は前橋藩に移封となり、講学所「博喩堂」は廃止された。なお「博喩堂」の保岡教授によって、『川越板校刻日本外史』二十二巻が、校訂刊行されている。この外史の売れ行きは、極めて好調で「洛陽（江戸）の紙価」を高めたといわれている。

松平大和守直克が前橋に移封後に、川越藩主になったのは、奥州棚倉から転封してきた松平（松井）周防守康英である。「長善館」が、康英によって藩校として創設される。この藩校は、同家が石州浜田に在城した一七九〇年に、すでに創設されていた藩校の名称を継承したものであり、盛んであった浜田藩時代の藩校を復活し、川越の藩風を振興しようとしたものである。

川越藩の「長善館」は、西大手門外宮ノ下（現宮下町、浦和地方裁判所川越支部）に開校された。その授業内容は、孝経、論語、詩経、礼記、易経などの講義及び素読であった。受講した生徒は、約三八〇名である。

しかし、明治維新を迎え、「長善館」は廃校となった。

これに代って、「文学寮」が、三の丸の外（現川越小学校の地）に創設された。授業内容は、「長善館」の継承であったが、新たに洋学が加えられ、在校生は五〇〇名に達した。「文学寮」もわずか四年で廃止され、「郷学校」を経て、学制公布を期に、郭町の城内施設を活用し、小学校が設立される。

新しき時代に向かって

幕末には、儒学、漢学以外に洋学（蘭学）を学ぶ川越藩士も輩出している。

異国船警備の関係から、当藩では、洋式の砲術を伊豆、韮山の江川英龍のもとに小久江勝右衛門らを派遣し学ばせている。

シーボルトの門人、伊藤玄朴に学んだ川越藩の柳下元良、金子忠範は『新定和蘭文範』を一八五六年に刊行、蘭学者としての地位を

高めた。

明治の画壇に名声を博した橋本雅邦は、宮下町の氷川神社前に住み、藩士の子弟として「文学寮」に一時学んでいる。

明治の新しき時代に向かって、着々と歩みを続ける若き学徒たちがいたのである。

明治初期の寺子屋と私塾

一八七二（明治五）年八月に学制が公布されてからも、幕末以来盛んになっていた寺子屋や私塾が重要な教育的役割を果たしていた。

寺子屋と私塾の区分は難しいが、教材に着目すれば、往来物を中心に実生活に密着した「よみ、かき、そろばん」の寺子屋が町民子弟のためにあったのに対し、藩校の流れをくむ朱子学中心の漢学塾は士族子弟のためにあったと言えよう。

『川越市史』によると、その数は合わせて三〇校、僧侶が教師を務める場合が多かった。このうち旧川越町には五校、指導者はそれぞれ佐々木文治（商人）、利根川尚方（医師）、花形精（女性）、かつて藩校で教えていた佐々泉右衛門と戸井田研斎であった。

廃藩にともない城内の土地、建物は役場、郡役所、警察など、行政機関として利用されていった。その配置には城下を守るという目的も持たされていた多くの寺院は、学制公布により学校の校舎が建てられるまで、一時教室として利用されていた。

県下初の郡立中学校

一八七六（明治九）年、熊谷県に属していた川越は埼玉県に統合された。学制公布にともない、文部省は初等教育と教員養成を急務としたため、中等教育への対応が後手になった。地方三新法（郡区町村編成法、府県会規則、地方税制）の制定後、一八八一年になってやっと中学校教則大綱を決めた（中学校令の制定は一八八六年）。

しかし、埼玉県はこれに先駆けて、一八七五（明治八）年、埼玉中学校を師範学校（現埼玉大学教育学部）内に設立したが、維持できず間もなく廃校となった。

さらに、一八八〇年、県令（知事）は「現在五万九千三百余人の小学生の中で、さらに学ぼうとする生徒の志を生かすためには、中学校の果たす役割は大きい」と言い、各郡長に『公立学校設置心得』を通達した。そして県議会では学校運営のための補助金を決めた。

これを受けて、翌一八八一年十月には川越に県下初の入間・高麗郡立中学校が開校した。なぜ川越だったのか？　理由としては、次のようなことが考えられる。川越では失業士族を教師にして、三芳野学校（郭町旧家老屋敷内）、北学校（広済寺内）、鍛冶学校（法善寺内）と相生（あいおい）学校（采林寺内）の四つの小学校で数百人の生徒が学んでいたし、大商人などは中学校運営資金の援助を通して子どもたちに夢を託していたからだった。

郡立中学校へ入学した生徒数は五五名、教員数は五名で校長は鈴川克慧。入学資格は高等小学校四年を卒業していること。修業年限は三年。授業時数は週二八、教科目は必修として読物、作文、習字、数学、地理学、修身学、歴史学の七教科。任意科目として物理学、生理学、博物学、経済学、図画学、英学、体操があった。唱歌（音楽）はなかった。

ところが県は、一八八六（明治一九）年七月、郡立中学校を廃校に追い込む。これは県を統治する国（文部省）の方針でもあった。直接の原因は学務委員の選出方法で県と郡の意見が対立したためであった。

「学校の維持管理は県令の直轄には属さず、人民が直接選挙した学務委員が行うべきだ」という思いが地元住民の中にあった。こうした思いを支えた人物に川越が生んだ自由民権運動の旗手、福田久松と、後に川越から福田とともに衆議院議員に当選した高田早苗がい

た。一方で、竹谷兼吉の資金援助もあった。

郡は直接町村を統治する行政区であったが、予算面では県に制約されていた。県に従わない郡は、予算で締めつけられたのである。

郡立中学校に籍を置いた生徒の中には、東邦電力（現中部電力）の創立者であり、「日本の電力王」といわれ、NHKの大河ドラマ『春の波濤』のモデルともなった福沢（旧姓岩崎）桃介もいた。

中井尚珍の「英和学校」

中井尚珍（川越市立図書館所蔵）

文部省は一八八〇年代後半の埼玉県の状況を当時の「年報」で次のように分析している。

「小学校を卒業する生徒は年々増加しているが、（公立）中学校はない。このため、学ぶことを途中で止めてしまう子供が多い。これは誠に残念なことだ。さらに教育を振起しようとするならば、中学校の開校が急務である」

そして、一八八六（明治一九）年に中学校令を公布した文部省は、中学校を政府官僚養成機関の末端に位置づけ、尋常中学校の設立資金及び補助金は地方税から支出することとし、しかも各府県一校に限るとした。さらに、一八九九年、尋常中学校を中学校とし、高等中学校を高等学校として大学へ直接結びつくようにした。

ところで、廃校になってしまった郡立中学校に籍を置いていた生徒たちはどうしたのだろうか？　中井尚珍が生徒たちを引き取り、私塾を開いたのである。彼の業績については、初代川越町長の岡田秋業が『実業人傑伝』の中でおよそ次のように書いている。

「郡立中学校の制廃するや、中等教育の道なくして、高等小学校卒業後の子弟身を託するところなく、（中略）為に（中井は）備中松山の人平川浦三氏を傭兵して、当時資材余裕あるに非ざるも其資を投じて月に俸給を贈り、又塾舎を給して小学校卒業の生徒を督励し之に就しむ。中学校令発布年、私塾を廃して規模を拡大せんと欲し、同町の有力者竹谷兼吉、黒須博吉、綾部惣兵衛他の諸氏と之を「英和学校」に改め、さらに有為の教員（喜多欽一郎など）を傭いて青年子弟を薫陶し、かつ此等の人々をして（青年子弟が）都下に遊ぶ必要を絶たしめ、父兄に無上の利益を与えたり。明治二十一年町村制実施に際し、校舎及び書籍を町に寄付しこれを町立となせり」

なお、中井は先見の明ある人物で人望が厚く、岡田町長を引き継いで二代目川越町長となった。川越商業会議所設立にも尽力した。

一八九一（明治二四）年、町は「英和学校」を基に尋常中学校予備校を高等小学校（現第一小学校）内に併設した。この学校が県立川越中学校を誕生させる基盤になった。

商都川越の指導者たち

川越は商人の街で、各業種の問屋の持っている大きな財力が武士を養ってきた。県立中学校の設立・運営を支えた要素の一つにも、川越が商都であったことがあげられる。

一例として銀行に目を向けてみよう。一八七七（明治一〇）年十二月、第八十五国立銀行（現あさひ銀行）が開業した。続いて、私立川越銀行も開業。明治政府は金融政策で殖産興業に力を入れたため、企業の設備投資が活発になった。が、その結果激しいインフレに見舞われる。それを抑えるために、銀行条例で一五三にのぼる国立銀行の紙幣発行を停止させ、日本銀行に一本化した。結果は逆にデフレとなり、大不況を招いた。

だが、八十五銀行の業績は良好だった。大蔵省監理官の下に公金の収納業務を独占していたからだ。すなわち、全県の地租など全ての税金を集めては国庫に納入し、その手数料を稼ぐ。さらに、利息不要の公金を貸付に回

して利鞘を得ていた。開業以来の歴代頭取は、黒須喜兵衛（呉服商）、横田五郎兵衛（米穀、酒醤油醸造）、山崎豊（菓子商）及び綾部利右衛門（塩、油、肥料商）であった。

その後、川越商業銀行や川越貯金銀行が竹谷兼吉などによって設立され、八十五銀行は国立から私立となった。また染織講習所もでき、地場産業を支えた。黒須らは川越藩の御用商人であったし、竹谷は明治に入ってからの新興商人で、新旧相まって町を活気づかせ、中学校の開校をうながした。

県立中学校設置運動

一八九四（明治二七）年には、人口約二万人の財政豊かな川越町を足場として、県立中学校設置運動が組織されていった。当初から取り組みに参加した人物には岩沢寅吉、岡田秋業、渡辺政方、竹谷兼吉、中井尚珍、綾部惣兵衛の諸氏がいた。それに県会議員の田中萬次郎、粕谷義三が加わる。

岩沢寅吉は農業を営み、養蚕と製茶業に力を発揮した。喜多院、日枝神社の保存・維持管理にも尽力した。長男新平は川越中学校第一回生で早稲田大学卒業後川越高等女学校（現川越女子高校）で英語を教えた。竹谷兼吉は米穀や両替商で財をなし、県会議員を務め、商人層の中心となって岡田町長を助けた。綾部惣兵衛は東京薬学校に学び、薬剤師会の埼玉支部長を務め、のちに衆議院議員となった。

一八九七（明治三〇）年からは太田元章川越町助役、高橋幸助、田中五郎兵衛、坂田一清、佐々木駒太郎が県立中学校設置運動に加わった。五人は川越町の学務委員を務めていた。

さらに彼らに共鳴する一〇〇名の有志が委員に名を連ねた。その中には高等、尋常小学校校長を務め、川越町立図書館の初代館長ともなった菅野政五郎や川越市制成立に尽力した喜多欽一郎などもいた。

一方、県議粕谷義三（現入間市出身）は一八九五（明治二八）年、次のような発言をし運動の後押しをした。

「現に入間郡は高麗、比企、横見の三郡と合わせて高等小学校在学中の者千二百名以上に達している。川越町は郡立中学校廃止後、（尋常）中学予備校（修業年限三年）があるが、現在生徒が百名を超える状態であるから、県立中学校が設置された場合、その入学志望者が増加することは明白である。

しかしながら（日清）戦争後の財政難の折から地方税収入予算をも考慮しなければならぬので、これを二カ年継続事業とし、初年度は敷地を定め、次年度において校舎の建築に着手すべきだ」

「埼玉県第三中学校」

川越町の熱心な誘致運動に答えて、一八九五年十二月、県令は第三中学校を川越町に開校する議案を県議会に提案し可決された。当時の県会議長は鶴ケ島出身の田中萬次郎であった。なお、同時に第四中学校を粕壁に設置する議案も審議され、一度は否決されたが復活し可決された。

ところが、翌年の大洪水で、県は災害総額九万円を国庫補助と地方税増額でしのがざるを得なかったため、中学設立の認可は延期された。

一八九八（明治三一）年四月十五日、埼玉県第三尋常中学校の設立が正式に認可され、ただちに校舎の新築工事が開始された。

川越中学校の建設予定地は五か所あったことが県立文書館所蔵の地図と資料でわかる。それらは現在の地名でいうと郭町、宮本町、中原町、脇田町、松江町の五か所で、結果として現在地の郭町に決まった。

明治32年

1899

中1・2回

増野校長以下11名の職員、二年39名、一年80名で始まった。

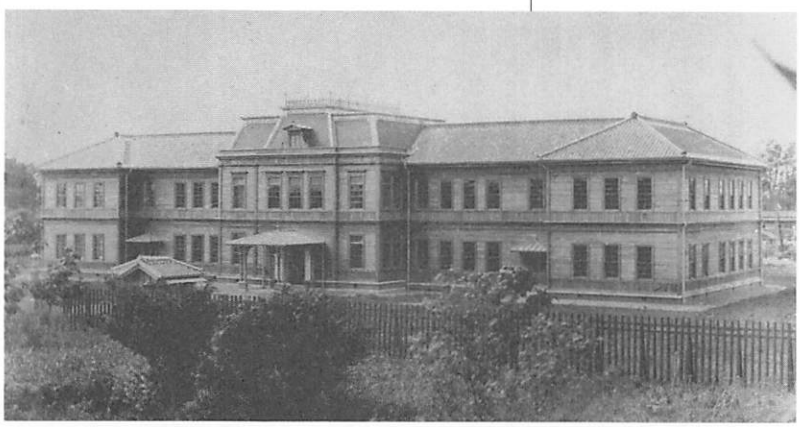
「埼玉県第三中学校」として始まった第一回の生徒募集にあたって、予定人員一〇〇名に対して一五〇名が出願した。四月二十日の予備調査と二十一日の入学試験では、一四三名が川越町入間郡公会所（現本丸御殿）にて受験し、その中で試験成績の佳良な者八〇名を選抜。更に校長は特別試験を実施し、同時に県と交渉して定員増加と第二年級設置を認められ、結局、一年八〇名、特に優秀な者三九名を二年とし、計一一九名が合格となった。

この内、高等小学校卒業者は一年四一名、二年二八名、三年修了者は一年三二名、二年一一名、二年修了者は一年七名であった（当時の小学校は、義務教育四年の尋常小学校を経た後、二～四年の高等小学校があった）。二年になった者の大半は川越高等小学校を卒業した後、同校内の中学予備校にて勉強した者で、その世話をした川越高等小学校の古澤與總教諭は、彼らとともに一八九九年四月、第三中学校に教諭心得と

開校時職員布陣

校長	増野悦興（ましのよしおき）	倫理
教務主任	和田亀之助	数学
教務部幹事	渡部斧人	体操
生徒取締	佐藤惟昇	国語 歴史
二年監督	古澤與總	英語
一年甲組監督	佐藤藤助	博物 地理、図画
一年乙組監督	水野澄治	漢文 作文
嘱託教員	中島協和	習字
剣道指南	星野仙蔵	剣道
会計庶務	市村　巌	
庶務	篠原豊州	

4・1（土）職員任命さる
11（火）第一回生徒募集出願締切
20（木）予備調査実施
21（金）入学試験実施
22（土）特別試験実施
28（金）第一回入学式



開校間もない埼玉県第三中学校。白いモダンな校舎の周辺には他に二階建はない

日本▶横山源之助『日本之下層社会』刊行。文部省、官公立学校等における宗教教育、儀式を禁止。
世界▶中国で義和団蜂起。アメリカ国務長官J・ヘイ、中国に関する「門戸開放」策を宣言。

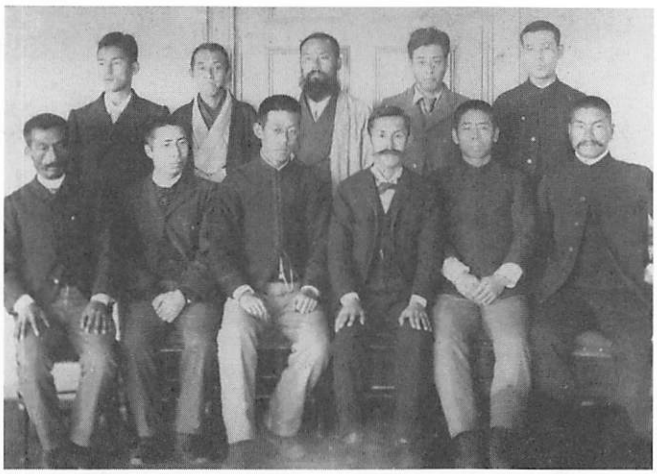
して赴任し、二年の学級監督となった。

四月下旬にようやく二階建の新校舎が完成し、五月一日に授業が始まった。

そして五月二十八日、新校舎二階の講堂で、五〇〇名以上の参列者を迎えて開校式が行われた。主な参列者は会報によると、

文部大臣　樺山資紀
文部省専門学校学務局長　上田萬年
文部大臣秘書官　樺山資英
埼玉県知事　正親町実正
埼玉県選出衆議院議員　持田　直
同　福田久松
埼玉県会議長　星野平兵衛

他に埼玉県議会議員十数名、埼玉県書記官、参事官、各県立学校長及び主席教諭、県下郡長数名、入間郡町村長数十名、川越町会議員及び区長数十名、付近小学校長二十余名、区裁判所長、警察署長、県内外新聞記者、及び本校職員、生徒であった。



開校時の職員11名。前列右から3人目が増野悦興校長。その左が教務主任の和田亀之助教諭

1899年入学者小学校別人数

小学校	数	小学校	数
川越	五六	勝呂	一
大井	五	柳瀬	一
南古谷	六	川島	一二
古谷	五	松山	一
黒須	七	窪田	一
飯能	四	萩ヶ岡	一
三芳野	三	高坂	一
坂戸	二	上尾	三
大家	二	川田谷	一
二葉	二	大宮	一
鶴ヶ島	一	岩槻	一
入西	二		

5・1(月)新校舎にて授業開始
28(日)講堂にて開校式
6・15(木)体格(身体)検査実施
7・13(木)一学期試験開始
17(月)一学期終業式
20(木)試験成績による新席次掲示
9・1(金)二学期開始
10・3(火)第一回遠足実施(坂戸方面)
17(火)秋季父兄会
28(土)御真影奉戴
11・3(金)天長節奉祝式
4(土)第二回遠足実施(豊岡方面)
12・15(金)二学期試験開始
20(水)二学期終業式
25(月)新席次掲示※2
1・16(火)寄宿舎開設
2・11(日)紀元節奉祝式
3・14(水)三学期試験開始
16(金)学年試験開始
21(水)校長講演「中学教育ノ方針」※3
31(土)学年試験成績掲示

※1 志願者の一身に関する記入調査および、挙動性情を視察するための面接が行われた。
※2 寄宿舎については115頁参照
※3 この講演会は、これ以前に増野校長が県内各地で中学教育の意義を説いていたので、第三中学校の父兄が中心になって増野校長に川越での講演を依頼し、川越町民に参加を呼びかけた。

明治33年

1900

中3回

学友会が発足し、運動会、講話会を開催。

開校二年目は様々な組織が整備された。基本的な学校行事もほぼ出揃った。それらの基礎となるのが学友会である。

学友会は本校在籍の生徒を以て会員とする（会費は月額一〇銭）点で、現在の生徒会の前身といえるかもしれないが、会長は校長がこれにあたり、委員長こそ生徒から選出されたが、副会長以下役員は会長の委嘱によって本校職員がこれにあたった。

「会則」によると、会の目的は「本校教育ノ趣旨ヲ体認シ心身ノ修養ヲ勉メ善美ナル校風ノ発達ヲ翼成スル」こととし、そのために、次のことを行うとしている。

一、諸種ノ遊戯及ビ運動ノ会ヲ催ス事
二、講師ヲ招請シテ学術及ビ道徳ニ関スル講話ヲ聴く事
三、教育上有益ナル企画ヲ賛助スル事
四、会員相互ニ相戒メ相助クル事

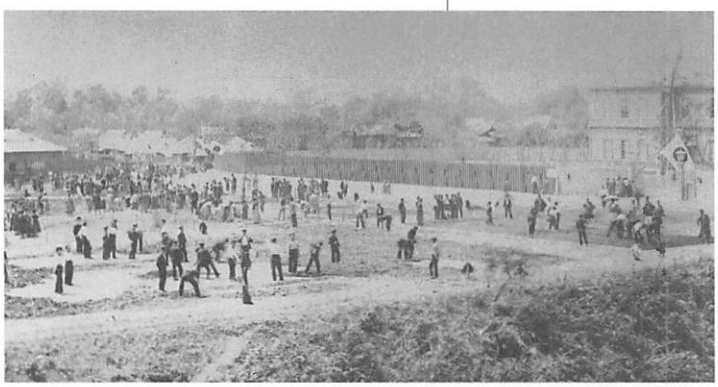
目的の第一項を実現すべく、五月二十八日の開校記念日を期して、学友会主催で記念すべき第一回の運動会が開かれた。競技は全部で四〇回行われた。その競技種目を次に紹介する。

乙短距離、旗取り、甲短距離、
戴嚢、二人三脚、球拾い、
撃剣紅白仕合い、長距離、擔荷（たんか）、
各級選手長距離、職員長距離

以上である。種類はそれほど多くはない。時代を反映しているのは旗取り、戴嚢、撃剣紅白仕合い、擔荷、といったところだろうか。当日は、午後一時開始、五時に終了した。

次の学友会主催行事は講話会である。これも「会則」の第二項の実施であり、始めの数年は、年間三回の講話会がもたれた。

4・9（月）入学志願者予備調査
10（火）入学試験（出願者一四四名）
14（土）修業証書授与式
第二回入学式（一二四名）
20（金）体格検査実施
5・10（木）皇太子殿下御成婚奉祝式
瑞葉園開設
学友会発会式



皇太子（大正天皇）の結婚を祝して、校門の南側の土地を耕して草花を植えた。これが瑞葉園である。校門に日の丸が掲げられているので、5月10日の開設風景であろう

日本▶『鉄道唱歌』(東海道篇)発行。娼妓取締規則公布(18歳未満の娼妓就業禁止)。
世界▶巨大飛行船ツェッペリン号初めて空を飛ぶ。エバンズ、クレタ島の発掘開始。ニーチェ死す。

次にこの年の講師と講演の演題を記す。

第一回(七月四日)
増野校長「居と志」
本校教員　和田亀之助先生「水の話」
佐藤藤助先生「北清地理」

第二回(九月二十三日)
高等師範学校教授　岸本能武太氏
「英語を学ぶ心得」
本校教員　岡本　定先生
「漢字に対する中学生の覚悟」

第三回(一月二十六日)
元外国語学校教授　村井知至氏
「米国青年の気風」
本校教員　佐藤惟昇先生
「学生と社会の進行」

＊

九月に部団設置というのがある。これは学友会会則第四項にある「会員相互ニ相戒メ相助クル」ための組織として、会員を第一から第五部団に分けて編制したもので、会員に問題行動があった時にはなんらかの制裁を加えたらしい。

■最初(1900年)の修学旅行行程■

第3学年……

10／31　川越＝所沢＝国分寺＝新宿＝品川＝横須賀＝鎌倉
※横須賀では海軍造船所、新造軍艦朝日号を縦覧。鎌倉の宿は丸屋という旅館である。

11／1　宿…由比ケ浜…江ノ島…鎌倉(諸史跡見学)…宿
※この日は雨の中だが、歩いて移動したようである。

11／2　宿…鶴岡八幡宮…鎌倉駅＝横浜(横浜港見学)＝新橋…招魂社参拝…牛込＝新宿＝国分寺＝川越

第2学年……

10／31　川越＝信濃町…青山練兵場…陸軍大学校…日枝神社…愛宕山…新橋…銀座…宮城(きゅうじょう)…宿(九段の望雲閣)
※宿の近くに靖国神社(招魂社)があるが、夜の自由行動で行く者がいた程度である。

11／1　宿…神田明神…浅草水族館…上野博物館…上野動物園…飯田町＝川越

第1学年……

11／2　川越＝所沢＝国分寺＝八王子＝国分寺＝川越
※八王子にて萩原製糸場、信松院、富士ヶ岡公園などを見学

※＝は鉄道、…は徒歩である

13(日)特別教室棟及び雨天体操場新築
28(月)第一回運動会開催
7・4(水)第一回講話会
10(火)一学期試験開始
16(月)一学期終業式
9・1(土)二学期始業式、生徒役員任命
17(月)部団設置、細規発表
23(日)第二回講話会
29(土)遠足実施(飯能方面)
10・2(火)体格検査実施
7(日)秋季父兄会
31(水)三年修学旅行(横須賀、鎌倉方面)
二年修学旅行(東京方面)
11・2(金)一年修学旅行(八王子)
3(土)天長節奉祝式
17(土)遠足実施(大井村方面)[※1]
12・14(金)二学期試験開始
20(木)二学期終業式
25(火)新席次掲示
1・8(火)三学期始業式
9(水)山田県知事来校、訓諭す
26(土)第三回講話会
2・11(月)紀元節奉祝式
3・12(火)三学期試験開始
28(木)成績掲示
30(土)修業証書授与式

※1　この遠足の帰途、〝部隊競争〟と称してクラス毎に大井から学校までを競争した。だいたい三十分前後で帰りついた。

明治34年

1901

中4回

校名を川越中学校と改称、学友会「会報」が創刊された。

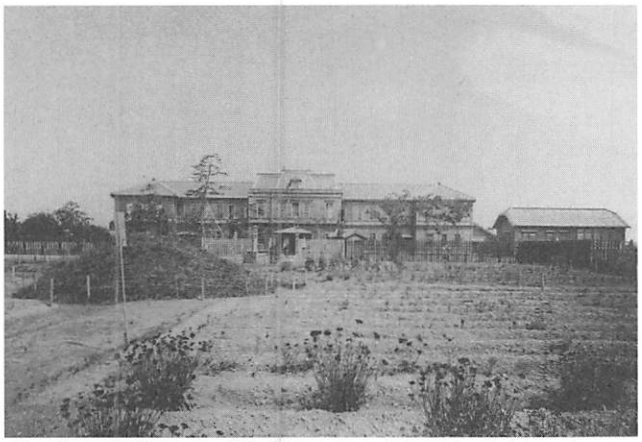
開校三年目も新しいことがいくつか見受けられる。

まず、四月二十九日に当時の皇太子に第一子（後の昭和天皇）が誕生し、五月五日に命名式が行われたのを記念して、瑞葉園の中に土を盛ってこれを豊栄丘と命名した。

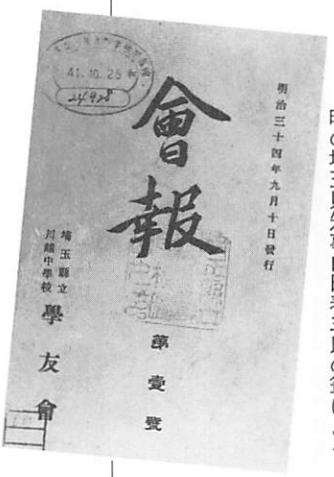
次に学友会の「会報」の編集である。五月十日、編集責任者に嘱託教師寺尾熊三先生が委嘱され、他に生徒の編集委員が一四名である。創刊号は開校時から二年半分を扱ったが、四か月という短い編集期間でさまざまな記録を整理した。この間県知事からの告示で、学校名が第三中学校から川越中学校に変わった旨が最後の奥付に見られる。

印刷所は東京のジャパンタイムズ社、費用は一〇六円五九銭五厘だった。第二号まで裏表紙に上のマークが印刷されている。学友会のシンボルマークと思われる。

学友会のマーク



前年に作られた瑞葉園の中に豊栄丘が築かれた。左側の小高い丘がそれである



学友会「会報」第一号。表紙の題字は当時の埼玉県知事山田春三氏の筆による

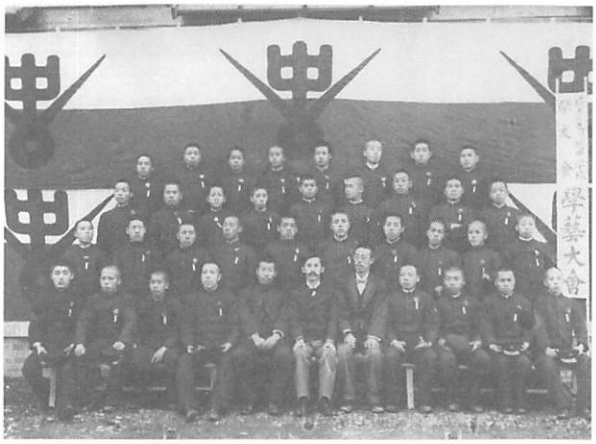
4・7（日）入学志願者予備調査（一二九名）
8（月）一学期始業式、生徒役員任命
入学試験実施
15（月）第三回入学式（入学者一二〇名）
23（火）体格検査実施
28（日）父兄懇親会（喜多院にて）
30（火）学友会総会
※この頃特別教室及び雨天体操場使用開始
5・5（日）皇孫誕生奉祝式
豊栄丘起工式
18（土）学友会春季大運動会開催
7・10（水）一学期試験開始
15（月）一学期終業式
20（土）新席次掲示
8・13（火）校名を川越中学校と改称
9・2（月）二学期始業式
10（火）学友会「会報」第一号発行
18（水）部団執事選挙

日本▶八幡製鉄所操業開始。田中正造、足尾鉱毒事件で天皇に直訴。与謝野晶子、『みだれ髪』刊行。
世界▶アメリカ、製鉄３社が統合しＵＳスチール会社設立。レントゲン、デュナンに第１回ノーベル賞授与。

次に十二月一日に学芸大会が開かれた。これは毎年秋に開かれていた父兄会が、単調で父兄の参加が思わしくないということを考慮して、生徒の作品や実地演習を披露することにより父兄の関心を集めようとしたものである。

作品は、習字、図画、地図、植物標本、地図模型(日本全図の他に中国の遼東半島)、製作器械で、他に修学旅行の写真も併せて講堂と三教室に陳列。

演習の部は、和英文章の暗唱、朗読、演説、対話、理化学実験で、雨天体操場を会場とした。


学芸大会の日の整列写真。後ろの幕に学友会のマークが見える

第四回講話会
嘱託教師　寺尾熊三先生
「札幌農学校の過去及現在」
教諭　村瀬米之助先生
「地理学より見たる埼玉県」
第五回講話会
海軍大佐　国友次郎氏
「海軍思想に就きて」
第六回講話会
学校長　増野悦興先生
「中学校教育の第一義」
東京専門学校講師　安部磯雄氏
「英独学生の気風」
「欧米諸大学に於ける体育」

この年も講話会が三回開かれたが、そのうち最後の講話会では安部磯雄氏が講話をしている。安部氏は社会主義者であると同時に自由主義的なキリスト教徒でもある。実は増野校長と安部氏は、出身地こそ違うが、共に一八六五年生まれ、ほぼ同じ時期に同志社で新島襄の薫陶を受けている。このような、増野校長との私的な関係で安部磯雄氏が講話会に来たものであろう。

23(月)第四回講話会
28(土)遠足実施(志木方面)
10・7(月)体格検査開始
28(月)四年修学旅行(足尾及び日光)
三年修学旅行(横須賀、鎌倉方面)
30(水)二年修学旅行(東京、横浜)
11・1(金)一年修学旅行(立川、青梅)
3(日)天長節奉祝式
9(土)第五回講話会
12・1(日)学芸大会開催
16(月)二学期試験開始
19(木)二学期終業式
1・8(水)三学期始業式
19(日)第六回講話会
2・11(火)紀元節奉祝式
24(月)増野校長、休職を命じられる
26(水)教務主任和田亀之助教諭、校長事務取扱となる[※1]
3・1(土)三、四年生発火演習実施
11(火)三学期試験開始
31(月)修業証書授与式

※1　当日は全学年で遠足の予定であったが雨天のため三、四年生のみ、川越付近でのこの演習となった。記録上、発火演習の初見である。

安部氏の講話には思想的なものは見られないが、その一か月後、増野校長が突然休職を命じられた。時の県知事との対立が原因ともされるが、真相は明らかでない。

明治35年

1902

中5回

運動会で新聞発行。第一回卒業生は29名。

学友会組織が若干改められ、風紀、学芸、運動、会計の四部編成となった。学芸部は講話会や展覧会を主催するもので、また、運動部は運動会を主催するほか、撃剣、柔道、野球、庭球、フットボールの五部からなり、生徒はこの中のいずれかに所属することが義務づけられた。今日につながる、いわゆる部活動の始まりである。

また、春と秋の運動会で〝運動時報社〟なる組織が活躍した。これは当時五年生の矢部謙次郎（後に時事新報社勤務）が、他の五年生一二名と共に、その日の競技結果等をワラ半紙大の新聞にして発行したもので、当日はグランドの片隅に天幕を張った小屋を立て、印刷機械は学校や川越町役場から借りて新聞を十回発行したという。

三月に第七回目の講話会が開かれたが、このときから生徒の弁論の練習会を兼ね、一八人が登壇した。ほかに講話者と演題は次の通りである。

陸軍参謀本部　楠山大尉
「最近七、八年に起これる出来事に鑑み帝国国民の軍事上の覚悟」
校医　井上　力氏
「独逸国大学の状況及学生体格に就いて」
教諭　磯部精一先生
「英語の歴史に就いて」

そして三月三日、兵庫県立豊岡中学校長小倉敏行氏が本校校長に着任。しかし初代校長増野氏の強い影響下にあった生徒にはなかなか受け入れられず、第一回生の卒業写真の撮影に小倉校長は呼ばれなかった。

三月三十日、午前九時より第一回卒業式が行われた。卒業生は二九名である（入学

4・7（月）入学志願者予備調査
8（火）入学試験実施
一学期始業式
12（土）第四回入学式（入学者九八名）※1
5・9（金）入学志願者追加募集（十名許可）
遠足　坂戸（一年）、岩殿（二年）
17（土）学友会総会
24（土）父兄会
28（水）春季運動会開催
7・10（木）一学期試験開始
9・1（月）二学期始業式
校長、学友会組織改正を発表
17（水）学友会改正規則発表

11月に開催された秋の運動会の風景。手前の観客の服装や女性の髪型に時代が見える

日本▶日英同盟締結。八甲田山で第五連隊の199名遭難。横浜でペスト発生、家屋を買い上げ、焼き払う。
世界▶ハバロフスク・ウラジオストック間のシベリア鉄道開通。ナイル川のアスワンダム完成。

時は三九名だったが、二年次の試験欠席一名、三年の時に落第四名と中途退学四名、五年の時に中途退学一名)。式の来賓、参列者、式次第は次の通りである。

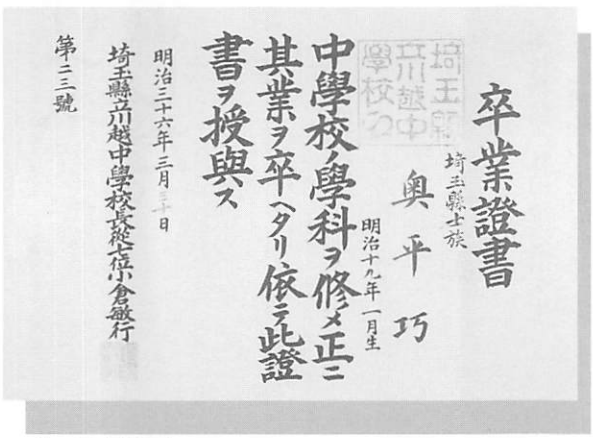
来　賓　県知事、県視学官等

参列者　父兄、保証人、生徒、職員

式次第　県知事臨場、校長挙式の旨告ぐ、唱歌君が代二回、教育勅語奉読、卒業証書授与、校長式辞、県知事告辞、来賓祝辞、職員惣代祝辞、生徒惣代祝辞、卒業生惣代答辞、卒業式の歌、賞状授与、校長終式の旨告ぐ、県知事退場

第1回卒業生の整列写真。前列中央の人物は、4年次から1回生の学級監督となった小幡弘基教諭心得。撮影が卒業式後の4月のためか、4名が映っていない

卒業式の「賞状授与」の内容は不明だが、当時は一年間を通じた学科成績、操行、勤怠等を査定して、優秀な者に特別賞をはじめ、一、二、三等賞、そして精勤賞が与えられていた。



卒業證書

埼玉縣士族　奥平巧　明治十九年一月生

中學校學科ヲ修メ正ニ其業ヲ卒ヘタリ依テ此證書ヲ授與ス

明治三十六年三月三日

埼玉縣川越中學校長從七位小倉敏行

第三號

第1回卒業証書

19(金)県令第59号により県立中学校学則の一部改正

10・7(火)体格検査開始

16(木)遠足実施(松山方面)

20(月)休職中の増野氏、本職を免じられる

30(木)五年修学旅行(箱根方面)

四年修学旅行(水戸方面)

31(金)三年修学旅行(御岳方面)

二年修学旅行(高尾方面)

一年修学旅行(府中方面)

11・3(月)天長節奉祝式

12(水)文部省学校衛生主事来校視察

16(日)秋季大運動会

1・1(木)新年拝賀式

24(土)発火演習(入間郡新宿村付近)

25(日)学友会「会報」第二号発行

2・1(日)寄宿舎請負賄制を廃止し、自炊制とする

3(火)雪中遠足(入間郡伊草方面)

3・1(日)学友会第七回講話会

3(火)第二代校長小倉敏行氏着任

6(金)発火演習(入間郡堀兼村付近)

16(月)学年試験開始

21(土)文部省視学官野尻精一氏本校視察

30(月)第一回卒業証書授与式

※1 募集人員は一二〇名であったが、この年の出願者は九八名のみで全員合格となり、更に追加募集して十名が出願合格した。

明治36年

1903

中6回

日露戦争にむけて、生徒が軍に献金した。

五回目の開校記念日をむかえた五月二十八日、この年は記念式の後、運動場にて演武会なるものが催された。これは撃剣及び柔道の試合を行ったものであるが、本校生徒や職員だけでなく、地元の有志や剣客を招いて対戦したものである。

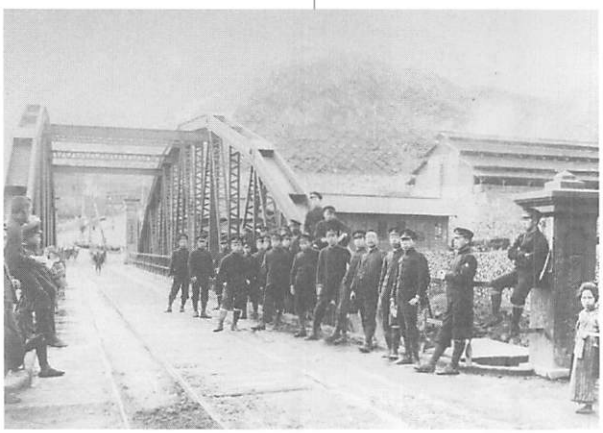
九月の学友会臨時総会で、会則が再び一部改正された。前年の改正で、在校生を通常会員、卒業生を特別会員、教職員を賛助会員とし、特別会員は毎年五〇銭の会費を納めるものとされたが、この年会費をなしにした。また、従来の運動部が柔道、撃剣からなる武芸部と、野球、庭球、フートボールからなる運動部に分かれた。やがて武芸部は盛んになるが、運動部の方は庭球のほかは振るわない。そして学友会内に図書館を設置、学芸部が管理にあたるとした。

九月のお彼岸には、〝亡友祭〟がとり行われた。これは学友会会則第二十条に従って、本校在学中に死亡した二名の生徒について行われた神道祭式である。

この年度で、目をひくのは、一九〇四年三月十三日の「生徒一同、軍資金を献納」である。いったいいくら集まったのか不明

第八回講話会
東京帝大理科教授　坪井正五郎氏
「人類学の大意」
本校教諭　芳賀景介先生
「応用的才能」
本校教諭　秋田鐐之助先生
「博物の応用」
第九回講話会
生徒二五人による発表
第一〇回講話会
東京帝大理科教授　坪井正五郎氏
「古物遺跡の調査の真価値」

4・8(水)一学期始業式
13(月)第五回入学式
27(月)学友会総会開催
29(水)体格検査開始
5・28(木)開校記念式
演武会開催
31(日)第八回講話会開催
6・6(土)遠足実施（所沢町方面）
29(月)第九回講話会開催
7・15(水)一学期終業式
9・1(火)二学期始業式
学友会「会報」第三号発行



5年生の修学旅行。足尾銅山にある古河橋の上にて

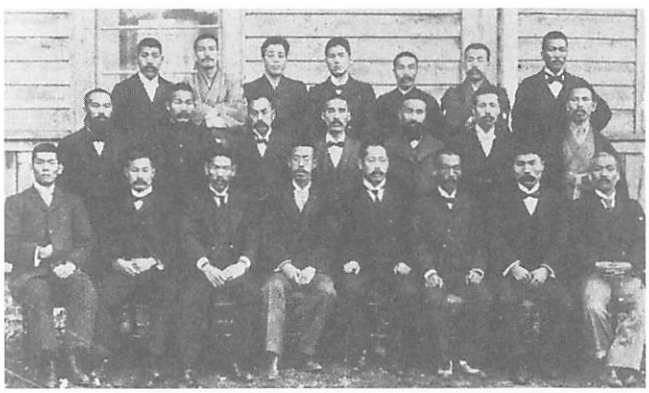
日本▶一高生徒藤村操、華厳の滝に投身自殺。東大七博士、対露強行意見発表。東京で路面電車走る。
世界▶ライト兄弟、飛行機発明。第１回ツール・ド・フランス開催。キュリー夫妻ノーベル物理学賞。

だが、この一か月前の二月十日に日露戦争が始まった。それにむけてのものであることは間違いない。同年四月発行の学友会「会報」四号に、当時五年生だった柳井淑人（後年小学校準訓導となり、川で子供を助けようとして殉職してしまう。50ページ参照）が「清韓に就きて」という文章を寄せている。要旨は次の通りである。

吾が国に隣接する清韓の地の「一盛一衰は吾が国の利害に関係する」「天の万物に於ける一視同仁は洋の東西を問はない」はずだが、「欧米人の東洋に垂涎するや、虎狼の狐狸を襲ふが如」くである。特に幕末の対馬占領から、日清戦争後の遼東還附要求にいたるロシアの無礼なる行いは、「山賊の所業に類似し、亜細亜人にして熱血あるもの、誰れか慷慨悲憤」しない者があろうか。今こそ「ロシアの暴慢を挫く」時だと叫ぶ。

政府の国民へのアピールそのものと言えるが、当時の中学生がいだいていた世界観、歴史認識がうかがえる。

"Bicycle Race" と題された写真。時期ははっきりしないが多くの見物人が集まっている


明治36年か37年の教職員。前列左３人目から、前原新校長、和田教諭、小倉前校長。小倉氏他２教員が去るにあたって撮ったものであろう

2（水）学友会臨時総会開催
4（金）同志会[※1]発足
9（水）学友会内に新たに図書館設置
24（木）秋季皇霊祭を卜して亡友祭実施
10・11（日）第一〇回講話会開催
12（月）身体検査開始
21（水）五年修学旅行（日光、足尾方面）
四年修学旅行（箱根方面）
24（土）三年修学旅行（東京方面）
二年修学旅行（八王子、拝島方面）
一年修学旅行（飯能、高麗方面）
11・3（火）天長節奉祝式
16（月）秋季大運動会
12・23（水）二学期終業式
26（土）小倉敏行校長、和田亀之助教諭、市村巌助教諭、休職を命じられる
熊谷中学校長前原仙次郎氏、本校校長事務取扱を兼務
1・1（金）新年拝賀式
8（金）三学期始業式
14（木）前原仙次郎氏、本校校長に転任
3・12（土）学年試験開始
13（日）生徒一同、軍資金を献納
19（土）三学期終業式
30（水）第二回卒業証書授与式

※1 62ページのコラム参照
※2 〝休職を命じられる〟とあるが、三人がそれぞれどの様な理由で〝休職〟となったのかは不明である。

明治37年

1904

中7回

戦勝を祝って提灯行列。運動会が「天長節」の日となる。

一九〇四年二月十日、日露戦争が始まった。後の十五年戦争の時に比べれば、戦争が学校生活に入り込んでくる割合ははるかに少ないが、それでも「会報」五号の記事に日露戦争に関するものが多く目につく。

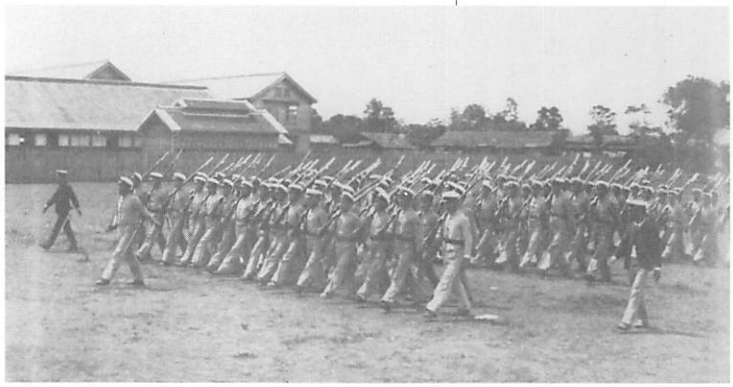
まず最初が、六月一日の「遼陽占領」を祝う提灯行列である。「会報」にはこの内容に関する記述がないので、詳しいことはわからない。ただ「遼陽占領」は十月で、五月三十日に大連を占領しているので、これは「大連占領」を祝っての提灯行列の誤りと思われる。

そして六月二十五日の講話会では、東京帝大教授の上田萬年氏（一八九九年の開校式には、文部省の専門学校学務局長として出席している）が「日露戦争後に於ける青年の覚悟」と題する講話を行っている。戦争はまだ始まったばかりであるが、日本人の統一性、及び君臣同体の国体によって日本の勝利は疑いもないこと、とりわけ維新以来の近代化政策の優れていることを勝因とし、そしてそのことを十分考え、戦争後も気を引き締めるべきことを説いている。

旅順をめぐる激しい攻防が繰り広げられている十一月、川中では発火演習が行われた。三年生以上が福原村の所沢街道沿いで実戦さながらの軍隊組織を作って南北両軍に分かれ、午前三時から十一時にかけて模擬白兵戦を展開したのである。

また、川中の教職員で徴兵された人もいた。まず一九〇四年三月に助教諭鈴木庸三先生、五月二日に助教諭心得田端八十次先生、八月二十三日にはやはり助教諭心得の原田榮旦先生がそれぞれ戦地に赴いた。この内、鈴木先生は翌年一月二十五日の戦闘で「前額部貫通傷」を負い、渋谷の陸軍病

4・8（金）一学期始業式
15（金）第六回入学式
学友会「会報」第四号発行
28（木）体格検査開始
5・28（土）開校記念式
6・1（水）遼陽占領祝勝のため職員生徒一同、提灯行列
25（土）第一一回講話会開催



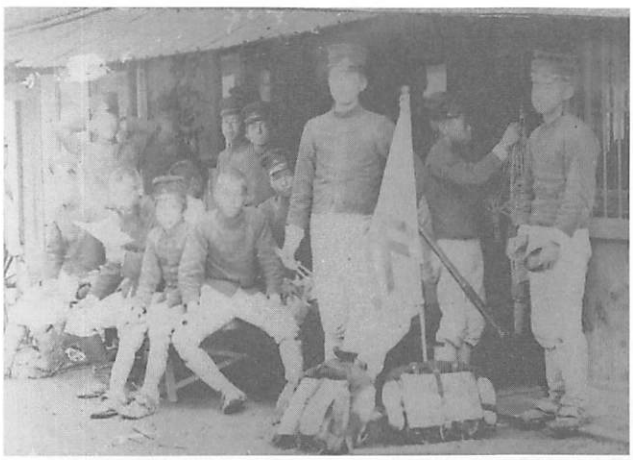
体操の授業は「普通」と「兵式」合わせて各学年3時間あった。これは「兵式体操」での行進と思われる。左奥の建物は雨天体操場。その奥の二階屋2棟が寄宿舎か

日本▶全国の小学校で国定教科書使用開始。「平民新聞」が『共産党宣言』訳を掲載、発禁。
世界▶英仏協商成立。イギリス、ロールスロイス１号車完成。パブロフ、ノーベル医学賞受賞。

院に収容され、また田端先生は「徒歩砲兵第一独立大隊第一中隊」に所属し、一月に開城後の旅順に入場した様子を、少尉の肩書で書き送ってきている。

二月の海軍中将による「義勇艦隊」建設を呼びかける演説は、やがてくるバルチック艦隊との対決に備えてのものであろうか。とするなら、大変重みのある事実である。

他に戦死者葬儀参列というものがたびたび実施されたが、詳しいことは不明である。



上下とも、この頃行われた発火演習の合い間のスナップと思われる

第一一回講話会
東京帝大教授　上田萬年氏
「日露戦争後に於ける青年の覚悟」
本校教諭　松崎求己先生
「樺太境界談判」　他生徒16名
第一二回講話会
日本禁酒同盟会長　安藤太郎氏
「禁酒に就きて」
同副会長　ソーバル博士（アメリカ）
「学生訓」

7・16(土)一学期終業式
9・1(木)二学期始業式
17(土)第一二回講話会開催
午後武芸大会
10・12(水)五年修学旅行(日光方面)
四年修学旅行(箱根方面)
15(土)三年修学旅行(横浜方面)
二年修学旅行(青梅方面)
一年修学旅行(東京方面)
11・3(木)天長節奉祝式[※1]
午後、秋季大運動会
26(土)発火演習(三年以上、福原村)
12・13(火)職員生徒一同戦死者葬儀に参列
20(火)二学期終業式
1・1(日)新年拝賀式
9(月)三学期始業式
2・10(金)職員生徒一同戦死者葬儀に参列
14(火)上毛孤児院[※2]主の演説、並びに携うる蓄音器を聞く
15(水)海軍中将有地允之丞氏、義勇艦隊建設に関し演説
18(土)職員生徒一同戦死者葬儀に参列
25(土)職員生徒一同戦死者葬儀に参列
3・11(土)学年試験開始
20(月)三学期終業式
28(火)第三回卒業証書授与式

※1　天長節の日に運動会が行われた最初の年である。
※2　三学期に行う学芸大会をやめ、その費用を孤児院に寄付したお礼である。

明治38年

1905

中8回

日露戦争の勝利に川中生も興奮した。

一九〇五年、日本はヨーロッパ列強の一国に勝利した。「会報」六号には、その勝利での川中生の興奮が随所に表れている。

日本海海戦勝利の五日後、その祝賀のための武装行列が行われた。どのような〝武装〟であったのかは不明である。更に九月五日にポーツマス条約が結ばれた後、戦利品を見学に所沢に遠足に出かけている。どのようなものが陳列されてあったのか、これも不明である。

そしてこの年度に行われた講演は、全て日露戦争に関したものである。講演者と演題は次の通りである。

第一三回講話会

農学士　志賀重昂氏　「従軍些談」

第一四回講話会

陸軍歩兵少佐　山田軍太郎氏

「征露第一軍作戦概要談」

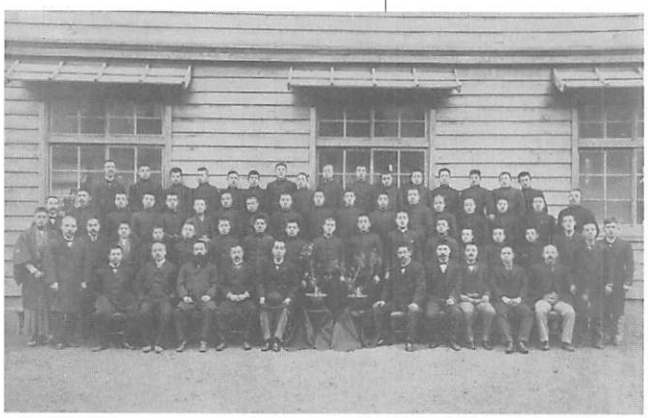
水兵　三村寅吉氏

※演題不明だが、海戦談

第一三回の志賀重昂と言えば、『日本風景論』（一八九四年）で有名な国粋主義者である。志賀氏は旅順攻防戦で見聞きしたさ

日露戦争勝利を祝って川越町内に作られた〝凱旋門〟

4・8（土）一学期始業式
9（日）入学試験挙行
15（土）「会報」第五号発行
16（日）第七回入学式
20（木）職員生徒一同戦死者葬儀に参列
5・3（水）生徒体格検査開始
28（日）開校記念式
6・1（木）職員生徒一同、日本海海戦大勝祝賀のための武装行列
13（火）第一三回講話会、午後武芸会



第4回卒業生。この中に後に奉安殿を設計した室岡惣七がいる

日本▶ポーツマス条約反対で、日比谷焼き打ち事件起こる。平民社、内部対立で解散。「仁丹」発売。
世界▶ロシア、血の日曜日事件。戦艦ポチョムキンの水兵反乱。アインシュタイン、「相対性理論」完成。

まざまな出来事を、山田氏は戦争開始からの第一軍の動きを話した。

この他軍事関係では、六月に水雷艇主唱者による講演があり、十一月には三年生以上によって発火演習が行われた。前年同様南北両軍に分かれての白兵戦が展開されたのである。

このように日露戦争での勝利、学校でのさまざまな講演、軍事演習が続く中で、川中生のボルテージは次第に高まった。「会報」六号には、五年生が中心となって、「奮起せよ吾人青年」と題して、大志を抱くことの必要性を説いたり、「戦後に於ける吾人青年の覚悟」では、戦争に勝利し世界の一等国になった、この光栄ある国家の後継者としての自覚を持て等、戦争の勝利で気持ちの高ぶった川中生の文章が続く。

この他、前原校長赴任以来、武芸部がさかんとなった。柔剣道の道場設備の拡充などが進み、特に剣道（当時は撃剣と称された）は、学年は不明だが、鎌倉への修学旅行の途中、雨天による予定変更で師範学校に赴き、数番の試合を行うなどしたほどである。

戦後に於ける吾人青年の覚悟（「会報」6号より）

五年乙組　平沼静治

…而して我国は全戦の光栄を擔ふて、世界一等国中の優勝なる地位に進み、世界列国をして驚嘆せしむ。斯くの如く国運の発展と共に、その為すべき責務も増大し、従って我等国民たるもの、責務亦重大となれり。而して吾人青年は、此の光栄ある国家の後継者を以て任ずるもの、豈に奮発一番、報効の誠を抽てすして可ならんや。西哲曰く「一国の盛衰は青年の元気如何に関す」と、青年たるもの、今に於て覚醒するにあらずんば、我帝国の前途知るべきのみ。嗚呼皇統連綿二千五百有餘年、未だ曾て外国の侮を受けたることなき、金甌無缺の歴史を有する我国が、吾人の時代に於いて衰運に向ふとせんか、実に千載の恥辱ならざるなきを得んや。嗚呼吾輩青年たるもの、責任何んぞ其れ重大なる。今や我国は戦勝の効果を利用して、世界に飛躍せざる可からざる秋に際す、随て其人才に須つもの、此の時より切なるはなし。而して之れが衝路に當って、快刀乱麻を断つの手腕を揮ふべきものは、現今の青年にあらずして誰ぞや。吁青年たる者奮起努力せざるなきを得んや。（抜粋）

7・17(月)一学期終業式
9・1(金)二学期始業式
4(月)職員生徒一同戦死者葬儀に参列
9(土)職員生徒一同戦死者葬儀に参列
30(土)戦利品見学のため職員生徒一同所沢に遠足
10・18(水)平和克復につき勅語奉読式
19(木)英国艦隊観艦のため生徒一同修学旅行
20(金)三学年以下、修学旅行より帰校
22(日)四、五学年修学旅行より帰校
11・3(金)天長節奉祝式
4(土)秋季大運動会※1
18(土)発火演習(三年以上、入間郡高階村、大井村)
12・21(木)二学期終業式
24(日)大宮にて開催の浅田中尉歓迎会へ、有志生徒並に校長と付添職員二名参列
1・1(月)新年拝賀式
26(金)第一四回講話会
2・11(日)紀元節拝賀式
瑞葉園に戦勝記念の植樹を行う
3・27(火)第四回卒業式

※1 一一月三日に行う予定であった。当日が雨天のため四日に順延となったが、競技回数が増えて七五回となった。

明治39年

1906

中9回

一年生、初めて妙義山へ遠足。卒業生、柳井准訓導が殉職。

一九〇七（明治四〇）年発行予定の「会報」七号は、原稿が集まらなかったので予定通りには発行されず、翌年にようやく発行された（「会報」七号には編集係からの会員への苦情、奮起を促す文が載っている）。「会報」七号は一九〇七年の記事が中心であるため、一九〇六年の記事はほとんど見られない。ただ、巻末に明治三十九（一九〇六）年度の学友会決算報告が掲載されており、それを基にいくつかの行事の実施が確認されるに過ぎない。

その中で時期不明の「演武会」について若干説明する。「会報」では、一九〇三年五月の開校記念式の後に行われたのが最初である。翌年九月の講話会の後に行われた「武芸大会」も別のところでは「演武会」と称されている。一九〇五年は六月の講話会の後に行われているので、この年も六月の松崎中尉の講話の後と思われる。内容は川中生による撃剣、柔道の試合で、来賓を招き、出場者には賞品が出されている。

十月の一年生の妙義山への旅行は、この年が最初である。川越電気鉄道の久保町駅（現在の東京電力附近）から大宮に出て、信越線で松井田まで行き、妙義山麓に投宿、険悪な妙義山中の道をおそるおそる歩いた。

年表中の第二回卒業生柳井淑人の殉職について、若干記す。柳井は当時二一歳、川越南尋常小学校（現川越中央小学校）の准訓導であった。

彼は一九〇六年九月二十日、一学級の児童を引率して古谷村の荒川付近で校外授業を行っていた。ところが一児童が誤って川に転落、これを助けようとして自らも命を落としてしまったのである。

そしてこの事件の十六年後の一九二二（大正一一）年、柳井を顕彰する記念碑が、同窓会などの働きかけによって川越の蓮馨寺に建てられた。

4・16（月）入学式（志願者一二三名、入学者一二二名）
5・20（日）学友会「会報」第六号発行
6月　第一五回講話会
　松崎中尉の海戦談
9・20（木）卒業生柳井淑人（中2）殉職
10・17（水）一年修学旅行（妙義山～18日）
10月　東京修学旅行（学年不明）
11・3（土）運動会
11月　発火演習
3学期　第一六回講話会
3・26（火）第五回卒業式
＊この他に「演武会」が行われている

川越中央小学校に建つ柳井淑人の顕彰碑。最初は蓮馨寺境内に建てられたが、いつの頃か、当地に移された

日本▶鉄道国有法で主幹線国有化。宮崎滔天、新聞「革命評論」発刊。「ゴールデンバット」発売。
世界▶イランで国民議会招集、憲法発布。インド独立運動、スワラージ、スワデシー等を採択。

明治期、卒業できたのは半分だった

左に示した表は明治四十五年の『埼玉県立川越中学校一覧』掲載の「生徒増減一覧表」に、卒業者数を加えたものである。これを見てもわかるように、明治から大正時代にかけて、川中に限ったことではないが、毎年10～20%の生徒が中途退学している。

これを学年別の〝卒業率〟で見ると、この数字は更に大きくなる。一年目に入学した一回生は「成績優秀なる者」が二年生になったということもあってか、三九人入学に対して卒業は二九人だが、二回生は八〇人入学で卒業四二人とほぼ半減する。

生徒の進級、卒業を阻むものの第一は試験である。例えば、『八十周年記念誌』に中九回（明治三十九年入学）の有山余志三氏は次のように書いている。

「……この幾何のためでもあるが、三年で原級にとどまったものが少なくない。原級で思い出すのだが、私達入学者は百二十余名、二年はまあまあだが、三年にまたドッカリ置き去りにされ、四年はどうやら、五年にまた振るい落とされたので、卒業生は入学生数一二〇人に対し、その半数以下の五十七人になってしまった。しかも、学年の平均点が四十点未満が一科目、四十点以上六十点未満が三科目あると進級できないのだから、出来る者でもウカウカしていられない。試験が一本勝負なので、容赦はない点取り競争であった。」（ちなみに明治三十四年に定められた「県立中学校学則」には、「各学科ノ学年成績五十点以上ニシテ平均六十点以上ノ者ヲ及第トス、但一学科ノ成績点四十以上五十未満ノモノ三科以内ナルトキハ平素ノ成績ニヨリ及第セシムルコトアルヘシ」とある）。

彼等が進級できなかったのは試験によるものだけではない。じつは開校以来の資料が川高の金庫の中に残されていた。これをもとに、一二四名が入学した三回生のそれぞれの軌跡を分類すると、次の通りである。

中途退学した者は五七名を数え、そのうち家事の都合が二二名、落第一八、病気事故八、中学校施行規則五十一条によるもの（性行不良等によって退学を命ぜられた）四、学年試験欠席三、商業見習のため二、死亡二である（家事の都合というのが、家庭の経済的事情のためかどうかはわからないが、ちなみに明治時代の授業料は月額一円五〇銭、巡査の初任給が一二～一五円の時代である）。他に転校した者は一三名で、そのうち、落第を重ねた結果の者三、実業学校へ転学した者二。そして落第しながらも卒業した者は一〇名である。さまざまな人生模様がうかがえる。

順調に五年間で卒業できた者は四一名、なんと三分の一にしか過ぎない。

明治期生徒増減一覧表（中途退学や落第などのため、本表の在籍数は記事中の数字とは一致しない場合がある）

	第1学年		第2学年		第3学年		第4学年		第5学年		卒業	合計	
	在籍数	中退者数	在籍数	中退者数	在籍数	中退者数	在籍数	中退者数	在籍数	中退者数	者数	在籍数	中退者数
M32年	80		39									119	
M33年	119	10	69	7	34	4						222	21
M34年	119	12	100	16	50	16	33					302	44
M35年	120	14	93	19	79	15	44	6	29	1	29	365	55
M36年	87	11	100	24	70	21	64	9	42		42	363	65
M37年	81	13	66	19	80	20	61	11	54	1	46	342	64
M38年	91	20	67	7	60	14	71	14	56	4	49	345	59
M39年	116	12	81	16	56	12	60	8	68	2	56	381	50
M40年	127	6	104	15	72	19	46	7	60	7	54	409	54
M41年	118	15	111	18	84	23	57	5	43	3	40	413	64
M42年	119	21	81	28	91	20	71	13	52	2	50	414	84
M43年	115	9	96	17	71	16	83	9	63	1	59	428	52

（明治45年「埼玉県立川越中学校一覧」より）

実業教育を切り離した中学校

―明治・大正期の中学校―

我が国の近代の教育制度を定めた最初の法令は、一八八六（明治一九）年の「学校令」である。時の文相森有礼によって定められた帝国大学令、中学校令、小学校令、師範学校令を総称したもので、教育を国家発展のために効率的に行おうとしたものである。

この時の中学校令では、中学校は五年制の尋常と二年制の高等の二段階に区分され、共に「実業ニ就カント欲シ又ハ高等ノ学校ニ入ラント欲スルモノニ須要ナル教育ヲ為ス所」と位置付けられた。その中で、高等中学校は専門教育と大学進学のための予備教育機関という性格がはっきりしていたが（一八九四年に高等中学校は高等学校に改められた）、尋常中学校は実業教育と上級学校への予備教育という二重の性格と機能をもたされていた。

やがて産業革命が進展する中、埼玉県第三中学校が開校する一八九九年に、新しい中等学校制度を確立する三つの法令（中学校令、実業学校令、高等女学校令）が出された。

産業革命は大量の技術労働力を必要とし、従来のような徒弟奉公的な職工養成では間に合わなかった。そこで学校での実業教育を独立させるべく出されたのが実業学校令で、埼玉県では一九〇二年熊谷農学校、一九〇七年には川越染織学校（現川越工業高校）が開校した。

この実業学校令をうけて、新しい中学校令での中学校の位置付けは「中学校ハ男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トス」となった。すなわち、目的を「高等普通教育」に一元化することによって、実業学校との区別が明瞭となったのである。表の教育課程表を見てわかるように、開校当初の川中には実業科目は全くない。

しかし中学校のこのような性格付けは、地元の要望とは少しくいちがっていた。とくに商都川越であってみれば、商業経営を中心とした実業教育こそが中学校に求められるものであった。だから、初代の増野校長は中等教育のいかなるかを、地域に説いて回らなければならなかったし、初期に「家事の都合」を理由とした中退者が多かったのも、この認識の違いによるものとも言えよう。

また、高等女学校令は女子の上級教育を要望する声の増加を背景に整備され、「高等女学校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ為スヲ以テ目的トス」とうたった。埼玉県では一九〇〇年に埼玉高等女学校（現浦和一女高）が設置された。

しかし修業年限は四年で、教育課程を男子の中学校と比較すると、理科や数学がけずられ、川中では七時間もある外国語にいたっては〝随意科目〟とされて設置する必要もなかった。その分、中学校にはない「裁縫」や「家事」が一〇時間前後もあった。一般の普通科目にこれらの科目を加えることによって、いわゆる〝良妻賢母〟の育成が目指された。一八九九年の中学校令は、そのような女子教育との区別も明らかにしたのである。

川越中学教育課程表（1901年）

学科目	一年	二年	三年	四年	五年
修身	1	1	1	1	1
国語漢文	7	7	7	6	6
外国語	6	6	7	7	7
歴史地理	3	3	3	3	3
数学	4	4	4	4	4
博物	2	2	2	2	—
物理化学	—	—	—	3	4
法制経済	—	—	—	—	2
図画	1	1	1	1	—
唱歌	1	1	1	—	—
体操	3	3	3	3	3
計	28	28	29	30	30

日露戦後の社会と学校教育

ところで一八八六年の段階では50%程度に過ぎなかった小学校の就学率は、一八九〇年に授業料が廃止されたこともあって、産業革命の進展とともに急上昇し、日露戦争後の一九〇七年には97%に達し、義務教育が六年に延長された。女子の就学率もほとんど差がなくなった。このような状況を背景に、埼玉県内では一九一一年に熊谷高等女学校、川越高等女学校が相次いで設置された。

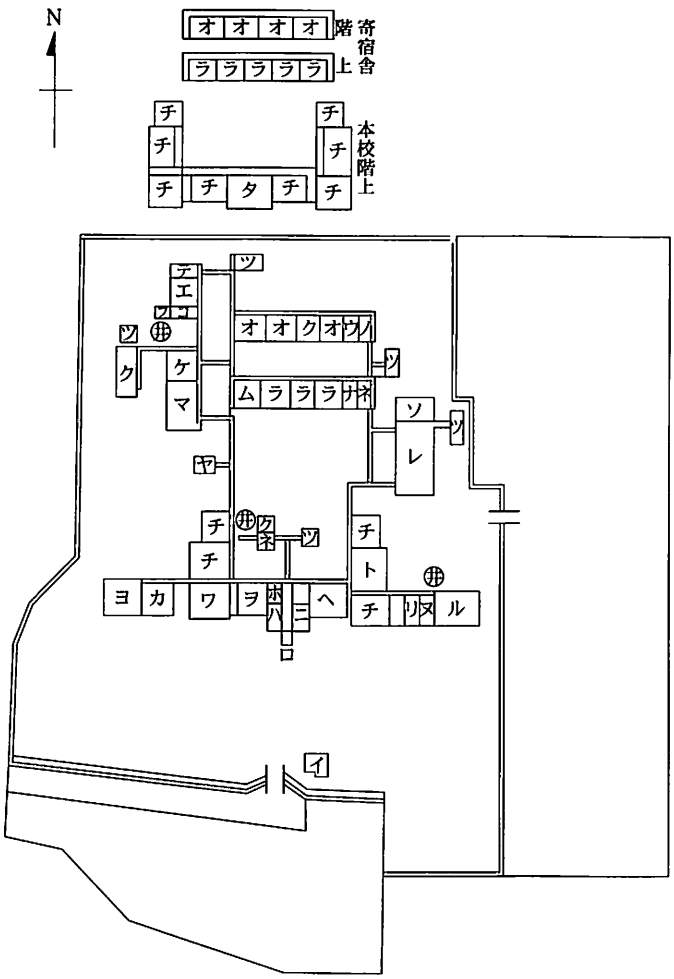
このように国民教育が根をおろす中で、政府は小学校の教科書を国定制とする一方、学校では日露戦争を題材として様々な講話や行事が行われた。学校は国家主義的価値観を民衆に浸透させる上で大きな役割を果たした。

一方、産業革命の中で芽生えた社会主義は、維新以来の自由主義思想を復活させ、知識人や民衆に新しい可能性を示した。また経済発展は、自己の利害を第一とする風潮を生んだ。

しかしこの様な動きを牽制すべく、政府は一九〇八年に、国家利益を優先すべきことを改めて説いた戊申詔書を出し、学校でその奉読儀式を行わせた。

こうして明治末からの学校教育は、いくつか見られるデモクラシーの芽を抑えつつ、国家主義を柱として展開されてゆくのである。

1909年の校舎配置図



イ 門衛所
ロ 玄関
ハ 校長室
ニ 事務室
ホ 職員宿直室
ヘ 教員室
ト 武術場
チ 通常教室
リ 理化器械室
ヌ 理化準備室
ル 理化教室
ヲ 習字図書教室
ワ 歴史地理教室
カ 博物器械標本室
ヨ 博物教室
タ 講堂
レ 雨天体操場
ソ 銃器室
ツ 便所
ネ 小使室
ナ 舎監室
ラ 自修室
ム 新聞雑誌縦覧室
ウ 舎監寝室
ノ 病室
オ 生徒寝室
ク 物置
ヤ 油庫
マ 食堂
ケ 炊事場
フ 火焚場
コ 盥嗽所
エ 浴室
テ 脱衣室
井 井戸

明治40年

1907

中10回

「水泳教授」が始まる。同窓会が設立される。

この年の重大事として同窓会の設立があるが、校内でのトピックスはなんといっても「水泳教授」の開催である。

この「水泳教授」の呼称は「水練」、「水泳部」とか、いくつかあるが、一九〇七年から一九四〇(昭和一五)年まで、毎年七月下旬から八月上旬にかけての二週間ほど、水泳技術の修得を目的として、房総の館山湾の海岸で、希望者を対象に行われた。参加者数はだいたい五〇～七〇名だった。

水泳教授がどういう経緯で始まったのか、詳細は不明である。「会報」第七、八号に、時の前原校長自らがその記録を詳しく書いていることを考えると、校長の強い意向もあったかもしれないが、例えば、唱歌「われは海の子」がこの頃作られたように、日露戦争後の国民の中で、〝海国日本〟という認識が強くなったという背景は無視できまい。当時の浦和中学でも、この年に「水泳練習会」が房総で始まっている。

一年目の水泳教授は次のように行われた。

まず場所は千葉県北条町字八幡（現館山市）の北条海岸。ここは第一高等学校を初めとして多くの中学、高校が遊泳場として使った。参加希望生徒、七三名。指導者は、監督教官に東尚胤、桑原侃先生（陸軍少尉で、川中の兵式体操を担当していた）、水泳教官には三重県から樺井耕造氏を招いた。樺井氏は観海流という古式泳法（斜体泳法を根本とする）の教授にあたった。

宿舎は近くの農家を借り切り、外に三間一二間のバラックを建てて泊まった。

泳ぐ前に英語学習

日課は次のように記されている。

一、起床　午前五時

4・8(月)始業式
15(月)入学式
5・21(火)二、三年、東京勧業博覧会へ
上野(～22日)
7・26(金)房州北条海岸で水泳教授開催
(七三名参加、八月八日まで)
8・23(金)荒川洪水[※1]
9・1(日)同窓会発会式[※2]
10・17(木)修学旅行
二、三年　水戸へ
五年　箱根へ
11・22(金)発火演習(川越にて)
3・25(水)第六回卒業式

※1　八月二十一日から雨が降り始め、二十四日に水が堤防を越え、二十六日になってようやく水が引き始めたという。

※2　詳しくは、98ページ参照。

水泳教授での集合写真。フンドシの色は浦和中の赤に対して、川越中は白だった

日本▶日露戦後恐慌。日本初のガソリン自動車製造。義務教育6年になる。「デカンショ節」流行。
世界▶アメリカ、ハワイ・メキシコ・カナダからの日本人の入国禁止。英仏露三国協商成立。

一、朝食　同六時
一、学科　同七時より八時まで
一、水泳　同九時半より十一時半まで
一、午食　正午
一、水泳　午後一時半より三時半まで
一、入浴　帰舎後随意
一、夕食　午後五時
一、就眠　同八時

このうち「学科」は、基本的には学年別に分かれての英語学習にあてられた。

さて水泳の練習そのものであるが、始めはそれぞれの泳力に応じて（全く泳げない者が三分の一以上いた）、「ヨーイソラ」の掛け声とともに水の中を往復した。その間に進歩が認められた者を、等級に応じて審査する。そして、一町（約一〇九メートル、遊泳時間五分程度）から、五〇町（遊泳時間二時間）までの段階で泳力が認定された。

最終的に五〇町及第は二二名で、彼等には観海流初段免状請求の手続きが取られた。初めは全く泳げなかった者でも半数近くは一〇町まで達し、中には五〇町に到達した者が一名いた（水泳教授が回数を重ねる中で生徒の泳力は漸進し、やがて、八〇町にも達する者も出てくる）。

最終日の八月八日の終業式でそれぞれの泳力の証書が渡された。その後、小隊教練、木剣体操、西瓜拾い、茄子拾い、千鳥競泳等の余興が行われて、終了となった。

なお「教授」の終盤近くに、北条海岸で関東水泳大会が開催されて川中もこれに参加。生徒一〇名が、観海流の「陣笠飛及平泳榜示廻りの形」というものを披露した。

生徒一人当たりの費用は、往復旅費一円七五銭、宿泊料五円二七銭、雑費七五銭であった。

水泳教授の変遷

1907：7.26　館山の北条海岸で水泳教授始まる
1910：8.2　この年から「水練」と称される
1912：8.12　明治天皇の崩御で実施が遅れる（～8/24）
1914：7.21　学友会で「水泳部」と位置付けられる
1918：7.21　希望者100名以上いたが、赤痢発生で一時中止。3年生以上で実施
1919：7.26　八幡の宿との値段交渉不調により、近くの岩井村に移る（以後ずっと岩井浜で実施）
1920：7.22　物価高により期間を11日に短縮
1940：7.23　戦前最後の水泳部出発（～8/1）

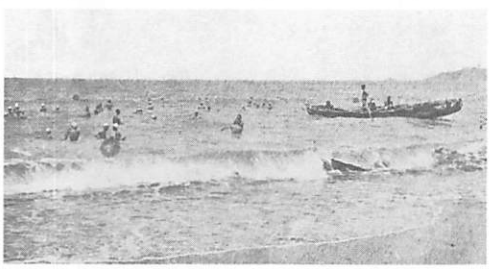
水泳部の歌

一、秀麗高き富山（とみさん）や
紺碧深き岩井濱
境を占むる水泳部
日影月影清くして
晝三伏（ひるさんぶく）の暑さなく
九夏の夜も夢安し

二、朝に迎ふる富士の峰
夕に送る富の鐘
晴れては泳ぎ雨に読む
浮世の夏も白波の
寄する渚の友千鳥
喜び多き團欒（まどい）かな

三、時こそ来れ赤帝の
威はたけくして焔吐く
いざや試さん腕の冴
怒濤狂瀾何かある
海国男児の奮闘を
見せばや三芳野健児團

四、嗚呼勇ましの水練よ
浪の戦果てぬれば
心さやかに身も軽く
意気天を衝く思ひあり
沖にはなほも白波の
われて砕けて玉と散る



上の歌は、開催場所が岩井に移る大正後期に作られたと考えられる。飯田亮先生作詞とされている（写真は1914年のもの）

明治41年

1908

中11回

同志会を中心に、校長の教育方針への批判が起こる。

「会報」には一九〇八年に関する記事が少ない。しかし『七十周年記念誌』『八十周年記念誌』のOBの回顧談や『同志会十年史』などから、この頃、前原校長の方針を批判する動きがあったことがうかがえる。

前原仙次郎氏は、一九〇〇年に熊谷中学校の校長に赴任したが、一九〇三年十二月、川越中学校の小倉敏行第二代校長が休職となったのを受けて、翌年一月に川中の第三代校長となった。以後一九一二年八月に退職するまで、実に八年半の長きにわたって（校長としての在職の長さは、一〇〇年の歴史の中で最高）川中をリードし続けた。

この間川中では、日露戦争の時期と重なっていることもあって、学校の軍国主義的な動きが見られたが、これらは校長の個人的傾向と直接つながるものではない。

前原氏は同窓会の設立に助言し、その初代会長に就任するという面倒見のよさを示す一方で、自らが長州藩士出身ということもあってか、生徒の日常の生活態度には目を光らせ、武道の振興には特に力を入れ、校内武道大会が開催されるようになった。

前原校長について、『記念誌』の回想からうかがえる当時の在校生の印象をまとめると、次のようになる。

武道中心のスパルタ教育

学友会会則では剣道、柔道、野球、庭球、フットボールの中からいずれか一つを選べばよかったはずであるが、「野球、テニスをする者にろくなのはいない、柔剣道以外はするな」と釘をさされたり、平素の品行については特にやかましく、「靴は編上げはダメで、短靴とされ」「少しでも変ったことをすれば〝放課後校長室に用事あり〟

4・15(水)入学式
6・20(土)「会報」第七号発行
8・5(水)第二回水泳教授実施、房州鏡ケ浦海岸(〜17日)
8・30(日)同窓会第二回総会
10・13(火)四、五年修学旅行、日光、足尾へ(〜16日)
10・14(水)二、三年修学旅行、鎌倉・江ノ島へ(〜15日)
一年修学旅行、妙義山へ(〜15日)
11月初旬　運動会開催
11・21(土)発火演習
11月　「同志会々報第一」で前原校長批判される
3・28(日)第七回卒業式

*この他、「会報」の決算書からうかがえる出来事に「講話会」と「演武会」があるが、いずれも実施時期は不明である。

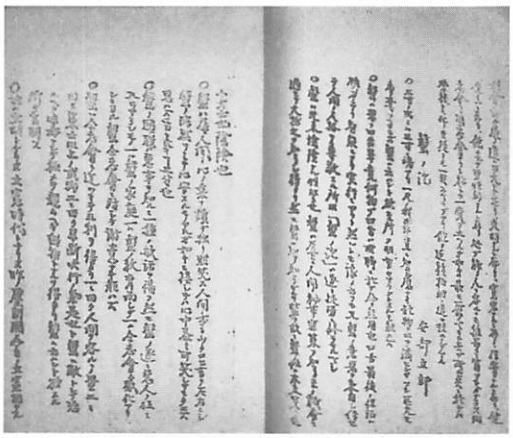
「同志会々報第一」の表紙。手書きで版をおこして印刷した

日本▶戊申詔書発布。第1回ブラジル移民781人、神戸から出発。川上貞奴の帝国女優養成所開所。
世界▶青年トルコ党の立憲革命。オーストリア・ハンガリー帝国、ボスニア・ヘルツェゴヴィナを併合。

の札が廻って来て、厳重な注意戒告を受ける」といった様子であった。また校長自身も質素で、「校長の弁当はいつも麦飯に沢庵」という話がある。

このようないわゆる〝スパルタ式〟教育に反発をもつ者もいた。その一人に、第一回卒業生の安部立郎（あんべたつろう）がいる。

安部は、生徒の自主性を重んじ、崇高な倫理観と人格主義を教育の基本にした初代校長増野悦興の影響を強く受け、卒業後の一九〇三年に、様々な活動を通じておたがいの人格を高めあうことを目的とした同志会（62頁参照）を設立した。



前原校長を批判した「蟹ノ泡」の冒頭部

同志会はテニスコート

そのような安部にとって、前原校長の教育は圧制以外の何物でもなく、母校川中の将来を憂慮せずにはいられなかった。一九〇七年に同志会で喜多院境内にテニスコートを作り、武道だけでは飽きたらない会員を中心に、「城南倶楽部」なる庭球団が作られたのも、前原校長への抵抗の一つと考えられるが、更に安部は前原批判を展開する。

一九〇八年十一月、「同志会々報第一」の中で、安部は「蟹ノ泡」と題して次のように書いた。

教育ニマテ専制主義ヲ及スノ必要アリヤ大体ヲ握テ一定ノ指針ヲ授ケバ□□タル青年進ムニ足アリ□ラ□ニ手アリ只粗暴ヲ戒メ極端ヲ防ガバ可也□□其手ヲ□、其足ヲ□ヘ其精神ヲ萎微縮少セシムルハ何事ゾヤ……（□は不詳文字）

名指しこそしていないが、前原校長の教育を痛烈に批判していることは間違いない。そして翌年八月末の同窓会総会の席上、第一回生の理事として出席していた安部は、同窓会長として出席していた前原校長を目の前にして、前原校長の教育法を痛論したのである。

この安部のほかに、表立った校長批判の動きは見当たらない。在校生自身は窮屈さを感じながらも、前原校長の教育法をそのまま受け入れていた者が多かったと思われるが、この当時の学友会「会報」に原稿が思うように集まらなかったのに対して、同志会の会員は増え続け、その雑誌「初雁」には多くの原稿が寄せられたというのは、安部の言動を支持する生徒が少なからずいたことを物語っていると思われる。

批判の対象は教育手法

ただ、安部らの前原批判の対象は、あくまでもその教育手法であって、私的なことは全く別である。実際、前原校長の子息二人が当時川中に在籍し、二人とも同志会役員として活躍していたのである。

なお、前原校長は一九一二年八月に突然辞職して、東京電気会社大井工場長として実業界入りしたが、この辞職が安部らの批判活動と関係があるのかわからない。

同窓会は、急拠有志が前原校長への記念品贈呈のための募金活動を行った。

明治42年

1909

中12回

開校10周年を迎え、校歌が作られた。

一八九九（明治三二）年に開校以来、川越中学はこの年で満十年を迎えた。

晴天に恵まれた五月二十八日の開校記念日、十周年記念祝賀式が創立時の県当局有志、卒業生、父兄、その他来賓を招いて行われた。この日に備えて、校歌と十周年祝歌の制作が画された。祝賀式の内容は詳らかではないが、午前八時より祝賀式、その中で、校歌が初めて披露された。

祝賀式終了後、卒業生有志や父兄の臨席のもと、運動会に移った。競技数一二〇というから、盛大である。三時に終了し、発表されたばかりの校歌と十周年祝歌を唱え、万歳三唱をもって歓喜のうちに解散した。

なお、十周年を記念して川越の書店が記念絵葉書を発売した。内容は、学校の風景と川越に関係する偉人（天海僧正、松平石見守、奥貫友山）ということである。

ところで校歌についてであるが、歌詞と譜面は804頁を参照されたい。作詞は古谷喜十郎教諭、作曲は内田粂太郎なる人物の手による。

作詞者の古谷教諭は一九〇七年に浦和高等女学校から川中に転任、以来国語教師として四年間在職し、一九一一年三月に病気療養のため依願退職となった。なお、576頁に孫の古谷圭一（高4）が「回想」をよせている。

作曲は近代音楽の大先達

一方、内田粂太郎氏と校歌について、戦後の川越高校の音楽教育で一時代を画した故牧野統教諭による評が『七十周年記念誌』に掲載されているので、それを引用する。

＊

本校校歌の作曲は内田粂太郎（明治二十

10周年記念で発売された絵葉書の1枚

4・14（水）入学式
5・28（金）開校十周年記念祝賀式挙行、式後大運動会開催
6月　一学期講話会
8・3（火）第三回水泳教授出発（～17日）（千葉県北条町、57名参加）
11月　発火演習
1・20（木）「会報」第八号発行
1・23（日）同志会[※1]入間川支部新設
3・27（日）第八回卒業式

※1　入間川町（現狭山市）から通学する生徒三〇名余りのほとんどが同志会員となったので、特別に支部設置となった。

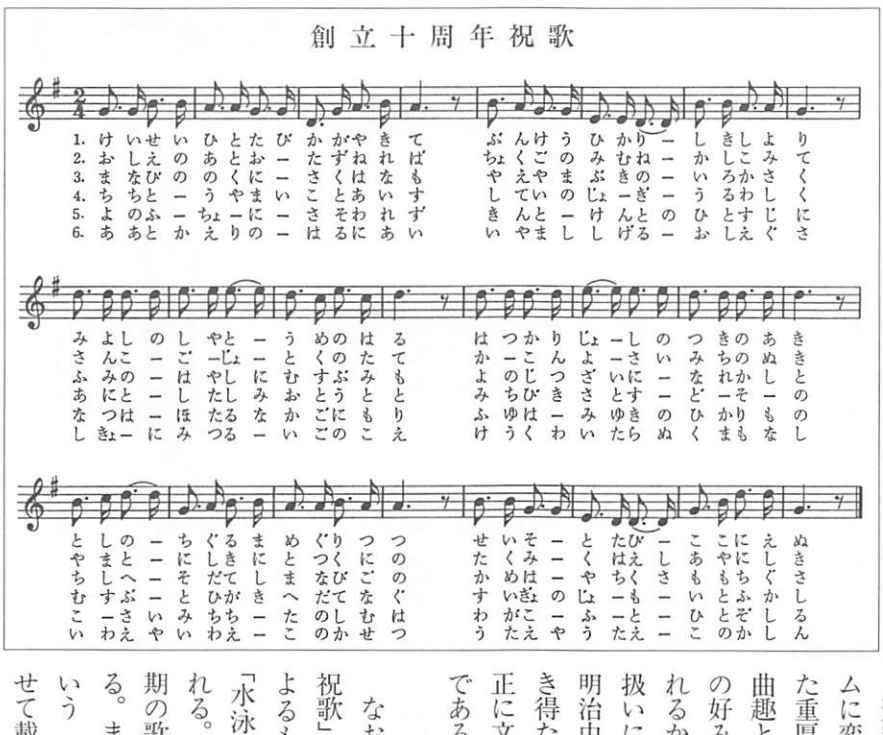
＊この他に時期不明で「大宮への遠足」、三学期に「服部海軍大主計」なる人物による講話会が開かれている。

日本▶伊藤博文暗殺される。生糸輸出量、中国を抜いて世界１位。徴兵検査でのトラホーム罹病率23パーセント。
世界▶ピアリー、北極点に到達。アパッチ族の大酋長ジェロニモ死す。

年、文部省音楽取調掛（二期生）氏による。音楽取調掛は後の東京音楽学校（現東京芸術大学）の前身である。滝廉太郎が明治三十一年、山田耕筰が四十一年卒であるから、まことに日本音楽の大先達による作曲である。一期生、つまり日本で初の音楽学校卒には、有名な幸田露伴の妹、幸田延の名がある。こんな古い時代の作曲でありながら、この曲は形式もよくととのい、リズムに変化があり、歌詞に応じた重厚さもある。ドイツ風の曲趣と言えよう。現代の若者の好みには、やゝ古く感じられるかも知れないし、拍子の扱いに誤りがあったりするが、明治中期にこれだけの曲を書き得た人に畏敬の念を感ずる。正に文化財的な価値を持つ曲である。

＊

なお、「川越中学校十周年祝歌」も古谷・内田コンビによるもので、更に古谷氏は「水泳部の歌」も作ったとされる。55頁に掲載した大正後期の歌の元となったと思われる。また、この頃作られたという「発火演習行軍歌」も併せて載せておく。



水泳部の歌

一、鏡ケ浦の砂白く
八幡の浜の松青き
境を占むる水泳部
ここは月影清くして
知る三伏の暑さなく
休暇の夜半の夢安し

二、あしたに向ふる富士の峯
夕べに親しむ那古の鐘
晴れには泳ぎ雨に読み
浮世の風も白波の
寄する渚の捨て小舟
たのしみ多き集いかな

古谷喜十郎先生

発火演習行軍歌

一、すめらみくにのものふは
生きては立てよいさをしを
死しては残せかんばしき
名は千代八千代の末までも

二、こう見よ豊臣秀吉は
矢作の橋の霜白く
むすびし夢はいかにぞや
また見よフランスナポレオン

三、コルシカ島の潮風に
破れし窓に春の雨
かかるはかなき倭（しゃ）の男（お）が
千軍万馬の将となり　オイッチニ

明治43年

1910

中13回

この年、帽子に一本の白線が入る。

一九〇八（明治四一）年に川越染織学校（現川越工業高校）が創立されていたが、一九一〇年の一学期、全校学級委員会で、染織学校と区別する方策が検討され、帽子に白線を巻くことになった。二本は当時の一高と誤られるので、川中は一本になった。

また九回生の回想によると、この頃学年バッジがあったという（桜、桔梗、撫子、他は不明。『八十周年記念誌』より）。

「会報」には、一九一〇年に関する記事は少ない。

この頃大雨が降ると、しばしば荒川や入間川が氾濫した。この年、時期は不明だが、入間郡水害地域学校に二五円寄付した。

またこの年の学友会決算を見ると、「入間郡学友会費四百六十人分一人五銭」として二三円が支出されている。全校生徒の数であるが、「入間郡学友会」がいかなる組織か、不明である。

ところで「会報」九号には、生徒の寄せた課題作文に「（明治四十四年）新年所感」というのがあり、その前年の韓国併合に言及しているものがいくつかある。例えば、

「……今や、韓国は併合せられて新日本の朝鮮となり、彼の人民は等しく明治聖代の恵に浴しつゝあり。……吾人は、今日に於て二千有餘年来の祖先の志を遂げ、遼東還附の報酬を得、日露戦争の効果を更に大ならしめ、併せて、地下十萬の将士の霊をして、莞爾たらしめたる記念すべきこの新年を迎へぬ。吾人豈大に楽しみ、大に喜び、抃舞（べんぶ）して以て祝せざるべけんや。……」

また、この頃講話会の時に演説を申し込む生徒頗る多く、しかも弁論の内容も上達を見ている、これは同志会等での練磨の功と考えられる、という。

4・11（月）入学式
6月　講話会
8・2（火）第四回水練
　　千葉県北条町（～17日）
9・23（金）二年修学旅行（高尾山）
11月　運動会
　　発火演習
2・25（土）講演会
　　鈴木巴水氏講談
　　一高教授、斎藤阿具先生[※1]
3・25（土）第九回卒業式

※1　斎藤氏の講演内容は、歴史の効用、並びに修学上の注意、といったものである。

1911年3月、第9回生の卒業写真。帽子に白線が見える

日本▶韓国を併合。大逆事件で社会主義者逮捕あいつぐ。石川啄木「時代閉塞の現状」を発表。
世界▶ハレー彗星、５月に地球に最接近。南アフリカ連邦成立。リルケ『マルテの手記』。トルストイ死す。

明治期、川中生の進路

表１　卒業後の進路

	上級学校	軍関係学校	小学教員	公務員	会社員	農　業	商　業	その他	合　計
１回生	11	0	3	1	1	3	5	5	29
２回生	10	3	8	4	2	7	2	6	42
３回生	21	7	5	1	2	4	1	5	46
４回生	20	2	4	0	3	7	9	4	49
５回生	24	2	6	2	6	7	2	7	56
６回生	28	1	5	1	1	4	7	7	54
７回生	24	0	2	1	4	1	3	5	40
８回生	23	7	3	0	2	5	5	5	50
９回生	27	1	3	3	2	9	5	7	57
10回生	42	1	3	1	3	7	8	9	74
11回生	32	1	1	1	3	4	10	4	56
合計	262	25	43	15	29	58	57	64	553

※上級学校：高等学校、大学予科、高等専門学校、師範学校等
　その他：宗教家、不明、死亡等
※当時は中学卒業で、小学校教員の“無試験検定”を受ける資格を得た。
※軍関係学校からは、ほとんどが職業軍人になっている。
※上級学校進学率は少しずつ高くなって６回生から５割前後となり、10回生になって突然際立って高くなる。この回期は卒業率も他の回期と比べると高い。同志会で活躍したメンバーが多くいる回期である。

表２　上級学校進学者の就いた職業

	教　員	技師研究職	医　師	会社員	公務員	弁護士	実　業	その他	合　計
１回生	4	1	1	1	0	0	1	3	11
２回生	0	2	1	3	0	1	0	3	10
３回生	4	4	7	2	1	0	1	2	21
４回生	3	4	8	2	0	0	0	3	20
５回生	2	3	11	2	0	0	1	5	24
６回生	2	3	4	4	2	0	2	11	28
７回生	9	2	2	1	1	0	1	8	24
８回生	9	4	5	2	0	0	0	3	23
９回生	8	3	7	5	1	0	0	3	27
10回生	8	5	12	2	2	0	1	12	42
11回生	9	2	3	5	2	0	1	10	32
合計	58	33	61	29	9	1	8	62	262

※７回生から教員が急増するが、そのほとんどが小学教員である。これは７回生が卒業する1909年に、１年制の埼玉師範II部ができた影響が大きい。ちなみに、Ｉ部は５年制で、高等小学校から進むものである。
※医師は大学医科、医学専門学校を経て、開業医、軍医、勤務医等になった者である。
※実業は農業、商業を含む。
※その他には、不明、死亡の他に、大学法科を卒業した後、そのままの者が多数いる。司法試験のために浪人中の者であろうか。
※明治期の川中生の就業状況をまとめると、１番多いのが教員。小学校教員がほとんどで、中卒、師範学校卒両方で、101名と、卒業者の１/５近くを占める。ついで、医師。次が農業と商業だが、家業を継いだ者として両方を足すと、教員を抜いてトップになる。ここに中学校令の目指した中学教育の位置付けとは別の、明治期の川中の置かれた状況が見られる。次が技術・研究職。上級学校卒、中卒の会社員が同数で並ぶ。そして軍関係へと続く。一般公務員はまだ少ない。

川越中学の大正デモクラシー ―同志会の三十年―

同志会は第一回卒業生の安部立郎（あんべたつろう）の手によって、川越中学校の卒業生、在校生を中核として結成された有志団体で、明治中期から昭和初期にかけてのおよそ三十年間、川越を中心に活動を展開した。

創設者安部は、自由主義的にして生徒の自発性を重んじた初代校長、増野悦興（ましのよしおき）先生を深く敬愛した。同志会はその精神を受け継いで生まれたとも言いうるが、安部自身の卓越した個性によって生まれた団体とも言える。そしてその積極的な活動によって、当時の川越中学校の生徒へは勿論、川越の政治、文化へも大きな影響を及ぼしたのである。

同志会については、既に『八十周年記念誌』でかなり詳しく紹介されているので、ここではそれらをもとにして、概要を述べたい。

黎明期-青年文庫と健脚隊

一九〇二（明治三五）年、増野校長に去られ、五年生となった第一回生二九人は、新しい学年の開始にあたって様々な抱負を語り、それらを実行していったが、その一つに図書館運営がある。

これは各自の寄付による本、会費で購入した本を集め、同年五月に川越慈善学校（養寿院境内）の校舎を借りて学生図書閲覧所にしたもので、「青年文庫」と名付けられた。しかしこれはその運営が思うようにいかず、ほどなく休業状態となり、翌年九月、蔵書は川中学友会に寄贈された。これによって学友会内に図書部が設置され、後の「明治文庫」につながるが、第一次「青年文庫」は消滅した。

一方、一九〇二年九月に、安部ともう一人の五年生広木隆壽、そして一年生海老名義雄（中5、後に会長になる）の三人で青梅に遠足に出かけた。自由にして愉快なこの行動は興味深く、さらに仲間を集めて活動を広げることになり、翌月、一〇名の会員で「健脚隊」が成立した。

始めは雑然とした会に過ぎなかったが、安部、広木らは会の統一を計るべく規則を改め、集会に力を注いだ。そして新たに図書を集め、隊員の意識を高めた結果、健脚隊の内容は次第に整備充実していった。遠足の目的地は、近くは伊佐沼、遠くは大宮、飯能の阿須山、高坂の岩殿山等である。また、回覧雑誌「健脚文壇」が一九〇三年一月から翌年三月まで一一冊出された。

こうして青年文庫―健脚隊から、同志会へと発展する気運が生まれた。

同志会の成立と発展

一九〇三年三月、安部、広木は川中を卒業した。その頃在校生の健脚隊員の中に、「吾々も段々進んで、幾分か学問的議論を試みるようになって来ると、健脚隊従来の事業はあまりに簡単であって変化に乏しい、モー少し複雑した偉業をやって見ようではないかと云う処から編輯事業の拡張、図書館の経営を企てた…」（『同志会十年史』海老名義雄「回顧十年夢茫々」より）という動きが現れた。

そして健脚隊を改革発展させる協議を重ね、同年九月四日、安部宅で「同志会」の発会式が行われた。会員一三名での出発である。

発足当初は人数も少なく活動もはっきりしなかったが、翌一九〇四年一月、安部は会の

同志会の創設者
安部立郎（中1）

振興に熱弁をふるい、海老名を会長としたほか、幹事、会計、編集、図書等を定めた。さらに四月には念願の印刷機も購入され、こうして同志会は図書編集、遠足、集会を順調に進行させ、七月には会員数も三〇名を超えた。

その後安部は一時会を退いたが、一九〇五年九月に復帰、自ら会長に就く一方、海老名を編集及び図書の責任者として会の活性化をはかった。そして一九〇六年一月の集会で図書館開館を決めた。場所は養寿院境内、川越慈善学校の旧校舎の一部。一月十三日に開館式が行われた。青年文庫の復活であると同時に、同志会図書館の開館でもあった。

備品はまだまだ貧弱で、図書用本棚は安部らが自宅から持ち込んだ。図書館の利用について、安部は規則を作り、整然とした雰囲気の中で会員の学習を期待した。一部には安部のこのような姿勢には反発を覚える者もいたようだが、多くの会員は安部の期待によく応えた。やがて会員数の増加にともない、活動拠点は安部宅から図書館へと移った。

同志会刊行の雑誌類（『同志会十年史』より）

一九〇六年十一月、養寿院が夜学校を始めるにあたり、同志会図書館は立ち退きを余儀なくされた。そこで、翌年五月、学校のすぐ南側の御岳山下の新築の家を借りて、これを新図書館とした。ここは学校にも近くて利用者が多く、やがて蔵書も一〇〇〇冊を超えた。

こうして同志会はようやく安定した活動を展開するに至る。二〇名前後の遠足参加。集会では安部らによる様々な演説（日露戦争後だけに、「戦争に於ける農民と国家」「戦後学生の覚悟」「将来の日本と清露」といった演題が見える）がなされた。また、編集図書は「同志会雑誌」（一九〇四年四月～十一月）及び「世界的日本」（一九〇五年一月より十一月）を謄写版で印刷し、「初雁」は第八号（一九〇七年九月）から川越分監（現川越少年刑務所）で活版印刷され、会員の感動を呼んだ。

同志会経営の二大主義

同志会の在り方について、安部は次のように書いている。

「然らば同志会とは如何なるものなりや。曰く同志会とは有為の青年の団体にして人格の修養を以て会員の本領とし協同一致を以て結合の基礎となすもの是也。人格の修養とは決して頑固偏屈の人を作るの謂にあらずして常識を備え品性体格学識円満に発達せる人を作るの謂也。協同一致とは附和雷同することにあらずして思ふ所を云ひ信ずる所を論ずるも多数によりて已に決定したる所にはよく調和服従するを云ふ也、修養と協同とは即同志会の二大主義にして会員の忘るべからざる旗幟、同志会の経営は先ず二大主義に適合して行はざるべからざる也。」（「初雁」九号「同志会経営の精神及理想」、一九一〇年三月）

ここに述べられた中で、「人格の修養」、「常識を備え品性体格学識円満に発達」、そして読書、討論会を通じて「思ふ所を云ひ信ずる所を論ずる」等、まことに大正デモクラシーの教育理念の先駆けであり、今日の川越高校が掲げる〝全人教育〟の発想の源流とも言えよう。また、同志会の活動の柱の一つに遠足があるが、それが「人格の修養」につながってとらえられる点は、二〇世紀に入って始まったドイツのワンダーフォーゲル運動を髣髴とさせるものがある。

川中生は同志会に新しい時代の息吹を見たのか、一九〇七年に会員は六〇名を数えた。

個人修養から運動団体へ

一九〇七(明治四〇)年、会の運営の中心は五回生の海老名等から、六回生へと移った。この頃から会の幹部には在校生の五年生がつくことになっていた。

十一月、安部は突然会長を辞任したが、それは前原校長批判によって禍が同志会に及ぶことを避けるためであった(57頁参照)。

会長は再び海老名に代わった。そして、安部はついに一九〇九年八月、前原批判を公然と行った。このことの同志会への影響は、成徳寮所属会員が一時退会せざるを得なくなったほかには特になく、会員はすぐに増え始めた。十一月に学校の博物教室で同志会の討論会が開かれたが、これに集まる者七〇名。安部が壇上に進むと拍手で迎えたのである。

先に喜多院庭球コートで、同志会員を中心とした城南倶楽部という庭球団が組織されていたが、一九〇九年十二月、同志会はこれと合流して同志会庭球部が成立し、同時に氷川神社境内に新コートが作られた。

一九一〇年一月には同志会の寄宿舎が宮下町に設立され、御岳山下の図書館も寄宿舎に移った。これは運営不慣れで一年で閉鎖されてしまったが、会の理想実現の一つとして企画されたものであった。

また一月には、剛健にして壮快な企画として、飯能で兎狩りが実施された。四四名が参加し、二匹捕まえ、食した。これは会員の意気上がるところとなり以後たびたび行われた。

やがて会員は一〇〇名になり、入間川方面からの学生はほとんど同志会に入会したので、同志会入間川支部が新設され、現地慈眼寺の二階を借りて図書を分置した。

この勢いは翌年も続いた。一月に幹部は国崎定洞、安部達人(たつんど)らの意気旺盛な十回生に代わった。寄宿舎の閉鎖にともなって図書館は中学校新道に移ったが、ここは学校に近いこともあって来館者が増え、会員数は最高の一二〇名に達した。

詳しい時期は不明だが、昭和初期か。後ろの建物は川越図書館と思われる(佐藤百合子氏蔵)

このエネルギーは学校内の「学生憲法発布」及び「野球革新」への下地を作ったというが、詳しい内容はわからない。しかし、安部の強烈な個性によって始まった同志会は、今や多数の幹部に率いられた有機的団体となり、当時の日本国内でのデモクラティックな流れを先取りするような動きすら見せたのである。

川越町立図書館の実現

さらに同志会は川越中学の枠から飛躍する。川越町では川越尋常高等小学校内に図書館を設立する計画を立てていた。これを陰で支えていたのが、当時川越町立高等女学校(後県立移管)英語教師で、川中一回生の岩沢新平である。しかし岩沢はやがて栃木県に転任、図書館設立計画を同期の安部に託した。安部はこの事業に奔走。同志会では一九一二(大正元)年十二月、川越町の図書館計画と合体することが了承された。

そして翌一九一三年二月、同小学校雨天体操場内に私立川越図書館が設立された。同志会の図書はこれと合体し、運営は同志会幹部と学校、町の代表者が協力してあたり、出資

は川越町学事奨励会に仰いだ。

この年九月、同志会創立十周年記念祝賀式が、同小学校雨天体操場で挙行され、あわせて『同志会十年史』が刊行された。

この後、海老名が急逝したためか、安部は再び会長に戻る。

安部会長は会員拡張の方針で、一九一五年、小学部（小学生対象）と染織部（染織学校生対象）を設けたが、染織部はすぐ消滅した。翌年には同志会自体の活動も衰え、集会出席者が五、六名という有様だった。

安部会長は同志会解散の意向を漏らした。結局会員の精選のため、会を一度解散して改めて会員を募った。入会したのはわずか七名だった。

会員数は少なくなったが、遠足はこの頃、安部の指導で土器や石器、板碑（いたび）の蒐集を行った。また入会にあたっては、会員による人物検査、そして安部会長が口頭試問を行い、これに合格して入会許可となる。

その結果、一九一七～一八年は伊藤泰吉（中17・後の川越市長）、坂田圭司（中17）ら、川中学友会の幹部が同志会に入会し、同志会は再び勢いをとり戻した。

図書館は、一九一五年に独立した建物を持つことになり、同志会員は特別閲覧室に自由に出入りしていた。一九一八年には、蔵書、建物が町に移管され町立図書館となった。ここに安部会長の初期の志は実現したのである。

また、一九一九年には安部会長と同期の岡田恒輔が川中校長に就任したので、川中と同志会の関係は一層円滑になった。

同志会から蘆笛短歌会へ

やがて安部の関心は次第に同志会から離れ、政治に向かっていった。

一九二三年二月、安部は第一回川越市議会議員選挙に立候補して、見事当選。ところがその一年後、安部は急逝してしまった。

一九二四（大正一三）年四月十七日、四十九日の法要を兼ねた追悼会、そして総会が蓮馨寺で行われた。そこで会の改組が模索され、結局、翌年安部立郎の甥にあたる安部達人が会長に就任した。

この頃在校会員は八〇名、特別会員は三〇〇名を超えていたが、同志会の活動内容は少しずつ変わっていった。同志会アーベント（夕べの会）、英語講習、一泊旅行、そして短歌会等である。短歌会は、安部達人が万葉集を会員有志に教え、作歌の手ほどきを行った。遠足は次第に行われなくなった。

一九二八（昭和三）年、同志会は創立二十五周年を迎え、記念事業として、「初雁」二一号の発行、基金積立が計画され、十月に記念祝賀会が行われた。この時、安部の功績を讃えるべく、図書館に安部立郎記念室を設けることを要望することが決議された。

だが一九三二年、市立図書館の新館建築にあたり、先に決議要望していた安部立郎記念室は設置されず、さらに、新館移転後、同志会員の閲覧室特別利用の特権は認められなかった。その結果、同志会は活動拠点を失った。同志会は解散を宣言したわけではなかったが、活動は目に見えて衰えていった。

時あたかも五・一五事件で政党内閣がテロで倒された年である。同志会の三十年は、まさに日本近代史における大正デモクラシーの盛衰そのものと言っていい。戦前の民主的潮流の意義と限界を研究する上で、大変興味深いものを提供している。

なお、同志会が遺したものに図書館のほかに短歌会がある。一九二八年に「蘆笛短歌会」と名付けられ、同志会本体の活動が止んだ後も、活動は続いた。戦争中は休会となり、また、安部達人も病没してしまったが、戦後、石黒宗吉（中22）を主宰者として復活した。合同歌集「蘆笛」を刊行し続け、真面目な地方歌壇として活動を続け、現在に至っている。

明治44年

1911

中14回

全校で所沢に飛行機操縦を見学に行った。

ライト兄弟によって飛行機が発明されたのが一九〇三年末。以来欧米各国は戦争への飛行機利用を研究した。一九一〇年、日本も所沢に飛行場を設け（現在の所沢航空公園）、その操縦を研究した。

一九一一年六月九日、所沢での最初の野外飛行が遠足の日と重なったので、これを見学に行くことになった。

前夜学校に集合し、午前一時、ラッパの響きとともに学校を出発、途中校歌を歌ったりしながら行軍、午前四時に所沢飛行場に到着した。

さて、当日操縦された機種は「ファルマン式」なる飛行機。操縦者は一回目、徳川大尉及び山瀬中尉。午前五時十六分離陸、高度四五〇㍍、三十五分間の飛行で川越方面を往復して無事帰着。

しかし二回目、徳川大尉及び伊藤中尉の飛行機は四十分たっても帰着せず、やがて故障で川越付近に墜落という衝撃的な知らせを受けた。川中生は直ちに帰校することになったが、汽車で川越に到着後、搭乗者二名は軽い負傷ですんだ、と聞かされた。

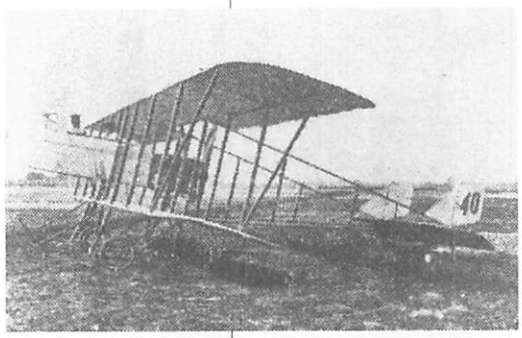
墜落というおまけまでついてしまったが、轟々たる爆音をたてて、天空を人間が駆ける姿を初めて目のあたりにした感動は、いかばかりのものであったか。

飛行機については、翌年一月の講演会で、伊賀氏広という男爵が飛行機の原理、構造、発動機その他を、模型や図で示して説明している。生徒は科学技術の進歩に目を見張り、人類の、そして日本の発展に大きな期待を寄せたのである。

同志会員の活躍目立つ

前後するが、五月二十七日の海軍記念日

4・10(月)入学式
5・27(土)海軍記念日講演会
水雷学校教官海軍大尉
鳥山貞美氏「日本海海戦談」
鈴木巴水氏講談
28(日)開校十二周年記念日
武術大会
6・9(金)全校生徒、所沢飛行場にて飛行機操縦を観覧
8・2(水)入間地方、未曾有の大洪水
3(木)第五回水練(～17日)
10・18(水)初代校長増野悦興先生死去
20(金)修学旅行　二・三年　高尾山
四年　鎌倉、江ノ島
五年　伊香保



当時の複葉式飛行機（『所沢市史』より）

日本▶徳富蘆花、一高で「謀叛論」講演。平塚らいてう、雑誌「青鞜」創刊。警視庁、特別高等課を設置。
世界▶中国、辛亥革命始まる。アムンゼン、南極点に到達。野口英世、梅毒スピロヘータの純粋培養に成功。

の講演会では、海軍大尉の講演に先立って、午前中に生徒五名の弁論と卒業生安部立郎（「会報」九号には「安部定郎」とあるが、誤植と思われる）の講演が行われている。

生徒五名は全員五年生で、かつ同志会員である。その中に国崎定洞（中10）という生徒がいる。国崎は東京帝大医科にすすみ、やがてドイツ留学し、共産党に入党。ソ連に入ったが、スパイ容疑でスターリンに粛正された（詳しくは493頁参照）。

この学年（十回生）は国崎のほか、同志会員が多い。同学年に安部立郎の甥にあたる安部達人（立郎死去後同志会会長）がいる影響もあるかもしれないが、卒業生七四名のうち、実に半数近い三二名が同志会員である。しかも学友会各部の理事は、文芸部江村守一、撃剣部国崎定洞、柔道部片岡常吉、庭球部関口信吉といった具合に、野球部を除いて同志会会員が名を連ねている。同志会の影響の大きさがうかがえる。

なおこの年（あるいは前年）から学友会の武芸（撃剣、柔道）、運動（野球、庭球）の各部はそれぞれ独立して位置付けられるようになったが、フットボール部が消えた。理由は不明である。

増野悦興先生、死去

一九一一年十月十八日、初代校長の増野悦興（よしおき）先生が、東京東洋内科病院にて永眠した。四六歳であった。増野氏が一回生に絶大な影響を及ぼしたことは前述したが、病中の増野氏の見舞いに卒業生は勿論、川中の現旧職員のほか、川越町の有志三〇余名等多数が訪れた。

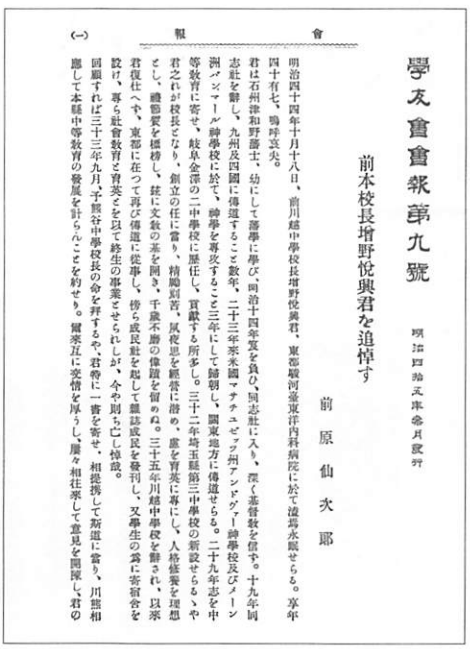
死去にあたって、「会報」九号の巻頭には増野氏の遺影を掲げ、それまで校長に赴任以来一度も寄稿したことのない前原校長が追悼文を書き、続いて一回生の岡田恒輔が増野氏の評伝を書いている。破格の扱いである。また、徳富蘇峰の「国民新聞」も増野氏の死去を伝えた。

増野氏が川中を去って十年。その間も、川越中学校に多くの影響を及ぼし続けたことを示している。

増野氏については、508頁の記事を参照されたい。

11・3（金）天長節、秋季大運動会
21（火）発火演習（三年以上、上戸村）
1・27（土）講演会
織戸正満氏「昔の乗物と今の乗物」
飛行機製作家、伊賀氏広氏
3・24（日）「会報」第九号発行
25（月）第一〇回卒業式

初代校長増野悦興先生



學友會會報第九號　明治四拾五年拾月發行

前本校長增野悦興君を追悼す

前原仙次郎

明治四十四年十月十八日、前川越中學校長增野悦興君、東都駿河臺東洋内科病院に於て遂に永眠せらる。享年四十有七、鳴呼哀尖。

君は石州津和野藩士、幼にして藩學に學び、明治十四年覆を負ひ、同志社に入り、深く基督教を信ず。十九年同志社を辭し、九州及四國に傳道すること數年、二十三年米國マチユゼフ州アンドヴァー神學校及びメーン洲ゾ〻マール神學校に於て、神學を專攻すること三年にして歸朝し、關東地方に傳道せらる。二十九年志を中等教育に寄せ、岐阜金澤の二中學校に歷任し、貢獻する所多し。三十二年埼玉縣第三中學校の新設せらるゝや君之れが校長となり、創立の任に當り、精勵刻苦、風夜思を經營に潛め、底を育英に專にし、人格修養と理想とし、禮儀愛を標榜し、徒に文教の基を固き、千歳不拔の像躰を留めぬ。三十五年川越中學校を辭され、以來君復仕へやゝ、東都に在つて再び傳道に從事し、傍ら政社を起して雜誌政民を發刊し、又學生の爲に寄宿舍を設け、專ら社會教育と育英とを以て終生の事業とせられしが、今や則ち亡し悼哉。

回顧すれば三十三年九月、子無谷中學校長の命を拜するや、君將に一書を寄せ、相提携して斯道に當り、川越相應して本縣中等教育の發展を計らんことを約せり。爾來互に交情を厚うし、屢々相往來して意見を開陳し、君の

「会報」9号巻頭に前原校長が増野元校長追悼文を寄せた

明治45・大正元年

1912

中15回

陸軍特別大演習が行われ、川中が大本営になった。

夏の暑い盛りの七月三十日、明治天皇の死去が報じられた。翌年九月に発行された「会報」一〇号は、巻頭に職員生徒一同の名で明治天皇追悼文を掲げている。

これにともなう「諒闇」ということで、例えば、同窓会総会は中止されるなどした。しかし学校行事の水練は、実施期日が延期されはしたが、二週間後の八月十二日から予定通り二週間の期間で実施された。

また、八月に突然退職した前原校長の後任として、新潟県新発田中学から渡部校長が赴任した。

この年の重大事は、秋の陸軍特別大演習に際しての川中の〝大本営化〟である。

陸軍は毎年秋に特別演習を日本各地で実施したが、この年は武蔵野の地で行うこと、そして天皇の行在所が川越中学になるらしいことが四月頃から伝えられていた。その後明治天皇の死去により演習中止かと思われたが、二学期に入り生徒の健康診断が厳重になり、平服の軍人が校内に出入りするようになった。そして九月二十一日放課後、生徒全員が集められ、当分の間の学校移転と大演習実施が正式に伝えられた。

学校移転は次の通りで、これより十一月下旬までのおよそ二か月、職員生徒は母校を離れた。

五年……尋常高等小学校

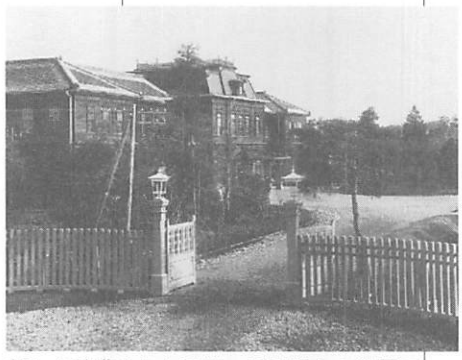
四、二、一年……入間郡公会場

三年……理科教室（後に入間郡公会場へ）

寄宿舎……石原町の佐久間旅館跡へ

そして校舎は大修繕を加えられ、本校舎の二階東側三室が御座所に、他の教室は、侍従や宮内大臣等の供奉員の部屋にあてられた。校舎の南側の庭がきれいに整備され、正門もほぼ現在の位置に移しかえられた。

4・10（水）入学式
5・28（火）柔剣道大会（開校記念日）
7・30（火）明治天皇死去
8・2（金）前原校長、依願退職
12（月）第六回水練（参加者三五名、千葉県北条町、～24日）
9・1（日）二学期始業式
4（水）第四代校長渡部鏑氏就任式
21（土）大演習に備えこれより学校移転
11・14（木）大正天皇、川中に入る
15（金）陸軍特別大演習始まる（～19日）
20（水）大正天皇、川越を去る
27（水）各学年、校舎に戻る
2・15（土）講話会　陸軍歩兵大尉秦真次氏「特別大演習に就きて」
22（土）発火演習（奥富村付近）
3・26（水）第一一回卒業式



新しく整備された正門。ほぼ現在の位置であるが、敗戦直後まで、生徒は特別の場合を除いてここを通ることは認められなかった

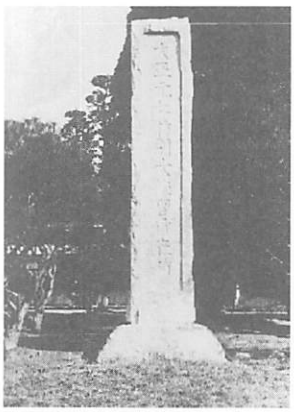
日本▶美濃部達吉、『憲法講話』刊行、上杉慎吉とのあいだに憲法論争。鈴木文治、友愛会結成。
世界▶英豪華客船タイタニック号、処女航海で氷山に激突して沈没。中華民国成立。第1次バルカン戦争。

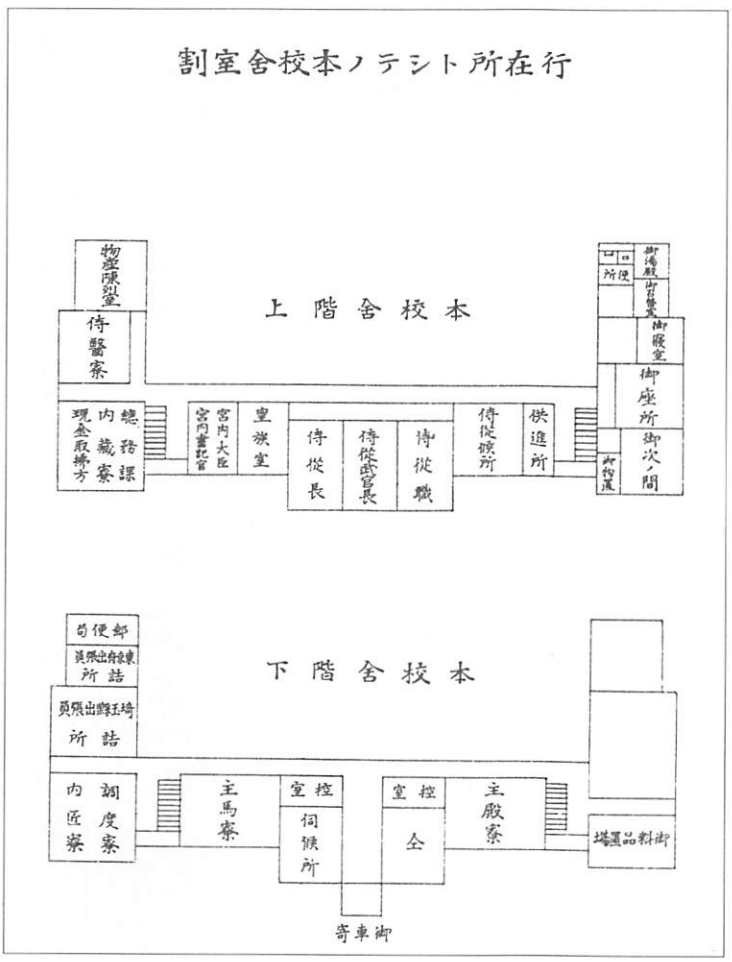
さて十一月十四日午後、大正天皇は新宿から列車で川越停車場（現在の本川越駅）に到着。駅からは馬車で川中に向かった。この奉迎にあたって、川中の全職員全生徒は午後二時に氷川神社境内に集合。道筋にあたる南町通の両側（郵便局から仲町、時の鐘付近）に整列して迎えた。

翌日から天皇は演習視察のため、武蔵野の各地に出かけるが、川中の職員生徒は、手分けしてその送迎に動員された。授業どころではない。職員は校長をはじめとして七名、生徒は二学年ずつで、毎日朝五時に氷川神社に集合した。他に校長はじめ一〇名の職員は、大演習地方委員としてその事務を担った。また十一月十九日には、所沢で賜餐会が催され、校長と教諭二名が招かれた。校長は大忙しであった。

そして翌二十日午前九時二十分、川中の全職員、生徒が見送る中、大正天皇は川中を離れた。これに先立って、校長と先の二教諭は御座所に出向いて天皇に拝謁した。滞在中の天皇に直接面会というだけでなく、大本営となった川中に川中関係者が足を踏み入れたのは、この時だけかも知れない。とにかく大演習の期間中、川中生は天皇の送迎には動員されたが、学校からは締め出されていた。当日は勿論、最近病気をしたという者までが登校禁止になったという。

だが、その後の学友会「会報」で見る限り、川中が行在所になったということは、川中生に栄誉ある学校の生徒としての誇りを持たせ、ひいては後の川中生に尊皇の気風を育む上で大きな影響を及ぼしたと考えられる。


行在所記念碑。1935年2月に建立された



学友会「会報」10号より

特別大演習は地元住民に何をもたらしたか？

陸軍特別大演習は一八九二（明治二五）年に第一回が始まり、一九一二（大正元）年に行われた演習は数えて一一回目である。この演習は松山から川越、所沢にかけての武蔵野の一帯を中心として繰り広げられた。参加した軍隊は北軍に第一三、一四師団、南軍に近衛、第一師団の合計四個師団で、兵員総数十万、しかも所沢方面に於ては飛行機、飛行船が活用されるという、大規模なものだった。

「大本営」標札が掲げられた川中の正門を出る大正天皇

演習の日程は次の通りである。

十一月十四日
大正天皇、青山離宮から、新宿―国分寺―所沢の経路で川越に到着。

十一月十五日
両軍の先鋒部隊が川越付近で衝突する。天皇の野立所（のだてじょ）は、川越の新宿（あらじゅく）内雀の森。

十一月十六日
入間川付近で両軍衝突。南軍勝利で、北軍退却。野立所は入間川の稲荷山。

十一月十七日
北軍に増援部隊あり、南軍後退。所沢付近で両軍衝突。飛行機、飛行船が北軍に配属。野立所は所沢。

十一月十八日
立川付近にて最終決戦。

十一月十九日
所沢飛行場にて観兵式の予定が雨で中止。同所を賜餐場（しさんじょう）とし、功労者への叙位、叙勲。

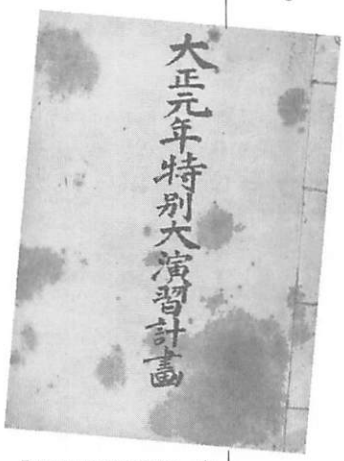
十一月二十日
大正天皇、川越駅（現本川越駅）から還幸の途につく。

この演習は川越、あるいは地元の人々にどのような影響を及ぼしたのか。

川高同窓会に『大正元年特別大演習計画』なる冊子が保管されている。これには演習の兵員配置や行動の計画等が記されているが、一方、演習のために川越にやってきた宮中、軍部、政府高官、帝国議会議員の名前が列挙されている。主な人物をあげると、

内大臣　桂太郎、陸軍大将　大山巌、朝鮮総督　寺内正毅、内務大臣　原敬、外務大臣　内田康哉、大蔵大臣　山本達雄、陸軍大臣　上原勇作、衆議院議長　大岡育造……

そうそうたる顔ぶれである。多いのは陸軍



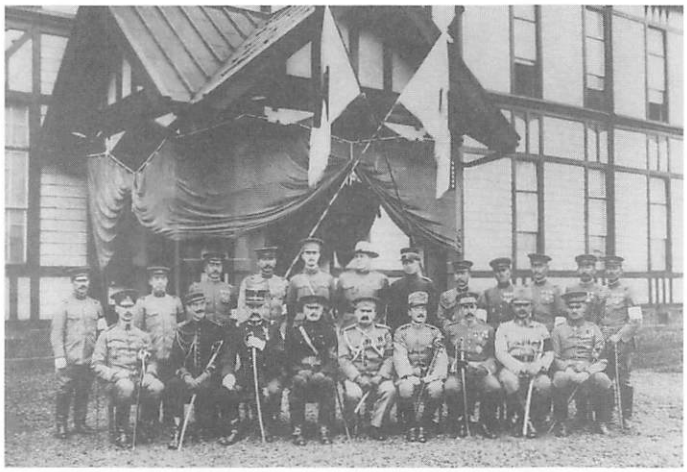
「特別大演習計画」書
（川越高校同窓会蔵）

幹部であるが、議員もかなり多く、九〇名もいる。演習を取材報道する新聞、雑誌、通信社は日本全国から一〇三社も集まった。ほかに外国武官も招待された。

まず天皇を始めとしたこの一団の奉迎には、川越町内の生徒児童だけでなく、町民もこぞって動員された。

次にこれを受け入れる宿の問題がある。

天皇は川中に宿泊したわけだが、高官は初音屋、佐久間旅館のほかに一般の商家、料理屋、旅館に分宿した。外国武官の宿については川越高等女学校があてられた。当時の川越には洋風旅館はなかったが、この演習の前に特別教室が新築され、それが当時としては相当立派な洋風建築だったからである。また、統監部が川越尋常高等小学校（現川越第一小学校）におかれた。


川越高等女学校に泊った外国武官と接待部職員

結局川越にやってきた人員は三万。そのために川越町および川越町民は多くの時間と労力をかけた。特に宿舎にあたった家では、家の改築修繕、畳替え、寝具食器の新調等で出費もかさんだ。これらの関係で物価は一時高騰し、鳶、大工の手間賃は二倍以上に上がったという。しかし忙しいだけで、経済が特に潤ったということはなかった。

また、演習は武蔵野の原野、耕地見境なく繰り広げられた。畑には芽をだしたばかりの麦や、そこそこの大きさになった大根があった。そこに塹濠を掘り、兵隊、馬が駆け回ったのである。畑が荒らされたことはいうまでもない。

このような犠牲に対して、川越町へ下賜金二〇〇〇円が下された。しかし川越町ではこの二〇〇〇円の積極的な使途を見い出せず、そのまま積み立てるだけだった。およそ半年間、大演習のために川越町は莫大な費用をかけてその準備と運営に忙殺されたといっていいが、「得る処つひに失ふ処を償ふ事出来ずに了った」と地元の新聞（「武蔵新報」）は伝えている。

川越の新宿の耕地に塹濠を掘って潜む歩兵。成育した大根と散らかった大根の葉が見える

しかし、大本営になったことがその後川中生に皇民観念を育む上で大きな役割を果たしたように、川越尋常高等小学校でも毎年十一月二十日を特別大演習記念日として記念会が開かれ、児童に善良なる日本人たるべきことが説かれ続けた。こういうことが日本各地で大演習を実施する大きな目的でもあった。

大正2年

1913

中16回

天皇宿泊の教室が御座所として整備保存された。

まず新学期開始直前、渡部校長が突然浦和中学へ転任になった。在職わずか八か月である。さすがに「会報」でも、これは「更迭」と記している。理由は不明である。四月八日の始業式及び入学式は校長不在のまま、しかも明治天皇の「諒闇」のため、喪章をつけて行われた。

そして四月十二日、第五代校長に柏壁中学より服部捨太郎氏を迎えた。

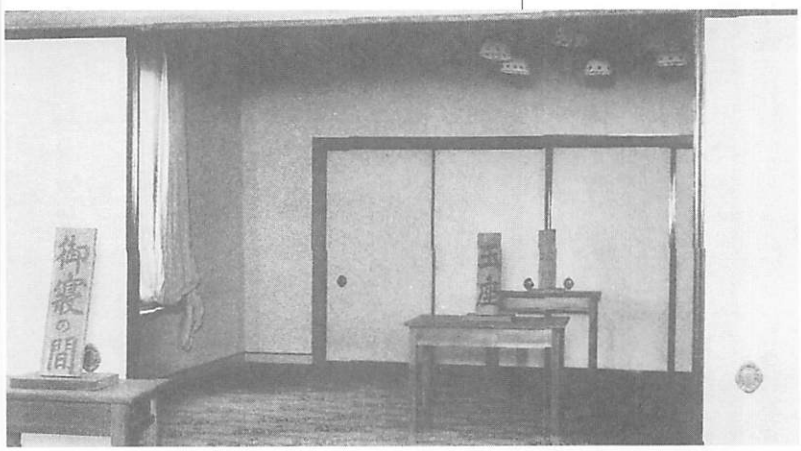
ところで、前年の陸軍特別大演習で大正天皇が宿泊した教室はそのまま御座所として整備され、シャンデリア、白木の机、椅子のほか、演習時校門に掲げられていた「大本営」の欅板が置かれた。ここは特別な場合以外は非公開であったが、十一月中旬の大正天皇駐輦記念の時には、年によっては広く一般にも公開されることがあった。

また、演習時に供奉員の部屋として三つに仕切られた講堂は、その後図書室と習字図書教室に衣替えされた。生徒数の増加にともなって従来の講堂では手狭になったこともあって、雨天体操場が講堂を兼ねるようになった。

寄宿舎「克己旅行」実施

寄宿舎では開設以来、弓道や角力等の部活動のほか、夜間フットボールや遠足等の寄宿舎独自の行事や活動があった。そしてこの年の十月に、初めて「克己旅行」なる行事が行われた。これは要するに軍隊式の行軍宿泊を兼ねた遠足である。土曜日の午後授業が終わってから、学校を出発。夕方に西入間の川角の小学校に到着。ここの板の間の上に外套一枚をかけて就寝。翌日は五時半に起床。越生の町を自由見学して、やがて学校へ戻った。

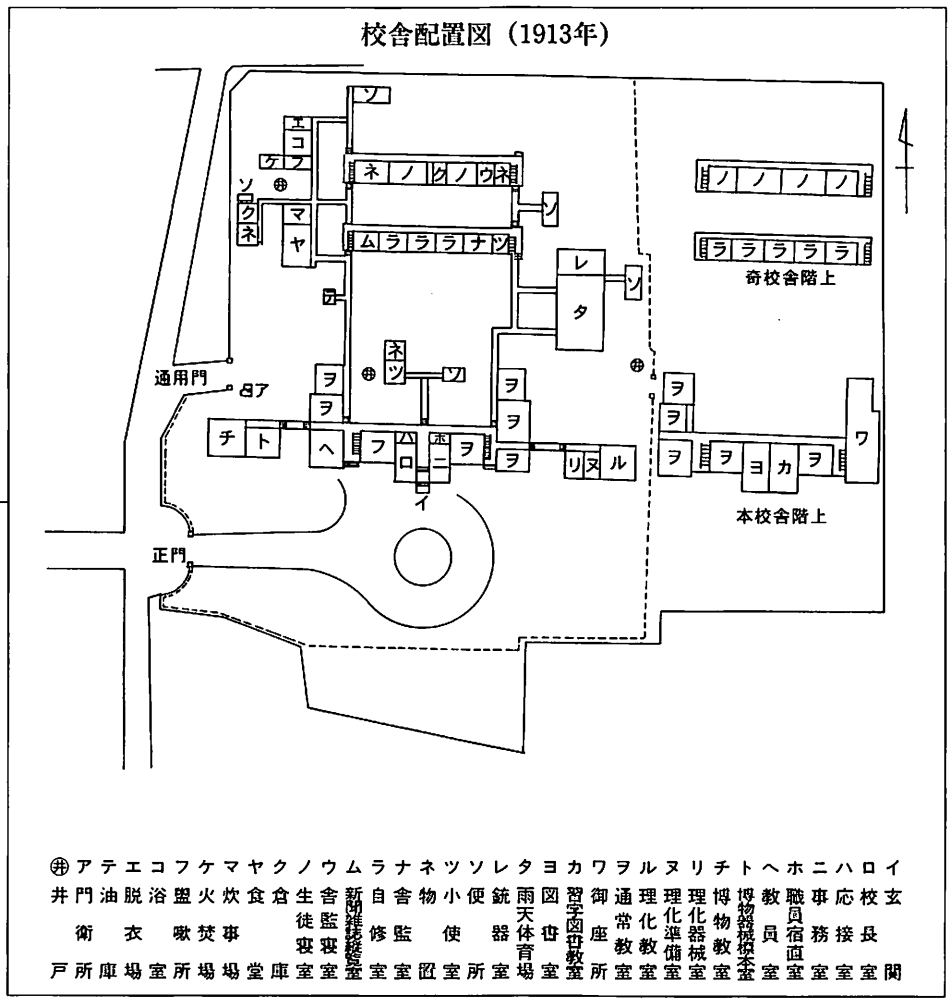
4・5(土)渡部校長、浦和中学校長に転任
8(火)始業式兼入学式(一二〇名入学)
12(土)第五代校長に服部捨太郎氏就任
5・10(土)遠足　一、二年　松山方面
　　三年以上　日和田山
28(水)開校記念日につき講話会



本校舎二階東側三室が御座所となった

日本▶大正政変で、桂太郎内閣倒れる。中里介山『大菩薩峠』の連載開始。岩波書店開業。
世界▶カリフォルニアで排日土地法成立。第２次バルカン戦争。プルースト、『失われた時を求めて』出版。

また従来川中では剣道に力が入れられていたが、開校当初より剣道指南嘱託として指導にあたっていた星野仙蔵氏が、国会に働きかけて、剣道、柔道は一九一一年に体操授業の中の正課に位置付けられた。それが川中では二年後のこの年から実施された。



農学士　志賀重昂氏「南北亜米利加に於ける日本人」
7・30(水)明治天皇御忌日につき校庭にて遙拝式
8・3(日)第七回水練(参加者四二名、～17日)
9・10(水)「会報」第一〇号発行
10・4(土)寄宿舎生克己旅行(～5日)
15(水)修学旅行
四、五年生　日光(～17日)
三年生　妙義山(～16日)
18(土)修学旅行(一、二年生　高尾山)
31(金)※1大運動会
11・13(木)大正天皇本校御駐蹕記念御座所拝観許可(～19日)
12・25(木)二学期終業式
1・8(木)三学期始業式
31(土)講話会　貴族院議員　江原素六氏「徳器成就」
2・11(水)紀元節につき武術大会
14(土)発火演習(全校生徒、鯨井村)
3・24(火)第一二回卒業式

※1　この日は大正時代の天長節である。

大正3年

1914

中17回

第一次世界大戦勃発と皇太后の諒闇に川中は揺れた。

四月に、学友会会則が実態に即して改正された。まず第一に、参加者を募って毎年夏に行われる水泳授業を正式に水泳部として、学友会内に位置付けた。第二に学芸部が文芸部と改称された。第三に年会費は二円、入会金を一円とし、卒業生には五年間無料で「会報」を送付し、その後は実費とした。そして第四に講話会は年二回と正式に決定した。

皇太后の諒闇で運動会中止

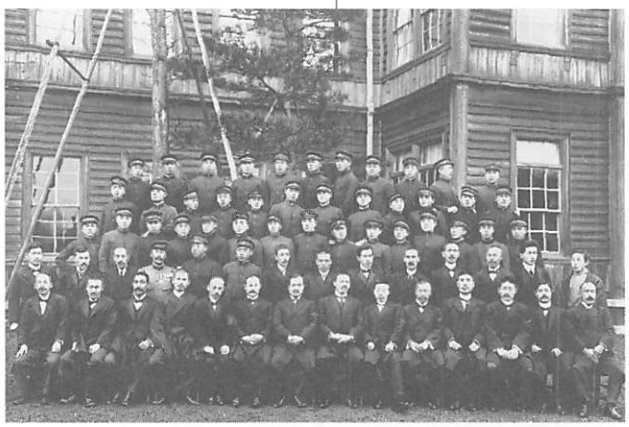
会則改正に先立つ四月十一日、昭憲皇太后が死去し、当日は学校が臨時休業になったが、秋の運動会がその諒闇（りょうあん）中にあたるので、開催をめぐって十月八日に学友会理事会が開かれた。開くとしたら、装飾、余興をやめて運動本位ということであったが、結局、運動会そのものが中止となった。そして浮いた費用を発火演習の充実にあてることも決まった。

というのもこの年の七月、ヨーロッパで第一次世界大戦が始まり、日本も八月二十三日にドイツに宣戦布告して参戦したからである。これ以来、川中の行事の中に、戦争の影響が色濃くあらわれるようになる。

「欧州の大乱について」と題された九月七日の時局講話会では、川中の教諭二名がこれにあたった。サラエボでのオーストリア皇太子暗殺事件とその原因、バルカン情勢、ロシア、オーストリア、ドイツ、フランスを中心としたヨーロッパ諸国の思惑並びに同盟・対立関係、そして一九世紀末以来の東洋への列強進出の情勢と日本の外交、立場、日英同盟が大戦参加の理由であること等を説明、講話した。

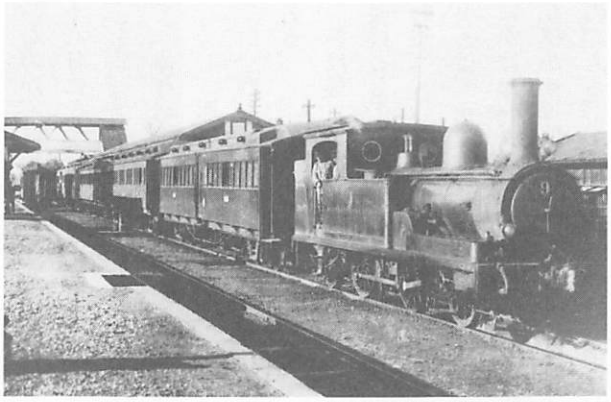
ついで、十一月に日本軍が中国の青島（チンタオ）を

4・8（水）始業式及入学式（一二〇名入学）
11（土）昭憲皇太后死去（学校休業）
17（金）学友会会則改正
5・9（土）徒歩行軍　一、二年生　所沢
三年生以上　平林寺
24（日）昭憲皇太后御大喪遙拝式
6・18（木）講話会
農科大学講師、村上辰五郎氏
7・21（火）水泳部（～8／5）
9・7（月）講話会「欧州の大乱について」
30（水）「会報」一一号発行
10・8（木）学友会理事会



1915年3月卒業の第13回卒業生

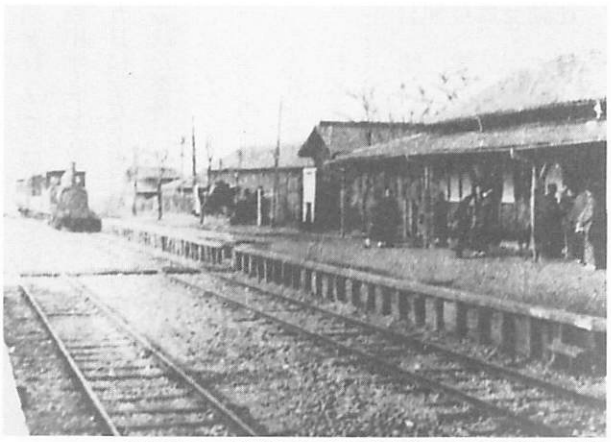
日本▶営業税、織物消費税、通行税の廃止運動、全国に波及。シーメンス事件で、山本権兵衛内閣倒れる。
世界▶オーストリア、セルビアに宣戦布告。パナマ運河開通。イギリス、エジプトを保護国化。


開通当時の東上線の列車（東武博物館所蔵）

占領すると、十一日には戦勝行列を実施した。三年生以上は銃を携帯し、二年生以下は日の丸の小旗を持って、校門から三芳野天神、氷川神社を経て、市内を行進。三年生以上はそのまま、小仙波で発火演習の予行に移った。

二十七日には、浦和中学生二〇〇名が川越に発火演習にやってきたので、陣中見舞いにさつまいもを贈り、宿舎に総代があいさつに行った。

年が明けて二月二日には、第二回講話会として、青島攻撃に参加した徳川大尉がそのときの様子を詳しく話し、軍人には身体、精神だけでなく、科学的知識の必要なることを説いた。


開通当時の川越町駅（現川越市駅・東武博物館所蔵）

発火演習で東上線利用

そして二月十三日、恒例の学校行事としてではなく、前年十月に、運動会に代わるものとして学友会が決議した発火演習が行われた。

演習場所は志木、大和田方面。いつもは浦和中学が演習を行っている場所である。その日は雪がちらついていたが、朝六時に校庭集合。まず南軍の部隊が東京街道を南下して大和田まで行軍、演習の開始を待つ。続いて前夜川越に露営したとの想定の北軍が南下、志木町を占領しようとする南軍と戦闘を展開した。

演習が終わると志木駅に向かい、帰路はこの年に川越・池袋間に開通した東上線の鉄道を使った。運動会中止でできた費用をその汽車賃にあてたのである。

14（水）四、五年修学旅行、箱根（～16日）
15（木）三年修学旅行、伊香保（～16日）
16（金）二年修学旅行（太田金山）
一年修学旅行（高尾山）
11・9（月）岡本定教諭、死去
11（水）青島陥落祝勝行列を行う
14（土）発火演習
12・5（土）秋季行軍（所沢）
1・8（金）三学期始業式
2・2（火）講話会 徳川大尉「青島攻囲戦に於ける我が航空部隊の行動」
11（木）紀元節　武術大会
13（土）発火演習（志木、大和田方面）
3・23（火）第一三回卒業式

※1　催眠術に関する実験講話である。

大正4年

1915

中18回

大正天皇御大典記念として校旗が作成された。

前年は昭憲皇太后の諒闇で中止になった運動会が、この年は復活した。それも、一九〇四年以来天長節（明治時代は十一月三日、大正時代は十月三十一日）に行われていたのが、この年から開校記念日の五月二十八日になった。さらに「会報」によれば、「従来の運動会は多少お祭り的」だったので「本年はその点を改善して」、応援旗をなくし、服装を体育着に限定した。それまでは達磨など様々な仮装が見られた模様である。

競技種目は別表の通りだが、ほかに団体競技として三年以上は兵式体操（特に一斉射撃）、一、二年は徒手体操である。母衣串とは、元来は近世馬術の一種で、母衣串にかけた一反の母衣を背負って長く後方になびかせ、地につかないように疾走するものである。学校の運動会では、生徒が母衣を長くなびかせて、地面に着かないように走ったのであろうか。

さて、大正も四年目になっていたが、この年の十一月にようやく大正天皇の即位大典を行うことになっていた。その記念に川越中学としてどんなことを行うか、九月十五日に学友会委員会（各学級三名ずつ選出された委員による）が開かれ、次のように決まった。

一、学校の仕事として記念植樹をする
二、大礼記念の奨学資金を設置する
三、校旗を作成する

…運動会競技種目…

徒一・二・三・四周、障碍物、武装、旗取、棍棒運、袋飛、縄飛、戴嚢、記憶、杓子、大下駄、母衣曳、封披、二人三脚、計算

4・8(木)入学式
5・8(土)春季行軍
一、二年　松山町、吉見百穴、三年以上　岩殿山
27(木)海軍記念日　海軍三矢大尉講話「日本海海戦について」
28(金)開校記念日　大運動会
8・4(水)水泳部三八名出発(～19日)
29(日)同窓会開催
9・15(水)御大典記念に関する学友会委員会開催
30(木)「会報」一二号発行
10・14(木)四、五年修学旅行(日光、足尾、～16日)
15(金)三年修学旅行(横須賀、鎌倉、横浜、～16日)

初代校旗。現存が確認されず、『八十周年記念誌』からの複写である

日本▶第１回全国中等学校優勝野球大会（大阪朝日新聞社主催）開催。早川徳次、シャープペンシルを開発。
世界▶中国の陳独秀、「青年雑誌」を創刊。イギリス、対トルコ参戦の代償としてアラブ諸国に独立を約束。

記念奨学資金については、左の規定にあるように学友会基本金より五〇〇円を出し、七分利息の債券を購入してその利息を運用するものである。大戦景気に日本経済がわいていた時期ならではの着想である。この年は、農工債券というものを購入した。

そして十一月十日の即位式の日、玄関前の車寄にて記念樹植付式が行われた。

また開校十六年目にしてようやく作成された校旗の授与式が、翌日行われた。紫地で、周縁を金モールで縁取り、中央に校章を配置してあるが、これは第三中学をイメージしている、という。だが残念ながら、この初代校旗の現存は確認されない。

大禮記念奨學資金規定

一、川越中學校學友會基本金ヨリ金五百圓ヲ割キテ七分利付債券（額面五百圓）ヲ購入シテ大禮記念奨學資金トス

二、大禮記念奨學資金ハ其利子ヲ以テ川越中學校生徒學事奨勵ノ資ニ充ツ

三、債券ノ保管竝ニ其利子ノ支途ハ之ヲ學校長ニ委托ス

大正四年十一月

優秀卒業生に賞を贈る

「会報」一三号には、久しぶりに卒業式のことが詳しく記されている。

それによると、第一四回卒業式では校長式辞のほかに埼玉学生誘掖会（ゆうえきかい）会頭の渋沢栄一氏代理と、入間学友会会頭発智庄平氏代理がそれぞれ祝辞を述べた。

埼玉学生誘掖会とは、大正時代になって埼玉から東京の高等専門諸学校に通う学生がいよいよ多くなってきたので、彼等の東京における生活環境を配慮して、渋沢栄一氏が中心となって、勉学、運動、生活等にわたって援助するために設立された団体である。この後、剣道の試合の主催者としてたびたび登場する。

そしてこの年度から設置された大礼記念奨学資金は、五年間の精勤者一一名の卒業生の中から、特に優れていると思われる五名に与えられた。ほかに、埼玉学生誘掖会賞一名、入間学友会賞を五名が受けている。

このような優秀な卒業生への賞与は、この時代の上級学校への進学熱の上昇を反映していると思われるが、それは「会報」そのものにもあらわれている。このころから「会報」では、卒業生便りとして、一高等の高校紹介や、受験案内に多くのページを割いているのである。

16（土）二年修学旅行（太田金山）
一年修学旅行（高尾山）
28（木）文芸部講話会　加藤咄堂氏
「如何なる人が成功するか」
29（金）御真影奉戴式
11・10（水）大正天皇即位式
午後三時生徒一同万歳三唱
車寄に記念植樹
11（木）校旗授与式
20（土）三年以上坂戸に行軍、発火演習
一、二年入間川に行軍
12・25（土）二学期終業式
1・8（土）三学期始業式
15（土）柔道奨励のため講道館より本田存五段他来校、講話、稽古
29（土）文芸部講話会
佐久間長敬翁「幕末実見談」
2・5（土）発火演習（今福村）
12（土）武術大会
3・15（水）第一四回卒業式
30（木）入学試験（志願者一七一名）
31（金）入学生徒成績発表
（合計一三〇名）

大正5年

1916

中19回

一年生が三学級編成になる。剣道の寒稽古が始まった。

大正時代に入ると、入学志願者が次第に増加し、それにともなって合格者も漸増した。一九一六年は志願者一七一名に対して、合格者が初めて一三〇名（資料等で入学が確認できたのは一二七名）になったので、これを受けて三学級編成となった。小学高等科二年を卒業してから入学した者が甲組、高等科一年からの者が乙組、尋常科六年からの者が丙組、と分けられた。いわば年齢別学級編制である。これは二年次まで続き、この間に落第、退学があるので、三年からは二学級となった。

一九一四年以来戸外運動が奨励され、野球や庭球はまだ校内とはいえ、試合がよく行われるようになった。庭球についてはコートが三面に拡張され、更にこの年は一面増えた。

一月に行われた剣道寒稽古は、「会報」の記事を見る限りではこの年が最初である。参加者は五九名である。一九一三年以来武道は体操の正課として取り入れられ、特に剣道は指導者がそろっていたこともあって、次第に運営が整えられていた。

剣道を指導した人々

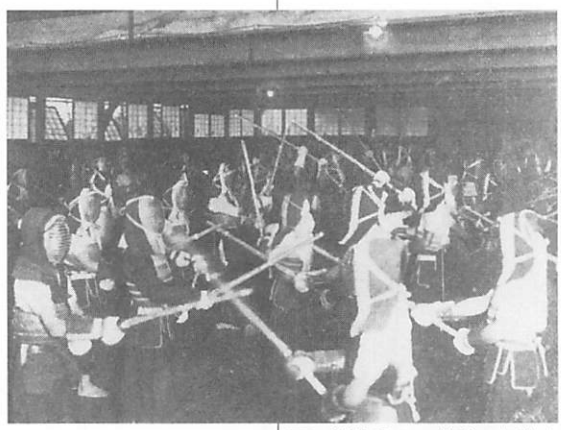
川中の剣道は地域との関わりも深く、これを指導した人々について記す。

川中が開校した時、嘱託で剣術指南役となったのは星野仙蔵氏だったが、間もなく阿部親昵（しんじ）氏に代わった。

阿部氏は幕末の川越藩主松平康英に仕えた士族で、剣術の直心影流（じきしんかげりゅう）免許皆伝の腕前を持ち、藩の剣術教授方を命じられていた。

廃藩置県後、当時の埼玉県では珍しい牛乳搾取業を始めたが、一方で地元の士族や町家の子弟を相手に剣術指導を始めた。道

4・1(土)始業式　入学式
5・6(土)一日行軍(三年以上飯能、一、二年所沢飛行場)
27(土)軍艦朝日乗組員合田四郎氏講話「日本海海戦及国民の覚悟につきて」
28(日)開校記念式、陸上運動会
6・8(木)通学寄宿混合野球試合
10(土)文芸部講話会
元気球隊長河野長敏大佐「本邦航空機の沿革及概要」
7・20(木)一学期終業式
21(金)水泳部出発(五七名、～8／5)
8・3(木)京都武徳会剣道試合参加



雨天体操場での剣道の寒稽古

日本▶吉野作造、「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」を「中央公論」に発表。夏目漱石没。
世界▶第１次世界大戦で、イギリスにタンク登場。英仏露のトルコ分割のサイクス・ピコ秘密協定成立。

場は川中正門近くにあり、やがて一八九五（明治二八）年、川越明信館の看板を掲げた。

阿部氏は道場の門弟だけでなく、広く地域の子供たちにも教授し、その熱心な指導に対して九七年に町議会から表彰された。そして九九年、川中の剣術指南となった。

阿部親昵氏が一九〇一年に死去すると、明信館長は子息の朔次郎氏が継ぎ、川中剣術指南には星野仙蔵氏が復帰した。

星野氏は福岡河岸の回漕問屋に生まれて家業を継ぐ一方、剣術では小野派一刀流神道無念流免許皆伝で、福岡明信館を建てた。

川中に赴任してからは一九〇六年からの水泳教授にも同行し、参加生徒に木剣体操なるものを行わせた。一方、星野氏は政治にも関心が強く、一九〇三年に衆議院議員に当選。やがて議会から文部省に働きかけて、一一年に剣道、柔道を中学校の体操の正課とすることに成功したのである。

川越小学校校庭に立つ明信館跡碑

戦前の川中剣道を指導した人物には、ほかに間中龍吉、鹿太郎父子がいる。

龍吉氏は眼光鋭く、長い白髭が特徴の彰義隊の生き残りで、川越明信館が設立されると、これに招請された。

一方鹿太郎氏は朝鮮独立守備隊への入隊経験をもち、一九〇九（明治四二）年、川中に書記として赴任。そして、川中で剣道が体操の正課として取り入れられた一九一三（大正二）年、父龍吉氏と共に川中剣道の指導にあたることになった。

こうして星野氏が亡くなる一九一七年までは三人の達人によって指導された。川中生は明信館にも通い、学校では寒稽古が始まり、星野氏の亡くなった三か月後の県下中等学校連合体育会で、川中剣道部は初優勝を飾ったのである。第一の充実期だった。

星野氏が亡くなると龍吉氏も退職し、その後の指導の中心になったのが鹿太郎氏で、戦後の武道追放によって川中を退職する一九四五年まで川中剣道部を指導し続けた。

9・22（金）第三回寄宿舎克己旅行（桶川）
10・11（水）寄宿通学混合野球戦をなす
19（木）この日より修学旅行順次出発
四、五年生　箱根方面（～21日）
20（金）三年生　伊香保、棒名（～21日）
21（土）一、二年生　高尾、太田金山
28（土）皇后陛下御影奉戴式
31（火）天長節祝賀式
後、生徒及職員の庭球大會
11・3（金）立太子礼奉祝式を行う[※1]
8（水）文芸部講話会　久留島武彦氏
「新たに解釈すべき南洋」
25（土）三学年以上は入間川方面に発火演習。一、二学年は一日行軍
27（月）「会報」一三号発行
12・7（木）欧州戦乱写真絵書展覧会開催[※2]（～9日）
1・10（水）剣道寒稽古始まる（～26日）
27（土）武術大会（柔道・剣道）を開く
夜、寒稽古終了式を行う
2・3（土）発火演習（小川街道）
3・15（木）第一五回卒業式
30（金）入学試験施行、応募者一七六名
31（土）入試成績発表、合格一四二名

※1 これを祝して学校では祝餅が配られた。
※2 文部省から回付されたもので、雨天体操場の壁に展示された。

大正6年

1917

中20回

夏休み、武甲山で川中生三名、遭難死。

第一次大戦中、日本は大戦景気で沸くと同時に激しいインフレに見舞われたが、その余波は川中にも及んだ。年度当初の四月、学友会では物価高騰のため、年会費二円の学友会費の値上げを委員会で検討したが、結局値上げは見送られ、一人あたり二〇銭、総額九五円六〇銭の臨時徴収となった。

六月、服部校長が退職となり、第六代校長に長崎県立島原中学校から古賀毅氏を迎えた。

校長が代わって間もなくの夏休み、川中を驚愕させる知らせが入った。秩父の武甲山で生徒が遭難したというのである。

七月二十六日、当時三年生の新井三郎、高山重義、金井昇、松本正夫、江森雄二の五名が連れだって、博物の授業で行う鉱物採集の実地調査のため武甲山に入った。彼等は全くの有志の集まりだったから、付添いの教員はいなかった。その日、夕闇迫る中下山の途についたが、険峻な屏風岩にさしかかってその絶壁から転落したのである。うち新井、高山、金井の三名は頭を打ち死亡。残り二名は苦痛に耐えていたのを、同日夜九時頃、村人に発見され、翌朝救助された。そして三名の遺体も引きあげられ、学校に連絡が入った。急報に接した学校では教務主任倉町教諭と間中鹿太郎書記が現

日新聞　第一面　一千一百

武甲山中の惨事

—中學生三人横死—

▽絶壁より三人墜落し

▽二人は辛して救はる

▲秩父連山に

▲四方に手別

事故を伝える東京朝日新聞
（大正6年7月28日）

4・2(月)始業式

7(土)物価騰貴につき学友会費臨時徴収を決定

28(土)雨中一日行軍

5・27(日)陸上運動会

6・19(火)服部校長離任式

23(土)陸軍編輯　長瀬鳳輔氏講演「欧州大戦と世界の前途」

7・9(月)古賀毅氏、第六代校長に任ぜられる

27(金)本校生徒、武甲山で遭難の報

8・4(土)水泳部六十余名出発(～16日)

26(日)武術教師星野仙蔵氏死去

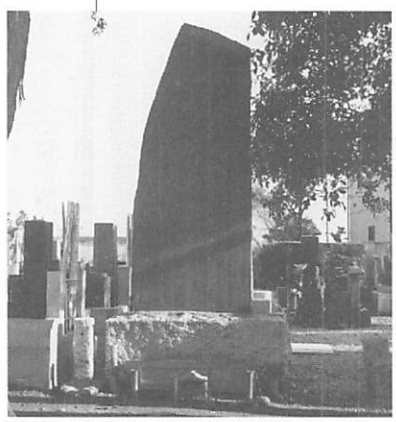
9・22(土)森村男爵講演「帝国の将来に対する覚悟」

26(水)四、五年修学旅行の件決議

10・13(土)一年生高尾山に一日行軍

15(月)修学旅行出発

(三年　箱根、四年生　日光
五年　水戸・仙台方面)



武甲山遭難三生徒追悼碑。翌7年に遺族によって建立された(川越市東光寺)

日本▶主婦向け実用雑誌「主婦之友」創刊。理化学研究所、服部時計店、明治乳業等設立。
世界▶ロシア革命。ドイツ、無制限潜水艦戦を開始。アメリカ、対ドイツ参戦。イギリス、バルフォア宣言。

場に急行し、二十九日に三名の遺骨と生存者二名は川越に帰った。

八月二十八日に三名の合同葬儀がしめやかに行われ、職員生徒が会葬。就任したばかりの古賀校長が弔辞を読んだ。三名の霊は、川越市藤間の東光寺境内に眠っている。

またこの夏は、一九〇一年以来十五年間にわたって川中の剣道教師として指導にあたってきた星野仙蔵氏が亡くなった。生徒の合同葬儀が行われた二日後に星野氏の葬儀が行われた。

五年生、東北へ修学旅行

この年は修学旅行について議論している。というのは、修学旅行がとかく頽廃的になっているというので、学校によっては中止するところもでてきており、その意義を問いただす議論がなされた。結局川中では古賀校長がその意義を積極的に肯定し、今後の修学旅行がどうなるかは今年の旅行の成果如何にかかっているとして、この年は初めて東北に行くことになった。行程は次の通りである。

一日目　川越から水戸へ。弘道館を見学。

二日目　仙台へ。青葉城等を見学。

三日目　松島、塩釜を見学。夜汽車で帰途につく。

四日目　早朝川越に到着。氷川神社参拝後、学校にて解散。

体育、学業に新しい動き

体育系の行事が学校の内外で目立った年でもある。

きっかけはこの年から開かれることになった県下中等学校連合体育会である。川中ではこれに、柔道一四名、剣道一二名、徒歩（陸上競技のこと）八名の派遣を決定。参加校数は不明だが、川中は総合で第二位。このうち、剣道は七校（浦中、熊中、粕壁中、熊農、埼玉中、川中）が参加し、川中が優勝した。この大会への参加をきっかけとしてか、校内の徒歩大会（陸上競技大会か）が冬に二回行われた。

また学業面でも新しい動きが見られた。十一月からたびたび教授訓練会ということが行われている。二月には五年生の学力比較試験が県下各中学校で行われた。教育効果というものが県当局から求められたのであろうか。新しい教育思想の影響かもしれない。

16（火）二年修学旅行へ出発（鎌倉）
17（水）二、三、四年帰校
18（木）午前七時五年帰校。旅行の翌日につき二、三、四年休業
20（土）「会報」一四号発行
30（火）松村介石氏講演「教育の淵源」
11・1（木）東京府立第四中学生徒来校、瑞典（スウェーデン）式体操を行う
18（日）第一回県下中等学校連合体育会に参加
21（水）教授訓練会（27日、12／4、7）
12・1（土）上富村方面に一日行軍
8（土）第一回徒歩競争会
12（水）武田飛行中尉、欧州戦乱に関する講話
25（火）皇太子殿下御影拝戴式挙行
1・11（金）柔剣道寒稽古開始
24（木）寒稽古納会、精勤者に賞状授与
26（土）五年予餞会
27（日）武術大会
2・2（土）発火演習（三年以上）
8（金）個性調査会
9（土）発火大演習（藤間村方面）
11（月）第二回徒歩競争会を行う
14（木）菅野力夫氏、世界探検談
28（木）県下中等学校五年学力比較試験
3・13（水）四年以下終業式
14（木）第一六回卒業式
30（土）入学試験

大正デモクラシー期の社会と教育政策

明治末年頃から、政府の軍備拡張のための増税路線を批判する民衆運動が、日本各地でさかんとなった。川越でも、地元選出の代議士高田早苗らが中心となり、鶴川座で講演会を開き、織物消費税等の悪税廃止運動を展開した。これらの声を背景に中央では政党が次第に政治力を強めて、藩閥官僚政府に代わろうとした。これが大正デモクラシーである。

特に第一次世界大戦後のヨーロッパにおける民族自決の動きやロシア革命は、世界各地の民衆運動を活気づけ、日本では米騒動が起きて藩閥政府が倒れた。

また第一次大戦による大戦景気によって、日本経済は飛躍的な発展を遂げた。それによる人口増加と小学校卒業率の上昇、国民の教育熱の高まりは、中学校志望者の増加をもたらした。

そのような中で、新しい教育思想が現れた。個人の人格形成を第一とするドイツ流の教育学説が流入する一方で、教育における社会的側面を強調する教育理論も一世を風靡した。特にアメリカのデューイの学説は、学校を社会生活を営むための訓練の場ととらえ、そこでの生活がそのまま教育になるという経験主義教育論を構成した。

これらの教育理論によって、教師中心から児童中心へ、注入教授から自発学習へと、様々な教授方法が研究された。それらは明治以来の国家主義教育を、形式主義、画一的、人間軽視として批判するものであった。

大正の学制改革

このような新しい動きに対して、一九一七(大正六)年、寺内正毅内閣は「国民思想の善導」のために内閣直属の臨時教育会議を設置し、国民教育の改革を目指した。寺内首相は、「国民教育の基本は、徳性の涵養、知識の啓発、身体を強健にして、護国の精神に富む忠良なる臣民の育成にある」と表明していた。それにそって臨時教育会議の答申では、国家主義を柱とした道徳教育の強化が叫ばれた。

寺内内閣は米騒動で倒れるが、臨時教育会議の答申は次の原敬内閣のもとで具体的に法令化される。

一九一八年十二月、まず大学令が公布された。従来の官立の他に、公立私立及び単科大学の設置が公認されて大学の数が増えると同時に、大学教育の目的として、従来のものに、「人格の陶冶」と「国家思想の涵養」が付け加えられた。

これと同時に改正高等学校令も公布された。修業年限は三年とし、他に尋常四年を加えた七年制の高等学校設置も認められた。設置数も従前の八校から漸次増やされ、一九二九年には三二校になった。こうして高等教育機関の拡充が計られた。

そして翌一九一九年二月に、小学校令と併せて中学校令も改正された。中学校では高等学校の予備教育と同時に実務教育が要求された。尋常小学校五年修了でも受験可能とする

学科目	一年	二年	三年	四年	五年
修身	1	1	1	1	1
国語漢文	8	8	6	6	6
外国語	6	7	8	7	7
歴史地理	3	3	3	3	3
数学	5	5	5	4	5
博物	2	2	2	2	—
物理化学	—	—	2	4	4
法制経済	—	—	—	—	2
図画	1	1	1	1	1
体操	5	5	5	5	5
計	31	32	33	33	34

表1　川越中学教育課程表(1921年)

いわゆる〝飛び級〟が認められ、国民道徳の養成に努むべきことも付け加えられた。

新たな中学校の設置も進められ、埼玉では一九二一年、私立埼玉中学が県立に移管されて県立不動岡中学となり、また本庄中学が新たに設置され、一三年には松山中学が開校し、県立中学は七校になった。しかし埼玉県の中学生数は、なお全国で最下位に近かった。

また普通選挙制度の成立に備えて、立憲国家の一員としての自覚を生徒に持たせる、いわゆる「公民教育」の重要性も認識された。明治以来の国家主義教育をいかにして時代にあった形で再編成するかということに国家権力は腐心するのである。

新しい教育思想が現場でどのように現れていたのか、残念ながら検証できるものはあまりない。各教科の研究会が開催されたり、一九一七年に川中では「教授訓練会」が開かれている。県当局主導のもので内容は不明であるが、国家主義という枠の中で、新しい教育の実践方法が模索されたものもあろう。

表1は、一九二〇年頃の川中の教育課程表である。開校当初に比べると唱歌がなくなったが、授業時数が各学年とも増えた。英語や数学が増え、物理・化学が三年から始まった。上級学校への進学者の増加を意識したものであろう。一方体操の内容は、普通・兵式が一九一三年に体操・教練と改められ、更に二時間の武道が加えられて時数がふえた。

表2は、戦前の川中の入学志願者、入学者、及び卒業者の統計表である。一九一八年から一学年の定員が一五〇名となったのは、第一次大戦が始まる頃から志願者数が上昇していたことが背景になっていることがわかる。また、卒業者数も一九一八年度の第一七回生からようやく入学者数の半分を超えるようになった。中学教育が、それを受けようとする者にようやく定着してきた証と言えようか。

こうして国家主義教育という枠の中ではあるが、大きな時代の変化を感じつつ、大正時代の中学生は勉学に、運動に、真理探求に青春のエネルギーをつぎこんだのである。

表2　旧制川越中学の入学志願者、入学者、卒業者数

年度	入学回	志願者	入学者	卒業回	卒業者
1899	1	40	39		
	2	110	80		
1900	3	144	124		
1901	4	129	120		
1902	5	108	108	1	29
1903	6	90	84	2	42
1904	7	81	79	3	46
1905	8	99	96	4	49
1906	9	123	122	5	56
1907	10	131	125	6	54
1908	11	122	112	7	40
1909	12	132	120	8	50
1910	13	118	109	9	59
1911	14	123	113	10	74
1912	15		110	11	56
1913	16		119	12	58
1914	17		110	13	40
1915	18		119	14	56
1916	19	171	127	15	42
1917	20	176	136	16	60
1918	21		131	17	72
1919	22		145	18	73
1920	23		145	19	74
1921	24		144	20	93
1922	25		144	21	102
1923	26		141	22	83
1924	27		136	23	99
1925	28		130	24	98
1926	29		144	25	109
1927	30		148	26	112
1928	31		143	27	102
1929	32		144	28	114
1930	33		150	29	113
1931	34		149	30	117
1932	35	231	146	31	112
1933	36	227	150	32	114
1934	37	253	150	33	127
1935	38	266	147	34	124
1936	39	250	150	35	114
1937	40	254	149	36	126
1938	41	300	150	37	121
1939	42	342	150	38	118
1940	43	269	200	39	122
1941	44	285	204	40	131
1942	45・46	332	202	41	139
1943	47・高1	353	210	42	124
1944	48・高2	333	214	43	126
				44	149
1945	高3	341	203	45	176
1946	高4		250	46	108
1947	—	—	—	47	166
1948	—	—	—	高1	74
				48	22
1949	—	—	—	高2	200
1950	高5			高3	213
1951	高6		330	高4	228

※1学年定員は1918年に150名、1940年に200名に。
※1944年度の44回生は4年で繰り上げ卒業に。

大正7年

1918

中21回

五年生、厳しい服装検査に抗議して授業をボイコット。

民衆運動が高揚し、国民の高等教育への要求の高まりを背景として、高等教育機関が拡充された一九一八年、川中でも一年生の定員が正式に増えて一五〇名になった。

そして第一七回生が五年となったこの年、同志会の幹部の活躍が目立った。

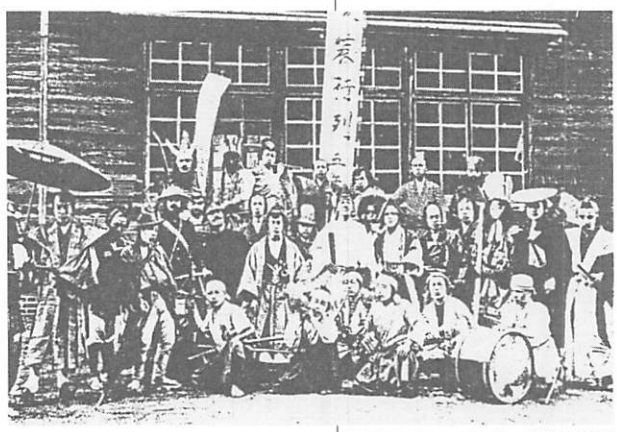
その一つが、学校の厳しい服装検査に抗議して行われた授業ボイコットである。

『七十周年記念誌』掲載の坂田圭司、竹内栄吉、森田稔（いずれも中17）の文によってこの事件のあらましを紹介したい。

「その当時慣例として毎朝強制運動と服装検査が行われたが、その服装検査たるや厳格そのもので、靴の汚ない連中は濡れた布でこすり、詰襟カラーを裏返しにして急場を間に合わせて検査をうけ、ボタン一つなくてもリストにあげられるなど、生徒はすっかり萎縮してしまって、外套は着てはいけない、手袋はしてはいけない、襟巻はいけない、夜の町を歩いてはいけない、校門の外に出るといけない、とまるで阿呆陀羅経の文句のように、いけないものづくしで圧えられていた。

これでは私達が卒業した後は後輩が萎縮して憐れだ、在学中に何とかしたいと、川越学生同志会会員であった伊藤泰吉君（元川越市長）を初め、私達が中心となって話しあい、学校に改善を申し入れることになった。そこで校長に団交に及んだところマンマとはねつけられたが、そのまま引き下がる同志会員生徒ではなかった。いよいよ五年生一同が授業をボイコットして、今の御嶽さんの北側の篠竹の生い茂った土手の日当りのよい処に、鞄から弁当までを持ちこんで川中始まって以来のストライキをしたのであった。当時の教頭、岩泉先生と級

4・1(月)生徒定員五五〇名となる
入学式及始業式挙行、式後職員
生徒一同種痘をなす
4(木)各組正副組長任命
学友会会則改正　角力部新設
4月
5・4(土)一日行軍
一、二年　三保谷、川田谷
三年以上　岩殿山
12(日)寄宿舎角力校内大会
26(日)陸上運動会
28(火)開校記念日、マラソン競争
5月
物理化学実験室新築
6・12(水)探検家中村直吉氏、南米旅行談



運動会での5年生の仮装行列

日本▶寺内内閣、シベリア出兵。米騒動全国に広がり、寺内内閣倒れる。東大新人会結成。
世界▶第１次世界大戦終結。シュペングラー『西洋の没落』。スペイン風邪流行。魯迅『狂人日記』。

担任の若原先生が心痛して、私達を宥めに来たが頑として応じないので、校長も流石に困って代表者十名と話しあいたいから校長室に来るよう申し入れが来たので、一同協議のうえ第二回団交に入った。校長も厳格すぎる位の校長であったが、話のわかる方で、一触即発の危機を乗越えて、その日の夕刻私達の要求を容れたので、私達生徒一同も生徒としての本分を守り、自主的に規律を守ることとして円満解決した。」

毎朝の〝強制運動〟がどんな内容のものかわからないが、前年からの運動奨励の動きと関係があろう。この時の校長は第六代の古賀氏であるが、前年に就任したばかりで、厳しい服装検査も含めて先代の服部校長以来の流れと思われる。十年前の校長批判は学外の同志会が中心だった。今回も同志会員が中心だが、在学生徒が学内で事を起こしていることは注目に価する。

仮装行列が評判となる

この年はまた、運動会で生徒の意見を入れた新しい企画がいくつかあらわれた。

まず、場内の至る所に人形が飾られた。例えば、太田道灌村雨に逢うの場、桃太郎鬼が島凱旋の場、児島高徳などである。

また近隣の小学校一七校が招待されて尋常小学校選手競争が行われ、優勝校には優勝旗が授与された。ちなみに第一回の優勝は南古谷尋常高等小学校だった。

そしてこの日の呼び物は五年生による英雄仮装行列である。赤穂義士、西郷隆盛、乃木将軍、二宮金次郎、大久保彦左衛門、菅野力夫（前年に川中に講演にきた探検家）、牛若丸、孔子、加藤清正……といった面々が続いた。総勢二〇人ほどである。この光景は新聞係の生徒がガリ版刷で発行、一躍近郷の名物となった。

このように、日本的デモクラシーのエネルギーが溢れる生徒の出し物が見られる一方で、学年ごとに軍国主義的な団体競技も用意された。一年は剣道基本教練、二年は合同体操、三年は野仕合、四年が中隊教練、五年が一斉射撃といった具合である。

角力部創設、柔道は県優勝

前年の県下中等学校連合体育会の開催に象徴されるように、青年の体育教育の必要が叫ばれる中、相撲巧者の秋岡先生の力で、学友会に新たに角力（すもう）部が設立された。

7・21(日)水泳部出発(～31日)
11・4(月)東京帝大山崎直方教授講演「欧羅巴の民族」
17(日)第二回県下中等学校連合体育会に参加　剣道、柔道優勝
30(土)野外演習
2・2(日)武術大会
3・13(木)「会報」一五号発行

秋岡先生は寄宿舎の舎監でもあり、舎の角力部も再興した。そして、五月に行われた寄宿舎角力大会では、東京角力協会から羽州山という力士を招いて稽古をつけてもらったほどである。

だが、翌年一月に秋岡先生が川中を去ってしまったためか、その後角力部の記録は一九四〇年まで途切れてしまう。

一方柔道は、これも秋岡先生の尽力で練習法を完成させ、講道館から講師を招いて稽古を重ねた結果、ついに十一月の県下中等学校連合体育会で、優勝を遂げたのである。

なお、運動奨励の風潮の中で、夏の水泳教授（水泳部）希望者は一〇〇名を超えた。ところが、直前に赤痢が発生し、一時は中止が決定されたが、結局三年生以上で実施された。

大正8年

1919

中22回

登山部創設、初登山は富士山。第一回卒業生、校長となる。

様々な新しい動きが見られた年であった。

一年生の定員は前年に続いて一五〇名であるが、それまで入学者は一三〇名前後であったのが、この年から一五〇名近くになった。受験者の増加をうけた結果であろう。

登山部が新たに学友会に設置された。世間での登山の流行が背景にあるが、設置の目的は「自然の美を穢さず流行的のものでない雄偉剛健の気を養ひ又学術の研究」とされた。ただこれは通年活動するのではなく、水泳部と同じように、夏休みを利用して希望者を集めて実施されるものである。

一回目のこの年は「大和民族の清浄を代表した富士山」に登った。生徒は二五名、引率教員は古賀校長を始めとして六名。服装は制服、制帽。携行品は冬シャツ、金剛杖、着真蓙(雨具代わり)、草鞋(わらじ)などである。

七月二十三日朝八時、川越鉄道で国分寺に出て、中央線で大月に向かった。大月から吉田まで、歩いたり一部馬車をつかったが、山麓の宿についたのは夜九時だった。

翌朝は三時起床、五時出発。まず富士浅間神社参拝の後、登山開始。八合目の宿で宿泊。そして翌二十五日、荘厳な御来光を拝み、頂上到着。下山は須走口を使う。御殿場に出て夜九時、川越に帰着した。

「会報」一六号掲載の登山の報告文は、周辺の交通、地理などの説明が克明で、富士山の植物分布などにも言及している。

一方、水泳部は開設以来の八幡の宿との料金交渉が不調におわり、それより少し北方の岩井村の高崎海岸に場所を移して実施された。当時のインフレの所産であろう。

ついで十月、古賀校長が熊谷中学校長に転任になった後、第七代校長に熊谷中学教諭の岡田恒輔氏が就任した。岡田氏は本校

初めてのOB校長岡田恒輔氏

4・1(火)生徒定員六〇〇名となる
入学式及一学期始業式
5・7(水)皇太子殿下御成年式祝賀式
11(日)全校生徒松山方面に一日行軍
22(木)明治大学剣道選手修行の為来校、本校有志者と稽古をなす
27(火)海軍記念日、大運動会開催
28(水)開校記念式挙行、茶話会を開く
6・12(木)文芸部主催久留島武彦氏講話「人柱」
7・1(火)講和祝賀式挙行
23(水)登山部、富士登山へ出発
26(土)水泳教授、八幡から岩井村に移って実施(〜8/6)
9・1(月)二学期始業式
10・21(火)古賀校長、熊谷中学校長に転任
23(木)新校長岡田恒輔氏新任式
26(日)県下連合体育会を浦和で開催[※1]
27(月)連合体育会に参加した選手の慰

日本▶普通選挙運動、大いに盛り上がる。雑誌「改造」創刊。第１回帝展開催。
世界▶朝鮮で三・一独立運動。中国で五・四運動展開。ベルサイユ条約調印。コミンテルン創立。

第一回卒業生である。川中卒業生では、やはり第一回生の岡田萬雄（かずお）氏がすでに前年に教諭として川中に赴任しているが、ＯＢ校長の誕生はもちろん初めてである。校長は同窓会の会長にも就任するので、同窓生を会長に迎えた同窓会の記事には「会員一同の大に満足する所なり」と記された。

五年生、関西へ修学旅行

五年生の修学旅行が、この年からついに関西方面になった。行程の概略は左表のとおりである。京都、奈良では由緒ある神社仏閣を中心に見学したが、大阪では産業施設の他に、公園や公共施設の充実を見て、その社会政策において東京よりも優れるという感想が記されている。往復に夜行列車を使い、現地四泊の一週間におよぶ大旅行であった。

５年生修学旅行（伊勢神宮にて、1928年）

1919年度第５学年修学旅行行程概略

11／5　21：00川越＝池袋＝品川
11／6　＝4：00京都駅…東本願寺・西本願寺…三十三間堂…方広寺…清水寺…高台寺…知恩院…(岡崎公園にて昼食)…平安神宮…二条城…宿　　＊有志は京津電車で三井寺へ
11／7　宿7：30＝桓武帝陵（伏見）＝北野天神…金閣寺…仁和寺…嵐山＝宿
11／8　京都駅8：00＝9：30大阪城…造幣局…毎日新聞社…四天王寺…宿（道頓堀）
11／9　大阪8：00＝9：20奈良…興福寺…春日神社…若草山…東大寺…奈良15：30＝二見浦…宿
11／10　二見浦9：00…山田…伊勢神宮…山田＝20：00名古屋23：00
11／11　＝川越…帰校
＊＝は列車あるいは電車　…は徒歩

11・4(火)午後岩崎不染氏来校講演あり
5(水)五年修学旅行、京阪地方へ
四年修学旅行、日光塩原へ
6(木)三年修学旅行、箱根方面へ
7(金)二年修学旅行、江ノ島鎌倉へ
19(水)内山大尉来校講話
22(土)午後校庭において庭球大会開催
27(木)県下中等学校理化教授研究会を本校にて開く
28(金)文芸部講演大会を開く[※2]
藤岡勝二氏「言語と思想との関係」
川井精春氏「生命の泉」
1・8(木)第三学期始業式
17(土)平和調印後の学生の覚悟、流行性感冒に対する注意、寒稽古の主旨など訓話
19(月)寒稽古始まる（～2／4）
24(土)発火演習挙行
26(月)流感予防注射を始む
2・10(火)県下各中学校四、五年生に対する英語数学学力比較試験を行う
14(土)五年予餞会を博物室にて開く
3・8(火)第一八回卒業式

※1　剣道、柔道、徒歩部が参加した。
※2　藤岡氏は東京帝大教授、川井氏は真言宗豊山派の伝道師である。

大正9年

1920

中23回

学校図書館が開設され、「明治文庫」と命名。

この年の一大事業は「明治文庫」の開設である。

これは十一月に明治神宮が造営された際、各地で記念事業が企画される中、岡田校長が生徒閲覧図書室の設置を発案し、学友会の記念事業として整備に着手したものである。すでに同志会によって学外に図書館は設置されていたが、開校二十年を過ぎた川中に学校図書館はまだなかった。

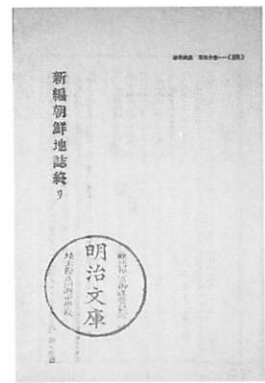
二学期終業式の十二月二十四日、次に示す趣意書が生徒を通じて父兄に配付された。

《趣意書》

粛啓、時下益々御清安奉賀候、扨先般明治神宮御造営相成候については、本校にても其記念の為、学友会事業の一つとして多年の懸案たりし生徒閲覧図書室を設置致し明治神宮御造営記念明治文庫と命名仕り候。申すまでもなく従来生徒の図書閲覧設備相無かりしことは、誠に遺憾此上なき次第に候へば、是非とも明年一月の新学期より開設致したく、就ては後進子弟のため何卒本記念事業の趣旨御賛成の上御高助を仰ぎたく奉懇願候。最初は生徒、父兄、卒業生、職員等より読了不用の図書寄贈を乞ひ、漸次拡張完備致したき計画に有之候につき、御不用の図書御座候はば多少に拘らず是非々々御寄贈に預りたく奉願候。先は甚だ唐突にて且御迷惑とは存じ候へども、御願迄如斯に御座候。敬具。

こうして生徒、父兄、卒業生、職員に図書寄贈が呼びかけられた結果、冬休み中に約三〇〇冊と寄付金一九二円が集まり、これをもとにして、一九二一年一月十八日、博物教室にて明治文庫が開設され、放課後一時間の閲覧が許可された。

従来学校内の図書の管理に関しては、学



「明治文庫」の印の押された川中時代の書籍

4・1(木)午前入学式、午後始業式挙行
八年度優等生・精勤者賞状授与
5・15(土)所沢へ一日行軍
27(木)大運動会挙行
28(金)第二一回開校記念祝賀式挙行
6・1(火)午前七時半始業
「会報」一六号発行
10(木)午後「時」記念講話
21(月)高島平三郎先生講話
「修養の心理」
7・7(水)入間郡小学教員のため授業公開。
9(金)尼港視察談
22(木)三年以上26名御岳登山へ
生徒42名水泳へ
9・1(水)二学期始業式、安部立郎氏満韓旅行談
10・17(日)五年修学旅行、京阪地方へ
20(水)四年修学旅行、日光足尾方面へ
21(木)三年修学旅行、箱根方面へ
22(金)二年修学旅行、江ノ島鎌倉へ
23(土)一年修学旅行、高尾山へ

日本▶株式暴落、戦後恐慌始まる。最初のメーデー開催。第1回国勢調査実施。
世界▶国際連盟発足。アメリカ、禁酒法。インドネシアでアジア初の共産党成立。

友会の学芸部が細々とこれにあたっていたが、翌二一年度の新学期、明治文庫は学友会の独立した組織として位置付けられ、学友会員たる生徒は、文庫への寄付金として一人三〇銭拠出した。更に、毎年寄付金や寄贈図書が寄せられ、やがて学友会も明治文庫に毎年二五〇円の予算を計上した。

一年たっての図書部数は六七四冊、三年後には一四七七冊となった。購読雑誌には、「考へ方」「受験と学生」「A・B・C」「日本少年」「アスレチックス」「中等英語」「野球界」「受験界」の八種がある。

そして一九二三年には博物教室から化学実験室に移った。実験室を半分に仕切ったもので、普通教室の二倍の広さがあった。しかし、当時の浦中、熊中の設備に比べると格段の相違があり、専用図書館への道は遠かった。

「明治文庫」の印

＊

七月九日に「尼港視察談」というのがある。「尼港」とは、沿海州北部の港ニコライエフスクである。一九一七年にロシア革命がおこると、日本はその混乱に乗じて勢力を広げるべくシベリア各地に出兵、占領した都市の一つにニコライエフスクがあった。やがてロシア側の反撃との戦闘の中で、一九二〇年五月二十四日、ニコライエフスクがロシアのパルチザンによって焼き払われ、日本人一二二名が殺害されるという事件が起きた。歴史上にいう「尼港事件」である。日本はこれを「過激派の暴虐」として大宣伝していた。

七月九日の川中での講話は、以上のような歴史経過をふまえてなされたものであろうが、講話者は不明。

登山部二年目は御岳登山。二日目に麓から頂上まで登り、その日のうちに一気に下山。麓につく頃には雨が降りだし、暗闇の中、懐中電灯を照らしながら歩くという強行日程。全員疲労困憊のうちに、宿に着いたのは夜九時を回っていた。

水泳部は岩井村の宿との値段交渉がうまくいかず、二週間の予定が一一日間に短縮されて実施。これもインフレの影響。

11・1(月)明治神宮鎮座祭遙拝式。
7(日)第四回県下中等学校連合体育会
13(土)教育勅語御下賜三十年記念生徒成績品展覧会(〜14日)
1・12(水)寒稽古開始(三週間)
18(火)学校図書館「明治文庫」開かれる
19(水)生徒職員一同鶴川座に社会教育活動写真見学
20(木)流行性感冒予防上の注意を印刷して生徒に配布す
22(土)福岡村方面にて発火演習挙行
28(金)保科孝一先生の講話
2・4(金)帝大助教授高柳賢三先生の講話
14(月)県下中等学校学力比較試験(四年のみ)
26(土)十二指腸虫患者の生徒に投薬
3・2(水)四、五年終業式
3(木)皇太子殿下御渡欧につき校長より訓話あり、後遙拝式
9(水)第一九回卒業式挙行
18(金)終業式

大正10年

1921

中24回

名物教師「万中さん」着任。「逆立ち」校長に生徒、ア然！

この年は戦前の川中で、名物教師として生徒に強烈なインパクトを与えた先生が着任する。

まず四月十五日に、体操科の教諭心得として着任した小松國三郎先生である。小松先生はシベリア出兵に参加した陸軍中尉で、一九四三年まで在職。在職中中尉のままであったので、「万中さん」（万年中尉の意）の渾名は多くの卒業生の記憶するものである。

そして八月、岡田校長が名古屋高等学校教授に転任になると、その後任に粕壁中学校長の野山忠幹氏が本校第八代校長として就任した。

野山校長は一九二五年までの四年間の在職であったが、着任にあたってその年度の「会報」に、所信と生徒への決意を求める文を寄せている。それを要約すると、

一、体育について
学習の英気を養うべく、強健なる身体をもつよう日々運動に努めよ。体操、教練には最も意を用い、規律的訓練に慣れよ。

二、訓育について
信用の出来る人物になるべく、不撓不屈の精神を持ち、礼儀作法を守り、諸徳を涵養せよ。他の生徒に悪影響を及ぼす者には断乎たる処置をとる。思想問題については特に注意する。

三、知育について
中学教育は全てが基礎であるから、学科に選り好みをせぬこと。埼玉の高等学校進学率は低い。大いに奮闘せよ。

内容は特に珍しくはないが、歯に衣着せぬ言い方に、野山校長の個性がうかがえる。

野山校長というと、卒業生は誰もが「逆

4・8(金)午前入学式、午後始業式
11(月)聖徳太子一三〇〇年忌日講話
15(金)小松國三郎氏着任
5・2(月)一年夏服着用
14(土)三年以上は天覧山、一、二年は阿須山へ遠足。
27(金)海軍記念日につき海軍機関少佐野村将三(中4)氏講話
28(土)開校記念日、陸上運動会開催
6・10(金)学友会会則改正
7・5(火)比企郡小学校長並首席訓導来校
19(火)終業式
22(金)白馬岳登山隊(38名、～26日)筑波登山隊(28名、～24日)出発
23(土)水泳隊(32名、～8／5)出発
25(月)数学、国漢、英語、物理の夏季課外講義開始
8・2(火)野山忠幹氏、第八代校長に就任
10・2(日)五年京阪地方修学旅行出発

第8代校長野山忠幹氏

日本▶戦前最大規模の労働争議である神戸の川崎・三菱造船所争議。信濃自由大学開校。原首相暗殺。
世界▶ワシントン会議始まる。ソビエト、戦時共産主義体制からネップ(新経済政策)へ移行。

立ち」を思い起こす。当時在学していた秋馬邦夫(中27)から寄せられたエピソードを次に紹介したい。

「運動会の途中、号令台が運動場の真中に出された。そして、野山校長も出て来た。

生徒は、何が起こるのかとみている。やがて校長は静かに号令台の上に上る。生徒の視線は校長に集まった。やがて、校長は上着を脱ぎ逆立ちを始め約五分ぐらい頑張っていた。生徒は驚いて拍手。然し校長は身体にも無理があったのだろう、それから二か月程休まれた。

野山校長は、一見温和に見えたが内に鋭いところがあった。(修身の授業で)生徒に歴代天皇の称号を暗記させた。憶(おぼ)えるのは容易でなかったが、これは歴史を学ぶ際の大きな力になった。」

*

年表にある五月からの夏服は、いわゆる〝霜降〟の青色っぽいもので、別掲の矢部の回想文に出てくる「小倉木綿の制服」は冬服である。

六月に学友会会則が改正された。登山部と明治文庫が正式に学友会の組織になったほか、会費が二円から一挙に三円三〇銭に引き上げられた。この時代の物価高騰の凄じさがうかがえる。

十二月の「組長、副組長に襟章」の「襟章」は残念ながら現物は見つからない。開校当初の学則では、組長、副組長は腕章をつけることになっていた。

そして、二月九日に国葬が行われ、講話の対象になった「山県公」とは、元老山県有朋のことで、二月一日に亡くなっていた。

一九二〇年頃の朝礼

小使さんの勇ましい集合喇叭で全生徒が一学級三組毎に運動場に整列。先ず演壇に立った野山忠幹校長の演説調の長い訓示に始まり、服装検査に移る。整列している生徒一人一人の前に体操教師(小松陸軍中尉、前田潔、原口多一先生)が立って調べる。制服は平織の小倉木綿、白い海軍式ゲートルに黒の短靴。少しでも乱れがあると厳重注意を受け、体操の成績減点に及ぶと伝えられた。

こんな形式と規則ずくめの素朴な中学生生活を素直に受け容(い)れて朴訥な「薯(いも)中生カラー」が形成されていったのであろう。(矢部義一・中23)

3(月)野山校長、奉天での中学校長会議に列席のため出発(〜11/3)
5(水)四年日光方面へ
6(木)三年箱根地方へ
7(金)二年鎌倉方面へ
8(土)一年高尾山方面へ
各学年帰校
13(木)本校庭球選手指導のため東京誘掖会より学生二名来校
31(月)「会報」一七号発行
11・7(月)野山校長の満鮮視察談
15(火)塙保己一先生百年祭挙行、講話
22(火)坂戸方面へ発火演習、一日行軍
26(土)東宮殿下摂政宮となられしにつき校長謹話
12・24(土)本日より組長、副組長に襟章を用う　試験終了　終業式
27(火)卒業生在校生懇談会開催
1・11(水)本日より14日間武道寒稽古
12(木)徒歩部寒稽古(〜26日)
23(月)高校、専門学校入学資格試験開始、受験者五名
2・4(土)福原村方面にて発火演習
9(木)山県公国葬日につき講話
13(月)英数、国漢につき県下中等学校四年比較試験開催
3・2(木)四、五年試験終了、終業式
9(木)第二〇回卒業式
22(水)三年以下試験終了、終業式

大正11年

1922

中25回

野球部、関東大会に初出場。剣道部、関東武道大会初優勝。

野球部が関東大会に初出場した。

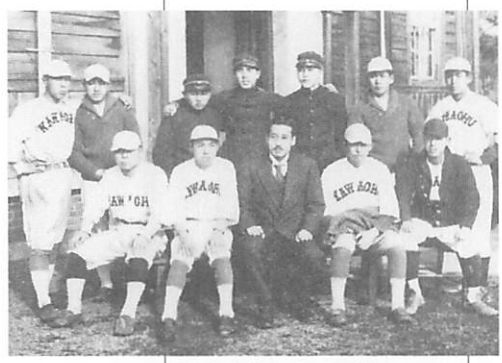
野球部はほぼ開校と同時に創設されていたが、初めは野球部内での紅白戦や、校内で寄宿舎生対通学生の対抗試合が行われていた程度であった。一九二〇年になってようやく校外での試合が許可され（どういうわけか、学校名は出さないという条件付きだった）、この年に赴任した飯田亮先生が野球部の部長に就任してから、コーチを招いたり、熊中、浦中と試合を行う等、積極的な活動が始まった。そして一九二二年、とくに優れた戦績を残しているわけではなかったが、全国中等学校野球大会の関東地区大会へ出場することになったのである。

これは予選を勝ち抜いてというものではなかったが、出場が決まるや部員大いに張り切り、夏休みに入ると、雨天体操場で初めての合宿を一週間行った。しかし、大会間近の合宿は危険でもあった。合宿終了近く、下痢に苦しむ者が数名出てしまい、一名が大会出場不可能となってしまった。

抽選で一回戦は不戦勝になり、七月二十八日、飯田先生以下野球部一行は、大会開催地の茨城県竜ヶ崎中学校に向かった。翌日、二回戦で、群馬県の覇者太田中と対戦。試合開始直前に野山校長から「奮励一番しっかり頼む」との激励電報が届いたが、初出場の壁は厚く、2対16の大差で敗れた。

一方剣道部はすでに県下での優勝を何回か果たしてきた実績で、この年十一月、栃木県桐生高等工業学校主催の関東武道大会へ招待された。その直前に開かれた県下連合体育会では埼玉師範に敗れたが、その雪辱を晴らすべく選手が奮戦して順調に勝ち進み、決勝で群馬の前橋中と対戦。これに勝利し、ついに県外での初優勝をとげた。

4・8（土）午前入学式、午後始業式
12（水）英国皇太子殿下午前10時45分の東京駅到着の時刻に英国国歌を合唱
25（火）「会報」一八号発行
5・13（土）大宮公園へ一日行軍挙行
28（日）第23回開校記念式及運動会開催
6・1（木）夏服着用
7・10（月）日光足尾地方模型を平和記念東京博覧会に出品し銅牌を受ける
20（木）終業式
23（日）水泳隊（47名、～8／5）、赤城榛名の登山隊（25名）、富士登山隊（31名）出発
27（木）四、五年生のため夏季特別授業開始（～8／19）
28（金）関東野球大会出場の選手出発
9・30（土）帝国電燈株式会社調査課矢田小一



関東大会出場の野球部メンバー。背広姿が飯田先生

日本▶全国水平社創立。日本共産党、秘密裏に結成。大学・高校の学年開始を9月から4月へ変更。
世界▶イタリアでムッソリーニ政権成立。ワシントン軍縮条約調印。オスマントルコ帝国滅亡。

英国皇太子に英国国歌斉唱

その他、年表を見る限りでも興味深い出来事の多い年である。

ワシントン軍縮会議が成功のうちに終わり、国際協調の気運が高まる一九二二年、英国皇太子（後のエドワード八世、シンプソン夫人との結婚で退位）が来日した。世界歴訪の途中日本に立ち寄ったもので、前年に日本の皇太子（昭和天皇）が訪欧した際イギリスで歓待されたのを受けて、国内では皇太子歓迎ムードが演出された。注目すべきは皇太子が東京駅に着くその時刻に、川越から声よ届けとばかりに川中生が英国国歌を歌っていることである。川中独自のことなのか、それとも当局からの指示によるものなのかはわからない。

第一次世界大戦後の平和を祝して、東京府が主催する平和記念東京博覧会が三月から開かれていた。これに川中から日光足尾地方（修学旅行でよく訪れていた）模型が出品され、七月に銅牌受賞に輝いた。

夏休みに入って行われた四、五年対象の夏季特別授業は、おそらく進学補習と思われる。高等教育機関拡充という、経済界からの要請による大学令（一九一八年）で大学の設置がふえ、進学率も高まっていた。川中でも明治期には半分ほどだった上級学校への進学率も次第に高まり、この頃は六割を超えるようになって、私立大学を目指す生徒もだいぶ増えていたのである。

柳井准訓導殉職碑建立

柳井准訓導は第二回卒業生で、川越南尋常小学校に勤務。一九〇六年、荒川に生徒を引率中、川に落ちた生徒を助けようとして自らの命も落としてしまった（50頁参照）。当時、殉職という事実から川越町の町葬にはなったが、世論は柳井准訓導の行動を高くは評価しなかった。

それが、一七回忌となったこの年になって、入間郡教育会が中心になって殉職記念碑建設促進の働きかけが行われた。川中同窓会もこの運動に一役買って同窓生に募金を呼びかけた。各方面の熱心な働きかけによって資金は集まり、埼玉県知事書の題字を刻んだ記念碑が完成し、十二月三日、文部大臣代理、知事代理以下三〇〇余名の参列者を得て、市内蓮馨寺で建碑式が盛大に行われたのである。

10・1（日）五年修学旅行隊（生徒82名）京阪地方へ出発
4（水）四年修学旅行隊（生徒85名）日光塩原へ
25（水）所沢航空隊将校、本校校庭より伝書鳩を放つ
30（月）臨時休校
11・1（水）学制頒布記念運動会開催
8（水）県下連合体育会に競技選手派遣
9（木）連合体育会出場選手慰労会開催、舎生、余興劇として武者小路実篤童話劇「花咲爺」、狂言「長光」等上演
11（土）一日旅行挙行（三年帝展見学、二年太田金山方面、一年高尾山）
13（月）桐生高工主催武道大会に選手派遣、剣道部優勝
18（土）陸軍機動演習を入間川に見学
12・1（金）川越町は本日より市制施行
3（日）柳井准訓導殉職碑建碑式
1・11（木）武道寒稽古開始（～26日）
2・3（土）発火演習挙行
14（水）故伏見宮国葬日につき臨時休校
3・2（金）四、五年終業式
8（木）第二一回卒業式
20（火）「会報」一九号発行
21（水）三年以下終業式

大正12年

1923

中26回

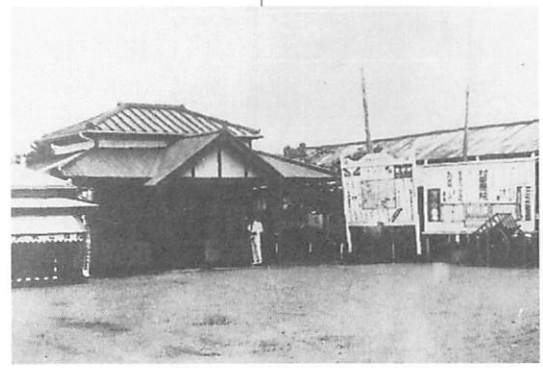
関東大震災に際し、大宮駅でボランティア活動。

一九二三年九月一日午前十一時五十八分、相模湾北西部を震源地とするマグニチュード七・九の大地震が関東地方を襲った。当時川中の教員であった岡田萬雄（中1）が「会報」に寄せた文章や、卒業生の回想文から地震が川中をどのように襲ったかをまとめると、次のようになる（岡田教諭の原文は本書518頁参照）。

第二学期の始業式が済んで、生徒が帰った後、職員の多数はまだ教員室にいた。やがて昼食をとっていた最中、ゴーッというもの音とともに猛烈に揺れだした。あわてて室外に飛び出したものの、なお大きな揺れが続き、通用門側の桜や電柱につかまって、身の安全をはかるほどだった。この地震で学校関係者に負傷者はいなかったが、寄宿舎南寮の瓦がほとんど落ちてしまった。他に本校舎をはじめ、門衛所、物理化学教室、寄宿舎の食堂などの瓦も一部落ちた。

夕方になると「朝鮮人暴動」の流言が川越にも広まり、寄宿舎生が着剣して警護にあたった。夜になると余震を恐れて、正門前に避難している人々があったので、学校は門柱に高張提灯をともした。

地震に伴う大火災で家を失い、東京から離れる人々で高崎線下り列車は溢れていた。そこで二日から、当時五年生の嶋田勝郎（中22）らを中心として「一灯会」という有志団体がつくられて、久保町駅（現在の東京電力付近にあった）から電車に乗って大宮駅に向かい、避難民の救援活動にあたった。内容は被災者への握り飯や湯茶の提供である。学校としても九日から取り組み、野山校長が陣頭指揮をとった。この救援活動は川中生だけでなく、当時の県内の多くの中学生、高等女学生が行っている。



当時の久保町駅駅舎。ここから「チンチン電車」に乗って大宮に向かった

4・9（月）午前入学式、午後始業式
5・2（水）四年旅行隊、日光方面へ
3（木）三年旅行隊、箱根方面へ
4（金）二年旅行隊、湘南方面へ
5（土）一年旅行隊、高尾山へ
6（日）五年旅行隊、伊勢関西方面へ
21（月）埼玉誘掖会主催武道大会にて剣道優勝
27（日）第24回開校記念大運動会開催
28（月）開校記念式挙行、長谷川貞平先生の海軍記念日講話
6・16（土）講演部小会開催、高橋喜一郎氏運動に関する講話と指導
舎生有志、児童劇「田舎の鼠と

日本▶菊地寛「文芸春秋」を創刊。北一輝、「日本改造法案大綱」を発表。難波大助、摂政を狙撃。
世界▶フランス・ベルギー軍、ドイツの賠償支払い不履行を理由にルール占領。ドイツマルク大暴落。

＊

関東大震災は首都圏経済に大打撃を与えたことはもちろん、その混乱は人々に自己の生命と財産を守る上で大きな不安を抱かせた。大戦後の社会運動の激化とデモクラシー思想への対処に苦慮していた政府は、これを機会に〝思想の善導をはかる〟として、十一月十日、「国民精神作興詔書」を出した。伝統的な日本精神、国民道徳を強調したもので、学校でもすみやかに十二日に奉読儀式が行われた。これ以後、教育勅語、戊申詔書とともに、毎年読まれる。

翌年二月三日の「実弾射撃」は川中創立以来初めてのことである。その時の模様が「会報」二〇号に記されている。

「…小松先生が銃の照準検査を行ふ。我々は瞳を据ゑて先生の一挙一動を見守った。そして恐ろしい予感が胸をかすめた様に見えた。小さな一発の銃丸、それが人を殺すべき可能性を持ってゐるのだ。」

発火演習とは違った、実弾を扱う緊張感がうかがえる。

着剣して夜警にあたった

私は当時は川越中学校に大正十一年の春入学しました。そして翌十二年の関東大震災に寄宿舎で遭遇しました。驚いたですね。

九月一日は二学期の始業式で、講話だけでしたので、十一時半には食堂に入り、部屋に戻るとグラリと来ました。皆が地震だ！　とさけんで窓から出ようとすると、目の前の庭に屋根の瓦がバラバラと落ちて来ました。あわてて廊下伝いに校庭に出て、近くの木につかまったまま暫く待ちました。

ところが夕方になって、朝鮮人が来るから武装しろとの命令が出て、着剣し、三八銃を持って、廊下にいて、交代で夕食をしましたが、十時頃それは流言らしいとわかり、解放されました。

翌日は普通に戻ったのですが、私の父が教師だったので、上級生の救援隊に加われと言われ、十数名の上級生と久保町からチンチン電車で大宮駅へ行きました。時折通るのは下り列車だけでしたが、バケツに水を入れ、列車の人々にひしゃくで水をあげたのです。あちこちから、水をくれ、と言われ、持って行きました。被災者がうまそうに水を飲んでくれました。

（村本達郎・中25）

東京の鼠」（坪内逍遙作）上演
17(日)高野佐三郎氏剣道指導※1
20(水)七段三船氏柔道指導
9・1(土)二学期始業式　関東大震災
9(日)本日より校長、村本、小松教諭等五年四年有志引率罹災者救助のため大宮駅へ出張
14(金)罹災者救助打ち切り
17(月)大詔奉読、訓話
10・25(木)本日より九時十分始業
28(日)浦高主催剣道大会で優勝
11・3(土)浦和へ一日行軍
12(月)国民精神作興詔書奉読
24(土)福岡方面にて発火演習
12・25(火)試験終了、終業式
1・11(金)武道寒稽古開始（～27日）
17(木)埼玉県救護団主催活動写真会開催（～19日）
26(土)皇太子殿下御成婚奉祝拝賀式
2・3(日)東村山射場にて五年生の実弾射撃訓練
11(月)紀元節拝賀式挙行、予餞会開催
15(金)第66連隊行軍に参加のため四、五年は古谷小学校付近まで行軍
20(水)第一回卒業生安部立郎氏死去
3・8(土)第二二回卒業式

※1　秩父出身で近代剣道の達人。九段に明信館を開き、かつて阿部親昵氏も師事した。

大正13年

1924

中27回

開校25周年を迎え、学友会の活動がいよいよ活発になる。

開校して二十五年たち、その記念行事が行われた。

まず五月二十四日、職員生徒が祝賀旗行列で市内を練り歩いた。翌日の日曜日、記念祝賀式が多数の来賓を招いて本校雨天体操場で行われた。その後昼食は生徒も交えて校庭で園遊会。午後は再び雨天体操場で六名の同窓会員による講演会が行われた。

記念事業には同窓会が中心になってあたった。同窓会による事業は次の通りである。

一、十年以上勤続職員の表彰
一、明治文庫へ図書資金一〇〇〇円の寄付
一、運動場の拡張(北側に広げた)
一、会員名簿の作成
一、記念品に、渋沢栄一翁揮毫の扇子作製
一、歴代校長額面作製

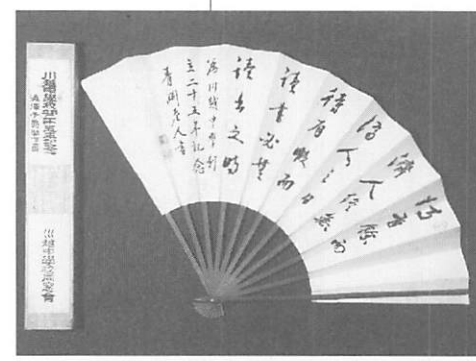
他に、学友会は記念絵葉書を発行。また、二十五周年祝歌を生徒から募集し、比留間喬介(中24)の作品が選ばれた。翌年十二月発行の「会報」二一号は二十五周年記念号として、通常の二倍の頁数で編集された。

＊

剣道部は二十五周年記念祝賀式直前の埼玉学生誘掖(ゆうえき)会大会で、前年に続いて優勝、秋の桐生高工大会でも再び優勝を飾った。

庭球部は開校当初より創設されていたが、長く校内の親睦的な活動にとどまっていた。それが一九二二年頃から対外試合に出かけたり、本校主催で近隣チームを招いての大会を開く等、活発な活動を展開してきた。この頃、県立中学が、不動岡、本庄、そして松山にあいついで設置されたこともあって、身近に試合相手ができたのである。

七月に開かれた不動岡中学庭球大会で、北野・藤野組が出場組数八十余組の中で見事優勝を遂げた。そして八月に開かれた日



25周年記念で作られた渋沢栄一翁揮毫の扇子

4・8(火)午前入学式、午後始業式、
11(金)高野先生、度量衡に関し講話
5・5(月)五年京阪方面に修学旅行
7(水)四年日光足尾方面に修学旅行
8(木)三年筑波水戸方面に修学旅行
9(金)二年江ノ島鎌倉方面に修学旅行
10(土)一年長瀞に遠足、各学年帰校
18(日)埼玉学生誘掖会武道大会にて剣道優勝
24(土)開校二十五周年記念旗行列
25(日)開校二十五周年祝賀式
28(水)開校二十五周年記念運動会
6・2(月)始業時変更　二年以上夏服着用
29(日)元明大選手木下明氏野球部指導
7・3(木)師範学校において修身法制経済科打合会(〜4日)

日本▶甲子園球場竣工。第１回明治神宮競技大会（国体の前身）開催。寿屋、日本初のウィスキー工場竣工。
世界▶シャモニーで第１回冬季オリンピック開催。アメリカ議会、排日移民法可決。

本軟球協会主催全国中等学校軟式庭球大会に二組が出場。四回戦まで進んだ。

＊

このほか、一九二三年に開校した松山中学と、この年から何回か対抗競技試合が行われるようになった。この年、試合を行った競技は庭球、野球、陸上である。松中はまだ創立間もないということもあって、この年はいずれも川中の一方的勝利だった。

埼玉学生誘掖会剣道大会で優勝した時のもの。カップを手にするのが北村博学主将（中23）。２列目中央が渋沢栄一翁

弁論部、激励演説で復活

活躍したのは運動部だけではなかった。二十五周年をきっかけとして、弁論部がこの年復活した。普通選挙法の公布を翌年に控えて、議論の重要性が認められてきたという背景も見逃せない。

弁論部復活の烽火（のろし）は〝運動激励演説〟なるものである。これは運動部と提携して、校庭の階段上から運動に励む部員に向かって激励の演説をぶつ。野球の試合でも応援演説。いわば、檄をとばすのである。

そして本来の弁論活動として、全関東中等学校弁論大会にも選手を派遣した。

二十五周年祝歌

一、土かたくして　揺るぎなき
雲のうてなも築くべし
ああいさをしのはらからが
試練の二十有五年
校風成りて士気振ふ
建設の時今ぞ来ぬ

二、暴風（かぜ）に翅（つばさ）をねる鵬（とり）は
万里の波上翔けるため
友よたゆまぬ力もて
たてずや高き校風を
人生闘裡（とうり）の一線に
雄飛の時は今ぞ来ぬ

6（日）不動岡中学庭球大会で優勝
12（土）松方公国葬につき校長の講話
22（火）白馬登山隊出発
23（水）水泳及び、赤城榛名登山隊出発
28（月）夏季特別授業開始（10日間）
9・16（火）午前8時15分始業に変更
10・5（日）桐生高工武道大会で剣道部優勝
17（金）埼玉県在郷軍人練武会
29（水）生徒トラホーム検査
11・1（土）本日より一週間図書館週間、及び、三週間衛生デー開始
2（日）松山中学校と対校競技
3（月）体育デー、優勝旗披露市内行進
10（月）五週間勤倹デー開始
12（水）五年新宿御苑拝観、明治神宮参拝
14（金）行幸週間開始
22（土）山田方面において発火演習
1・10（土）寒稽古始まる（二週間）
25（日）寒稽古終了、納会、豊島師範、早稲田実業剣道選手来校
2・10（火）五年東村山にて実弾射撃
3・9（月）第二三回卒業式
10（火）野山校長、広島県立広島第一中学校長に転任
11（水）金子道啓教諭、校長事務取扱を命ぜらる
20（金）三年以下試験終了、終業式

※1　この年七月にメートル法が施行された

同窓会の歩み①

――創設から一九四五年まで――

同窓会の創設

五回目の卒業生を送り出し、その数が二二〇名となった一九〇七（明治四〇）年の夏、岡田萬雄（かずお）、岩沢新平ら第一回卒業生の間から同窓会創設の発議があった。ついで川越在住の一回から五回生までの各年代毎に二名の理事を選出し、当時の前原仙次郎校長に相談しながら準備を進めた。そして九月一日、同窓会設立のための第一回例会（現在の総会）が、川越中学校講堂で開かれた。

この時定められた規約には「会員相互ノ和合ヲ計ルヲ以テ目的トシ毎年一回例会ヲ開ク」とある。会長には中学校の校長があたることになり、初代会長に前原仙次郎氏が就任した。会費は例会の時に五〇銭を徴収し、新卒業生の入会金を二〇銭とした。

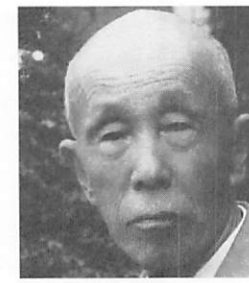
発足当初の同窓会の活動は年一回の例会だけで、内容は、芸人を呼んで講談や落語を楽しんだり、同窓生による講話、懇談である。

一九〇九年八月の第三回例会の席上で、安部立郎が前原校長の教育方針を批判するという言動に出たが（57頁参照）、それはあくまでも安部個人のものであって、むしろ同窓会としては、同窓会設立に力を貸してもらい、五年にわたって会長を務めた前原校長には恩義を感じていた。だから一九一二年の前原校長退職にあたっては、理事が相談の上、記念品贈呈のための募金を同窓会に呼びかけ、予想以上の結果を収めた。

第一二回卒業式を経て卒業生も六〇〇名を超えた一九一四（大正三）年、同窓会運営について、学校とのつながりを強化するための役職が整備された。すなわち、学校職員から理事を一名選出し、卒業生と在校生との連絡をとって学校側における同窓会会務にあたり（初代理事は中一十教諭）、事務室の書記（篠原書記）が同窓会の事務を担当することになった。また会の維持金としての新卒業生からの入会金を、一〇銭あげて三〇銭とした。

この結果、翌一九一五年発行の学友会「会報」一二号から、同窓会関係の記事が「同窓会記事」として毎号掲載されるようになった。

一九一八年、中教諭が退職になり、かわって第一回卒業生で同窓会創設の立て役者でもある岡田萬雄が川中に赴任し、学校理事になった。ついで翌一九一九年、やはり第一回卒業生の岡田恒輔を校長に迎えた。初の卒業生校長が誕生し、かつ卒業生を同窓会長に迎えることになって、「会員一同大に満足するところ」だった。戦前での同窓生校長は、岡田唯一人である。



同窓会創設の中心となった岡田萬雄（中1）

各種事業に取り組む

一九二四年五月に開校二十五周年を迎えるにあたり、同窓会では記念事業計画を一年前の一九二三年八月の例会で決定し、準備を進めた。なお翌年より、入会金を一円とすることも決められた。二十五周年記念事業は次の通りである。

○運動場拡張
（現在のテニスコート付近、一五〇〇円）
○明治文庫の記念図書費（一〇〇〇円）
○同窓会員名簿の作成（一三二円）
○歴代校長肖像額面の調製（一〇一円五〇銭）
○十年以上勤続職員表彰

（七人、謝恩記念品代九八四円八三銭）
○二十五周年事業記念品（二三二円一五銭）
○記念講演実施（五人の同窓生）

これら五つの事業のために四〇〇〇円を目標として、一口五円以上で同窓会に寄付を募った。初めは思うように集まらなかったが、役員の尽力もあって最終的には五〇〇〇余円が集まった。二十五周年事業の記念品は渋沢栄一翁揮毫の扇子で、その調製を名古屋の「扇由商店」に依頼。来賓、寄付者、在校生に配布された（96頁参照）。

二十五周年記念事業が行われて間もない六月八日、上野精養軒で在京同窓生の懇親会が開かれた。今日の在京初雁会の基礎といってよい。また一九二八（昭和三）年には比企郡高坂の岩殿山日の出屋で同窓会が開かれた。

戦前に発行された同窓会名簿

今日の散策会的なものであったようだ。そして翌一九二九年には会員相互の親睦を一層密にするために近郷及び東京に地方幹事を置くことになり、こうして同窓会の地区組織が強化された。

一九三四年には開校三十五周年記念祝賀式が行われた。この時は特に募金活動はなかったようであるが、記念祝賀式、講演会、展覧会、園遊会が行われ、同窓会もその実施に協力した。そして記念式典祝賀行事終了後の同窓会総会で、皇太子誕生記念事業として大本営御駐輦記念碑建立と、三十五周年記念事業としてプール築造が決定された。

記念碑はさっそく翌年二月に玄関前に建立された。プールは同窓会で決定する前から、学校側が他県の様子を視察する等して検討され、それを同窓会が支援するという形をとったものと思われるが、種々の事情で戦前においては実現を見ることはできなかった。

在校生、卒業生への支援活動

同窓会の事業として重要なものに、川中奨学会がある。これは一九三四年十二月に、大谷校長排斥を掲げて五年生が一週間ストライキを敢行した（120頁参照）が、これを母校の不祥事ととらえた同窓会有志の中に、母校の名誉回復のための在校生支援制度として、一九三五年十一月に創設が決まったものである。この制度は、一九四二年に学校の後援組織としての父兄会が創設されるまで続いた。

この他、同窓会は優れた活動を見せた卒業生も支援した。一九二六年に明治神宮競技大会（現在の国体）の剣道青年組において北村博学（中23）が見事優勝すると、その栄誉を讃えて北村への記念品授与のための募金を募り、翌年十一月に、全校生徒の前で銀製カップと剣道具一式が授与された。また、一九三六年のベルリンオリンピックに陸上の鈴木聞多（中29）が出場することが決まると、その後援活動に同窓会も一役買った。

戦時中では、戦没同窓生の慰霊が同窓会の重要な活動になっている。一九三九年に学校に忠霊室が設置された後、一九四二年十一月二十二日に同窓会戦没会員合祠祭が行われ、翌日第三四回総会とともに慰霊祭が行われた。一九四三年十一月の幹事会で総会は当分開かないとの方針が決められたが、合祠祭、慰霊祭は行った。

多くの卒業生が戦場や勤労動員に駆り出される状況の中で、同窓会の運営資金は厳しくなっていた。そこで一九四四年の役員会で、新卒業生は同窓会入会金五円と終身会費一〇円を納入することとなるが、この金額は当時の授業料が五円であったことを考えると、かなり高額だった。

大正14年

1925

中28回

現役の陸軍将校が配属され、学校教練が本格化した。

前年度三月に野山校長が広島県に転出、四月に第九代校長に岩泉善太郎氏が就任した。岩泉新校長は一九一七(大正六)年から一九年まで、本校に教頭として在職。熊谷中に転出の後、校長として本校に返り咲いたのである。以後、一九三三年まで八年の長きにわたって在職するが、これは第三代の前原仙次郎氏の九年間につぐものである。その温厚な人柄は長く生徒に慕われ、多くの卒業生の記憶に残る校長であった。

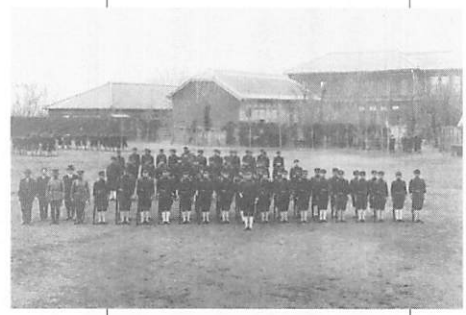
一九二二年、国際的軍縮の一環として、日本も海軍の主力艦削減と陸軍の師団規模縮小を決定したが、陸軍はその見返りに、国民の国防思想の強化のため、学校への現役将校の配属を求めていた。それを受けて内閣直属の文政審議会が、一九二五年一月に学校における軍事教練実施を決定して内閣総理大臣に答申。四月に陸軍現役将校学校配属令が制定され、いよいよ学校教練が本格化することになった。

川中には、五月に初代配属将校として相場重雄少佐が着任。以後、歴代の配属将校は別表の通りである。

教練そのものはすでに体操の授業の中で、普通・教練・武道の一つとして行われていたが、評価は「体操」として一括されていた。それが、この年から「教練」だけは独自に評価が出されることになった。従来行われていた演習は、野外教練として位置付けられ、各学期一回実施することになった。

また、配属将校が体操科の主任となった。更に、陸軍省令で学校教練の実施状況を査定するために、軍から係官を派遣する、いわゆる教練査閲の制度もでき、やがて学校教育が軍の意向に左右されるようになる下地がここに作られた。

4・8(水)第九代校長岩泉善太郎氏就任
午前入学式　午後始業式
5・1(金)一年夏服着用
4(月)[※1]五年京阪方面に修学旅行
10(日)両陛下大婚二十五周年拝賀式
11(月)両陛下銀婚式奉祝にて臨時休業
12(火)配属将校相場少佐新任式
17(日)第三回埼玉学生誘掖会武道大会
にて剣道優勝
30(土)開校記念運動会
6・1(月)始業時変更　二年以上夏服着用
5(金)生徒希望者種痘施行
7・20(月)終業式
21(火)全校生徒入間川方面で野外演習
22(水)夏季休暇開始
25(土)夏季特別授業開始
9・1(火)国民精神作興に関する詔書奉読
21(月)[※2]岡田萬雄教諭満州朝鮮視察談



校庭での教練、左側の軍服姿が、教練の小松中尉と配属将校相場少佐

日本▶雑誌「キング」創刊。東京放送局、試験放送開始。治安維持法、普通選挙法成立。京都学連事件。
世界▶ロカルノ条約が成立し、ヨーロッパの集団安全保障体制確立。イラン、パーレビ朝成立。

本格的教練実施の一年目、野外教練には七月、十一月、二月の演習や行軍があてられ、年表にあるように教練査閲官が頻繁に来校した。本来の査閲は毎年一回、十一月か十二月に行われた。また、軍との関係が親密になった結果、二月の野外対抗演習では、近衛歩兵第四連隊から新兵器である軽機関銃を借用した。

更に、三月十日の陸軍記念日講話。陸軍記念日そのものは日露戦争での奉天会戦の勝利を記念して、海軍記念日と同年の一九〇六年に定められていた。海軍記念日には早くから川中でも講話がなされていたが、陸軍記念日には、これまで講話の記録は見えない。おそらく、陸軍将校の学校配属によって、この年から講話がなされるようになったものであろう。

配属将校の変遷

1925.	5	相場重雄少佐
1927.	3	溝部一倜大尉
1929.	8	岡鉄之助少佐
1932.	12	松井卯吉少佐
1934.	8	井上安三少佐
1940.	1	三品宥明中尉
1940.	4	蛭田武治少尉
1940.	8	伊ケ崎清中尉
1942.	8	海北条司中尉
1944.	6	金久保金治中尉

弁論部、華々しく活躍

一九二五年は普通選挙法が成立した年でもある。それだけでなく、デモクラシーの風潮の中、国家権力が統制しようとしても雑誌や書籍を通じて新しい思想は中学生にも伝わり、前年に復活した弁論部は華々しく活動した。

校内での活動は勿論、浦高や、明大、東洋大などが主催する関東、あるいは全国中等学校雄弁大会に選手を送り出した。中でも、十一月の日大主催全国中等学校懸賞雄弁大会に、前年に二十五周年祝歌を作った五年の比留間喬介が出場、「開け霊魂の扉を」の演題で熱弁を振るい、参加校六十余校の中で、見事三等賞を獲得したのは特筆に価する。

その翌週には、川中剣道部が連続優勝を遂げた桐生高工で、近県中等学校雄弁大会が開かれた。これに出場した五年の石川信雄（中24・497頁参照）が「東に唯物史観の旗高く」の演題で四等に入賞、川中が剣道ばかりでないことを知らしめた。

27(日)桐生高工武道大会で剣道部優勝
10・1(木)全校生徒冬服着用
16(金)近衛師団指令部牧達行陸軍少将教練状況視察のため来校
11・3(火)東村山方面に一日行軍を行う
8(日)松山中学校と対抗試合
日本大学中学雄弁大会にて三等
21(土)近衛、第一師団対抗演習講評場となる本校に各宮殿下来校
12・11(金)近衛四連隊長三宅大佐教練査閲官として来校
12月 25周年記念「会報」二一号発行
1・30(土)第一回雄弁大会開催
31(日)松山中学校対抗武道試合
2・4(木)教練査閲官来校視察
10(水)四、五年、福岡方面において蚕業学校生徒と野外対抗演習
3・1(月)四、五年、終業式
2(火)五年、東村山方面にて実包射撃
9(火)第二四回卒業式
10(水)陸軍記念日講話
13(土)三年、平方方面にて野外演習
20(土)三年以下試験終了、終業式

※1 この他に例年通り、各学年修学旅行実施。
※2 岡田教諭は全国中等学校地理歴史教員協議会満鮮旅行団一〇〇名の一員として、七月下旬から一か月現地を見聞した。

大正15・昭和元年

1926

中29回

野球部、県大会で初優勝。大正天皇大葬で二日間休校。

野球応援歌（その二）

一、猛球土をかんでとび
熱球高く雲に入る
行方追へども力なく
敵陣乱るゝそのひまに
一塁二塁奪ひつゝ
進む味方の頼もしや

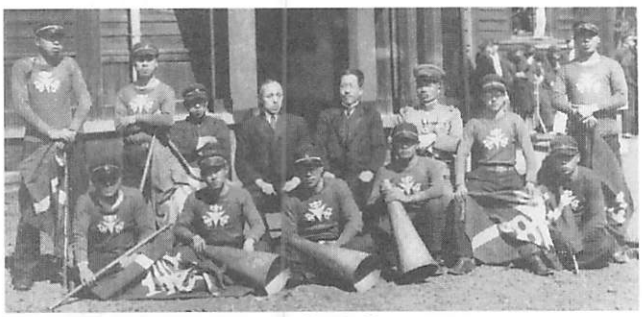
二、空蒼茫と夕されば
戦いつかをさまりて
記録入日にあざやかに
栄ある勝を語るとき
紫匂ふ応援旗
かざす我等の心地よや

野球部は、四年ぶりの北関東大会出場のチャンスを得て、夏休みに入ると明治大学専任監督を三日間ほどコーチに招いて指導を受けた。八月に宇都宮で開かれた北関東大会では、一回戦不戦勝、二回戦栃木中学を破ったものの、翌日の三回戦で宇都宮中学に敗れた。その後積極的に対外遠征も行い、秋の浦和高校主催県下中等学校野球大会を迎えた。

出場校は八校。一回戦で埼玉師範、二回戦で埼玉商業を破り、そして決勝戦の相手は浦和中学。10対9でからくも逃げ切り、優勝！　浦高の球場につめかけた応援団による「空蒼茫と…」の勝利歌が、響き渡った。

野球場は一度に多くの観客や応援生徒を収容できるので、多くの生徒が青空のもとで肩を組み合い、手を取り合って応援し、川中生としての一体感を味わえたのである。

なお学友会会則には明記されていないが、応援団員の写真が当時の「会報」や卒業アルバムにのっているので、組織そのものはあったのだろう。野球応援歌は、一九二四年に当時五年生だった渡辺和(中23)が作詞し、飯田教諭が補筆したものであった。



1928年の卒業アルバムに見える応援部員

4・8(木)午前入学式　午後始業式
11(日)度量衡に関する講話
27(火)「結核予防」に関する講話
5・2(日)五年、京阪地方へ修学旅行
14(金)県下中等学校教練科研究会
15(土)県下中等学校普通体操科研究会
27(木)長谷川先生の海軍記念日講話
28(金)第二七回開校記念運動会
30(日)埼玉学生誘掖会武道大会にて剣道優勝
6・1(火)7時40分始業に変更　夏服着用
9(水)吉村先生の「時」に関する講話
10(木)李王殿下国葬当日につき校長より講話
19(土)全校生徒坂戸方面にて発火演習
25(金)地久節につき学校長謹話
8・2(月)北関東野球大会で栃木中を破る
9・1(水)国民精神作興詔書奉読式
18(土)競技部明治神宮競技大会へ出場
19(日)第三回川越市青年団支部対抗競技会を本校校庭にて開催

日本▶改造社『現代日本文学全集』刊行開始、円本ブーム始まる。福本和夫の福本イズム、一世を風靡。
世界▶中国国民革命軍、北伐開始。ドイツ、国際連盟加入を許され常任理事国となる。

三曲あったが、〝その二〟を別に掲載した。

野球の他、剣道は本年も誘掖会大会で優勝したが、その後は振わず、競技部（陸上）も積極的な活動を展開し、明治神宮での全国大会に出場したが、入賞にはまだほど遠かった。なお、この頃の一〇〇㍍の決勝タイムは十一秒台半ばである。

明治文庫は、引続き年二五〇円の学友会からの予算と、二十五周年で同窓会からの寄付金一〇〇〇円を預金した利子六六円で図書を購入し、蔵書の総計は一三二九冊となった。購読雑誌は九種あるが、この年「武蔵野」をやめて「キング」を、翌年には「戦友」を購読することになった。「キング」は前年に講談社から創刊された大衆雑誌で、ここにも時代の波がうかがえる。

＊

一九二六（大正一五）年十二月二十五日、大正天皇が死去し、即日、新帝が践祚して昭和と改元された。

昭和元年はわずか一週間で暮れ、翌昭和二年二月七、八日の両日、大葬の儀が行われた。学校は臨時休業であったが、生徒職員は七日午後四時に登校。四時半から奉悼式、六時から遙拝式を行った。

御大葬の夕

四年　田中宗平

昭和二年二月七日……この夜こそは国を挙げて哀しみの中に先帝の御魂を御送り申した夜である。

この夜遙拝の式を挙げるべく我が校六百の生徒は午後四時頃から続々と登校した。やがてさら〳〵と残雪を踏んで校庭の南隅に設けられた祭壇前の縄ばりの中に整列した。（中略）

式場の四隅にはかゞり火がたかれ、めら〳〵と炎が上がりびし〳〵と火の粉がちる。

正六時最敬礼の号令が凜然と満場にひゞき渡るや、今までざはめいてゐたがそのざはめきがぴたりと止みしーんと静まりかへった。我々の頭は静かに〳〵低く下っていった。

此の時は丁度御轜車宮城御発引の時である。道の両側に並んだ老若男女は異常なる緊張裡に、しづ〳〵と進む御葬列をお見送り申したことであらう。私はその光景を想像して妙にしんみりとした気持ちになった。黙禱三分間は終はった。何を言ふ者もない。ただ聞えるのは静かな我々の息づかいのみである。（後略）

（「会報」二三号より）

10・3（日）浦高主催県下野球大会で優勝
7（木）日本歯科学士小田顕一氏の口腔衛生に関する講演
22（金）長慶天皇申告祭[※3]につき臨時休業
24（日）浦高主催関東陸上競技大会
11・1（月）競技テスト開始
3（水）全国体育デー　天覧山方面に発火演習を兼ね全校生徒一日行軍
11（木）国民精神作興詔書奉読式
四、五年、高坂方面における機動演習に参加
27（土）午後より弁論大会開催
12・23（木）「会報」二二号発行
25（土）大正天皇死去。昭和と改元
1・27（木）学校教練各学年査閲行われる
2・7（月）大葬の儀につき、臨時休業（～8日）
16（水）全校生徒福岡村方面へ発火演習
3・1（火）四、五年、終業式
2（水）五年、東村山にて実包射撃実施
8（火）第二五回卒業式
10（木）陸軍記念日講話
19（土）三年以下学年試験終了、終業式

※1　例年通り他の学年も旅行実施。
※2　朝鮮最後の国王純宗の葬儀である。
※3　南北朝時代の南朝側の天皇で、長く即位が認められていなかったが、この年詔をもって皇統に加えられた。

昭和2年

1927

中30回

蹴球部が創設され、剣道部、野球部、競技部が大活躍。

学校教練が始まって三年目。野外教練の記録が多く目につくようになったが、一方で運動部が華々しい活躍を見せた年である。

まず剣道部は五月の埼玉学生誘掖会武道大会で五連覇を達成。十月には水戸高校主催の武道大会に出場した。参加校は近県から一六校。水戸高校には川中から長谷部という卒業生が進学しており、彼が川中選手の世話にあたり、その甲斐あって、川中は初出場で見事優勝した。

また、一九二五年に川中を卒業した北村博学(中23)が、前年の明治神宮競技会全国武道大会で、青年組埼玉県代表として出場し、優勝した。同窓会では、これを表彰すべく同窓生に寄付金を募ったところ、一五八名がこれに応じた。この年、十一月三日は明治節と定められ、かつ全国体育週間にもあたるので、この日に全校生徒参集の前で、北村に銀製優勝カップと特製剣道具を記念品として授与し、栄誉をたたえた。

野球部は浦高主催の県下中等学校大会において、決勝で当時の埼玉中学野球の雄、熊谷中学と対戦。7対6で熊中を破り、見事前年に続いて優勝。

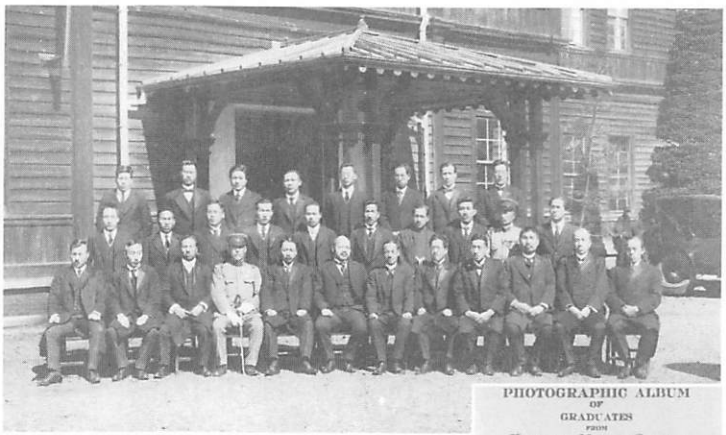
競技部は、十一月の法友陸上倶楽部第一回関東中等学校競技会に六名の選手を派遣。八〇〇㍍で五年の木下正平(中26)が二分一〇秒八で優勝。木下は一五〇〇㍍でも三位に入り、また、四年の神田が一〇〇㍍、二〇〇㍍でそれぞれ四位に入賞。二人の活躍で、川中は参加六五校中、総合六位の好成績をあげた。

この年四月、青山学院蹴球部主将だった川田教諭が着任し、蹴球部が誕生した。部員はまだ一五名。試合も全敗であったが、放課後の校庭はいよいよ賑やかになった。

4・8(金)午前入学式　午後始業式
11(月)「メートル法」記念日
27(水)結核予防講話
5・1(日)五年、修学旅行出発
15(日)埼玉県学生誘掖会武道大会で剣道五連覇
27(金)海軍記念日
28(土)第二八回開校記念大運動会開催
6・10(金)時の記念日講話
11(土)四、五年、野外教練で福岡高階へ
15(水)午後一時より庭球大会
17(金)三年、平方方面にて野外教練
22(水)一年、野外教練
24(金)二年、伊草方面にて野外教練
7・5(火)五年、野外演習
20(水)一学期終業式

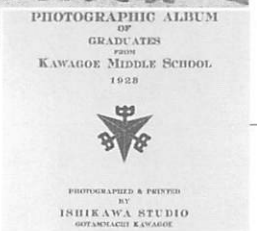
数々の優勝を飾った剣道部

日本▶金融恐慌始まる。芥川龍之介自殺。岩波文庫創刊。上野・浅草間に日本初の地下鉄開通。
世界▶リンドバーグ、大西洋横断飛行成功。ベーブルース、60本塁打。トロツキー、ソビエト共産党から除名。



1927年度の職員一同

高野先生　岡田先生　村本先生　川田先生　小松中尉　飯田先生　吉見先生　松岡教頭　原口先生　長谷川先生　不明　石井先生　忍田先生　宮脇知事　下田先生　保泉先生　岩泉校長　梅沢先生　原山先生　講部大尉　吉長先生　前田先生　吉村先生　平川先生　萩本先生　久保先生　長谷川書記　坂戸先生　間中先生



1928年卒業アルバム中表紙

古木と語る

憧れの川中に大正十三年に入学。五年間寄宿舎生活をする。大正デモクラシーの雰囲気の中で伸び伸びと青春をおくる。

冬の夜、井戸端での冷水浴、度胸だめし、剣道の稽古など、思い出はつきない。川中剣道部の黄金時代。寒稽古、暑中稽古と先輩に鍛えられ、五年生で選手となる。旧制浦和高等学校主催の県大会で優勝し、優勝旗、優勝カップを持って、大宮からチンチン電車に乗り帰校し、出迎えの在校生の祝福を受ける。輝かしい青春の一ページ。

木造の校舎なくなり寂しくて昔を知れる古木と語る

（中嶋幸三・中27）

一般応援歌（一）

一、白龍跳りて雲をよび
万雷怒りて波起す
抜山蓋世の勇をもて
手向ふ敵は粉微塵

二、鉄石の身に技を練り
厳冬酷暑も厭ひなく
備へ夢にも怠らぬ
あゝたのもしのわが選手

一般応援歌（二）

一、金石とかす夏の日も
寒風身をきる冬の日も
初雁健児のたゆみなく
鍛へに鍛へしこの腕を
錬りに錬りたるこの技を
示すは今ぞこの時ぞ

9・1(木)二学期始業式　詔書奉読　震災記念式を挙行し一分間黙禱
10・2(日)浦高主催県下中学野球大会において二連覇
12(水)四年、川越市火葬場付近にて野外教練
16(日)水戸高主催武道大会で剣道優勝
22(土)四、五年、名細・鯨井で野外教練
11・3(木)明治節講話
卒業生北村博学表彰式
8(火)四、五年、機動演習に参加
10(木)国民精神作興詔書奉読及び訓話
13(日)法友倶楽部陸上競技大会にて八〇〇メートルで優勝
18(金)一、二年、高坂方面で野外教練
22(火)三年、伊草方面にて測図演習
12・3(土)四、五年、蚕業、工業両校と連合で伊草方面にて野外教練
18(日)大日本武徳会埼玉支部川越地方剣道大会を本校道場にて開催
1・11(水)本日より十日間武道寒稽古
14(土)午後より弁論部大会開催
21(土)午後、クラス対抗剣道優勝杯戦
26(木)教練査閲
28(土)五年、東村山にて実包射撃
29(日)武道大会
2・28(火)三年、野外教練
3・7(水)第二六回卒業式

※1　例年通り他学年も旅行実施

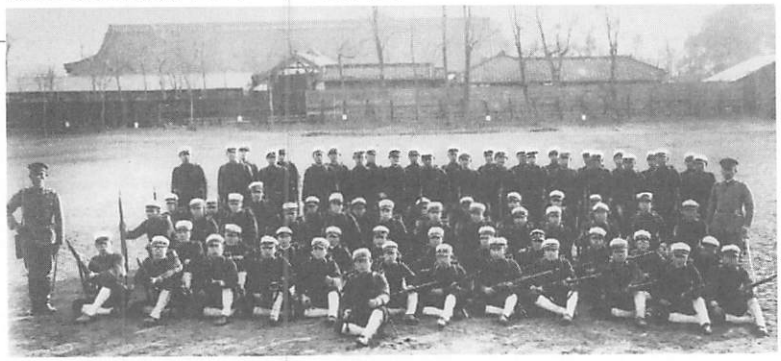
昭和3年

1928

中31回

昭和天皇の即位奉祝御親閲に五年生が全員参加する。

校庭での野外教練。白いゲートルは海軍式



大正天皇の諒闇が明け、昭和天皇が即位した。前年の金融恐慌も一段落して、日本国内は即位関係の儀式に動いた一年である。

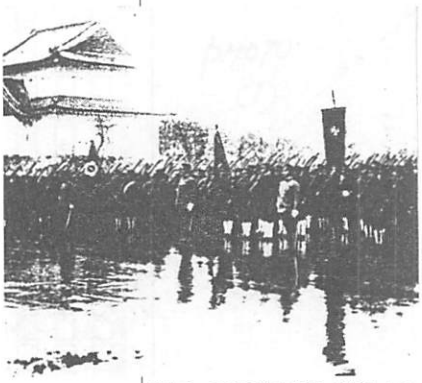
四月二十九日は昭和になって最初の天長節。元日の四方拝、紀元節、そして前年制定された明治節とならんで、これで代表的な皇国儀式を行う四大節が整った。

即位の諸儀式は秋に行われた。

十一月十日、即位の大礼が京都御所で行われ、十四日夕方から翌朝にかけて大嘗祭。十六、十七日が大饗（だいきょう）。この間、川中は十日、十四日、十六日が臨時休業となる。特に十日は大礼奉賀式を行い、職員生徒一同が運動場に整列。午後三時を期して、校長の発声で「天皇陛下万歳」を三唱した。

「現人神（あらひとがみ）」としての即位儀式を終えて帰京した天皇は、今度は軍隊の大元帥として、陸軍観兵式、海軍観艦式、在郷軍人代表親閲式に臨む。ここまでは予定の儀式であるが、今回は特に近隣の五府県知事（東京、神奈川、千葉、埼玉、山梨）がはかって、学生、青年訓練所、青年団員も親閲を仰ぐべく宮内省に申し出て、これが実現した。

4・9(月)午前入学式　午後始業式
11(水)「メートル法」記念日講話
15(日)「会報」二三号発行
20(金)職員生徒希望者に種痘施行
25(水)二年、野外教練
27(金)「結核予防デー」で校医講演
29(日)天長節拝賀式
5・5(土)三年、野外教練
8(火)五年[※1]、修学旅行
20(日)誘掖会武道大会で剣道六連覇
26(土)海軍記念日講話
27(日)第二九回開校記念運動会
浦高主催県下中等学校剣道大会で剣道部優勝
6・4(月)虫歯予防デー
8(金)四年、野外教練
11(月)「時の記念日」に関する講話



皇居二重橋前広場に整列する中学生

日本▶特高警察、全国に拡充。ラジオ体操始まる。改造社『マルクス・エンゲルス全集』刊行開始。
世界▶パリ不戦条約に63か国参加。イタリア、ムッソリーニ独裁政権確立。ソ連、第1次5か年計画発表。

かくして十二月十五日、雨降る中、学生は五〇校一万五〇〇〇名が参加。青年団体を含めると、五〇〇〇の団体、七万四〇〇〇人が皇居二重橋前広場に集まった。川中からは五年生九九名が、岩泉校長、配属将校溝部少佐、教練主任小松教諭、学級主任二名らの先生方に引率されて親閲を受けた。

親閲式そのものは、軍楽隊の行進曲にあわせて整列行進、天皇の前で「頭ア、右ッ」の号令とともに、顔を天皇に向けるというだけであるが、御真影で時々見ることしかない現人神の御親閲を受けるとあって、参加した生徒の感激はひとしおであった。

地元の協力で運動部発展

学友会の活動もいよいよ充実した。

剣道部は本年も学生誘掖会武道大会、浦高剣道大会で優勝したが、その実績で、いよいよ川中剣道部主催の大典記念県下小学校剣道大会を開催した。第一回のこの年に招待されたのは、川越、入間、石戸、入間川、第一飯能、北吉見、所沢の各尋常高等小学校である。優勝は川越であった。なお、この大会の開催にあたって、弘武堂、明文堂、好兼堂、報知新聞社等から、優勝旗、メダル、文房具などの賞品協力を得た。

学友会の活動が活発になる中で、七月に在校生父兄の市内有志と卒業生有志とで、川越中学校体育後援会が組織された。この会は数千円の寄付金を集め、各運動部の補助等の事業を行った。

その一つがグランドの拡張である。元来川中の校庭は南北に細長い。野球場の右翼はあってなきがごとしだった。そこで校庭と校舎敷地の垣根を取り払い、その西にある便所を寄宿舎の北に移し、かつ雨天体操場を五㍍西に移動させる工事にかかった。これによって野球場が拡張された。十一月に早稲田実業と桐生中を招いての拡張記念野球大会を開き、大勢の観衆を集めた。

また、すでに二十五周年記念事業で、校庭北側の土地が借地ながら拡張され、ここにテニスコート一面と狭窄射撃場が作られていた。テニスコートは他に南側の瑞葉園跡にもあったが、ここに間もなく講堂ができるというので、北側のテニスコートと射撃場の間にテニスコートを新設。その西に金網を設けた。こうして独立した二面のテニスコートが整ったわけだが、この工事にも体育後援会の援助があった。

19(火)四、五年、野外教練
23(土)東京理化学研究所相談役鎌塚氏の発明発見に関する講演
7・7(土)一、三年、野外教練
10・6(土)上海同文書院教授、清水薫三氏の講演「支那事情」
13(土)両陛下御真影奉迎式
16(火)四、五年、野外教練
夜、古谷村青年訓練所生と融合演習を行い、運動場に露営
31(水)全校吉見百穴方面に一日行軍
11・4(日)剣道部主催第一回県下小学校剣道大会
9(金)御大礼に関する謹話
10(土)即位礼当日につき臨時休業
午後二時より大礼奉賀式
14(水)大嘗祭につき臨時休業
16(金)即位礼大饗第一日の為臨時休業
21(水)二年、野外教練
23(金)一年、野外教練
24(土)四、五年、蚕業、工業両校と連合で落合橋にて野外教練
30(金)東京府立第五中学校より伝書鳩二羽を譲り受け飼育し始める
12・11(土)歩兵大佐大浜氏による教練査閲
15(土)二重橋前広場での大典奉祝御親閲に五年参加
22(土)二学期終業式

※1 例年通り他学年も旅行実施

昭和4年

1929

中32回

名スプリンター、鈴木聞多の活躍始まる。

生家に保管されている鈴木聞多使用の白いスパイク

競技部の鈴木聞多（中29）の活躍が始まった。川越中学がやがて世界に誇ることになるスプリンターである。

鈴木はすでに三年生の時から、五年生にまじって県大会等に出場していた。四年生になったこの年、まず十月の法友倶楽部関東陸上競技大会一〇〇㍍と二〇〇㍍で優勝を飾った。タイムは一一秒七と二四秒四で、二〇〇㍍は大会新記録だった。続いて行われた水戸高校近県中等学校陸上競技大会でも、一〇〇㍍は同タイムで優勝。二〇〇㍍は二位だったが、二三秒九と、自己記録を更新した。この大会では八〇〇㍍に出場した五年の山下隆三（中28）も優勝。川中は総合で四位に入った。

鈴木は翌年、五年生になって、九月の甲子園運動場で開かれた全国中等学校陸上競技大会（全日本インターミドル）に出場した。この大会には文字どおり全国から百余校の選手が参加した。鈴木は一〇〇㍍と二〇〇㍍にエントリー。大会一日目はそれぞれ二回の予選を好記録で通過。翌日、準決勝も勝ち進んで、いよいよ決勝。一〇〇㍍は一一秒一、二〇〇㍍は二二秒七で、堂々の二冠を成し遂げ、一躍全国の注目を集めたのである。なお、この大会には五年の横山武造（中29）も槍投げで出場したが、実力を発揮できず、入賞をのがした。

鈴木は翌一九三一年に慶応大学に進学して、素質にますます磨きがかけられる。これ以後の国際的な活躍は「はつかり人物誌」を参照されたい。

4・5（金）「会報」二四号発行
8（月）入学式
20（土）全日本籠球選手権大会群馬埼玉予選会に出場
5・12（日）浦高主催県下中等学校柔道大会で二回戦敗退
19（日）浦高主催県下中等学校剣道大会で四連覇
26（日）学生誘掖会県下中等学校武道大会で剣道決勝で敗れる

陸上部員。中央でカップをかかえているのが鈴木聞多

日本▶徳永直『太陽のない街』、宮本顕治「『敗北』の文学」発表。映画「大学は出たけれど」封切。
世界▶ドイツの賠償金支払い最終案「ヤング案」成立。ニューヨーク株式大暴落。世界恐慌始まる。

鈴木の業績は、国際的な活躍だけではない。川中競技部の卒業生で組織された川越中学陸上競技倶楽部に参加し、一九三四年には同倶楽部主催の第一回県下男子陸上競技大会が、川中グランドで開催された。翌年、鈴木はベルリンの五か国対抗陸上の一〇〇㍍で優勝し、彼の名声は世界的なものになった。その直後に川中で開かれた第二回県下男子陸上競技大会で審判を務め、大会に華を添えたのである。

弁論部も全国大会で入賞

五月の埼玉師範主催の関東中等学校大会で、五年の新井三郎（中28）は「苦痛哀愁の彼岸へ」の演題で入賞。六月の浦高主催の全関東中等学校大会では、同じ演題で二位に入った。また五月の東京高等師範主催の全国中等学校大会は全国から五十余校の選手が出場。その中で五年の新井正雄（中28）は「大自然は吾人の思想を高潔ならしむる慈母也」の演題で、堂々全国入賞を果たした。

この実績で弁論部は十二月に近県下中等学校雄弁大会を本校で開催した。これは一九二五年の校内弁論大会に他校の弁士を数人招待したのが始まりで、二八年までは県内弁士だけだったが、この年から東京の中学校からの参加も得た。

弁論部の活躍は翌年も続き、東洋大学主催の第一回懸賞論文大会では、五年の矢部正司（中29）が「将に鳥は溺れんとす」の演題で見事優勝を果たした。本校主催の近県下雄弁大会には東京、神奈川からも参加を得て、二九校三〇名が雄弁を競った。

弁論部員。中央で盾を持つのが矢部正司

剣道部は浦高主催の県下剣道大会では四連覇を飾ったが、誘掖会大会では決勝で不動岡中に敗れ、七連覇を阻まれた。また、九月に東京高等師範主催の全国中等学校剣道大会に出場した。この大会には全国から九四校が参加。一回戦では海城中を破ったが、二回戦で千葉師範に敗れた。

五年生の中に籠球部設立の要望が強く、この年、原口教諭を監督に迎えて籠球部が認められた。部員は二八名。さっそく四月の全日本籠球選手権大会の群馬埼玉予選に出場したが、まだまだ実力不足だった。

27(月)埼玉師範主催関東中学校雄弁大会で入賞
29(水)東京高師主催全国中学校雄弁大会で入賞
6・9(日)浦高主催関東中等学校雄弁大会で二位
7・24(水)山岳部富士登山隊出発
水泳部、房州岩井へ（～8／5）
9・22(日)東京高師主催全国中等学校剣道大会で二回戦敗退
10・3(木)法友倶楽部関東陸上大会で鈴木聞多一〇〇㍍、二〇〇㍍に優勝
水戸高近県中学校陸上大会で、鈴木一〇〇㍍、山下隆三八〇〇㍍優勝
12・7(土)第五回近県下中等学校雄弁大会を開催
1・9(木)武道寒稽古（～19日）
29(水)講堂新築地鎮祭
3・6(木)第二八回卒業式

昭和5年

1930

中33回

講堂新築さる。緊縮財政下、五年の旅行中止。

開校当初、本館二階にあった講堂は様々な儀式に使われていたが、一九一二（大正元）年に大本営が置かれた後、クラス数の増加もあって二つに区切られて普通教室に変わった。以後、生徒全体が集まる儀式には、雨天体操場が使われていた。雨天体操場は柔剣道場を兼ね、広いが天井が張ってなく、屋根裏の梁が丸見えであった。儀式を行うには見劣りする場所で、正式な講堂の建設は、川中の懸案であった。

その念願の講堂建設にやっと県から許可がおり、この年一月から工事に取り掛かって、六月に竣工となったのである。建築費用一万三九四〇円だった。

講堂は校門を入って右手、現在の体育館の場所に建てられた。面積は一四二坪六二。褐色がかった黄色の外壁に、屋根は橙色（だいだい）の瓦で葺かれた。玄関上の外壁には大きな○（まる）に十字の飾りが付けられ、南北面の壁面には上端がすぼまったゴシック風の大きな窓があき、明るくモダンな建物だった。

六月二十八日に落成祝賀式を行ったが、生徒が初めて中に入ったのは、七月十八日、一学期の終業式の時だった。その時の様子を、「会報」二六号に掲載された当時四年の安藤孝二（中30）の文章で紹介しよう。

「……中へ入る。黄色の石畳だ。洋傘立てがきちんと置かれてある。靴を脱ぐ。プーンと鼻を襲ふ木の香も新しさを思はせて気持ちがよい。右側には来賓応接室、そのドアーの上に洋画家近藤洋二（中14）氏の筆に依る巴里郊外の額絵が掲げてある。一寸

講堂内部。正面に「興廃一戦」の額が見える

新築された講堂の外観

4・5（土）「会報」二五号発行
8（火）入学式
5・4（日）全関東中等学校陸上競技大会にて横山武造槍投げで二位
6・21（土）東洋大学講演部主催第一回懸賞雄弁大会で矢部正司優勝
28（土）新講堂落成祝賀式
7・18（金）新講堂にて一学期終業式
22（火）水泳部、岩井浜へ（～8／2）

日本▶昭和恐慌始まる。映画「何が彼女をそうさせたか」封切り。特急つばめ運転開始、東京・大阪8時間。
世界▶ロンドン軍縮条約調印。インド、ガンジーの指導のもとで第2次非暴力的抵抗運動を開始。

室内を覗くと見事な円テーブルを囲んで、そこらには易々見られさうもない立派なひぢ掛け椅子が五つ六つある。之なら大概の来賓がその様子の良さにびっくりするだらうと聊か鼻の高くなるのを禁じ得ない。

愈々講堂へ入る。床は隅から隅まで板張りである。正面には高さ三尺位のがっしりした壇があって美しい彩色の施された絨たんが敷いてある。その後には天皇・皇后両陛下の御真影を奉安するのであらう、幾重にも幕が垂れてゐる。壇の両側には沢山の椅子があり、その左側の椅子のある右前には両端に川中の制章のついた今まで見たこともない程美しい黒板がある。

それから僕たちはキチンと並べられた新しい長椅子に着席する。

天井は随分高い。色は真白で大きな六個の電燈が下ってゐるのが見える。真後の壁には『修文奮武』と筆太に書かれた大額がかかって居り、それと相対して正面には東郷平八郎閣下の直筆なる『興廃一戦』と書かれて金縁の額が二十五年前のあの大海戦を思ひ起させるかの様にかかって居る……。」

講堂の南側にはかつての豊栄丘を中心に花壇が整備され、豊栄丘と講堂との間には小さな池があった。心という字をかたどっていて、心字池と呼ばれた。

一九六九年の七十周年記念で、重層体育館兼講堂が建設されるまでの三十九年間、その間の戦争をくぐりぬけて、この講堂は入学式や卒業式、講演等で使われ続けた。中は音が響いて話が聞きにくいこともあったようだが、瀟洒でモダンなたたずまいは川中・川高生の誇りであり、木造校舎の面影とともに多くの卒業生の記憶の中に生き続けたのである。

＊

前年からの浜口内閣の緊縮財政と、それに続く昭和恐慌は県財政や一般の家計を苦しめた。深刻な不況の中、県当局は修学旅行自粛を学校に求め、川中では五年の関西旅行が中止になった。翌年は実施の可否を父兄生徒に事前調査し、四年の東北旅行を中止、更に翌々年も五年の旅行を見送った。

＊

蹴球部が五月に再興された。一九二七(昭和二)年に創設されたが、その後休部状態になっていた。この年、川田教諭の熱心な勧誘で部員が集まって復活となった。さっそく浦中と対戦したが、0対18で大敗。

23(水)山岳部、白馬岳に出発(～28日)
8・3(日)野球部、北関東大会準決勝戦まで進む
10(日)浦和実業主催第二回県下中等学校野球大会で優勝
24(日)同窓会例会を新講堂にて開く
9・14(日)鈴木聞多、全国中等学校陸上競技会一〇〇㍍、二〇〇㍍で優勝
28(日)水戸高主催近県中等学校陸上競技大会で、鈴木一〇〇㍍、二〇〇㍍で優勝、横山槍投げで優勝
10・3(金)五年、実弾射撃及び兵営訓練(～4日、於近衛歩兵四連隊)
5(日)東京高師主催全国中等学校柔道大会に出場、三回戦まで進む
28(火)高野佐三郎氏講演及び実施指導
30(木)教育勅語渙発四十周年記念講演四王天延孝氏「自由平等友愛論」
11・2(日)全国中等学校東西対抗陸上競技大会に、鈴木聞多出場
9(日)川中野球後援会主催第一回関東中等学校選抜野球大会開催、優勝
15(土)本校弁論部主催近県下中等学校雄弁大会開催
19(水)四、五年、近衛師団対抗演習
2・14(土)第八回全国中等学校選抜野球大会に、川中推薦さる
3・5(木)第二九回卒業式

昭和6年

1931

中34回

野球部、春の甲子園初出場。夏、予選準決勝敗退と大惨事。

野球部が念願の甲子園出場を果たした。

前年、毎週のように練習試合を行って実力を高めた。夏の北関東大会では準決勝で高崎商業に敗れて甲子園出場はかなわなかったが、県内の大会では秀でた成績を残した。試合結果は四二勝五敗一分で、川中野球部史上最高の戦績だった。

部長の飯田先生が春の甲子園選抜野球大会に向けて、これらの資料を提出したところ、この成績が評価されて川中が推薦されたのである。

一九三一年二月十四日、部員は登校して飯田先生からこの吉報を知らされた。夢にまでみた甲子園である。しかも埼玉からは初めての出場である。部員、学校はもちろん、川越市も歓喜に沸いた。

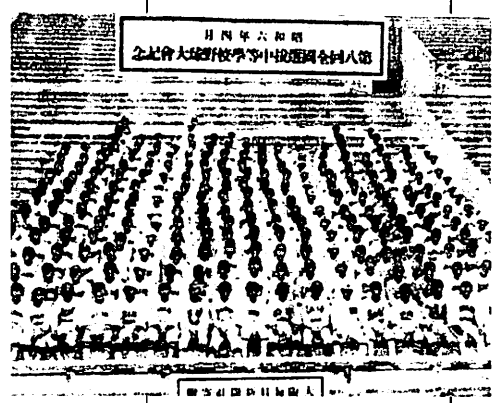
大会に向けて猛練習が行われる。監督は卒業生で立教大学選手であった岸田勝太郎(中25)。ほかにOBの来校激励、早稲田大学選手や元大毎の林(旧姓井川)補手のコーチ、そして出発直前には学生野球の大御所飛田穂洲氏の指導を受けた。また、出発まで雪が三回降ったが、その度に全校生徒がグランドの雪かきをした。

いよいよ四月一日、第八回全国選抜中等学校野球大会の開会式。ここで川中はもっとも遠くからの参加校ということで、野本定(中30)主将が選手宣誓の栄誉を担った。

試合は四月三日。相手はやはり初出場ながら強豪の中京商業である。川中の先攻で試合は始まったが、経験したことのない大きな球場と大観衆の中で、さすがに川中の選手は緊張した。ヒットはわずか二本。失策八つ。結局0対11の完敗であった。

初陣による緊張で実力を出しきれなかったといっていいが、この甲子園での苦い経

2・14(土)第八回全国選抜中等学校野球大会に川中推薦さる
4・3(金)野球部甲子園初出場
8(水)入学式
25(土)「会報」二六号発行
7・22(水)水泳部、岩井へ(〜8/1)
28(火)野球部、県大会で優勝
8・1(土)登山部槍ケ岳へ(〜6日)
4(火)野球部北関東大会準決勝で敗退帰途列車転覆事故で部員死亡
10・10(土)第七回全関東中等学校懸賞弁論大会を開催
25(日)剣道部主催第三回県下小学校剣道優勝大会開催
11月 剣友会発会記念第一回剣友大会
12・5(土)故山畠豊追悼式
1・10(日)武道寒稽古(〜25日)
3・8(火)第三〇回卒業式



開会式前日に撮影された参加チームの記念写真

日本▶満州事変勃発。日本初のトーキー「マダムと女房」。古賀政男「酒は泪か溜息か」ヒット。
世界▶イギリス、金本位制を停止。フーバーモラトリアム。ニューヨークのエンパイアーステートビル完成。

験は貴重であった。その雪辱に燃え、夏の甲子園を目指して再び猛練習が始まった。

夏の甲子園大会の北関東予選は、これまで埼玉、群馬、栃木三県の四〇校ほどが集まって試合が行われたが、この年から、各県の予選を経た八校で争うことになった。

まず七月下旬の埼玉県予選で川中は優勝。文句なく北関東予選に駒を進めた。

悪夢の八月四日

北関東予選大会の開催地は前橋。一回戦は八月三日、優勝候補の高崎商業と対戦。前年に準決勝で苦杯をなめている相手だが、接戦の末7対6で勝利。

翌日の準決勝は対桐生中戦。この試合で川中は打撃好調、失策もなく、8対3のリードで、九回の桐生中最後の攻撃を迎えた。この時川中の決勝進出を疑う者はいなかった。ところが、川中の熊谷投手が突然制球を乱して八つの四死球を与え、野選もあって、六点を献上。この間に桐生中がバットを振ったのはわずか二回だけ。まさに悪夢としか言いようのない出来事であった。九回裏の川中の攻撃は簡単に終わり、8対9でまさかの逆転負けを喫したのである。

茫然自失の敗戦に、しばらくは声もなかったが、帰りの車に乗るや、張りつめていたものが一気に緩み、一同男泣きに泣いた。これが一年間の猛練習の結果か、このような断腸の思いで学窓を去るのか、と。

だが、その帰りにさらなる悲劇が起きる。

選手二十数名は大宮で西武電車（元川越電気鉄道のチンチン電車）に乗り換えて川越に向かった。夜十時半、珍しく満員となった乗客を乗せて列車は進んでいたが、三橋村大字並木の賀茂川から一〇〇メートルほど先の急勾配の下り坂を猛スピードで突っ走り、その勢いに耐えきれなかった列車が脱線転覆したのである。

（二）　昭和六年八月六日　（木曜日）　（第一版）

東京日日新聞　埼玉版

西武電車顚覆の惨事

山畠、齋藤兩君は

依然として重體

乗客は全部將棋倒し

傷の治り次第練習を開始

兩君は高等學校

雨天には車内で傘をさすの珍事

車輪檢査に通過するのが不思議

ボロ〳〵の西武電車

川崎市改修案の負擔額減運動

大阪村で決議

事故を伝える「東京日日新聞」（埼玉版）

車内の乗客は将棋倒しになって多数の負傷者が出た。その中で、五年の山畠豊（中30）と四年の斎藤富吉（中31）は列車の下敷きになってしまったのである。

とりあえず二人は救出されて病院へ運ばれた。しかし山畠は背骨を折り、大小腸の切取接続という大手術を行い、一時は小康状態を保ったが、三日後の八月七日に亡くなってしまった。斎藤は左足踵関節骨折の重傷を負ったが二か月後に退院した。

山畠の葬儀は八月九日に養寿院で行われ、さらに十二月五日、学友会主催で全校の生徒職員の参加による追悼式が開かれた。

＊

剣道部は埼玉学生誘掖会武道大会で一九二八（昭和三）年に六連覇を達成した後は振るわなかった。剣道部の低調を憂慮した北村博学らのOBは、川中剣道部出身者で剣友会を組織した。会長には川中校長がつき、現役に稽古をつけたり、大会を開催する等、現役部員の一大奮起を促したのである。

また、この年、中学校令の一部が改正になって、中学校に実業教育が導入されることになり、この年から一年生に作業科の授業（土木・園芸）一単位が置かれた。

昭和7年

1932

中35回

寄宿舎制度が廃止され、木造の正門が改装された。

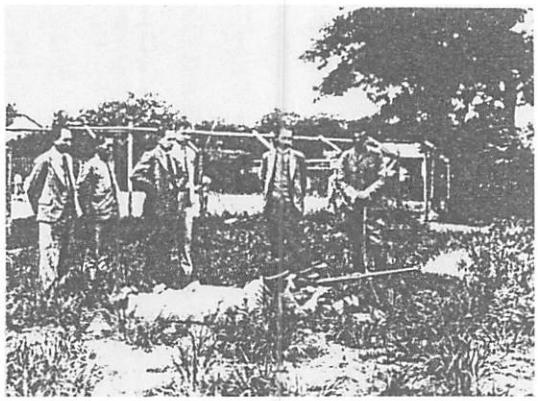
古いものが大きく変わっていく年である。二年前の講堂新築にあわせるように、校門が装いを全く新たにしたのである。

それまで川中の校門は、一九一二(大正元)年の〝大本営化〟に伴う校舎修繕で位置が変わったが、いずれも木造の門柱で、両脇を木の柵で仕切る外観は変わらなかった。それが今回は、化粧石板張りコンクリート造りの門柱で、両脇の柵は土を盛ったものになった。校門の扉も鉄製になり、重厚になった。その近代的な外観は右手奥のあかぬけた講堂とよく調和した。

また、開校当初から幾多の寄宿舎生を育ててきた寄宿舎が、三十二年間の歴史に幕を閉じた。寄宿舎については後述する。

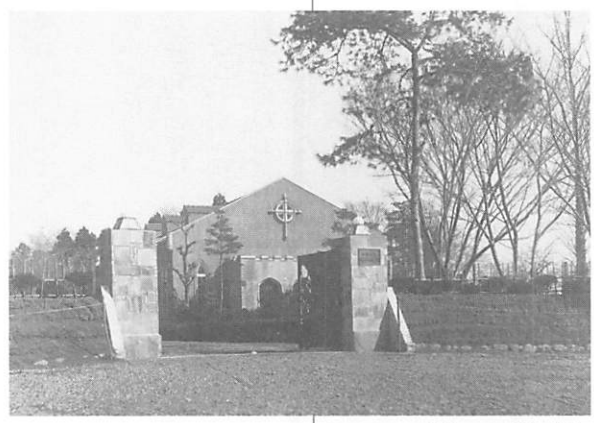
＊

一九三二年三月に卒業した第三〇回生が学校に贈った卒業記念品は軽機関銃であった。また十一月に行われた四、五年の発火演習は、名細村の小学校で露営を伴うもの。露営演習は一九二八年以来行われているが、前年九月の満州事変勃発で、軍事教練もいよいよ本格化した。



テニスコート南側の校庭草地で軽機関銃の射撃訓練。右端が小松中尉。その隣が岩泉校長

3月　寄宿舎制度廃止
4・1(金)入学式
7・10(日)「会報」二七号発行
21(木)登山部、乗鞍岳へ(〜26日)
22(金)水泳部、岩井へ(〜8/2)
26(火)正門改築
29(金)野球部県大会で優勝
8・3(水)野球部、北関東大会準決勝で三たび敗れる
10・29(土)本校主催全関東中等学校雄弁大会開催
11・8(火)四、五年、発火演習を兼ね、第一師団演習に参加(〜9日)



新しい正門と講堂

日本▶５・１５事件により、政党政治終焉。『日本資本主義発達史講座』刊行。日本橋白木屋大火災。
世界▶満州国成立。リットン調査団報告。アメリカ大統領に、ルーズベルト当選。

寄宿舎の沿革

寄宿舎は一九〇〇（明治三三）年一月一六日に開設された。本校舎の北側に東西二二間、奥行四間半の二階建一棟が建てられ、他に附属施設として食堂と風呂場があった。

当時、川越～所沢～国分寺間（川越鉄道）と川越～大宮間（川越馬車鉄道）に鉄道が通っていたが、通学可能範囲は、北は川島、坂戸、西は高萩、南は大和田、東は桶川近辺までで、生徒の自宅は現在より更に遠くに分布していた。寄宿舎はこれら遠方生徒の便宜を図ったものである。

開校当初の一、二年生は比較的川越近辺の者が多く、入舎生はわずか八名だったが、三回生からは遠方の生徒が増え、自宅を離れる者が半数以上に上り、学校側が寄宿舎への入舎を勧めたこともあって、一九〇一年には舎生は五〇名に達した。そこで一棟だけでは手狭になったので、もう一棟同じ大きさの建物が北側に追加建設された。

部屋割りは図の通りである。南棟が主に舎生の自修室をはじめとした学習棟で、北棟が寝室にあてられた。一部屋の大きさはだいたい一教室分で、これに一〇～一二人が入った。各室の室長、副室長が五年生の中から校長によって任命された。

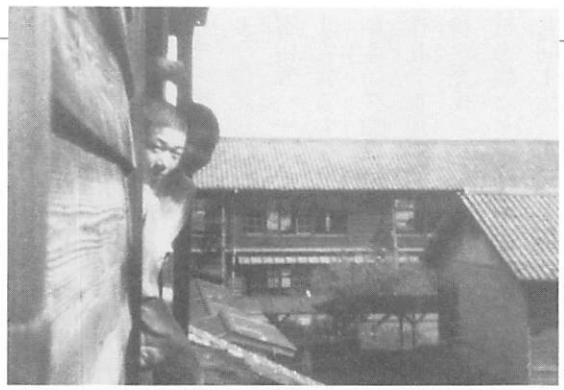
食事ははじめは請負賄制だったが、これは営利に傾いて献立が単調になりやすく、舎生の嗜好にかならずしも合わない上に経費もかさむので、一九〇三年から自炊制に変わった。

自炊といっても、食事を実際に作るのは雇われた炊事夫で、正副室長が炊事委員となって二部屋ずつ一か月交代で当番になり、毎週土曜日に舎監と相談して献立を決め、食材の購入にあたったのである。

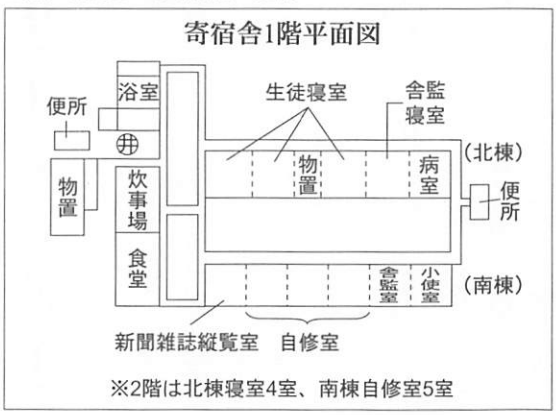
寄宿舎費は時代によっても異なるが、大正時代で、寄宿舎使用料五〇銭、舎費一円、食費が一一円だった。

五学年がそろった一九〇二年以降、寄宿生が何人いたのか、残念ながら年ごとの推移は不明であるが、一九〇二（明治三七）年が六四名、一九〇九年九四名、一一年八三名、一三（大正二）年五九名、一六年六〇名、二三年は四〇名という記録がある。

これから考えると、明治四十年代が舎生数としては全盛期で、東上線池袋～川越間が開通（一九一四年）した大正時代前半は、五〇～六〇名で推移したと考えられる。



正面に見えるのが寄宿舎の建物



1・29（日）第四回県下小学校剣道優勝大会開催
3・7（火）第三一回卒業式
25（土）岩泉校長、退職

寄宿舎の精神―家族主義、規律遵守、自治

大正年間、寄宿生には「舎生手牒」が渡された。その中の寄宿舎生徒心得の第一条には次のように記されている。

「寄宿舎ハ一個ノ家庭ト心得舎監ニ対スル父母ニ事フルカ如ク同窓ニ交ハル兄弟ニ於ケルカ如ク順良信愛ナランコトヲ力メ起居動作凡テ規律ニ従ヒ自ラ重ンシ公共自治ノ精神ヲ発揚スヘシ」

舎監を親とし、同窓生を兄弟とする家族同様の共同生活、規律遵守、そして自治精神。これが寄宿舎生活の三本柱である。

明治末年頃の寄宿舎の生活の様子をまとめると、次の通りである。

毎日の日課は別表の通りであるが、夜十時に自習時間が終わると消灯になり、舎生は寝室に行く。寝室には電灯がなく、長い廊下の両端に四個の電灯がついているだけだったので、学期試験の時など自修室で予定の勉強が出来ないと、廊下の電灯の下に集まって立ったまま勉強を続ける者もいた。

休日の前日の門限は一時間遅く、夜の学科もなかった。点検消灯は一時間繰上げられた。

五年生が室長として統率するという形をとっていたため、自然各室のあり方も室長の個性によって硬軟様々であった。

朝食前と就寝前の二回、室員全員を整列させて勅語を奉読する部屋もあれば、詩吟や薩摩琵琶に熱中する部屋、俳句や和歌に精進する部屋、という具合であった。

■寄宿舎日課表

朝	6時	起床
	6時30分	朝礼
	6時40分	朝食
	7時～8時	学科
昼食	12時30分	
夜	門限5時30分	同時夕食
	6時30分～7時50分	第1学科
	8時～9時	第2学科
	9時30分	点検
	10時	消灯就寝

■寄宿舎年間行事

4月	7日開舎
	8日1年生入舎式
	13日勅語奉読式
	19日草餅会
5月	4日勅語奉読式
	28日茶話会
6月	1日勅語奉読式　食卓の洗濯
	14日庭球大会
7月	2日武道大会
	20日閉舎
8月	31日開舎
9月	7日勅語奉読式
	13日月見会
10月	5日勅語奉読式
	7日武道大会
	9日職員対舎生庭球大会
	30日茶話会
	31日寄宿舎野球大会
11月	17日火鉢を入れる
12月	25日閉舎

寄宿舎の雰囲気は独自の文化だった

寄宿舎の年間行事は別表の通りである。

月見会は運動場の真中に丸くがま莚を敷いて、だんごや芋等を食べながら歌ったりして月見をしたのである。

茶話会は原則として一か月に一回、土曜日の夜に開いた。食堂の長机を四角に並べて舎生全員が出席し、舎監二人と先生方五、六人

舎生手牒

を順次に招いて、お茶に亀屋の餅菓子とセンベイを食べながら話を聞くのである。堅苦しい話、面白い話いろいろあったが、気持ちを許せる一時でもあった。

この表以外にも、一九一三(大正二)年から数年間、寄宿舎独自の一泊「克己旅行」(72頁参照)や、喜多院境内での肝試し会があった。五百羅漢でドラを鳴らしたり、中をくりぬいてロウソクをたてた西瓜を池の上にぶらさげるという細工をした。

また、寄宿舎内の運動として、野球のほかに、早くから相撲や弓道、夜間フットボール、そして七月と十二月の試験期間を除いて毎週水曜と日曜に、一時間程度の柔剣道の稽古が実施された。

卒業生が寄宿舎を訪れた。中でも一高から東京帝大へ進んだ山口政二(中3)は全舎生を魅了した。山口は好んで徒歩旅行をしたが、その帰途、洋服に蓑笠脚絆草鞋姿で寄宿舎に立ち寄り、舎生を集めて話をした。山口が帰ったあと舎生は生き生きとし、山口の教えた一高の寮歌を大合唱したという。

現役の舎生の中にも名物男がいた。「オヤジ」と呼ばれて、平気で留年を続けていた深田喜一郎(中10、八年かけて卒業)。デップリ肥った大男で見るからに寄宿舎の主だが、また寄宿舎のまとめ役でもあった。

ほかにも、寄宿舎の食堂の屋根の先端でスクッと逆立ちをする者、起きてから寝るまで暇さえあれば、廊下でも寝室でもおかまいなしに大声で軍隊式号令の練習をする者等々。

規律と心身の鍛練といった生活の管理がある一方で、和気藹々とした男だけの共同生活から生まれる豪放磊落さ。それらは寄宿舎生活の特徴でもあるが、そこで語り継がれた様々な逸話は、寄宿舎文化の結晶と言ってもいいかもしれない。

寄宿舎の終焉

一九二三年九月の関東大震災では、寄宿舎は南寮の瓦が落ちる被害を受けた。それと同時に北寮が埼玉師範の寮として移築されることになったので、南寮が改築され、十月十七日には寄宿生は南寮に引っ越した。北寮は十二月に解体され、埼玉師範に移された。

新しい南寮は勉強室と寝室が一体となった舎生の部屋が七室、他に舎監室、集会室を兼ねた娯楽室、読書室があった。舎生の部屋は各部屋に電灯がつき、明治時代のように、廊下の明かりで勉強という光景はなくなった。

しかしその直前から舎生数は減り始めていた。その原因は、東上線が一九二一年には坂戸まで、二三年には松山まで延びる等、交通機関の発達で生徒の通学可能範囲が広がったこともある。それにもともと厳しい規律は敬遠されていたが、上級学校への進学志向が強まる中で、様々な行事や柔剣道の稽古で時間を奪われるのを嫌い、勉強時間の確保のために二年になると下宿に移る者もいたのである。

こうして寄宿生が次第に先細りになる中、一九三二年三月、寄宿舎は静かに幕を閉じた。

舎歌

一、霞綾き花笑ひ
照らす日影は長閑けきも
隙行く駒の足早み
あはれ光陰過ぎ行かば
落花悲傷の歎あらむ
世は永遠に春ならず

二、文の林に果を拾ひ
学の海に珠探る
我に尽ざる汗みてり
我に湧き立つ血潮あり
険しき岨路ものならず
怒れる波濤何かある

三、堕落の世をば救へてふ
重き使命は我にあり
花一と時の香に酔ひて
快楽にふける諸人よ
濺ぐ健児の熱涙に
覚せ偷安不義の夢

四、禮節質の綱領旗
翰す正義の太刀風に
向ふ妖魔の影もなし
醜の醜草靡き伏す
汗あり血あり涙ある
健児の威力仰がずや

※明治時代の舎監、中一十先生作詞。歌詞は「会報」一〇号掲載のもので、八番まであるが省略した。

昭和8年

1933

中36回

学芸冊子「栄丘」創刊。〝葉隠校長〟に生徒職員戸惑う。

学友会文芸部が新たな冊子「栄丘」を七月に創刊した。

文芸部からは学友会機関誌「会報」が刊行されているが、それが近年部報本位となり、文芸欄が少ないという不満の声があった。実際、一九三〇年の二五号から一九三三年の二八号までの「会報」は部活動の記録がほとんどで、学校全体の記事や、生徒の文芸原稿が少ない。そこで「会報」とは別に、生徒や教員の原稿を中心として、学芸冊子「栄丘」が刊行されたのである。

初め「栄丘」は二つ折りB5判八ページの冊子で、年間四回の刊行が目指された。しかし六号が一九三四年十二月に発行された後は、七、八号の発行時期は不明。一九三六年の九号から、A5判の製本雑誌となり、年二回のペースになった。一九四一年に廃刊になったというが、一九三九年の一五号までが現存する。

短歌や俳句、詩文、紀行文の掲載や、生徒に呼びかける教員、生徒の原稿に学芸冊子の面目がうかがえるが、それだけでなく、行事等に言及した文章も随所に散見するので、学校の記録としても貴重である。

＊

岩泉校長が退職した後をうけて、四月に第一〇代校長大谷徳馬氏が就任した。

大谷校長は歴代校長の中では異色の存在である。強烈な信念の持ち主で、山鹿素行や葉隠思想の影響を受けていたと言われる。

九月の「乃木会」と「南洲翁を偲ぶ会」はそれぞれ乃木希典と西郷隆盛の命日に因んで講堂で開かれた（西郷の命日は九月二十四日）もので、前者は生徒による乃木研究の発表や乃木の詩を朗吟したり、校長自らが「山鹿学と乃木大将」と題する講演を

4・1（土）入学式
6（木）第一〇代校長に大谷徳馬氏就任
5・15（月）「会報」二八号発行
7・18（火）学芸冊子「栄丘」創刊
21（金）登山部常念岳へ
22（土）水泳部房総岩井へ
8・26（土）同窓会会則改正
9・13（水）乃木会開催
14（木）下位春吉氏、ファッショ運動について講演
19（火）武富海軍大佐講演
25（月）南洲翁を偲ぶ会開催
10・16（月）神嘗祭につき遙拝式
11・4（土）「栄丘」二号発行
5（日）大運動会
12（日）県下柔剣道大会
29（水）登校停止の生徒、自殺未遂事件
12・8（金）三年、父兄会

「栄丘」創刊号

日本▶ヨーヨー大流行。小林多喜二、拷問死。佐野学、鍋山貞親、獄中転向声明。日本、綿布輸出世界１位となる。
世界▶ドイツ、ヒトラー政権成立。アメリカ、ニューディール政策開始。禁酒法解除。

行った。南洲翁の会は一年生が担当したというが、これらは校長の熱心な働きかけで実施されたと思われる。生徒の反響はどうであったかは不明だが、いずれも実施の記録があるのはこの年だけである。

＊

大谷校長はまた、九月の生徒係教員の会議で、団体訓練の内容を改めることを提案している。その具体的内容は不明だが、概して大谷校長は自らの思想信念をもとにして、精神面だけでなく、行動面でも積極的に生徒に働きかけた。十一月の思想問題講習会の開催に見られるように、学生の思想動向への対応も強化されてきた年でもあり、大谷校長は「栄丘」誌上でも陽明学的な知行合一の教えを展開するなどして、生徒を教化しようとしたのである。それは前任の岩泉校長とは対照的な姿勢で、生徒は勿論、職員にも戸惑いが見られた。

生徒の校長への不満は十一月二十九日の事件をきっかけに、爆発しようとした。

この日、四年生が自殺未遂を図ったのである。動機は、九月から十一月までの授業料三か月分を滞納したところ、大谷校長から突然登校停止を申し渡され、しかもその旨を記した文書が校庭の掲示板に張られたのである。これに悲観した生徒は、自宅で首を吊ろうとしたが、家人に発見され一命はとりとめた。以上は当時の新聞報道によるものだが、翌年一月二十日、県学務部長あてに提出された校長の報告書には、自殺未遂の事実はないと記されている。だが、校長の措置を苛酷とした川中生の中に、校長排斥のストライキを起こそうとする動きが出た。ストライキは、同窓会幹部の説得もありこの年は回避されたが、「規定にしたがったまで」とする校長に対し、県当局は、授業料滞納者に登校停止を命じた例はなく、さらにこれを掲示するのは「非常識」と大谷校長を批判した。

＊

この年の五年生の進路希望調査の結果が残されている。明治時代に比べると進学志向は大幅に上昇した。戦争が本格化していないこともあって、軍関係への進学志望者数はまだ少ない。

停學處分に悲觀
少年死を圖る
授業料滯納に苛酷な掲示
川越中學生徒不穩
反動が恐ろしい
先輩憤慨・校長を非難
非常識なやり方
掲示するなど
親は侮ろうとも
教育はしたい

生徒の自殺未遂事件を報じる「読売新聞(埼玉版)」(1933年12月２日)

9(土)教練査閲
21(木)文部省埼玉県共催の思想問題講習会に校長参加(～24日)
2月
北満州の兵士へ慰問文を送る[※1]
3・6(火)第三二回卒業式
17(土)三年、以下終業式

※1 五年生が慰問文を書き送ったが、ハルビンを過ぎて自動車で輸送中に行方不明となってしまったという。

1933年
5年生進路希望調査

家　業	17
就　職	18
進　学	79
〔進学の内訳〕	
高等学校	9
大学予科	12
高等専門学校	26
師範学校	17
軍関係	9
芸術関係	2
未　定	4

昭和9年

1934

中37回

ラッパの時報が廃止された。五年生、校長排斥のスト敢行。

一九〇二（明治三五）年以来、川中では授業の合図にラッパが使われていた。中庭に小使さんが出て吹き鳴らすのだが、一年生などは勇ましいラッパの合図に驚いた。

それがこの年の十月をもって廃止され、サイレンによる時報にかわった。最後のラッパ吹きは吉野覚治さんという小使さんで、一九二四（大正一三）年に着任以来吹き続けた。ラッパの響きは日常生活の一部として多くの卒業生の耳に残っている。

前年に着任した大谷校長への不満は、ついにこの年、五年生のストライキとなって爆発した。

具体的なきっかけは定かでないが、十二月十九日の朝、多数の五年生が三年の一教室に寝具や食料を搬入し、出入り口の戸に五寸釘を打って中にたてこもったのである。教室には「聲明！　校長排斥理由」と書かれた巻紙を壁に張り、校長解任要求のためのストであることを明らかにした。排斥理由として一八か条があげられ、その中には前年の生徒停学処分の件も入っている。

夜になり同志会会長だった安部達人（中10）が来校、縄梯子を伝って入室、スト解除の説得にあたった。生徒は解決を安部に任せ、ストを解除して教室を出た。

事件後、職員会議で「生徒盟休事件」として、参加者の処罰をめぐる議論がされた。首謀者の調査も行われたが、校長は「処罰は一切しない」という方針を示した。

安部がどのような動きをしたのか分からない。しかし大谷校長は翌年五月、突然退職したのである。

実業コースが設置された

一九三一（昭和七）年の県令二三号によ

教室にたてこもる生徒。壁に「聲明」文のはり紙が見える

4・4（水）午前入学式　午後始業式
10（火）生徒週番制度実施[※1]
27（金）靖国神社臨時大祭につき休業
30（月）五年、関西方面へ修学旅行[※2]
5・9（水）五年、戦役記念連合演習に出発
22（火）講堂にて参謀本部将官講演
28（月）創立三十五周年記念祝賀式
6・4（月）卒業生鈴木聞多来校、講話
5（火）故東郷元帥国葬日で学校長訓話
7・4（水）千葉県長生中学校教諭来校、四年一種（実業科）視察
9・1（土）商業科演習として購買部新設
19（水）満州事変三周年記念講演
陸軍歩兵少将森五六氏
24（月）川越中学校陸上競技倶楽部主催[※3]
県下男子陸上競技大会開催

日本▶室戸台風で、死者行方不明3,036人。初の職業野球チーム巨人軍誕生。丹那トンネル開通。
世界▶ソ連、国際連盟に加盟。ヒトラー、総統に就任。中国の紅軍主力、瑞金を放棄、長征へ出発。

って、四、五年次にそれぞれ一種（実業コース）と二種（進学コース）課程を設けることになり、それがこの年の四年生から実施された。一種課程はさらに農業科と商業科に分かれ、それぞれ実業科目として「農業」「商業」の時間が三時間おかれた。

農業科の実習地は旧寄宿舎北寮跡地一反（約一〇㌃）と、入間郡農会試験栽培地の四反の畑と一五坪の温室だった。また商業科の実習として購買部が設置され、九月から、始業三十分前と昼休みに商業科の生徒が学用品や運動靴、帽子、校章など約三〇品目の販売にあたった。

なお生徒数一三九名中、一種は一一名。その内、農業は三名、商業は八名だった。

幻におわったプール建設

開校三十五周年を迎え、五月二十八日に記念祝賀式が行われた。

祝賀行事終了後に同窓会は総会を開き、皇太子降誕奉祝事業としての大正元年大本営駐輦（ちゅうれん）記念碑建立と、三十五周年記念事業としてのプール建設を決めた。記念碑は岩沢新平（中1）の奔走により、題字を時の首相兼文相斎藤実（まこと）氏に依頼し、翌年二月に建てられた。一方プールは、二五㍍の七コース、工事予算は六〇〇〇円。一九三六年夏に完成予定とまで決められた。しかしその後の社会情勢等の事情により着工されないまま時が過ぎ、プール建設は幻となった。

大谷校長お別れの言葉

先生のご在任は昭和八年四月から十年五月まで、二年余の短い間でしたが、ご出身が佐賀県で葉隠の思想が高く、朝礼や四大節の訓話、校友会報などの寄稿文にいつも一貫した強い信念があふれて先生の強い心に感銘しておりました。たまたま校内の或事件の為か、学年途中で辞任されることになりました。今日は校長先生とのお別れということで、全校生徒が運動場の朝礼台の前に集合して、先生からのお別れの言葉を待っていました。朝礼台にあがられた先生に対して敬礼の号令の後、先生はゆっくりと「皆さん、今日はお別れに来ました。大変お世話になりました。さようなら」と一言のべ、一礼して壇をおりてしまいました。一同あっけにとられてしばらくの間呆然と立っていました。

（真田益次・中35）

10・1（月）時報のラッパ廃止
13（土）関西地方風水害生徒有志義捐金を東京日日新聞社へ依託
28（日）第三五回陸上運動会
11・4（日）朝香宮殿下来校につき、全校生徒閲兵分列
5（月）時報に電気サイレンを使用開始
17（土）高崎にて御親閲拝受、五年参加
12・8（土）教練査閲
19（水）五年、ストライキ敢行
21（金）四年以下、二学期終業式
23（日）五年、生徒父兄会
24（月）五年、二学期終業式
26（水）ストライキ生徒の処罰検討
1・14（月）大阪ハーモニカ倶楽部員指揮者吉岡武雄氏の演奏
22（火）五年、実包射撃（山根村射場）
2・9（土）競技部主催長距離競走※4
11（月）大正元年行在所記念碑建碑式
3・5（火）第三三回卒業式
「学友会報」三〇号発行

※1 職務内容は不明だが、朝礼時には学級の先頭になった。
※2 修学旅行が各学年とも復活した。また、野外教練が各学年とも年二〜三回実施されている。
※3 県下の青年団、中学校などの参加申込者五〇〇名に及び、当日東武、西武両線は割引乗車券を発行した。
※4 参加者三四名、正門から小畔川寺山堤までを往復した。

昭和10年

1935

中38回

校舎内は上履きを使用。飯田先生頌徳碑が建立された。

開校以来、川中では校舎内でも下履きのままだったが、校舎の汚れと老朽化から上履き使用が検討され、この年四月から通学靴、上靴(白)、下靴(黒)の区別をつけることになった。そのため靴置場を設置、登校後ここで通学靴から上靴に履き替えるものとした。ゴム長の場合はよく拭ってそのまま教室に入ってもよかった。下校時は下靴、上靴とも持ち帰りが原則だった。

五月に大谷校長が突然退職した。二年前の生徒の自殺未遂事件での各方面からの批判や、前年のストライキ事件が影響しているのは間違いない。後任には松山中学から木原元三氏が着任した。

木原校長に代わると上級学校進学のための模擬試験が復活し、十一月と、一月にそれぞれ数英国の三科目で行われた。前年のストライキでの大谷校長排斥理由の一つに、模擬試験軽視があった。

五月と六月に二人の現職の教諭が相次いで亡くなった。国語の飯田亮先生と下田保平先生である。飯田先生といえば、野球部の発展、また下田先生は庭球部および、商業科の購買部設置に尽力された。葬儀にはそれぞれ全校生徒が参列した。

なお飯田先生については、在学中に特に先生の知遇を得た卒業生(中21)たちにより頌徳碑建立の議が起こされ、多数の賛同を得て、本年十月にはその除幕式が行われた。先生のレリーフをはめ込んだ碑は野球部グランドを見渡せる場所にあり、今も日夜野球部員の練習を見守っている。

五年の軍事演習強化

中国をめぐる状況が次第に悪化しファシズムの足音が次第に高まる中、軍事関係の

4・4(木)午前入学式　午後始業式
6(土)品川儀助氏の講演
13(土)本年より上靴下靴の区別制実施
5・4(土)四年、大島方面へ修学旅行
6(月)故飯田先生告別式に全校生参列
一年、野外教練
13(月)大谷徳馬校長、依願退職
第一一代校長木原元三氏就任
26(日)楠公六百年祭講演会開催
6・9(日)故下田先生告別式に全校生参列
16(日)五年、福原方面にて夜間演習
9・18(水)満州事変記念日
歩兵大佐稲見赴城氏の講演
24(火)鈴木聞多氏、渡欧競技の講演
10・6(日)故飯田先生頌徳碑除幕式
11(金)国防週間記念連合演習に参加
12(土)第一一回本校弁論大会
14(月)爆弾投下避難演習
16(水)日露講和克復詔勅奉読式後、
井上少佐講演「国是と国防」

校庭北隅に建つ飯田亮先生頌徳碑

日本▶天皇機関説事件で、美濃部達吉、貴族院議員を辞職。芥川賞、直木賞制定。小作争議件数、戦前最高。
世界▶ドイツ、再軍備宣言。中国共産党、八・一宣言で抗日統一戦線を提唱。デュポン社、ナイロンを開発。

行事が次第に増えた。野外教練の回数は従来とあまり変わらないが、五年生は中野電信隊で宿営訓練が行われた。翌年からは習志野に場所を移す。五年生は中学時代に軍隊生活そのものを経験することになった。

十二月十六、十七日には第一回の県下男子中等学校並びに入間、比企、秩父三郡の青年学校生徒の連合演習が行われた。以後毎年の行事となる。本年は川越付近を中心にした演習で、七〇〇〇名が参加、川中からは四、五年生が参加した。十七日の演習後、川越競馬場（一九三二～三七年、新宿（あらじゅく）にあった）で朝香宮による視閲を受けた。これには川中生は全員が参加した。

このほか、十一月の運動会では五年生が日頃の軍事練習の成果を擬戦として披露。校庭に煙幕を張り、二手に分かれて小銃、機関銃の射撃、銃剣をきらめかせて突撃などの白兵戦を展開した。五年生が残した卒業記念品は三八式歩兵銃二挺だった。

なお、これまで教練での脚絆は白だったが、この年の一年生からカーキ色になった。

運動会での擬戦の様子

飯田先生のこと

入学して二か月ほどの時、飯田先生が国語の授業で「夜のなごり」を問題にされた。調べた辞書を言わせ、「名・残り」でなく「波・残り」が本義であるから、語源に及ぶ辞書がよい、と説明された。

辞書以上の力のある先生――農村の小学校六年卒だけの私には強烈な印象であった。

高学年になって、太平記の講義（教科書に大塔宮熊野落の一部が載っていた）「道行文」の折も、七五調を生かす朗読、詳説を加えた上、「韻を踏んでいる箇所」を発見させたのも、その声調の巧みさ、さがさせようとする熱意と共に忘れられない。

飯田亮先生と云えば、野球部と結びつくのは勿論だが、雅号は胡春。薩摩琵琶の作詞者としての実績を知る人は少ない。遺著は仮綴りで未完のまま、六〇曲に近いという。惜しい限りである。

（仲　栄・中30）

18(金)五年、中野電信隊の営内宿泊
21(月)木原校長、報徳週間に関し訓話
25(金)四年一種農業科生、堀兼村落合忠治(中27)の農園見学
28(月)在ブラジルの埼玉県人子弟へ旧教科書を多数寄贈
11・3(日)第三六回大運動会
6(水)平野初江氏講演「忠孝」
11(月)木原校長、思想講習会に参加
16(土)同窓会に川越中学校奨学会創設
17(日)県体育連盟主催武道大会で剣道部二部、柔道部一部優勝
18(月)上級学校入学模擬試験(英数国)
国旗掲揚場設置※2
12・4(水)近衛歩兵第四連隊長の教練査閲
14(土)「栄丘」八号発行
16(月)県下男子中等学校生徒並に青年学校生徒の連合演習行はる
17(火)全校生徒川越競馬場に於て朝香宮の視閲を受く
2・10(月)五年、野外教練(測図演習)
15(土)講堂で陸軍関係の映画を見学
3・7(土)第三四回卒業式
「学友会報」三一号発行

※1 鈴木はベルリンで開かれた五か国対抗陸上大会一〇〇㍍で優勝していた。
※2 前年の高崎での昭和天皇の御親閲と大正元年の大正天皇の本校行幸を記念してのものである。

昭和11年

1936

中39回

月二回の国旗掲揚。学校教育のファシズム色強まる。

前年の天皇機関説事件をきっかけとした政府による国体明徴声明は、皇国史観に基づくイデオロギーだけを正統としたものであった。これを受けて、文部省は一九三五年十一月に教学刷新評議会を設置。評議会は日本教学の基本方針を調査、審議し、三六年に国体観念、日本精神を教育の根本とするべき旨の答申を出した。翌三七年五月、文部省は「国体の本義」を刊行し、これを全国の学校、社会教化団体に配布する。

こうした時代の動きの影響は、学校現場にもはっきりと見ることができる。

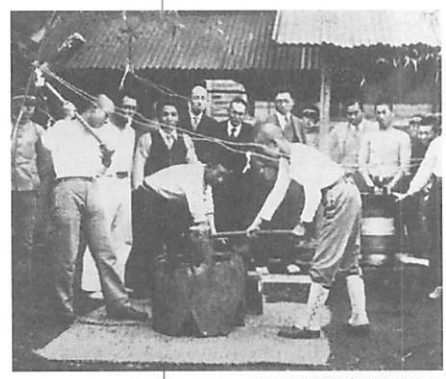
前年に設置された国旗掲揚場で、毎月一日と十五日、および何かの行事のたびに国旗掲揚が行われた。宮城遙拝や神社参拝も盛んに行われる。紀元節儀式で校長は、神武天皇の建国神話を事実として恭しく語り、明治憲法発布の記念日に因んで、天皇親政による立憲政治を説く。

この年から五月に農業科の実習地三畝を神饌田としてこれに種を蒔き、秋に一俵の糯米（もちごめ）を収穫。十一月二十一日に各組組長が出て餅搗（もちつ）きをして、氷川神社、三芳野神社、御嶽神社および校内道場の武神に献じた。

軍事関係では、五年生は九月十九日から中野電信隊兵舎で宿営訓練が行われたが、この年は更に千葉の習志野の原野での野営及び夜間演習が追加された。習志野は明治天皇が近衛兵を率いて露営したという由緒があり、長く陸軍操練場と定められていた。

十一月の「克己行軍」とは、国民精神作興詔書奉読式の後、困苦欠乏に耐え、質実剛健の気風を養うべく、寺山から的場方面を巡る一日行軍を全校で実施したものである。またこの日をはさんで三日間、全員日の丸弁当とし、その節約の一部を在満将兵

4・4(土)国旗掲揚　始業式　入学式
　　褒賞授与　奨学会表彰
15(水)国旗掲揚　皇居遙拝
20(月)入間川より砂利採取(四、五年)
21(火)砂利採取(二、三年)
27(月)靖国神社祭につき学校長講話
5・1(金)国旗掲揚　宮城遙拝　砂利採取
4(月)五年、修学旅行出発
18(月)神饌田播種式　模擬試験
27(水)海軍記念日につき学校長講話
28(木)国旗掲揚　第三七回開校記念式
30(土)一年、父兄会　海軍映画会を開く
6・2(火)日本興国同盟講演
　　講師、慶大教授　柴田一能氏
16(火)模擬試験(〜18日)
7・18(土)終業式
20(月)成績通知表　「栄丘」九号発行



神饌米餅搗きの様子

日本▶2・26事件。日独防共協定調印。阿部定事件。中谷宇吉郎、人工雪の結晶をつくる。
世界▶スペイン内戦始まる。ベルリンオリンピック開催。英王エドワード8世、結婚のために退位。

の慰問と教化事業助成の資金にあてた。

そしてこの年の動きで注目すべきは、勤労奉仕のはしりといえるものが始まったことである。すでに一九三一年から作業教育として、一年生で一単位の作業科の授業が行われているが、三六年の教育課程表を見ると、作業科の授業は一、二年生で各二時間、三年以上でも各一時間実施になっている。四月の「入間川より砂利採取」はこの時間をあてたものかも知れない。このほか、夏休みに各学級二回ずつの作業日が設けられた。内容は不明だが、「学友会報」三二号には、学校でのコンクリート作業をしている写真が掲載されている。

また、十月に「校外修養団」が組織された。これは生徒を居住する地域で一六の分団に編成し、生徒相互の自治的修養や、社会奉仕と公民的訓練を目指したものである。

時事的な問題を背景とした講演が多い中、十月の鈴木聞多(中29)の講演は、八月に開かれたベルリンオリンピックから帰国してのものである。

教練さぼりの言い訳

三年生の時だと思います。当時は木原元三先生が校長先生でした。この先生は祝日の時に長い長い講話をする人で、わがままな私はがまんが出来ず欠席することにしました。昔は祝日にはそれが日曜でも登校しなければなりませんでした。この不合理にもがまんがならなかったのです。それから学校教練(軍隊訓練)も気に入らない時は休むことにしたので、遂に一年間四四日休んだのです。

組の係の先生は橋本先生で、トンカチというあだなでした。その先生に皆の前で、「お前は一年間に四四日も休んでいる。出欠常ならずで退学させることもあるぞ。何故休んだか」とおこられました。

そこで「私はけがをして(頭の傷を示しながら)から、時々頭の上を川が流れているような気がして、奇妙な気分になり休みました」と言い訳をしました。

橋本先生は何とも言うことが出来ず、無罪放免となりました。

今は式日登校も学校教練もなくて幸せですね。私もわがままだったかも知れないけれど、馬鹿馬鹿しいことが当たり前で行われていた時代でした。

(荒居茂夫・中36)

9・1(火)国旗掲揚　始業式　奨学会表彰
5(土)夏季課題成績品展覧会
11(金)山田八郎氏講演
18(金)満州事変記念日
日蘇通信社近藤義晴氏講演
「日蘇国交の緊迫」
19(土)五年、兵営宿泊(〜22日)
10・1(木)国旗掲揚　校外修養団結成式
15(木)氷川神社例祭、四年生代表参拝
鈴木聞多氏講演
16(金)国旗掲揚　伊勢皇大神宮遙拝
神嘗祭御儀につき岡田教諭講話
21(水)全関東中等学校雄弁大会開催
25(日)第三七回運動会
11・3(火)国旗掲揚　明治節祝賀式
10(火)国民精神作興詔書奉読式
克己行軍
13(金)五年商業科、証券取引所等見学
16(月)四、五年連合演習出発(〜17日)
21(土)神饌田糯米搗き　庭球大会
25(水)教練査閲　御座所開扉
26(木)卒業生石川常長(中12)講話
「満鉄事業の概況と満州の現状」
27(金)四、五年、模擬試験
12・18(金)五年、松山民間射場で実包射撃
24(木)終業式　「栄丘」一〇号発行
1・30(土)予餞会
3・3(水)第三五回卒業式
「学友会報」三二号発行

昭和12年

1937

中40回

日中戦争勃発。川中にも国民精神総動員運動の波が――。

一九三七年七月七日の盧溝橋事件をきっかけとして、日本は中国と全面戦争に入った。政府はこれを国家の総力をあげての戦争ととらえ、九月十一日に日比谷公会堂で政府主催の演説会を開いた。これ以降、挙国一致、尽忠報国、堅忍持久のスローガンを掲げた国民精神総動員運動が展開される。

この年に川中で実施された国民精神総動員運動を整理すると、次の通りである。

まず九月十五日、恤兵献金箱なるものが校舎内に設置され、一七円四六銭集まり、翌年二月に埼玉県将兵援護会へ寄付された。

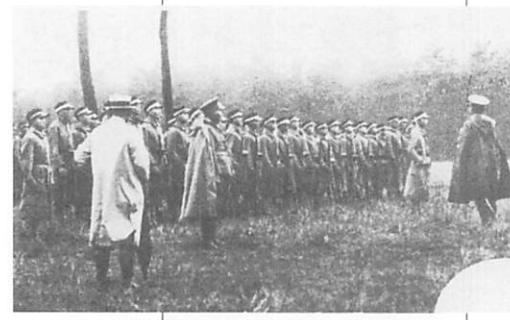
ついで二十二日、川越市内の中等学校六校（川中、女学校、農蚕、工業、商業、盲唖学校）の生徒全員の参加で、国威宣揚祈願祭と、国民精神昂揚式がともに川中校庭で挙行された。昂揚式では六校生徒総代として本校五年の柏木直（中36）が宣誓した。

十月十三日は戊申詔書渙発記念の日で、以後一週間は国民精神総動員強調週間とされた。この期間中、生徒は校外修養団各分団に分れて、出征将兵の家庭訪問、慰問、その他勤労奉仕（使い、手紙代書、家事手伝い等）、神社清掃、戦死者・戦傷者の遺家族の見舞等を実践した。

十月二十五日の運動会では来賓・父兄席の小屋掛けやメダル、花火、人夫賃等の経費を節約して七〇円捻出。当時、全国中等学校六五〇校の職員生徒四〇万人の拠金で、陸海軍に戦闘機を一機ずつ献納しようという運動があり、川中でも職員は一円、生徒は五〇銭ずつ拠出して総額三七三円集め、運動会で捻出された七〇円とあわせて、翌年、中学校長会へ送られた。

十一月三日の明治節拝賀式の後、第六回日本体操祭に合流。明治神宮、氷川神社を

4・5（月）入学式　前学年優等賞　向上賞　皆勤賞　奨学会表彰
5・5（水）五年、修学旅行出発
27（木）海軍記念日　全校マラソン競走
28（金）開校記念日　卒業生砲兵等講演
6・18（金）英語模擬試験施行（22日国漢）
7・11（日）公徳週間につき学校長訓話
15（木）海軍映画見学　倉永中佐来校
16（金）在満支将兵慰問金、朝日新聞社へ寄託
22（木）水泳部、岩井町へ（～8／2）
9・5（日）県下男子中等学校水上競技大会
15（水）防空演習　恤兵献金箱設置
22（水）川越市内男女中等学校国威宣揚祈願祭並びに六校合同国民精神昂揚式挙行
10・4（月）五年、習志野で野営演習、四年



習志野の原野での演習

日本▶政友会浜田国松、議会で軍部を相手に腹切り問答。文化勲章の授与始まる。永井荷風『墨東綺譚』。
世界▶ドイツ、ゲルニカ空襲。中国で抗日民族統一戦線成立。イタリア、国際連盟から脱退。

遙拝して出征兵士の武運長久を祈願。ラジオ体操を実施後、分列式を行い、天皇陛下万歳を唱えた。

十一月十日から国民精神作興週間。まず十日に作興詔書奉読。十二日と十六日は校内で勤労作業。十三日は祈願祭で氷川神社に全校で参拝。十四日は日曜日で、出征将兵の家庭を校外修養団の各分団で訪問した。

十二月十一日の夕刊で、日本軍が中国の南京を占領したと知らされると（実際には占領は十三日）、翌日には市内の小中学校連合で神社参拝し、市内を祝勝行進した。

年が明けて二月一日から、生徒の体位向上のために栄養剤としての肝油ドロップの服用開始。原料は鯨油である。

二月十一日からの一週間は、国民精神総動員第二回強調週間。

十一日の紀元節には、市内男女中等学校主催の建国祭並びに国民精神昂揚式を川越工業学校校庭にて実施。橿原神宮と宮城を遙拝して国歌奉唱。川西実三知事が告辞で、近衛内閣の「国民政府を相手にせず」声明を説明。愛国行進曲を合唱して閉式。

最終日の十七日は各自で、毛織物屑や金物屑を集めた。

「〇〇週間」と銘打った全校の取り組み行事が二か月に一回の割合で開かれる。更に戦争に関する講演の他、映画会も行われるようになった。教員の出征もあり、その告別式が行われた。儀式の時の講話を含めれば、一か月に一回は、戦争や国体論、総動員体制について話を聞かされることになる。こうした中で、陸軍士官学校を中心とした軍関係上級学校への進学者は急速に増えていった。

軍関係学校進学者数

1937年	3人
38年	9人
39年	11人
41年	12人
42年	14人

第一回二万メートルマラソン実施

海軍記念日の五月二十七日、第一回の全校一万㍍マラソン大会が実施された。コースは学校～山田～落合橋～二本松を通って、桶川県道から学校に戻る。六五七名が参加し、一位のタイムは四四分三〇秒。担当教員は、記録の低調を嘆いた。このマラソン大会は以後、海軍記念日か、開校記念日に行われる行事となる。

以下、講演　東京朝日永田正義記者「北支戦の兵士の労苦」
13(水)国民精神総動員強調週間
19(火)模擬試験（～21日）
20(水)大石懿星氏講演
23(土)浅野八郎教諭出征告別式
25(月)第三八回運動会
26(火)県主催国民精神文化長期講習会に七名の職員参加（～11／17）
11・3(水)明治節　第六回日本体操祭
7(日)全校行軍（坂戸方面）
10(水)関根正司書記の出征告別式
国民精神作興週間（～16日）
15(月)陸士合格者発表（七名合格）
16(火)四、五年、県下中等学校青年学校連合演習参加（～17日）
21(日)五年丙組組長多摩御陵参拝
28(日)教練査閲
12・1(水)国民精神総動員防火デー
5(日)時局映画見学（演芸館）
12(日)南京占領を祝し、市内小中学校連合で神社参拝、市内祝勝行進
1・29(土)予餞会
2・1(火)肝油の服用開始
11(金)国民精神総動員第二回強調週間
3・7(月)第三六回卒業式
「学友会報」三三号発行
11(金)東京飛行学校長陸軍少将の講演「日露戦役を回顧して所感を述ぶ」

昭和13年

1938

中41回

引き続き総動員運動を展開。夏休みに勤労作業を実施。

日中戦争二年目に入る。一九三八年二月発刊の「学友会報」三三号は、まず、「事変」にあたっての国民の奮起を促した三七年九月の帝国議会開院式での勅語と内閣告諭を載せ、ついで、出征した卒業生の中の戦死者三名の写真、そして木原校長の「聖戦第二年」という文を掲載する。内容は「支那事変」における日本の正当性、蒋政権の暴逆さを説き、日本が東西文明を融合して世紀の新文化を建設し、万邦協和と世界恒久の平和を確保……とある。

そのような中、四月に四、五年生は関西修学旅行に出発した。五年生の修学旅行はこの年が最後となる。

国民精神総動員運動は前年に続いて実施された。

四月十七日からは国民精神総動員健康週間。まず十七日に健康祈願で氷川神社に全校参拝。十八日は芳野村に行軍。二十日が栄養改善日で校長講話。二十一日は回虫駆除のため全校で海人草服用、全校をフォルマリン消毒、痰つぼ手入れ。

二十五日からの郵券報国運動は大日本皇道会主催のもので、川中だけで古切手四万二三〇〇枚を寄付。

六月の国民精神総動員貯蓄報国強調週間にあたり、全校生徒が月一〇銭の郵便貯金を開始した。職員は従来の義務貯金のほかに別の報国貯金も開始した。

そして七月七日の「支那事変」勃発一周年にあたり、氷川神社と招魂社に全校で正式参拝したほか、一人一品の古金物拠出運動は金額一三円二七銭になった。また〝制空鉛筆〟一一八〇本を注文する一方、慰問袋を八〇個作成して慰問文を入れ、市兵事課を経て陸軍恤兵部へ送られた。

4・5(火)四、五年、関西修学旅行へ出発
18(月)ロタ島小学校訓導小林雷忠先生の南洋談聴講
5・17(火)国民精神総動員健康週間
21(土)徐州陥落につき学校長訓話
25(水)郵券報国運動に参加
26(木)海軍映画上映
27(金)海軍記念日講話長谷川貞平先生「日本海海戦を回顧し英米蘇の現状及び国民の覚悟を希望す」
28(土)開校記念日第二回マラソン大会
6・5(日)宮内省下賜の「椎」「樫」植樹
16(木)国防婦人会講演会に五年参加
17(金)海軍機関少佐上田俊次氏講演
21(火)国民精神総動員貯蓄報国強調週間
8・14(日)全校夜行軍(松山方面)
9・10(土)五年、習志野宿営演習(〜12日)
12(月)防空演習(〜16日)

川越市運動場での勤労作業の様子

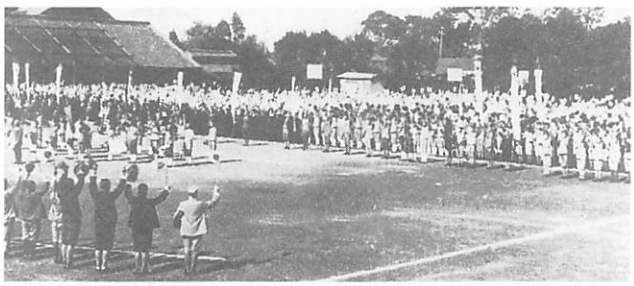
日本▶女優岡田嘉子、樺太からソ連に亡命。オリンピック東京大会中止が決定。映画「愛染かつら」ヒット。
世界▶ミュンヘン会談。ドイツ、オーストリアを併合。ラジオドラマ「火星人の襲来」で全米が大パニック。

十月の銃後後援強化週間では毎日四時限終了後に戦死者に黙禱を捧げた。十一日には生徒の近親、知己または卒業生の出征将兵への慰問文六七九通を発送。

十一月三日の運動会は戦死者の遺族を迎え、費用を六〇円節約して同窓生の戦死者への儀礼費用にあてることにした。

十日からの国民精神作興週間は、前年とは違って指扇村秋葉神社に行軍して祈願参拝、日の丸弁当を持参してその節約分を恤兵献金した。

そして十二月の埼玉県経済戦強調週間では十六日が儀礼刷新、十七日が家庭経済、十八日が消費節約、十九日利用更生、二十日が貯金報国、二十一日が公債買入れの日とされた。


川中校庭で開かれた市内中等学校合同の武漢三鎮攻略祝賀式

夏季休暇は七月二十一日から八月三十一日までだが、この期間の勤労作業が大幅に増えた。まず学級単位では、学校での作業が一～三年それぞれ三回ずつ実施された。校外での集団勤労作業は高萩飛行場や大宮運動場、川越市運動場の造営であった。また、校外修養団の分団ごとに心身鍛練のための合宿や勤労作業が実施された。期間は二～五日間。

県下グライダー連盟に参加

戦場での戦闘飛行機の重要性が高まる中、その操縦技術の早期育成が図られた。埼玉県では十一月二十六日に秋ヶ瀬飛行場にて県下中等学校グライダー連盟の発会式が行われた。連盟に加入した川中からは校長をはじめ生徒二一名が参加。練習希望者は四九名にのぼった。十二月四日には二等飛行士の高橋金三郎氏が来校して、グライダーについての講話を行った。

＊

庭球部が九月に行われた体育連盟主催の県下庭球大会で、栗原英夫・加藤清（中39）組が決勝で松中を破り、ついに念願の県初優勝を果した。

25(日)県下中等学校陸上競技大会
27(火)文部省推奨ドイツ映画見学「スパイ戦線を衝く」
10・4(火)「傷痍軍人並ニ軍人遺家族ニ賜ハリタル勅語」につき校長講話
5(水)銃後後援強化週間
13(木)電信隊第一連隊長川村赳大佐講話「ソ満国境について」
19(水)靖国神社臨時大祭にあたり講堂にて挙行
20(木)国策新興製品展、代用品廃品更正品輸出品展覧会見学
23(日)県下武道大会で柔道部優勝
28(金)武漢三鎮攻略祝賀式、市内行進
11・3(木)明治節　第三九回運動会
4(金)陸士三名合格
10(木)国民精神作興週間
15(火)防火実験見学　焼夷弾の消火法
16(水)四、五年、県下連合演習に参加
20(日)五年丙組正副組長多摩御陵参拝
26(土)焼夷ガス弾の防火訓練（3日間）
県下グライダー連盟発会式
29(火)教練査閲
12・15(木)時局認識の日
埼玉県経済戦強調週間校長訓話
19(月)海軍一等航空兵曹野原鶴蔵氏の南京渡洋爆撃実戦談
1・28(土)予餞会
3・6(月)第三七回卒業式

昭和14年

1939

中42回

「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」渙発。校舎内に忠霊室を設置。

国家の総力をあげての戦争にもかかわらず打開の道は見出せなかった。川中出身者でも、戦争が始まってから三八年十二月までで一三名の戦死者を数えた。方向を失った近衛内閣は三九年一月に総辞職する。そして支配層は新たな戦争体制を模索し始めた。その対象は「銃後」を守る国民、特に中学生以上の青少年である。

一九三九年五月二十二日、「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」が渙発された。この日は陸軍現役将校配属令十五周年にあたり、宮城前広場にて親閲が行われ、全国の学生生徒の代表三万五〇〇〇人が参加。川中からは校長他教諭二名と代表生徒一〇名が参加した。同時刻、川中の校庭には全校生徒が参集して宮城遙拝。氷川神社に参拝した。

この勅語は翌二十三日、学校にて奉読された。八月十六日には勅語の謄本を拝受し、二学期の始まる九月一日に拝受式が行われた。この日から毎月一日は「興亜奉公日」と定められ、国民に神社参拝、一汁一菜、禁酒禁煙、勤労奉仕が義務付けられた。この勅語には文部省の訓令による解説がある。学生生徒に対して、時局の要請にこたえて、勉学や修養だけでなく、「奉公ノ誠ヲ効スルノ覚悟」を固め、用意せよ、と説く。やがて始まる学徒勤労動員の権威付けだとも

青少年學徒ニ賜ハリタル勅語

國本ニ培ヒ國力ヲ養ヒ以テ國家隆昌ノ氣運ヲ永世ニ維持セムトスル任タル極メテ重ク道タル甚ダ遠シ而シテ其ノ任實ニ繫リテ汝等青少年學徒ノ雙肩ニ在リ汝等其レ氣節ヲ尚ビ廉恥ヲ重ンジ古今ノ史實ニ稽ヘ中外ノ事勢ニ鑒ミ其ノ思索ヲ精ニシ其ノ識見ヲ長ジ執ル所中ヲ失ハズ嚮フ所正ヲ謬ラズ各其ノ本分ヲ恪守シ文ヲ修メ武ヲ練リ質實剛健ノ氣風ヲ振勵シ以テ負荷ノ大任ヲ全クセムコトヲ期セヨ

昭和十四年五月二十二日

4・10(月)四年、関西修学旅行へ出発
5・1(月)五年、習志野廠営演習
6(土)古城嶽風氏講演ならびに朗吟
8(月)心身鍛練遠足(川越〜寄居)
20(土)東金子村茶摘勤労奉仕(8日間)
22(月)陸軍現役将校配属令公布十五周年、宮城前にて親閲
23(火)「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」奉読、謹話
25(木)寺西海軍中佐講演
27(土)海軍記念日　海軍大佐講演
一万メートルマラソン競走
6・10(土)映画「綴方教室」見学
22(木)六キロの団体無言行軍
28(水)陸海軍志願者模試
7・7(金)支那事変二周年、市内中等学校連合精神昂揚式、忠霊室鎮座祭
21(金)夏季鍛練期間開始
8・11(金)「栄丘」一五号発行

陸軍現役将校配属令15周年記念の親閲での分列式の様子。先頭左端が川中の校旗

日本▶ノモンハン事件。双葉山、連勝記録69でストップ。純国産機「ニッポン号」世界一周。
世界▶フランコ、スペイン内戦終了を宣言。第2次世界大戦始まる。映画「風と共に去りぬ」封切り。

言われる。

実際この年から、勤労奉仕が本格化する。五月二十日からの八日間、学年ごとに授業日に日を定めて、東金子村での茶摘みの勤労奉仕が行われた。

夏休みは川越の新宿付近の道路工事や秋ヶ瀬での作業（グライダー訓練場整備のためと思われる）。冬休みは二日間だけだが、集団勤労や砂運びの学校作業が行われた。

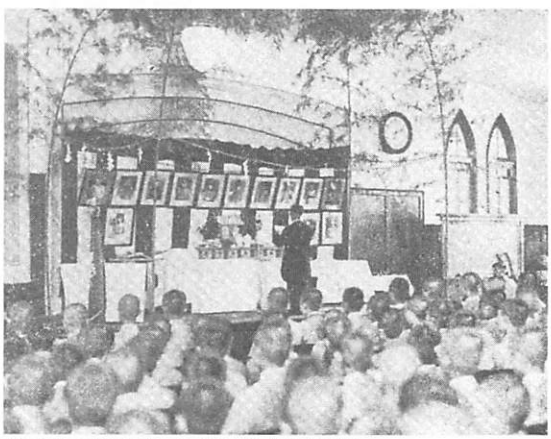
ところで、この年から夏休みが〝夏季鍛練期間〟、冬休みの勤労は〝冬季鍛練〟と称されるようになった。そもそも勤労奉仕は、労働力の不足を生徒を動員して補おうとする農林省や各省からの要請で始まったものであるが、一方で文部省は、勤労奉仕を集団勤労作業に組織して、学校を国体に基づく実践的精神教育を行う施設とすることを考えていた。「鍛練」という言葉には、その精神教育を狙う意図が込められている。

七月七日の「支那事変」二周年にあたり、大正天皇行在所の隣の部屋が忠霊室とされ、神棚を設けて戦死した川中卒業生一三名が祀られた。その鎮座祭はこの日、講堂で行われた。これ以後、戦死した卒業生は忠霊室に祀られた（鈴木聞多はこの直後の七月十日に中国で戦死、翌年祀られた）。

修学旅行については、この年から五年生では行かず、それに代わるように習志野廠舎演習が四日間にのびた。ただ、この時の五年生は四年生の時に関西に行っている。

この年も四年生が関西を旅行し、奈良では橿原神宮に立ち寄った。橿原神宮は翌年の紀元二六〇〇年記念事業として拡張工事を行っており、生徒一同、〝建国奉仕隊〟としてその土盛作業に参加した。

明けて一九四〇年は「紀元二六〇〇年」祝典儀式の宣伝で始まった。


戦死者13柱を祀った忠霊鎮座祭（講堂）

9・1（金）興亜奉公日
14（木）時局講演会　岡田、三上教諭
26（火）映画「空襲」見学
10・1（日）校外修養団行事実施
3（火）銃後後援強化週間
「軍人援護ニ関スル勅語」奉読式
7（土）所沢陸軍病院慰問（剣道部、庭球部）五年、実包射撃
28（土）慰問袋発送
11・3（金）明治節拝賀式　第四〇回運動会
10（金）国民精神作興詔書奉読式
14（火）「皇后ヨリ賜ハリタル令旨」奉読
16（木）県下中等青年学校連合演習
23（木）多摩御陵を生徒代表参拝
29（水）教練査閲
12・1（金）興亜奉公日　防火デー
5（火）海軍少佐講演　体力章検定会
11（月）誓詔祭　関根書記凱旋
16（土）映画「土と兵隊」見学
26（火）集団勤労（～27日）
1・1（月）紀元二六〇〇年新年拝賀式
27（土）予餞会
2・3（土）弁論部校内大会
12（月）「紀元二六〇〇年ニ賜ハリタル詔勅」奉読
16（金）秋山教諭凱旋
19（月）浅野八郎教諭凱旋
3・1（金）「学友会報」三五号発行
4（月）第三八回卒業式

昭和15年

1940

中43回

入学考査の学科試験を廃止。学校農場を開墾した。

上級学校志向の傾向は一九三〇年代になっても続き、中学校の受験競争も激しさを増していた。川中でも一九三九年の競争率は二倍を超えていた（83頁参照）。

そこで、一九四〇年度の入学者から定員が五〇名増えて二〇〇名になった。

それと同時にこの年から全国一斉に中学校の入学考査から学科試験が除かれ、小学校からの内申書、体力テスト、面接（口頭試問）の三つが選抜基準になった。激しい入学試験の準備は児童の心身に弊害を及ぼしていると、当局が考えたことによる。

入学考査は二日間にわたる。一日目は体力テストで、内容は一〇〇㍍走、ボール投げ、走幅跳び、懸垂、転回である。

二日目の口頭試問は三回に分けて行われた。質問内容は年度によって傾向が異なるが、例えば一九四三年の場合、第一室では「どういう人になって国のために尽くしたいか」といった皇国民としてのイデオロギー上の適格審査。第二室では大きなマレー半島の地図が吊してあり、「日本軍はどこに上陸して、どのように進軍したか」という、戦争をどれだけ把握しているかの質問。そして第三室では校長、教頭による人物考査で、出身地のことなどが聞かれた。

一九四五年には、次のような質問がなされたという。

一、神風特攻隊をどう思うか
一、B29と艦載機について知っていること
一、硫黄島について言いなさい
一、大東亜の資源について述べなさい

三つの選抜基準のうち、体力テストが合否の結果を左右するという噂もあった。それというのも、青少年学徒の体力増強を目指して、国が標準を定めた「体力章検定」

相撲部が明治神宮大会埼玉県予選で優勝して授与された軍配と賞状

4・4(木)入学式（一年生定員二〇〇名）
5・3(金)結核予防のため武具を日光消毒
4(土)全校ホルマリン消毒
7(火)五年、習志野廠営演習（～10日）
10(金)三年以下、修学旅行
15(水)鮫島海軍中佐講演
18(土)農業報国茶摘隊六〇名、高麗へ
6・12(水)一、二年、勤労報国隊出動
19(水)三年以上、勤労報国隊出動
7・7(日)陸軍参与官宮崎一氏講演
8(月)〝大楠公遺品宝物展〟拝観
16(火)映画「暁に祈る」見学
21(日)夏季鍛練期間開始
9・9(月)東亜同文書院学生講演
20(金)体力章検定会
21(土)ラジオで、五年、金井長四郎（中39）の「武蔵文化と川越」放送
28(土)秋ケ瀬での滑空訓練大会に参加
30(月)日独伊同盟に関する詔書奉読式
明治神宮埼玉県予選相撲部優勝

日本▶民政党斎藤隆夫、議会で軍部の日中戦争処理批判。大政翼賛会発会。東京に「贅沢は敵だ」の看板。
世界▶ドイツ軍、パリ入城。映画「チャップリンの独裁者」。フランスのラスコーで洞窟壁画発見される。

なるものが、前年の一九三九年から施行されていたからである。

左に示したのは検定の基準である。「手榴弾投」とはいかにも時局を映しているがもちろん本物ではなく、手榴弾の形をしたそれなりの重さのある物を投げた。「運搬」は俵を担いで五〇㍍走るのである。「一〇〇㍍」や「走幅跳」なら上級の基準をクリアする者もそれなりにいたが、六〇㌔の俵運搬となると、担ぎ上げるだけでも容易ではない。上級にパスする者はほとんどなく、せいぜい中級までだったという。

体力章検定は上級学校進学の条件になっているわけではないが、体力増強は国家的課題となっていたから、教員からは「とにかく合格するように」と言われた。

体力章検定基準

種目	初級	中級	上級
100m走	15秒	14秒	13秒
走幅跳	4 m	4.5m	5 m
手榴弾投	30m	35m	40m
運搬(50m)	40kg・15秒	50kg・15秒	60kg・15秒

勤労奉仕作業は一段と増えた。五月から六月にかけて、農業報国隊とか勤労報国隊が組織され、茶摘みや田植えの勤労作業に出動している。ほかに夏季鍛練期間には東京街道の道路作業、滑空場整備作業が学年ごとに四日間ずつ割り当てられた。

また七月には、県から「生徒をして時局を認識せしめて食糧の尊さを知らしめる為、報国農場を設けよ」との通牒があった。

突然の県からの通牒を受けて、川中ではさっそく土地の選定にあたり、境町の製糸工場跡地（後の川越税務署所在地）九〇〇坪を借用と決定、夏季鍛練期間の八月二日からの八日間、三年生以上の生徒が一人一日ずつの作業を課せられ、開墾した。

工場跡地なのでコンクリート土台をはがす必要があり、作業は難航した。また土地も痩せていることが予想されたが、まずは県からの指示である蕎麦を播種。後作には大麦。次いで翌年には陸稲、小麦と続いた。

＊

前年に復活した相撲部が明治神宮大会の埼玉県予選で優勝。この頃は双葉山の全盛期で相撲人気が高く、プロの金華山が来校するなど、まだ少しゆとりがうかがえる。

10・1(火)第三次東部防空訓練(6日間)
7(月)銃後奉公強化週間、正午黙禱
8(火)本県戦病死者慰霊祭(於川女)
に五年生が代表として参加
校外修養団、忠霊墓参
14(月)団栗蒐集(でんぷん供出)
横田教諭応召、告別式
24(木)映画「大楠公」見学
11・3(日)明治節　第四一回運動会
4(月)遵法週間、講演　立石種一地方
裁判所長、松尾慶二郎弁護士
5(火)海軍甲種飛行予科練習生募集に
関し、畠山大尉講演
10(日)市主催二六〇〇年奉祝式に参加
11(月)映画「われらの教官」見学
16(土)四、五年、県下連合演習
19(火)金華山大三郎講演、実地指導
28(木)映画「民族の祭典」見学
30(土)教練査閲
12・26(木)冬季集団勤労(～27日)
1・25(土)予餞会
30(木)映画「西住戦車長伝」見学
2・2(日)県下中等学校青年団駅伝競走
8(土)セルロイド廃品回収
13(木)玉の海、佐賀の花一行相撲見学
3・4(火)第三九回卒業式
23(日)普通教室三室増築
31(月)「学友会報」三六号発行

中等学校武道大会剣道部県優勝

昭和16年

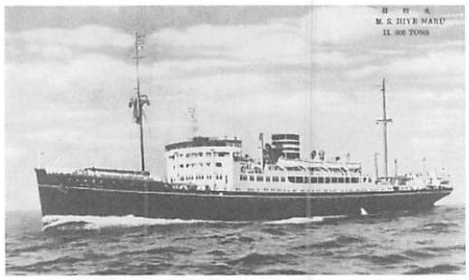
1941

中44回

最後の関西旅行は船で出発。学友会が報国団に改組された。

この年入学の一年生の帽子が戦闘帽にかわるなど、戦時色はいよいよ強まった。そんな中、四月に戦前最後の関西修学旅行（四年生）が行われた。ただし期間は三日間、伊勢神宮と橿原神宮参拝を目的としたもの。しかも、往路は船を使用（横浜～神戸、二十二時間）し、途中大阪城や東大寺の見学を入れたため、とにかく忙しい日程だった。

前年に県の指示で報国農場が設置されたが、この年は更に文部、農林両省から食糧増産に学徒を動員する旨の通牒が発せられた。それを受けて県から「在校生一人宛七坪の農場を設定せよ」との指示があり、五月に、古谷村の荒川河畔及び入間川河畔の土地が開墾された。ここには里芋の植付け、蜀黍（もろこし）、陸稲の播種をした。これで三か所の報国農場総面積は七五〇〇坪になった。



最後の関西旅行で使われた日枝丸

前年からの近衛文麿による新体制運動に呼応するように、開校当初から使われていた甲、乙、丙という学級名称が、この年から一、二、三組にかわり、運動会も体育大会という名称になり、六月には、学友会が「報国団」に再編成された。

先に文部省は、学校を「皇国民タルノ基礎的修練ノ道場」として強化するため、その修練組織を確立することを求めていた。これを受けて、各学校では〝興味本位娯楽第一〟の校友会や学友会を解散させ、これ

4・4(金)始業式　入学式
11(金)メートル法実施記念日で実測
24(木)四年生、関西修学旅行に出発
5・2(金)報国農場について学校長訓示
3(土)全校競歩大会
5(月)映画「燃ユル大空」見学
10(土)商大生受験勧誘指導のため来校
15(木)映画「美の祭典」見学
19(月)一～三年、報国農場、居残生茶摘
27(火)海軍記念日　全校対級マラソン
28(水)開校記念日　奉安殿竣工式
6・9(月)農業報国隊に関し学校長訓話
16(月)報国団結成式　始業七時三十分
21(土)全校勤労奉仕に出動
25(水)映画「父なきあと」見学
7・4(金)報国農場に粟を播種
26(土)宮城外苑整備寄付金の校長訓話
31(木)一学期終業式　木原校長退職
第一二代校長栗岡亀冶氏就任
9・21(日)相撲部、埼玉県大会で優勝

「報国団誌」創刊号表紙。昭和17年11月に刊行されたが、創刊号のみで終わった

日本▶ゾルゲ事件。1家庭子供5人の人口政策（産めよ殖やせよ国のため）。新聞、ラジオの天気予報中止。
世界▶アウシュビッツでユダヤ人の処刑が始まる。独ソ戦開始。ルーズベルト・チャーチル会談。

を学校の教員組織も含めて「学徳身体技倆共に逞しき青少年学徒たる練成を行う」ことを目的とする報国団に改組したのである。

川中ではその運営のために総務、学芸、鍛練、国防、生活の五部制を設け、総務以外にはその管轄下に班をおいた。組織内容は次の通りである。

総務部　報国団に関する企画統制

学芸部　学芸班（旧弁論部中心、講演や映画会主催）、科学班（模型飛行機、模型機械製作）、図書班、興亜班（旧郷土部）、気象班（天体観測中心）、芸能班（旧書道、絵画部）

鍛練部　従来の学友会での運動部。他に新しい組織として作業班（全校生徒が取り組む勤労作業や報国農場作業を統轄）

国防部　教練班（教練の専門集団）、滑空班（グライダー操縦訓練）、機甲班（自動車操縦）、防空防諜班（空襲にそなえた行動と訓練担当。全職員生徒で構成する特設防護団、学生防空補助隊、予備隊を統轄）

生活部　養護班、配給班（旧購買部）、職業指導班、進学班よりなり、生徒の生活指導、進路指導にあたる。

他にも軍事教練的な班がいくつか特設されたが、これらの組織は、卒業生の記憶にはあまりない。従来の学友会組織以外のものは付け焼き刃的なものだった。

奉安殿が設置された

天皇皇后の御真影は従来校長室の奉安所に安置されていたが、この年五月、杉皮葺総檜、神明造りの奉安殿が正門を入って右手に建設された。室岡惣七（中4）の設計施工によるもので、建坪一坪、工費は七七七五円であった。建設から一年半も経って御真影奉遷の許可がおり、一九四二年十一月に校長室の奉安所から移された。

奉安殿（「皇紀2600年」記念写真より）

10・11(土)五年、体力章検定会
14(火)今朝より報国隊組織で朝礼実施
20(月)団栗蒐集
23(木)映画「勝利の記録」見学
27(月)二～四年、体力章検定会
28(火)「教育者ニ賜ハリタル勅語」を職員室に奉掲
31(金)映画「潜水艦一号」見学
11・1(土)廃品回収
3(月)明治節拝賀式　体育大会
14(金)大正天皇御駐輦記念週間
18(火)多摩御陵代表参拝（生徒二名）
20(木)大正天皇御駐輦当時の謹話
12・5(金)科学班展覧会
8(月)米英に宣戦布告
27(土)二学期終業式
29(月)職員生徒で砂取り、校庭に撒く
1・8(木)始業式　小松國三郎教諭退職式
10(土)廃品回収
12(月)寒稽古（～17日）
18(日)校内武道大会
2・3(火)四年、金属回収勤労奉仕
9(月)正常形質ニ関スル遺伝学的調査
14(土)予餞会
3・16(月)第四〇回卒業式
19(木)新入生実力考査
24(火)一～三年、砂利運搬
25(水)作業（砂利運搬）
26(木)三学期終業式

太平洋戦争勃発と川中の戦争体制

日米交渉が行き詰まる中、戦争と中学校との距離はますます縮まった。

軍事映画「燃ユル大空」「潜水艦一号」や「勝利の記録」を見学し、たびたび軍人が来校して戦争の講話をする。川中の卒業生が海軍兵学校を優秀な成績で卒業したという話を校長がする。一方卒業生の戦死が伝えられると、「海行かば」を斉唱し、忠霊祠に祀った。グライダーでの滑空訓練が行われる一方で、一般の軍事教練は日常化し、一九四一年一月に示達された「戦陣訓」を五月には購入した。

そして軍国主義による学校のファシズム体制の組織として、「学校報国隊」が編成された。文部省の「指揮系統ノ確立セル全校編隊ノ組織」を「適時出動要務ニ服」するために樹立せよとの訓令を受けたもので、この隊組織を学校報国隊と称し、隊長は学校長が務めると定められていた。修練組織としての報国団とは別で、

大隊（全校）―中隊（学年）―小隊（クラス）

というピラミッド型の階層構造と、

隊長（学校長）―中隊長（学年主任）―小隊長（組担任）―隊員（生徒）

という指揮系統をもつ、単純明快な軍隊的組織である。軍事教練はもちろん、勤労作業や毎朝の朝礼もこの組織で行われた。

十月十四日に報国隊組織での最初の朝礼が行われた。「荒鷲の歌」のリズムが校舎内外に溢れる中、八五〇人の生徒が「カシラ、ナカ」とか「中隊長殿に敬礼」といった軍隊式号令をかけて整列する。続いて宮城遙拝、黙禱、そして「海行かば」を斉唱して朝礼を終えるのである。

そして運命の十二月八日。その日学校では、朝礼で校長が訓示し、氷川神社に戦勝祈願した。翌日は宣戦の大詔を奉読し、防空補助隊に学校長が訓示し、忠霊祠に特別参拝した。十一日には二年生以上にも名前を書いた白布を上着に縫い付けさせた。二十五日には大本営発表のラジオ放送を生徒が直ちに聞けるように、スピーカーを各教室に取り付けた。

年が明けて一月四日、電報、電話を使って職員生徒の非常呼集訓練。七六ｾﾝﾁの生徒が集まった。また、この月から毎月八日が大詔奉

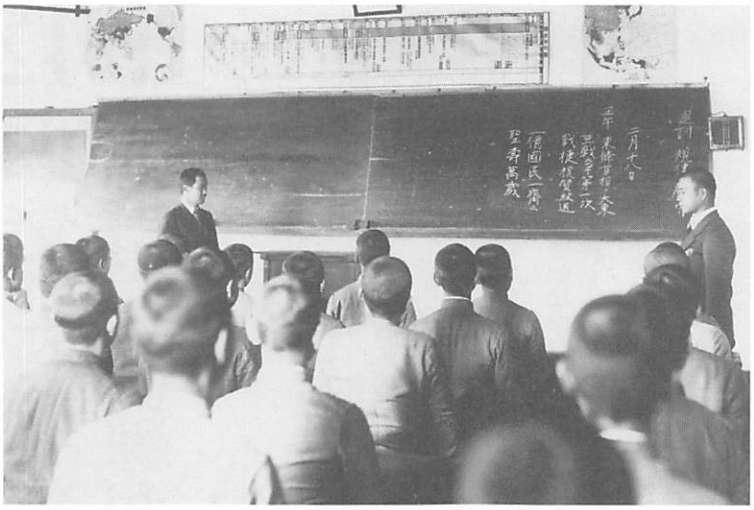
〈一九四一年の戦争関連年表〉

4・28(月)卒業生五柱を忠霊祠に合祀
5・12(月)防諜週間につき学校長訓示
23(金)「礼法要項」「戦陣訓」を購入
27(火)海軍記念日　国旗及びZ旗掲揚
6・20(金)貯蓄強制週間
7・3(木)滑空場寄付金に関し学校長説明
7(月)各学年銃剣道実施
12(土)五年、市葬参列
15(火)軍学校志願者、模擬試験
26(土)金沢、関根先生応召
9・13(土)航空日章配布
20(土)航空日に関する校長訓話
滑空班、秋ケ瀬大会に参加
10・3(金)銃後奉公強化週間、正午黙禱
4(土)戦没将兵遺族応召家族生徒への慰問激励及び校長訓話
6(月)軍人援護の作品受賞者を表彰、慰問袋提出
14(火)報国隊組織にて朝礼
25(土)五年、軽井沢廠舎訓練(～28日)
28(火)二年、軍役奉仕
11・16(日)五年、県下連合演習(～17日)
30(日)機械化義勇団指導者講習会
12・8(月)米英に宣戦布告、生徒を中庭に呼集、氷川神社に戦勝祈願
9(火)宣戦の大詔奉読式
防空補助隊に学校長より訓示
忠霊祠に特別参拝　廃品回収

戦日とされ、三学期始業式の一月八日、宣戦詔書の奉読、校長訓話が行われた。

二月十五日にシンガポール陥落のニュースが伝わると、十八日には戦勝祝賀会が行われた。この日、初雁グランドに川越市内の警防団、在郷軍人会、勤労者、青年学校生徒、各種中等学校生徒、国民学校児童等、あわせて約一万人が参集。国民儀礼（国旗掲揚、宮城遙拝、出征兵士の武運長久を祈念する黙禱）を実施、続いて市長式辞、市長の発声で万歳三唱。式後、川商軍楽隊を先頭に、「国民進軍歌」「大東亜決戦の歌」を歌いつつ、各戸毎に掲げた日の丸のアーチの中を行進。蓮馨寺前の十字路で校長の発声で万歳。その後学校に戻り、正午にラジオで放送される東条首相の発声で、全国一斉に万歳を叫んだ。

更に三月十二日には、ラングーン陥落とジャワ島攻略を期して第二次戦勝祝賀会が実施された。



一九四二年二月十八日、シンガポール陥落を祝した東条首相のラジオ放送を各教室で聞く

川中では英語を重要視

一月三十一日、英語科研究会が開催された。授業参観に続いて、東京高等師範の教授が、「大東亜戦争と英語問題」と題して講演。従来からの英語に関する誹謗は井の中の蛙で、戦争地域が、すべて英語ならば通用するということを考えると、英語を武器として宣撫工作に挺身しなければならない、そのためには今後英語がますます必要となる、と説いた。

後年、次第に英語が日常生活から消されてゆくが、川中の英語の教員は「アメリカを占領する日のために英語を身につけておけ」と言って授業を行ったという。

14(日)機械化義勇団指導者講習会
22(月)実包射撃査閲(西久保射場)
25(木)校内ラジオ放送施設取り付け
1・4(日)突然の職員生徒非常呼集訓練
5(月)戦勝祈願競歩大会(大宮まで)
8(木)大詔奉戴記念日　始業式
10(土)大東亜戦争に関する論文提出
15(木)陸海軍機献納資金として一人五〇銭拠出
24(土)耐寒全校鍛練行事(平方方面)
28(水)滑空訓練指導者講習会(二週間)
2・2(月)雪中行軍遭遇戦並びに攻防戦
12(木)香港爆撃体験談の講演
18(水)シンガポール陥落大東亜戦争第一次戦勝祝賀会
3・12(木)大東亜戦争第二次戦勝祝賀会

十二月八日　七時に臨時ニュウスが入って日本の陸海軍が西太平洋にあって交戦状態に入った由の報道があった。

英米と戦争状態に入りしとふ
ニュウスききつつ拳にぎりつ

こんな歌ができた。いよ〳〵行く所まで行ったのである。出勤の途上大分早く人も少なかったが、その人達の二人三人かたまってゐる話はすべて之に集注されてゐるやうであった。（吉川静雄教頭の日記より）

昭和17年

1942

中45・46回

父兄会が発足した。滑空訓練が頻繁に行われた。

一学年の定員が二〇〇名になって三年目を迎え、生徒数の増加に伴う施設設備の整備は、各中学校の課題であった。そこで校長が保護者に働きかけ、一九四二年七月、「川越中学校生徒ノ教育ニ協力スル」ことを目的として「父兄会」が発足した。父兄会は在学生徒の保護者で構成され、教練や理科の施設充実、図書購入、および進学希望者向け補助授業実施のために、それぞれ物的経済的援助を行ったのである。初代会長には岩沢新平（中1）が就任した。

滑空訓練が本格化した。一九四〇年から県下の中学校で取り組まれ、川中でもグライダー部（滑空班）員が参加していた。この年は三年生全員の参加で、五月に坂戸国民学校を宿営地として四泊五日で行われた。訓練は地上での操作訓練から始まり、次に人間が綱をひいて、地上滑走、跳躍、高度一メートル直線滑空、と進むのである。

また、予科練への勧誘が頻繁になり、八月には甲種飛行予科勧奨映画会が開かれた。翌年一月には、朝日新聞社から滑空機一機を寄贈された。当時朝日新聞社は全国の中学校への滑空機寄贈事業を行っており、この時県内では、川中のほかに浦中、浦商、熊中が寄贈された。贈呈式が一月十日に羽田で行われ、校長と滑空班員がこれに参加。滑空機は二十九日に川中に到着後、校庭で組み立てられたが、訓練は坂戸の飛行場で行った。こうして、「武勲の若鷲」を夢見て予科練を志す中学生が増えていった。

一方、陸軍関係の教練行事も強化され、五年生の軽井沢廠営訓練が六日間にのび、四年生も九月に三泊で行うようになった。

学校での勤労奉仕も強化された。一九四一年に年間三十日以内は授業を勤労作業に

4・6（月）入学式
18（土）蓮見幸雄（中23）講演「南方事情及び連邦国」
5・8（金）三年、滑空訓練出発
27（水）海軍記念日　一万メートルマラソン
6・9（火）映画「将軍と参謀と兵」見学
15（月）五年、軽井沢廠舎訓練（～21日）
19（金）各学年、農場や近在の村の麦刈りに勤労奉仕
7・3（金）陸軍幼年学校平井少佐講演
18（土）父兄会創立総会
23（木）県下野球大会開始
26（日）職員、宮城外苑整備作業に動員
27（月）道路奉仕作業（～8／12）
8・6（木）甲種飛行予科勧奨映画会
20（木）相撲班、橿原神宮大会に出発
26（水）配属将校海北中尉着任

朝日新聞社から送られた滑空機を背にする滑空班員

日本▶関門トンネル下り線開通。「海ゆかば」国民の歌に指定。標語「欲しがりません勝つまでは」。
世界▶連合国26か国共同宣言、対日独単独不講和を確認。連合軍、対ドイツ大反攻開始。

振り替えてよい旨の通知が文部省からなされ、一九四二年の川中では、一学期は農家への奉仕作業や報国農場の作業に、全学年が交互に出て、麦刈りや脱穀、草取りに従事した。また夏休み中は七月二十七日から各学年二日ずつ、鵜頭坂付近の道路新設のために、主に土運びを行った。

皇国民としてのイデオロギー錬成の中心行事は、十一月に一週間かけて行われた大正天皇御駐輦三十周年記念行事である。

御駐輦記念日の十一月十四日、御真影が奉安殿に移された。十七日には全校八〇〇余名の生徒職員が、冷雨降る中を八王子から歩いて、大正天皇の陵墓である多摩御陵に参拝。二十一日には御座所が公開され、奉安殿と併せて一般市民が拝観した。そして御駐輦記念絵葉書七枚が発行された。

ついで十二月八日には大東亜戦争一周年記念行事が行われた。学芸部が中心となり、四、五年は「大東亜戦争一周年と学徒の覚悟」、一～三年は「開戦当時の回顧」というテーマで、全校生徒に懸賞作文を書かせた。同時に興亜班主催で、戦争の勝利の記録、南方事情を生徒に知らしめる標本、地図、写真などの展覧会が開かれた。

戦局が悪化する中、学校と父兄を結ぶ連絡紙「初雁」が翌年三月に創刊された。タブロイド半折判の四面構成で、川中の一年間の記録が記されている。しかし一九四四年三月、川越警察署特高係から、「時節柄『報国団誌』と『初雁』の発行を停止するように」という連絡が入り、ともに創刊号だけで終わってしまった。

初雁
第一號
立教玉埼
校學中越川
創刊に際して
校長　荒川徳治
初雁誕生に際して
教師　井沢　剛平
[illegible]

軍人勅諭誤読騒動

七月四日の軍人勅諭奉読にあたって、これを読み慣れない栗岡校長が読み誤り、笑い声が起きるという事件が起きた。配属将校のみならず、教練教師や生徒の中にも校長の責任を追及しようとする動きがあったが、文部省の支援を得た校長はこれを押し切り、配属将校伊ヶ崎中尉が転任となった。

9・10(木)関口教諭航空美術展入選
12(土)四年、軽井沢廠舎訓練(～15日)
22(火)埼玉県県民体育大会相撲班優勝
30(水)陸軍予科士官学校生徒隊長講演
10・6(火)体力章検定会
8(木)第三回模擬試験
26(月)五年、実弾射撃(松山)
11・3(火)明治節　体育大会
9(月)古雑誌回収
10(火)「報国団誌」刊行
14(土)御駐輦三十周年記念行事
27(金)教練査閲
29(日)大政翼賛会主催の行事に参加
12・4(金)五年、県下連合演習参加
8(火)大東亜戦争一周年記念日
11(金)英米撃滅戦場精神昂揚川越地区県民大会を川中講堂にて開催
14(月)銅貨、白銅貨回収
26(土)一～四年、砂取り作業
1・10(日)朝日新聞社より駒鳥型滑空機を一機寄贈される
12(火)滑空査閲(於熊谷)
21(木)健民耐寒心身鍛練(～2／4)
2・6(土)読売新聞記者高岡幸雄氏講演「決戦の秋、昭和十八年」
15(月)予餞会
3・3(水)学校父兄連絡紙「初雁」創刊第四一回卒業式
23(火)本館屋上の装飾柵を撤去供出

昭和18年

1943

中47・高1回

「修練」の授業が始まり、一年生、戸田で海洋訓練。

「決戦の秋、昭和十八年」を迎えて中学校は大きく変わった。一月に、それまでの中学校令にかわって中等学校令が公布された(142頁参照)。これによってこの年から始まったものの一つが「修練」の授業である。

これは従来の「作業」の授業を発展させて、鍛練などの精神修養の意味合いも込めようとしたものである。川中では教練関係の授業も組み込み、六月十日から始まった。主な内容は、駆足、体操、閲兵分列、勤労奉仕、射撃、行軍等である。その実施にあたって、生徒と教員との一体感も強調され、生徒と一緒に駆足したり、昼食を食べるということも行われた。

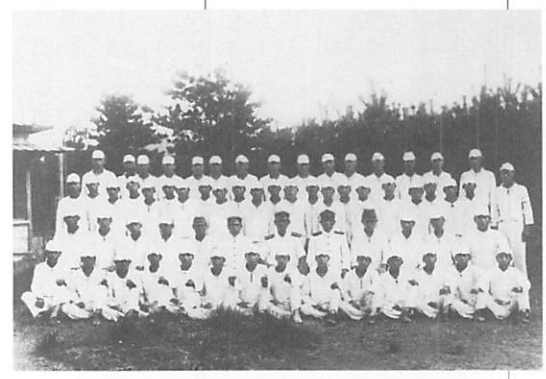
また十月三日に始まる「健民修練」は、肉体的にひ弱と見なされた生徒を柔道場に宿泊させて特別に鍛練したもので、教員も交代で泊まった。これは翌年も夏から秋にかけての二か月間行われた。

この年の新しい行事として、一年生を対象とした海洋訓練が実施された。

四クラスを二つに分け、第一次隊は七月三十日に川越を出発。小田急、箱根登山鉄道を乗り継いで小涌谷に向かい、そこから元箱根まで歩いて宿泊。翌日は山の中の東海道を三島まで歩く。これが長く、なかなかの難所だった。そこから沼津へは電車で、そして沼津からは船で戸田に着いた。

三日目となる八月一日からいよいよ海での訓練が始まる。内容は水泳が中心であるが、古式泳法の修得を中心とした従来の水泳教授とは違って、純然たる軍事教練であった。平泳ぎが重視されたというが、いかに長時間にわたって海に浮いていられるかが第一の目的で、艦船が撃沈された時のための訓練だったのではないかとも言われた。

4・6(火)入学式
8(木)始業式
24(土)映画「マレー戦記」見学
5・12(水)五年、軽井沢廠舎訓練(～18日)
馬事訓練に一二名参加
15(土)勤皇烈士先覚者顕彰祭に参列
27(木)海軍記念日　土浦航空隊員講話
28(金)開校記念日　一万㍍マラソン
6・5(土)山本五十六元帥国葬、校長講話、
弔旗掲揚、全国一斉に拝礼
9(水)大政翼賛会総務葛生能生氏講話
「大東亜戦争を勝ち抜く覚悟」
農家へ勤労奉仕(麦刈り)
17(木)課外修練実施
24(木)勤労奉仕(芳野村)
27(日)三年、滑空訓練(坂戸)



海洋訓練は純然たる軍事教練だった

日本▶谷崎潤一郎の『細雪』、軍部の圧力で連載中断。標語「撃ちてし止まむ」。アッツ島日本軍2500名玉砕。
世界▶コミンテルン解散。イタリア、ムッソリーニ失脚、降伏。米・英・中、カイロ会談。

最後は二キロの遠泳である。波をかぶりながら、ふらふらになって目的地にたどりつく。ほかに手旗信号の訓練。まさしく海軍の訓練である。こうして戸田の海で一週間の訓練を受け、八月六日に川越に帰りついた。

勤労奉仕については、引き続きクラス毎に農繁期の農家の手伝い等が実施されてきたが、六月に「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定されたのを受けて、県は八月に県内の中学生を工場へ、あるいは食糧増産のための開墾作業へ動員した。

川中では八月一日から十日間、四年一一〇名が中外火工、荒井伸銅、朝霞伸管、三年一六〇名が陸軍航空整備校、東洋ゴム、帝国火工に、それぞれ動員された。伸管での作業は銅やその合金で、航空機に必要な材料を作るのである。

「一日戦死」と「日曜献納」

この頃の教師の日記には「一日戦死」という言葉がある。これは飛行機献納のために、教員は給料日に一日分の俸給を出したり、貯蓄するのである。

また日曜日は「献納」されることになり、二週に一回は登校、出勤することになった。

物資節約に関して、九月八日に県内政部長より通牒があった。女学生の下駄履き禁止、中学生の下駄は許可制、卒業アルバムは作らぬこと、風呂敷使用を奨励する、時計、外套は一切使用不可というものである。戦前の卒業アルバムは一九四三年三月のものが最後である。

野球班の最後の試合が十一月に行われ、その後バックネットが供出された。

軍学校への志願が急増

川中の軍関係学校への進学者は急増した。一九四四年三月現在で、陸軍予科士官一二名、陸軍幼年五名、陸軍経理一名、特幹候補四名、少年飛行兵五名、海兵一〇名、予科練三七名、乙種飛行兵一名であった。

しかしそれは生徒の自発的意志によるものとばかりはいえない。一九四三年には予科練への応募者数の割当てがあった。川中は二四名。しかし生徒の希望者数はわずか三。そこで学校は生徒を積極的に勧誘し、時には問題を起こした生徒に対して、予科練受験でつじつまを合わせた。その結果十一月の段階で予科練希望者は三年生を中心として四一名に達し、三十数名が合格した。

7・5(月)土浦海軍航空隊大尉講演、映画
18(日)海軍希望者模擬試験
24(土)終業式
30(金)一年、海洋訓練第一次隊出発
8・1(日)三、四年、勤労動員(〜10日)
5(木)一年、海洋訓練第二次隊出発
21(土)二学期始業式
23(月)五年、海洋教練出発(〜31日)
9・4(土)陸士関係模擬試験(〜5日)
9(木)四年、軽井沢廠舎訓練(〜15日)
18(土)陸軍予科士官学校教授講話
21(火)坂田今朝三教諭出征壮行式
24(金)県下体育大会参加(大宮公園)
10・3(日)健民修練開始
27(水)映画「シンガポール総攻撃」見学
11・3(水)明治節　体育大会開催
14(日)野球班最後の試合(対川商戦)
19(金)五年、連合演習出発(〜21日)
20(土)乙種予科練三名壮行会
12・13(月)報国隊旗できる
14(火)滑空査閲(秋ケ瀬飛行場)
24(金)教練査閲
28(火)終業式
1・4(火)生徒非常呼集
軍人勅諭奉読式、閲兵分列
2・3(木)映画「海軍」見学
3・4(土)第四二回卒業式
29(水)川越警察特高来校、「報国団誌」「初雁」の発行停止を命ずる

皇国民の錬成から工場への動員へ

――決戦体制下の学校教育――

一九四一年に、〝皇国の道〟にのっとった初等教育を施し、皇国民の基礎的錬成をなすことを目的として国民学校が発足した。そしてそれを中等教育にも押し広げるべく、一九四三年一月に新たに中等学校令が公布された。ここでの変革の大枠は、修業年限を五年から四年に短縮したこと、四、五年にあった実業科、普通科の別をなくしたことである。

ほかに改訂された点は、

一、「学科」を統合して「教科」に編成した

二、「教練・体操」から「教練」を独立させ、授業時数を増やした

三、「修練」という授業を新設した

等である。

新しく設置された「修練」は、一九三一年から始まった「作業」を起源とする。これは中学校での実業教育が必要視されて始まったものだが、やがて日中戦争の勃発による労働力不足を補充するために、軍の要請で勤労作業や勤労奉仕という名称で増やされた。

一方で文部省は、学校を様々な行(ぎょう)を通じて皇国民錬成を行う道場にしようと考え、作業に精神教育の意味を込めたものとして「修練」を設置したのである。

表3に見られるように、すでに川中でも皇国民錬成の儀式が日常的に行われていた。しかし、「修練」の授業展開となると戸惑いが見られ、結局作業や教練、行軍で終わった。

また労働力の確保をめざす軍としては、これではまだるこかった。一九四三年六月に、「学徒戦時動員体制確立要綱」が閣議決定されると、学徒の生産勤労への動員が、夏休みだけでなく授業中にも、そして農業だけでなく工業にも拡大された。

十月にはいると政府は、「教育ニ関スル戦時非常措置方策」で、中学四年制の繰上げ実施(一九四四年度から)、文科系高等教育機関の理科系への転換、学徒動員期間を四か月とする等を決定した。

県ではこれを受けて翌年一月十五日、中学校に具体的に指示を出した。それによると、

- 一年(授業日数は二五〇日)の三分の一を修練として勤労動員にあててよい。
- 授業日数は、一、二年が二〇四日三四週、

		1年	2年	3年	4年
国民科	修身	1	1	2	2
	国語	5	5	5	5
	歴史	2	1	2	2
	地理	1	2	1	1
理数	数学	4	4	4	5
	生物	4	4	6	5
体練科	教練	3	3	3	3
	体操	2	2	3	3
	武道	2	2		
芸能科	音楽	1	1	3科目	3科目
	書道	1	1		
	図画	1	1		
	工作	1	1		
実業科(農工商)				(4)	(4)
外国語科		4	4	(4)	(4)
修練		3	3	3	3
計		35	35	36	36

表2　1943年教育課程

	1年	2年	3年	4年		5年	
				1種	2種	1種	2種
修身	1	1	1	1	1	1	1
公民				2	2	2	2
国語・漢文	7	7	7	6	5	6	6
歴史・地理	3	3	3	3	3	3	3
英語	5	5	6	3	6	3	6
数学	5	5	6	4	6	4	6
生物・物象	2	3	1	1	1	1	1
物理・化学			3	4	4	3	3
図画	1	1	1	1	1	1	1
作業	2	2	1		1	1	1
音楽	1	1					
教練・体操	4	4	4	4	4	4	4
武道	2	2	2	1	1	1	1
農業・商業				5		5	
計	33	34	35	35		35	

表1　1942年教育課程

三、四年が一八〇日三〇週、五年が一四〇日二三週を下るな。

●日曜に「修練」や授業をやってもよい。

だが三月には「決戦非常措置要綱」に基づく学徒勤労動員実施要綱」によって、動員は通年とされ、しかも対象が一、二年生にまで拡大されることになった。

これを受けて川中では、やがて始まる通年動員の前に、一九四四年四月から七時間授業、隔週日曜に授業、祝祭日は廃止とした。

こうして文部省の「修練」の構想は、軍部による生産第一主義に蹴散らされるのである。

朝　　礼	授業時・放課後
校庭集合(報国隊編成)	授業始め：黙想
学校長受礼	第1時：「青少年学徒ニ賜ハリタル勅語」奉読
宮城遙拝	
武運長久祈願	
忠霊祠拝礼	昼食時：師弟会食
学校長訓話	全校体操
「海行かば」斉唱	放課後：清掃作業
週番達示	報国団各班錬成

表3　1942年の錬成日課表

戦争映画鑑賞への動員

一九三八(昭和一三)年ころから川中では度々映画を観るようになる。それは映画の社会的影響力が注目され、映画への指導統制を確立すべく、一九三九年に映画法が制定され、これによって政府は、国民教育上有益と判断した映画を強制上映させることが出来るようになったからである。この時期に川中生が見学した代表的な映画には、「土と兵隊」や「西住戦車長伝」がある。ともに小説の映画化である。

一九四〇年十二月に、映画の担当は文部大臣から内閣情報局に移った。そして情報局は国民的理想を顕現した〝国民映画〟を各映画会社に作らせたのである。

「燃ユル大空」は日中戦争での陸軍九七式戦闘機部隊の活動を描き、「マレー戦記」はマレー上陸からシンガポール突入までを撮った。「ハワイ・マレー沖海戦」は対米英開戦一周年を記念して公開されたもので、太平洋戦争初期の海軍士官の成長を軸に円谷英二の特撮によって両海戦が再現された。「海軍」はハワイ奇襲攻撃に参加した青年将校の生い立ち、「決戦の大空へ」は予科練の少年たちの日常生活を描き、共に軍部が製作に関与した。

「轟沈」にいたっては、インド洋の潜水艦に乗り組んで実戦を撮影した映画である。

特に「ハワイ・マレー沖海戦」は「キネマ旬報」一位となり、映画館が営業しない午前中の時間に、学校単位で非営利に団体鑑賞させることが目指された。これ以後、国民学校や中学校の生徒が集団で国策映画を鑑賞させられるようになった。こうして映画が国民の戦意高揚に果たした役割は大きい。

川中生が見た戦時映画一覧

一九三八年「スパイ戦線を衝く」(ドイツ)
一九三九年「空襲」
「土と兵隊」(日活)
一九四〇年「暁に祈る」(松竹)
「われらの教官」
「民族の祭典」(ドイツ)
一九四一年「西住戦車長伝」(松竹)
「燃ユル大空」(東宝)
「美の祭典」(ドイツ)
「勝利の記録」(ドイツ)
「潜水艦一号」(日活)
一九四二年「将軍と参謀と兵」(日活)
一九四三年「ハワイ・マレー沖海戦」(東宝)
「マレー戦記」(日本映画社)
「シンガポール総攻撃」(大映)
一九四四年「海軍」(松竹)
「加藤隼戦闘隊」(東宝)
「轟沈」(日本映画社)
「決戦の大空へ」(東宝)

昭和19年

1944

中48・高2回

一年生、入学直後に宿泊訓練。学校から生徒の姿が消えた。

これまで廠営訓練は四、五年生で行われてきたが、この年の川中では新しい試みとして、入学早々の一年生を、五泊六日の日程で富士の裾野で訓練することになった。

しかし内容は四、五年生対象のものとは違う。前年に軍から、生徒の意気盛んな入学当初に軍隊礼式を身に付けさせ、服従心養成の訓練を実施するよう要請があり、学校でもこの行事の目的を「厳正ナル姿勢態度、端正ナル服装、明快ナル言語応答、敬虔ナル敬礼」を身に付けさせ、「教練日常化ノ基礎」を確立するためとした。

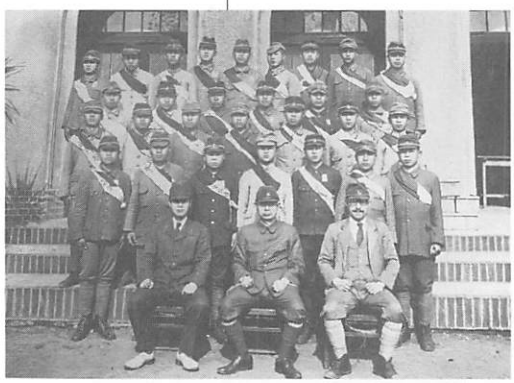
入学して三日後の四月十日、戦闘帽をかぶり、左肩から水筒、右肩から雑嚢を胸で交差させ、足にはゲートルという服装で川越駅を出発。御殿場駅まで行き、そこから板妻(現自衛隊の駐屯地)の宿舎「栗山荘」まで長い行軍。一クラスを四班にして、四年生がそれぞれの班長になった。

現地での訓練は上級生の吹くラッパの合図で行動した。集合、整列、点呼、移動。そして「不動の姿勢」や様々の礼、歩き方、手の振り方、歩調の取り方等の訓練。軍事演習的なものはない。まさに生活全般にわたっての基礎訓練だった。

五月十三日、栗岡校長が転勤するというので、急遽予科練入隊者三一名と特別幹部候補生一名の壮行式が校庭で行われた。彼等は他の軍学校進学予定者と共に、四十数名で一クラスに編成されていた。入隊者は教員や仲間に寄せ書きを書いてもらった日の丸を袈裟がけにしてグランドに整列。校長から訓示を受けた。

入隊者は五月三十一日に氷川神社に参拝、その足で川越の中央通りを行進。川越駅で級友の激励を受けて列車に乗り込み、その

4・7(金)入学式
10(月)一年、富士裾野廠営訓練に出発
17(月)七時間授業始まる
23(日)第一回日曜献納日　四時間授業
29(土)栗岡校長、陸軍諸学校への進学顕著につき表彰される
4月
映画「加藤隼戦闘隊」見学
5・13(土)予科練入隊者壮行式
15(月)栗岡校長、福井県小浜中へ転任
第一三代校長に小島承一氏就任
6・1(木)五年、通年動員始まる
14(水)四年二〇名、予科練見学
映画「轟沈」見学
15(木)一年農耕作業(〜29日)
23(金)海北中尉本庄中学へ転出



1944年5月13日、予科練入隊者の記念撮影。前列左から教頭、校長、学年主任

日本▶沖縄からの学童疎開船「対馬丸」、アメリカの魚雷で沈没、1500人死亡。標語「進め一億火の玉だ」。
世界▶連合軍、ノルマンディー上陸作戦。パリ解放。ドイツ、V2ロケット開発。

日のうちに土浦の航空隊に入隊した。

その後も軍関係学校への進学を希望する者は増え続け、九月に明らかになった合格者数は、陸士七名、海兵一三名、海機五名、海経一名だった。十一月段階での予科練希望者は三九名だった。中学一、二年で受験できる陸軍幼年学校にいたっては八三名が志願した。結局翌年三月の段階での陸海軍諸学校への進学者数は六五名にものぼった。

雄大な富士山裾野での一年生の宿泊訓練。どの顔にもまだあどけなさが残る

川中は全国的に見ても陸軍関係の学校への進学が多かったという。その〝功績〟で四月には栗岡校長が表彰されているし、十月に行われた元駐伊大使白鳥敏夫氏の講演も、川中が「軍からの覚えがよかった」から実現したものであろう。

こうした中で、ワシントン軍縮条約によって退役となり、川中に数学教師として赴任していた元海軍軍人の長谷川貞平先生は、日本とアメリカの軍事力の差を冷静に認識し、この戦争の不可なるを生徒に説き、軍学校への進学にはやる生徒を「今から出ていっても仕方がない」と諭したという。

この年の夏からいよいよ本格的な勤労動員が始まった(146頁参照)。六月から五年生、七月から四年生、八月から三年生、そして年が改まって二月に一、二年生がそれぞれ軍需工場に動員され、学校から生徒の姿が消えた。

そして三月二十八日は二つの学年の卒業式。五年生だけでなく、四年制の繰上げ実施で、四年生も一緒に卒業させられたが、両学年とも勤労動員は六月まで続いた。

27(火)金久保金次中尉着任
6月末 映画「決戦の大空へ」見学
通知「近況おしらせ」を配布
7・10(月)四年、朝霞被服廠に通年動員
30(日)一年、水泳訓練(〜8/4)
8・16(水)三年、上福岡火工廠に通年動員
21(月)二学期始まる
23(水)一、二年、荒川農場で草刈り
26(土)健民修練始まる(〜10/24)
特幹の割当て三〇名
28(月)予科練入隊者壮行式
9・9(土)軍諸学校合格者判明
18(月)海軍予科の推薦順位決定
27(水)陸幼推薦順位決定八三名
10・19(木)高等商船の内申書完成四〇名
21(土)白鳥敏夫氏、刈谷守宏氏講演
26(木)乾麺第二回配給
11・3(金)明治節、四、五年登校、三年は動員先にて作業
14(火)三五キロを行軍
21(火)上福岡火工廠にて生徒事故(死亡)
12・7(水)空襲あり
18(月)教練査閲
27(水)三〜五年の乾麺配給
1・1(月)四方拝、三年は動員先に出勤
17(水)予科練身体検査、五四名受験
2・14(水)一、二年、通年動員開始
3・20(火)入学考査
28(水)昭和十九年度卒業式(43・44回)

全学年にわたった勤労動員

――死者二名、重傷者二名――

一九四四年二月の「決戦非常措置要綱」によって、全学年にわたる通年の勤労動員が夏から始まった。

まず一九四四年六月一日より五年生（中43）、続いて四年生（中44）も七月十日から、共に陸軍被服廠に動員された。遅れて八月十六日から三年生（中45・46）が上福岡の陸軍造兵廠（通称火工廠）に勤労動員となった。

年が明けて一九四五年二月十四日には、二年生（中47・高1）と一年生（中48・高2）も動員が決まった。二年生は下の表のように、動員先がクラスによって分かれた。一年生は三年生と同じ火工廠である。

動員先での作業内容をまとめると次の通りである。

まず、四、五年生と二年四組の三五〇名の川中生が動員された朝霞の陸軍被服廠。ここでの作業は軍被服やレンガ、木炭、角材、その他の製品の運搬作業が中心で、編上靴の木箱を作るという作業もあった。国民は少ない配給でなんとかやりくりしていたが、倉庫の中には軍需物資が山のように積まれ、生徒はため息をついた。

更に空襲に備えての備品のための防空壕掘り、末期には物品の疎開のための突貫的な運搬作業や、倉庫の取り壊しといった、中学生には肉体的にかなりきつい作業もあった。

ここでは十二月二十八日の夕方、五年生の栗原三省（中43）が混雑する朝霞駅で電車から転落、死亡するといういたましい事故があった。また翌年七月二十六日に、当時三年生だった橋本日出松（高2）がトロッコを使って疎開物資の機械を運搬中、トロッコが脱線して落ちてきた機械に上半身を挟まれ、足腰を骨折するという重傷を負った。

次に三年生と一年生の四〇〇人が動員された上福岡の火工廠である。ここは武器製造が中心で、二〇ミリ対空機関砲の信管、航空機用爆薬、対戦車地雷（金属がなくなって陶製のものだった）の他、一部では風船爆弾の部品も製造していた。

このように危険な火薬の中にいたので、何回か爆発事故が起きた。そして一九四四年十一月二十一日、当時三年生の生田巌が爆発に

学年組	人　数	動　員　先	期　間
5年全組	150名	陸軍被服廠朝霞支廠（朝霞市）	44.6～45.6
4年全組	150名	陸軍被服廠朝霞支廠（朝霞市）	44.7～45.6
3年全組	200名	第一陸軍造兵廠東京製作所（上福岡市）	44.8～終戦
2年1組	50名	浅野カーリット（川越市古谷）	45.2～終戦
2年2、3組	100名	陸軍高萩飛行場（日高市）	45.2～終戦
2年4組	50名	陸軍被服廠朝霞支廠（朝霞市）	45.2～終戦
1年全組	200名	第一陸軍造兵廠東京製作所（上福岡市）	45.2～終戦
1945年度 1年全組	200名	石川製糸（現川越市立図書館付近） 日清製粉（本川越駅付近）	45年1学期

川越中学勤労動員一覧表（1944～45年）

巻き込まれて死亡。また、時期不明だが同学年の高篠晴夫(中46)が、爆発で指を吹き飛ばされるという怪我を負った。

二年二、三組一〇〇人は陸軍高萩飛行場である。高萩飛行場では変圧器の爆風避けや飛行機を隠す掩体壕を作ったり、飛行機の整備道具を磨いたりといった作業を行っていた。

そして二年一組五〇人の浅野カーリットである。カーリットとは火薬のことでここでも地雷や手榴弾の信管作業、運搬、摺り込み、発煙筒の製造が行われた。生徒は直接危険な作業にはあたらなかったが、いつ爆発事故が起きてもおかしくない所だった。

動員が始まって間もない一九四四年十一月、教員が何回かに分けて各動員先を視察、それを簡単な報告書にまとめている。その報告書の綴りが、図書館のロッカーの中に保管されていた。いずれも生徒の真剣な作業ぶりを伝えている。

その中で注目すべきものは、爆発事故で生田巌が死亡した火工廠の視察報告書である。事故当日の十一月二十一日と、二十三日、二十五日に視察している。二十一日の報告書には「当日九時三十分頃事故の為見学中止なる故に後の作業状況判明せざる」と書いているだけであり、更に翌々日の報告書には事故のことは全く触れられていない。ようやく二十五日に視察した教諭の報告書に「三学年一、二組全日作業、三、四組ハ生田巌葬送ノタメ作業午前中」とあるだけである。

学校へは二十一日に連絡があったが、事故の原因は本人の不注意とされた。その後も視察しているが、更に事故の原因を究明しようとする記述はない。ただ「作業ハ細心ノ注意ヲ必要トスルヲ以テ生徒ノ心労監督教諭ノ任務大ナルモノト思考ス」と述べるだけである。

この様な動員が続く中、始めのうちは一週間に一日登校日があって、授業が行われたり、あるいは動員先で休み時間等に引率の先生が即席の授業を行ったという。

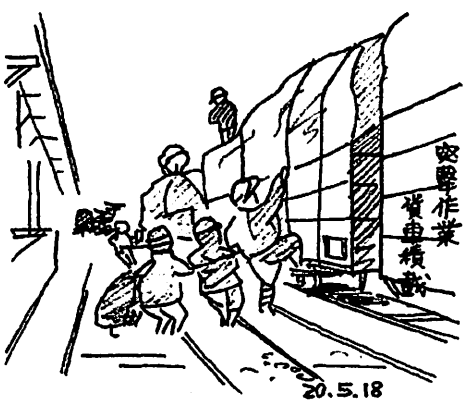
そして学年が改まっても組替えはなく、そのまま動員が続いた。

荷担ぎ人夫の勤労動員

昭和十九年六月から「勤労動員」という国家命令で、朝霞の陸軍被服廠へ通い始めた。一年間毎日、綿布だの、軍靴だの、五〇瓩、六〇瓩の荷物を担いで、トロッコに積み、押し運び、貨車に下ろし載せたり、つまり荷担ぎ人夫をやった。三か月過ぎる頃、死ぬほどの疲労感が拭い去られ、全身に山を抜く気力が漲ってきた。将来のことなど何も考えず、日々楽しかった。被服廠の中からいつも秩父連峯及び比企丘陵が見えていて、こいつが私の骨に摺り込まれた。

年が明けると進学受験ということになった。文部省の言いつけで、先ず、体力検査があった。いろいろやらされたが、六〇瓩の俵を下から担ぎ上げ、五〇㍍走れというのがあった。これなら毎日やっていた。六千人中一番だったのではないか。三〇瓩の俵を頭上に差す種目も百回を越えた時、試験官が「もういい！」と言った。二次試験は、千人ぐらいで受けた。学問だった。受けた奴は頭脳明晰とは言い難い連中ばかりだった。おかげで今の私がある。

(打木城太郎・中43)



カット・山根　豊(中44)

昭和20年

1945

高3回

川越中学校の「八月十五日」。

一九四五年三月に閣議決定された「決戦教育措置要綱」で、国民学校初等科以外の授業は四月一日から停止され、全生徒が食糧増産や軍需産業、防空防衛に動員されることになった。二月以来生徒の姿が消えた川中には、四月から関東第五軍が入った。

そういう状況下、四月に新一年生二〇三名が入学した。六月には疎開者を中心とした転入によって二七二名にふくれあがった。

上級生は勤労動員が続き、この学年もまもなく石川製糸と日清製粉に一、二か月ほど動員された。作業は繭の入った袋や小麦粉、大豆粉の入った袋の運搬である。

この工場動員のほか、農場開墾、農家の茶摘みの手伝いがあり、学校での活動は防空壕掘りや戦技訓練ばかりである。グランドは畑に変わり、くすの木の周辺は防空壕だらけとなった。通用門を入って左手の土俵の下に掘られた壕は地下三階まであり、第五軍の指令部だった。

しかし、それでも中間考査や期末考査が実施された。内容はともあれ、学校側は学校としての機能維持に苦心した。

そして八月十五日。二年生以上は動員先で、一年生は学校や勤労奉仕先の農家等、それぞれの場所で「玉音放送」を聞いた。

戦後はどう動き始めたか。

GHQによる占領を前にした八月二十一日の校長常会で、国勢を判断される書類や動員に関する書類を隠蔽あるいは焼却すること、という指示が出された。川中では、書類ではないが、明治文庫に所蔵してあった軍関係の雑誌、書籍などを、教員に分け与えて処理した。また戦前の教務日誌も現存しない。しかし戦時中の県の指示がうかがえる校長常会関係の資料は残された。

部分的に墨で消された教科書

4・2(月)川越付近空襲を受ける
4(水)関東第五軍部隊、校舎に入る
9(月)入学式
11(水)新入生の躾訓練開始(〜14日)
12(木)階段教室と奉安殿前に着弾
24(火)新河岸にB29墜落、捕虜米兵三名川中の第五軍部隊へ連行さる
6月上旬　一年、中間考査実施
6・26(火)中43・44回生、被服廠退廠式
7・12(木)戦技訓練幹部講習会実施
27(金)配属将校佐藤大尉着任
一年、期末考査(〜29日)
30(月)少年飛行兵、特幹候補生志願者の順位を連隊に連絡
8・12(日)一年、登校日、一学期成績発表
15(水)玉音放送を聞く
18(土)動員解除(朝霞被服廠、高萩飛行場)
31(金)転入学試験施行
9・1(土)始業式
10月　四年学級自治会に甘藷配給

日本▶広島、長崎に原爆投下。東久邇宮首相「一億総懺悔」。三木清、獄死。第1回宝くじ、1等10万円。
世界▶米・英・ソ首脳、ヤルタ会談。第2次世界大戦集結。国際連合創設。IMF、世界銀行の設置決定。

やがて占領政策が始まると、軍国主義教育払拭のため、教練や武道は中止になった。十二月には神道的象徴の除去をGHQから命じられ、御真影が返還された。更に小島校長は、GHQが天皇制に関わるものにも目を光らせていると判断。大正元年の特別演習記念碑を玄関前の地下に埋めさせた。

授業は九月一日から再開された。しかし勤労動員が終わって生徒が学校に戻り、また疎開学級を更に増設せねばならないのに応召から戻らない教員がいるという事情から、授業は一日四時間、四十分授業の二部制で暫定的に始まった。

生徒の動きとしては、十月には校友会が復活し、学校自治会が開催された。講堂での全校集会で、戦時中の軍国主義教育について生徒と教員がやりとりし、中には謝罪する教員もいたという。

軍学校からの復学者に「補習科」

戦時中、川中を中退して予科練等の軍関係諸学校に進んだ者を対象に、「補習科」の設置を県に申請して、将来への道を開く方法がとられた。これには、すでに川中を卒業して上級学校を目指す者や、川中以外の生徒で上級学校を目指す者も対象とされた。川中父兄会が開設者となり、川中の教室で、川中の教員が週三十時間授業にあたった。期間は一九四六年一月十五日から三月十五日まで。生徒数は川中卒業者三五名、未卒業者、復員者四〇名、埼玉の他校関係者九名の合計八四名に達した。

未卒、復員者はこの補習科によって川中卒業の資格を得た。受講者の中で、二一名が高等師範や高校、大学予科等に進学した。

現役の四年生は四年で卒業か、五年で卒業かを選択。四年で卒業する一三六名が三月二十八日の第四五回卒業式を迎えた。

八月十五日

その日は夏休みにも拘らず、朝から学校に行き、防空壕掘りの作業をしていた。暑い日で汗を流していた。正午に重大な放送があるということで、学校の玄関前に集められて整列した。直立不動の姿勢で、ラジオの天皇陛下の玉音を聴いた。それはポツダム宣言を受諾する内容であるが、その意味はすぐにはわからない始末だった。放送聴取後、校長先生？　の話があって、わが国が戦争に敗れたことを知ったのだった。

思いもしなかったことであったので、悔しい思いが強くしたが、その後は複雑で放心の状態だった。解散して帰路についたが、川越市の街中や、私の住んでいた入間川の街が、いやに静かであったことが強く印象に残っている。その静寂さは日本のこれまでにないような大きな強い変動の日で、しかも精神的衝撃の大きい時だったので、大変奇妙に思われたのだった。

（長谷川　栄・高3）

11・31（水）校友会生徒役員選出締め切り
11・24（土）学校自治会開催
12月 29（木）四年父兄会
校友会新規約作成、配布
期末考査終了後、校庭整理
12・22（土）大掃除
25（火）四年、補充授業（〜30日）
29（土）転入試験
御真影返還
1・2（水）四年の希望者に英語補習授業
15（火）補習科開設（〜3月）
3・5（火）職員消費組合の役員紹介と依頼
25（月）終業式
28（木）第四五回卒業式
29（金）小島校長、粕壁高等女学校長に転出
30（土）第一四代校長福森治氏就任

昭和21年

1946

高4回

疎開転入者で生徒激増の中、川越中学校は再出発した。

前年と同様にこの年も、主に東京方面からの一時的な疎開者の大量転入によって、川中は大きく膨れ上がった。一九四五、四六年度末の在籍者数は左表の通りである。一九四五年までの各学年の定員は二〇〇名で四学級編成であるが、それが各学年一〇〇名近い増員となり、一学級増で一学級六〇名編成というすしづめ状態だった。

そうした混乱の中、GHQの教育政策が次第に明らかになり、川越中学でも三月末に着任した福森新校長を中心に、新しい時代に向けての改革が進められた。

終戦直後の生徒在籍数

1946年3月		1947年3月	
		5年	108名
4年	248名	4年	278名
3年	285名	3年	287名
2年	297名	2年	270名
1年	281名	1年	252名

基本方針の一つは本来の旧制中学校の姿を取り戻すこと、つまり学力重視である。基本的教養を高めるため夏季休業中に三週間の課外授業として各種文化講座、芸能講座を設置。宿題に「衛生に関して」というレポートを課した。課外授業はその後も恒常的に行われた。レポートは休み明けに評価展示された。これが後に文化部展覧会になり、文化祭（くすのき祭）の源流になる。

教育の民主化の一環として教師指名の級長制度は廃止され、選挙制の自治委員による学級自治会、学校自治会が組織された。学校生活に関する生徒の要望が学級ごとにまとめられ、それを教員が検討して五月十七日に開かれた学校自治会で回答された（内容については157頁参照）。

このほか、生徒の正門通過が許可された。

4・15(月)入学式
5月　遠足実施
5・11(土)第一回父兄会理事会(補習科報告、今年度方針等)
13(月)第五限学級自治会
17(金)第五限学校自治会
23(木)新時間割実施
6・3(月)中間考査(〜5日、五年生なし)
4(火)埼玉軍政部よりハーモンド氏来校
5(水)文部省石原事務官来校
7(金)御座所等の処置につき、県教学課長へ報告
11(火)農繁休暇(〜17日)
7・1(月)パン配給
2(火)学期末考査(〜5日)

南畑村村社（現八幡神社）本殿となった旧奉安殿

日本▶天皇の「人間宣言」。農地改革。メーデー復活。日本国憲法公布。「リンゴの歌」大流行。新円切り替え。
世界▶チャーチル「鉄のカーテン」演説。米がビキニ環礁で原爆実験。第一次インドシナ戦争始まる。

一九四六年の時間割

武道、教練に続いて、前年十二月に地理、国史、修身も中止されていたが、地理と国史についてはそれぞれ本年中に再開されることになる。これとからんで時間割について、生徒の学力向上の要望も受け、次のような暫定措置がとられた。

一、土曜日に中学生向けラジオ放送を聞き「研修」の時間とする。

二、上級生に週一日午前中の特設課外時間を設ける。科目選択は自由だが出席は必須。下級生は週二日間を半日制とする。

三、一般課外は朝始業前に一時間と放課後に、一、二時間実施する。

一般課外の週時間数は次の通り。

二年　英語3

三年　英語3

四年　英語3　数学1　物象2　国語2

五年　英語4　数学1　物象1　国語1

秋になると「埼玉県立川越中学校教育研究協議会」という組織が作られた。これは「本校教職員自ラニヨル自ラノ再教育機関」で、教育関係法令、通牒の趣旨、民主教育の原理や方法の検討、研究を目的とした。

御座所等の処置

大正天皇御座所（一九五二年に改築される旧校舎本館の二階にあった）と、隣接する忠霊室の取り扱いをめぐって、GHQや文部省、県当局と交渉が行われた。

一九四六年六月四日、埼玉軍政部のハーモンド氏が調査のため来校した。この時学校側は、すでに三室のうち一室は図書室として利用、他の二室についても計画はあるが学校の一存でなく県と連絡をとって決定すると回答した。翌五日、文部省からも調査官が来校し、学校側は同様の回答をした。

その日の午後職員会議が開かれ、残り二室を生徒並びに職員用の図書室・閲覧室として利用することとした。これを県に報告して認められたので、六日朝、生徒に通告して直ちに室内備品などの撤去を行い、図書室・閲覧室として利用できるよう作業を開始した。

この他御座所にあった大正天皇関係の御物や「大本営」の看板については、当時の長谷川事務長の責任で完全廃棄された。県には全て撤去した旨の報告がなされ、司令部の了解も得られた。また、奉安殿については撤去の方針がかたまり、南畑村村社（現八幡神社）本殿として移築された。

こうして、新しい時代に向けて川中は動き出したが、十二月末、福森校長は前任の県青年教育官という経歴で戦争責任を問われ、不適格通知を受けて、教職追放となった（152頁参照）。

6（土）作業及び掃除
7（日）衛生講話並びに通学団編成
8（月）代休
9（火）家庭研修
10（水）終業式
20（土）地理授業再開に関して（埼玉県教育民生部長）
8・5（月）全校登校日
20（火）奉安殿撤去
21（水）二学期始業式
26（月）新時間割実施
10・12（土）GHQより国史授業再開許可
18（金）県民体育大会選手壮行式
12・17（火）川中教育振興会結成
28（土）福森校長、不適格通知、教職追放となる
31（火）教務主任寺島光雅教諭、校長事務取扱となる
3・4（火）第四六回卒業式
5（水）新学制（六三制）を県が発表

福森校長教職追放と復職・再審請求運動

一九四六（昭和二一）年五月七日、GHQ指令に基づいて軍国主義的な教員を排除するために、勅令二六三号「教職員の除去、就職禁止及復職等の件」や文部省訓令第五号「教職員の適格審査をする委員に関する規定」等の関係法令が公布された。

埼玉県では七月十六日に「埼玉県職員適格審査委員会規定」を公布施行した。教員団体代表七名、諸団体代表六名の計一三名の委員が任命され、翌十七日に第一回委員会が開かれた。審査は書面審査により行われ、一般からの投書も求められた。八月二十三日までに新規就職希望者などの審査を終え、第一〇回以降、現職者の審査にあたった。

審査は二つの基準によって行われた。基準一は講義、講演、著述、論文等言論その他の行動により、積極的に軍国主義あるいは極端な国家主義を鼓吹し、またはその意図を持って教科書や教育に関する刊行物の編纂にあたった者を不適格とする。基準二は職業軍人か十年以上本業として陸軍または海軍に勤務した者や、特定の学校、例えば東京農林専門学校拓殖科を一九三七年以降に卒業した者等、その経歴で自動的に不適格とするものである。

一通りの審査は十月十八日の審査会で終了し、不適格者は二五名だった。しかし基準一による判定は難航し、これによる不適格者はそのうち二名だけで、多くの者が保留となって以後の審査に残った。

しかし、この時期は追放の範囲が拡大されたり、審査委員会の改組が問題になっていた。不適格者が全国的にみて非常に少ないということで、十二月二十一日には教職員適格審査の事務責任者の木村泰夫県教学課課長が軍政部に呼び出され、もっと審査を厳重にするようにとの圧力を受けている。また、埼玉県教職員適格審査委員会のメンバーは委員長を含め三名が辞任し、十二月十日には野口訓三委員長にかわって斎藤鉄郎委員長が就任した。

こうして一九四七年二月二十八日、第五三回をもって教員適格審査は終了した。審査総数一万二三八三人。結局不適格者七〇名が県軍政部に報告された。基準一による者が二九名、基準二による者が四一名だった。

一九四六年十二月二十八日付で、福森校長に教職員追放に関する「判定通知書」が送付されてきた。十二月三十一日付で寺島光雅が校長事務取扱になり、福森は自宅謹慎になった。判定年月日は十二月十日になっている。十月十八日に保留された一二八八名への判定の一つと思われる。判定事由は「青年教育官として軍国主義を宣伝鼓吹したものであるから、別表一（基準一）の一の六によって不適格と判定さる」である。それ以外に何らの説明もなかったので、福森は具体的根拠説明要求を行い、翌一九四七年一月九日付の「判定事由書」を得た。ここには次の三点が指摘されていた。

（1）青年教育官として軍国主義を積極的に鼓吹した。

（2）埼玉県青少年団の最高指導者として極端な国家主義の宣伝に積極的に協力した。

（3）学徒動員の県の指導責任者として戦争遂行に積極的に協力した。

しかし、一九四六年八月から十二月の審査

第一四代校長 福森 治氏

会の混乱を除いてもいくつかの疑問点がある。

(1) 職務以外に具体的指摘がない。

(2) 在職当時の県教学課関係者への調査、現任中学校関係者への調査もない。

(3) 福森本人への尋問陳述の機会が一度もない。

同窓会を先頭に復職運動

同窓会がまず動いた。一九四七年一月八日常任幹事会が開かれ対策が決定された。福森に再審請求を勧める。再審のため、各方面の証言を集める。復職要求の署名を集める。中央審査会への働きかけを行う、などである。

一月中に、青年教育官在職当時の福森に関して具体的職務、人柄についての証言が集められた。越生町青年学校長平井朝介、入間郡大東青年学校長柴崎太郎、入間郡青年学校他二一校職員、教学課の部下だった五味淵光、森田栄一、新井富美男が証言した。彼等は、福森が軍国主義者、軍への協力者ではなく、軍による学校関与を排除し校長の権限強化を図り、かえって軍にマークされていたことを証言している。

青少年団指導者としての活動に関しても具体的な証言が集められた。福森が関与したのは総務部長の下、青年・女子・少年・錬成の一組織でしかないこと。職務は食糧増産が主な仕事だったことなどを明らかにしている。

学徒動員に関しては上司の黒田義晴の証言がある。黒田はすでに埼玉を離れ、宮城県渉外課長の職にあった。福森が庶務の実務多忙であって動員学徒指導にはほとんど関与していないことを証明し、また、福森が軍への協力不十分だとして浦和連隊司令官藤田少将、青年教育担当藤田中佐よりしばしば注意されたことも証言している。

(一) 教員としての適格を認める証明書（川越中学教職員一同）

(二) 懇願書（父兄会代表　岩沢新平・中1）

懇願書（同窓会会長　山崎嘉七・中7）

(三) 嘆願書（生徒、学年別）

なども集められた。

こうした証言、署名をもとに山崎嘉七同窓会長、寺島光雅校長事務取扱、岩沢新平川中父兄会会長を中心に文部省、県へ働きかけが行われた。六月五日には県へ陳情書を提出し、文部省へは前後二回出頭し、二回目の六月十三日には懇願書が受理された。岡田恒輔（中1）を仲介に、田島中央審査会会長（岡田の一高時代の友人）との面会を求めたが果たせず、相良惟一（いいち）（文部省調査普及局）主任に面会できた。相良主任は再審理由書を受け取り、二審（中央適格審査会）前に福森本人の事情聴取を行う旨の約束をしてくれた。

校長の人事異動の情報を得た同窓会、父兄会は福森の異動撤回を働きかけたが、留任は無理との回答を得た。一九四七年七月十一日付県の人事異動により、川越中学校長に日新義虎が任ぜられ、事務取扱の寺島は鴻巣女学校校長になった。福森は「県立川越中学校長を免ずる」「川越中学勤務を命ずる、二三号俸を給する」の辞令を受けている。

七月十五日に、中央適格審査会で「原審差戻し」判定を得る。これを受けた県の審査の結果、十一月二十日には「教職適格確認書」が交付され、正式に追放が解除された。

その後福森は一九四八年教育部学校教育課勤務、一九四九年教育委員会管理部総務課長、一九五〇年事務局秘書室長をへて、一九五一年四月一日熊谷高校校長に任ぜられるが、五日依願退職し、故郷三重県に帰っている。

教職追放にあった者の多くが、二審、三審（文部大臣）へ上告しても解除されず、一九五一年の追放解除、翌年サンフランシスコ講和条約発効によって復帰の道を得た。福森の場合、川越中学同窓会、父兄会を中心とした精力的な活動により、審査の不備を反駁し、広範囲の署名活動で解除を勝ち取っている。

昭和22年

1947

父兄会解散、PT会となる。次年度より使用の新校章決定。

学制移行期にあたり、この年より三年間、生徒募集は停止された。

一九四二(昭和一七)年に結成された川越中学校父兄会は、県下各中学校父兄会と同じく教職員の研究補助を活動目的の一つとしていたが、それは戦中、戦後のインフレ、物資不足の時期では、教職員への生活援助でもあった。

一九四六年の父兄会資料を見ると、教職員への支給基準は次のようになっている。

一、毎月四五円、ただし雇人は三五円。
二、家族一人につき五円。
三、通勤手当として六か月パスの一か月分代金の三分の一。
四、住宅手当は支給しない、など。

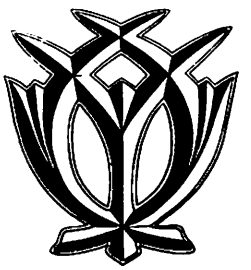
この基準にしたがい、一九四六年九月二日に八、九、十月分が支給された。

しかし九月二十五日に県教育民生部長から、援助を辞退するようにとの通達があった。県内各中学校長は対応を協議したが、明確な方針は出せなかったようである。

父兄会としての生活援助ができなくなると、十二月十七日、父兄会は同窓会とともに「川中教育振興会」を結成した。目的として、学校施設の営繕と教職員の生活援助を掲げているが、主たる目的は後者にあった。最初教職員は受け取る方針であったが、翌年一月になるとこの方針を撤回した。父兄会では集めた寄付金について返還するか施設営繕にあてるかについて協議し、総会で学校営繕費に使用することに決めた。

生活援助的組織とは別の「PTA」創立の動きは、早い段階からGHQ軍政部の働きかけによった。一九四六年から四七年、埼玉軍政部教育課長メイン中尉の「ニュースレター」は再三啓蒙を行っている。一九

5・29(木)福森校長追放問題につき同窓会、父兄会、川中教員組合合同協議会開催
7・11(金)第一五代校長日新(ひし)義虎氏就任
18(金)川中PT会会則施行
8・20(水)地区(ぎく)別PT会開催
9・6(土)同窓会幹事会にて開校五十周年行事を協議
11・29(土)PT会理事会、高校昇格、教職員への生活支援について協議
1・10(土)三学期始業式、新時間割発表



日の目をみなかった校章案

採用が決定した校章案

日本▶2・1ゼネスト中止。不敬罪、姦通罪廃止。学校給食始まる。太宰治『斜陽』。
世界▶トルーマン・ドクトリン。コミンフォルム結成。ガット調印。インドとパキスタン分離独立。

四七年三月には文部省が各都道府県知事宛に「父母と先生の会―教育民主化の手引き」を送付した。

このような状況下の六月十七日、川越高等女学校で「父母と先生の会(PTA)結成に関する研究協議会」が開かれ、七月八日の父兄会理事会で、協議会の報告とともに準備委員会設立が決められた。学校側から松田、那須、石川の各教諭と日新校長の四名、各地区の父兄代表計一八名が準備委員に選ばれた。

七月十八日の総会で川越中学校PT会が成立。会長に奥平巧(中1)、副会長に長島覚一、橋本惣平(中16)の三氏をそれぞれ選出した。学制改革にともない翌年の五月十日、川越高等学校PT会と名称変更し、現在に至る。

A案

B案

C案

D案

E案

検討された
5つの校章
デザイン案

新制高校の校章決定

翌年からの新制高校への昇格にあたり、新しい校章の図案を広く生徒から募集した。応募作品は数百点にのぼった。その中から美術の白井教諭が五作品に絞り込み、三月五日の卒業式当日、卒業する五年生に示した。

五年生の意向ではB案が絶対多数であったが、来賓、父兄、職員の意向はC案が多数だった。ついでB案、C案を修正して写真に撮り、三月十六日に二、三年生の意向を確かめた。結果はC案が多数だった。二十五日に四年生の意向を確かめると、同じくC案が多数だった。

結局生徒の意見はB案一六五票に対してC案五三九票だった。これをふまえて校長は、飛翔する三羽の雁をデザインしたC案の採用を決定した。

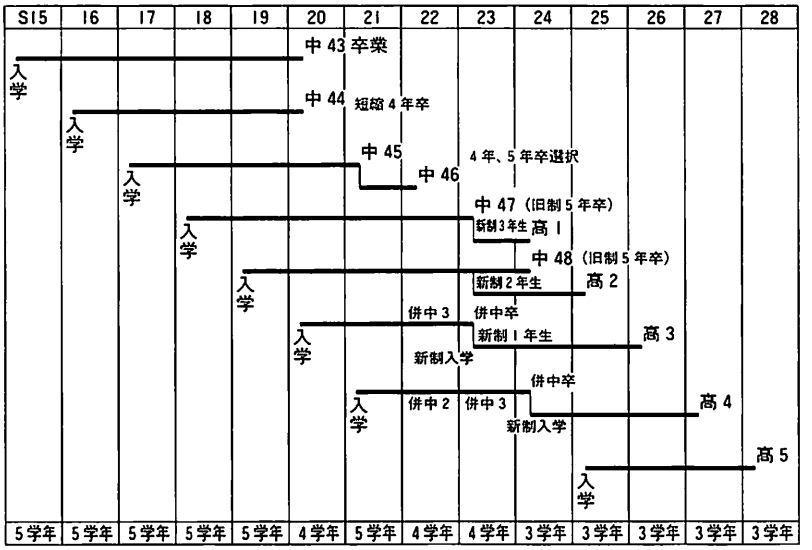
新校章は一九四八年五月十七日より使用することになった。

13(火)衛生講話、衛生展覧会(～15日)
15(木)模擬試験(～17日)
進学激励会
2・1(日)五十周年記念事業準備委員会
4(水)五年、考査
10(火)適性検査実施
19(木)四年、模擬試験
26(木)四年、考査(～3／2)
3・4(木)卒業式予行
5(金)第四七回卒業式
11(木)校内理事会(五十周年記念事業について)
二、三年、考査
四年、運動場作業(～16日)
25(木)終業式
併設中学校第一回卒業式
26(金)二年、農業召集(四日間)※2
30(火)同窓会、PT会合同五十周年記念祝賀事業準備会

※1 学校との教育座談会を学期に一回以上開く、農繁休暇の可否等を協議。
※2 農場作業、校庭整理を行った。

川越中学校から川越高等学校へ

旧制中学から新制高校へ



1、昭和十六年入学者
短縮四年卒　中44回（20年卒）
（中四三回と同時卒業）

2、昭和十七年入学者
短縮四年卒　中45回（21年卒）
五年卒　中46回（22年卒）

3、昭和十八年入学者
旧制五年卒　中47回（23年卒）
新制高校に一年間在学し卒業　高1回（24年卒）

4、昭和十九年入学者
旧制五年卒　中48回（24年卒）
新制高校に二年間在学し卒業　高2回（25年卒）

5、昭和二〇年入学者
旧制一・二年生、併設中三年生を経て
新制高校に三年間在学し卒業　高3回（26年卒）

6、昭和二十一年入学者
旧制一年生、併設中二・三年生を経て
新制高校卒業　高4回（27年卒）

一、昭和二十二年度
新制中学発足、旧制中学募集なし。併設中二・三年生四・五年生在学

二、昭和二十三年度
新制高校発足。併設中学卒業者が入学。
新規募集若干名

三、昭和二十四年度
併設中学卒業者が入学
新規募集若干名

四、昭和二十五年度
新制中学卒業者入学

五、昭和二十六年度
三年生は最後の旧制経験者　高4回（27年卒）

六、昭和二十七年度
一・二・三年生全学年新制中学卒業者

食糧事情

一九四五（昭和二〇）年九月十二日、文部省は「食糧増産の緊要性に鑑み」教育に弾力性をもたせ食糧増産に協力するよう要請するとともに、学校農園設置を奨励する通達を出している。翌四六年三月には「学徒の食糧増産に関する件」によって、学校農園に関して詳細な規定をもうけた。一九四六年四月七日、文部省の通達を受けて、埼玉県教育民生部長により「学校教職員ノ生徒ヨリスル食糧収受強要禁止ニ関シテ」が出された。五月には皇居前の食糧メーデーがあり、六月に吉田内閣は、深刻な食糧危機を理由に、学校授業短縮と夏休み繰り上げを決定している。

弁当持参が不可能な生徒が多い場合、始業時間繰り上げ、半日授業で対応した県内中学もあったが、川中の場合は特別処置をとる必要はなかった。川中では学校農園とは別に「職員農園」も設置され、食糧不足に対応していた。それだけでなく教職員の困窮に対処するため父兄会が援助していた。同年度父兄会予算のかなりの部分が生活援助に支出された。この年の暮れに作られた「川中教育振興会」は、父兄会組織とは別に教職員生活援助を目的とするものであった。

一九四六年度及び一九四七年度の父兄会理事会開催通知の備考に「当日は議事終了後、学校農園収穫の粗飯を差し上げたいと存じます」とあり、一九四八年学校自治会の記録に「体育部合宿の際、農場の作物の便宜を与えてほしい」とあるのは、この時期いかに食糧難であったかを示しているものであろう。

生徒会発足へ向けて

一、校友会

一九四五年に、戦時中の報国団は戦前の校友会に戻された。川越中学の校友会組織は、職員と生徒からなっていた。会長―部―班からなり、会長は生徒ではなく校長が務めている。総務、学芸、文化、鍛練、生活の各部長は教職員の理事が務め、部の下に班があった。班は企画班、進学班、自治訓練班、庭球班、配給班など全部で三六班あった。班長は教員の理事が務め、班の生徒のリーダーが幹事である。一九四八年に、川越高等学校校友会と名称が改められた。会長―総務―部に変わった。会長は校長のままで、新たに全校生徒の選挙によって選ばれる総務一名、副総務二名がおかれた。これは各部を統括し生徒活動の中心となる。班は部に改められた。吟詠、購買、修理など二三の部があった。正、副部長の各一名は生徒の互選によって選ばれた。理事は名称を改め参与となり、教職員が任命され、総務や各部を指導した。

一九四九年の校友会規定によると、総務と部に整理された。総務はそれまでの会長に当たり校友会を代表する。総務一名、副総務二名は、各部長によって互選された。部は中国文化、相撲、写真、工芸、書道、購買、修理の七部がなくなり、二六部に整理された。所属は一人一部が原則であり、正・副部長は部員の互選によって選ばれた。教職員は各部の専任顧問として残っているものの、校長が代表者の地位から退いている。

二、全校自治会

各クラス選出の学級自治委員によって構成された。一九四五年、十一月の第一回目では、上級生は敬礼の厳格な指導、隊列登校を主張し、下級生はそれに反駁している。学校側は、敬礼、歩調トレ、頭ミギ、などの廃止を提案している。一九四六年になると、一般生徒の全校自治会傍聴が許可された。開校記念行事一万㍍走の中止、昼食を三時限終了後とすることなどさまざまな要望があり、「川中応援歌」をつくろうかとか、混乱の中にも新たな活動への意欲が見られる。学校側からは、埼玉軍政部の「ニュースレター」の指導項目、たとえば、交通道徳、学校美化などが提案されている。一九四七年度の記録は残されていない。

一九四八年度は全校自治会が五月、九月、十二月の三回開かれているが、審議項目が極端に少なくなっている。週五日制など、この時期独自の問題や、教室の窓ガラス整備要求、試験答案や宿題の返却要望が目を引く。

終戦直後の教科書

一九四五(昭和二〇)年度は、二学期から授業が再開された。修身、国語、国史、地理は軍国主義的、超国家主義的部分を削除(いわゆる墨塗り)した教科書が使われた。三学期からは十二月末のGHQ指令によって、修身、国史、地理の授業は停止された。翌一九四六年の七月に地理、十月に国史が再開されるが、修身は復活しなかった。

一九四七年は教科書の発行が遅れた。GHQの検閲許可手続き、用紙不足などのため一年分の教科書が数回に分けられて刊行。製本もされていない「折り畳み教科書」だった。

一九四七年度に六・三制に移行し教科書検定制度が発足した。翌四八年度新制高校が発足し新たなカリキュラムに移行した。

昭和23年

1948

新制川越高等学校がスタート。五十周年記念行事が行われた。

一九四八年は新制高校がスタートした年である。埼玉県ではほとんどの旧制中学校や高等女学校が高校に昇格し、川越中学校も川越高等学校に昇格した。それと同時に、この年は川越中学校の開校五十周年にあたった。

記念行事としての記念講演や同窓会名簿作成を主な内容とする準備を、前年から進めていた。また新制高校移行にともなう設備営繕のために同窓会、PT会が主体となって「設備営繕後援会」を設立して、募金運動も進められていた。新制高校としての設備調査基準に、川中が指定されていた。また協賛券なるものを発行して記念行事の費用とした。

三年生には春季休業中に「村の人口、市町村の交通実態などの調査」等の課題が出され、これは記念展覧会に展示された。

記念行事としては、五月二十八日の祝賀式や記念植樹（ヒマラヤ杉）、記念展覧会（～30日）の他、卒業生による講演会、記念運動会が行われた。

講演者は、岡田萬雄（中1）、矢部謙次郎（中1）、打木村治（中20）のOB三氏だった。

記念運動会は戦後初めてのマラソン大会だった。正門→氷川神社→芳野村→川越商業学校（現川越市立博物館の位置にあった）→正門の全行程五〇〇〇㍍。マラソンはこの後、一九五一年新入生歓迎マラソンとして復活する。

併設中学校の設置

学制変更にともない、一九四七、四八年度の二年間、新制の併設中学校が存在した。この間の生徒の身分は次のようになる。

4・8（木）始業式
30（金）映画「緑の小筐（こばこ）」見学
5・2（日）サマータイム実施
7（金）PT会総会
10（月）模擬試験（～11日）
12（水）全校自治会
校友会総務選挙
17（月）新校章使用開始
28（金）五十周年記念式、祝宴、展覧会
29（土）五十周年記念講演
高校総合体育大会
30（日）五十周年記念マラソン
6・8（火）中間考査（～12日）
21（月）九学年、遠足（鎌倉、江ノ島）
22（火）十学年、遠足（上野国立博物館
科学博物館）
十一学年、遠足（鎌倉）
24（木）模擬試験（～25日）
7・13（火）期末考査（～17日）
20（火）終業式

創立五十年記念誌

日本▶帝銀事件起こる。美空ひばりデビュー。昭電疑獄発覚。全学連結成。東京裁判判決、東条英機ら絞首刑執行。
世界▶ソ連、ベルリンを封鎖。イスラエル共和国成立。第１次中東戦争。ガンディー暗殺。大韓民国樹立。

正門前にて。「併設中学校」の表札が見える

新制中学が発足した一九四七年には、一九四三年度入学者はそのまま旧制中学五年生、四四年度入学者も旧制四年生に進級した。しかし、四五、四六年度入学者は川越中学校内に設立された「埼玉県立川越中学併設中学校」の三、二年生になった。一九四七年は、旧制中学の募集は停止された。一九四八年新制高校発足にともない、名称が「埼玉県立川越高等学校併設中学校」に変更された。併設中学校経験者は、併設中学校卒業後は他の高校へ進学する者や就職の者もいたが、川越高校には無試験で入学できた。そのため、一九四八年、四九年度の川越高校生徒募集は若干名だった。

新学制の発足と新制中学の併設にともなって、学年表示が小学校からの通年表示になった。

一九四八年の年表で「九学年」とあるのは併設中学三年生、「十二学年」は新制高校三年生である。高校一、二、三年の表示になるのは一九五〇年からである。

サマータイム導入

電力節約のため、一九四八年四月二十八日に夏時間法が公布され、一九五二年四月十一日に廃止されるまで、本校もいわゆる「サマータイム」を経験することになった。初年度は五月一日（土）午後十二時を五月二日午前一時とし、九月十一日（土）夜半に復帰するものとし、次年度以降は四月第一土曜から九月第二土曜までとした。

六月に各学年の遠足が行われた。

参加は希望制で、第九学年は二〇名が不参加、第十一学年は鎌倉を訪れたが、遠方の者は弁当二食分を持参した。

第十二学年は希望者がきわめて少なく実施しなかったが、十月二十九日から一泊二日の日光修学旅行を行った。中宮祠に宿泊。費用八八〇円。主食の米五合を持参しなければならなかった。

8・5（木）全校登校日　農作業
26（木）始業式
30（月）自由作品提出
9・1（水）自由作品審査陳列
2（木）自由作品展覧会（～3日）
4（土）二部（定時制）入学式
13（月）模擬試験（～14日）
18（土）全校自治会
21（火）県民体育大会
10・9（土）第四七回秋季運動会
21（木）中間考査（～26日）
29（金）十二学年、修学旅行（日光方面）
11・11（木）十学年、実力考査
24（水）模擬試験（～25日）
12・15（水）期末考査（～21日）
25（土）終業式
1・8（土）始業式
19（水）模擬試験（～21日）
31（月）進学適性考査（浦和）
2・7（月）十二学年、期末考査（～9日）
11（金）予餞会
24（木）模擬試験（～25日）
3・5（土）旧制川越中学校第四八回卒業式
新制川越高校第一回卒業式
11（金）期末考査（～17日）
25（金）終業式
併設中学校第二回卒業式

26（月）第二回ＰＴＡ会総会　成績通知

昭和24年

1949

川越高校生徒会が発足。庭球部芹沢・岡田組全国優勝。

一九四九（昭和二四）年五月、川越高校生徒会が発足した。当時の生徒会規約からその組織を紹介してみよう。活動機関はホームルーム、校友会その他。決議機関に総会、代議員会、協議員会。審査機関として審査員会がある。

ホームルームは自治活動の単位であり、選挙でホームルーム会長、副会長を選出するとともに、学級委員（協議員）を選ぶ。

生徒会役員のうち会長、副会長は全員に立候補資格があるのではなく、次のような条件が必要であった。

一、各ホームルームから選出される二名の学級委員であること。

二、会長は十二学年、副会長二名は十二学年一名、十一学年一名であること。

三、前学年末の学科に欠点がないこと。欠席が二十日以上ないこと。

校友会はクラブ活動（部活）の組織。部長、総務、副総務の役員が生徒会からの校友会援助費その他の配分を決定する。

審査員は各学年から二名ずつ選ばれ、生徒会の活動を審査する。

協議員会は生徒会予算、決算、細則その他重要な事項を議決執行する。審査員会の審査を受け、再審議をするか、代議員会の判断を受ける。また各種専門委員会を置く。

代議員会は各ホームルームより五名に一名の割で選出される総会に代わる機関。

第一回生徒会役員選挙

四月十五日、学級委員（協議員）選挙が行われた。教員側資料に立候補者の成績順位などが書き込まれてあり、資格がチェックされている。五月十九日に会長、副会長、審査員の立会演説会、投票が行われた。

4・4（月）入学式　始業式
15（金）学級委員選挙
17（日）第六回県下陸上クラブ対抗（大宮県営競技場）
18（月）身体検査（～27日）
5・1（日）第四回県下陸上選手権大会（大宮）
4（水）生徒会発足
7（土）第一回模擬試験（～9日）
14（土）生徒体育大会
19（木）生徒会役員選挙
28（土）開校記念日
30（月）中間考査（～6／1）
6・5（日）同窓会総会
17（金）第二回模擬試験（～20日）
7・9（土）PT会総会
18（月）期末考査（～19日）
25（月）補充授業（～27日）
8・17（水）日新校長転出
第一六代校長荒井実氏就任
9・2（金）自由作品展覧会

庭球部全国大会優勝のレプリカ（1949年度ランキング1位の文字が刻まれている）

日本▶お年玉付年賀はがき発売。下山・三鷹・松川事件。湯川秀樹にノーベル賞。古橋広之進競泳で世界新。
世界▶中華人民共和国成立。東西ドイツ成立。NATO、COMECON成立。インドネシア連邦共和国成立。

この選挙を盛り上げるためか、日新校長提案による懸賞付投票予想が行われた。会長、副会長について、三名の氏名と獲得票数、それぞれ一名ずつについての氏名と獲得票数を当てるものだった。三重勝、単勝それぞれ獲得投票数が近いものから一等、二等の賞品が与えられた。三重勝一等賞品は鉛筆一二本、二等九本。単勝一等九本、二等六本だった。

選挙結果は以下の通り。

会長　12A　橋本日出松（高2）
副会長　12A　野口元二（高2）
　　11B　森岡昇（高3）

また、この年「生徒会々報」も創刊され、会長の橋本は「創刊に際して」に次のように記している。

「現在の学生は、敗戦と学制改革とによって生じた混乱からまだ完全に抜け切っていません。その為、学力が非常に低くなっていることを認めない訳にはいかないでしょう。しかし、また他方では、権威に対する懐疑と、何物にも束縛されない自由な批判力を持つようになりました。我々は後者にのっとり華美に走らず、着実に歩を進めて行きたいと思います。」

「生徒会々報」創刊号（1949.12.8発刊）の表紙

庭球部全国優勝

七月二日大宮県営テニスコートで行われた全日本高校軟式庭球選手権大会埼玉県予選会の結果、全国大会出場八チーム中三チームを川越高校が占めた。

全国大会は新設の東京後楽園コートにおいて、各県の代表一八四組が参加して開催された。一色・津坂組は一回戦滋賀県中央高校に惜敗。柿田・加藤組は三回戦で岩手県盛岡高校と熱戦の末敗北。しかし芹沢・岡田組は順調に勝ち進み、五回戦で愛知県岡崎商業高校に苦戦したものの、芹沢のサービスエースで切り抜けるとますます勢いに乗り、準決勝では柿田・加藤組を倒した岩手県盛岡高校をストレートで破り、ついに決勝戦に進出した。試合相手の兵庫県神戸高校に対し、芹沢の強打、岡田のスマッシュがよく決まり、四対一で押し切って、東日本勢として初めての全国優勝を勝ち取ったのである（318、529頁参照）。

なお、この年は国体埼玉県代表二組を独占しており、その後の庭球部の活動に弾みをつけることになった。

庭球部国体出場メンバー（左から、柿田、芹沢、加藤、岡田）

10（土）第三回模擬試験（～11日）
22（木）県民体育大会（～25日）
10・8（土）第二回秋季大運動会
11・2（水）一、二年、修学旅行（関西・日光方面）
25（金）適性検査模擬試験
1・22（日）第一七回県下駅伝大会
3・6（月）第二回卒業式

昭和25年

1950

高5回

「川越高校新聞」創刊される。

一九五〇（昭和二五）年、発足二年目の生徒会は、新たに図書委員会、新聞委員会、風紀・清掃委員会の三つの専門委員会を設置した。これは協議員会を分業によって活発化させようと意図したものだった。委員はいずれも協議員より選出された。

新聞委員会は協議員の四名からなっていた。三年一名、二年一名、一年二名、必要があれば協議員会の承認を得て各クラスから補充できる。この委員会は全校生徒の新聞に対する意見を反映し、新聞の充実を図ることを目的とし、そのため新聞部の会合に出席し、新聞部の活動状況を協議員会に報告する義務があった。しかし、翌年にはこの委員会は廃止されている。

これより先、五月二十三日に、新聞部は田中、野村両教諭を顧問に発足していた。部長は村山利喜（高3）だった。生徒会報によれば、校友会各部予算には新聞部の名はなく、新聞発行費は、総務一般費、会報費と並んで計上されていて、校友会費とは別枠となっている。

「川越高校新聞」は七月十八日、第一号が発行された。タブロイド判四ページ、日付は元号。二号（五〇・八・五）から西暦になる。二九号（五五・八・六）から再び元号、一三一号（七九・七・一七）からまた、西暦になる。

発刊の辞で村山部長は次のように言う。

「われ〳〵はあらゆる障害をのり越えて過去数年間の懸案であるわれわれの手による新聞の発刊という一大事業を成し遂げた。これは勿論全校生徒諸君の支持なくしては到底なし得ぬ仕事である。

古書に『百里を行く者は九十里を半ばとす、此れ末路の難きを言ふ』とあるように

昭和二十五年七月十八日　聞新校高越川　号

川越高校新聞

川越高校新聞の發刊を祝う

校長　荒井　實

發刊のことば

新聞部長　村山利喜

論說

「川越高校新聞」創刊号

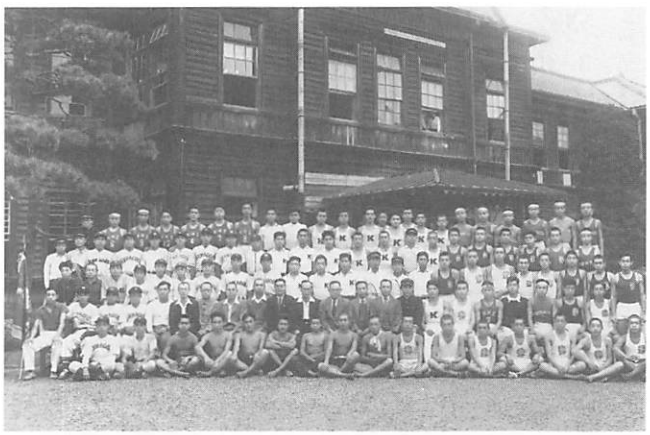
4・10（月）始業式　入学式　離任式
11（火）生徒対面式
27（木）生徒会役員選挙
5・4（木）埼玉県総合体育大会壮行会
19（金）模擬試験（数英適性検査）
20（土）PT会、後援会総会
22（月）模擬試験（国理）
25（木）校友会　新聞部部長選挙
27（土）校友会　演劇部発表会
28（日）開校記念日
6・1（木）遠足（川越史跡めぐり）
7（水）中間考査（～9日）
27（火）模擬試験（数国）

日本▶山本富士子第１回ミス日本に選ばる。公務員のレッドパージ決定。金閣寺全焼。
世界▶中ソ友好同盟相互援助条約。インド共和国独立。朝鮮戦争勃発。フランス登山隊アンナプルナに初登頂。

創刊号は単に自己という存在を改めて認識し外に示したに過ぎないのである。

ましてこの新聞には百里どころか吾人の想像を超越するような輝かしい或る意味に於いてはいばらに満ちた道程がくり拡げられると考えられる。即ちこの新聞の生命は無窮である。

われ〳〵は改めてその責任の重大性を痛感するとともに生徒諸君の心からの支援を期待するものである。」



県民体育大会（兼国体予選）に初の総合優勝を成し遂げた本校選手団

一回だけの松高対抗戦

九月十日川越高校を会場として松山高校との対抗戦が行われた。

要項によれば、一、スポーツを通して親睦を図りレベルの向上に資す。二、種目は陸上競技、野球、籠球、蹴球、排球、庭球、卓球、水泳とする。三、一日に全種目を終了する。実施種目の勝敗数の合計により勝敗を決す。四、会場は交互に持ち回る（但し水泳は松高）ものとし、年二回（春、秋）開催する、となっている。一回目の対抗戦後、「川越高校新聞」に次のような生徒からの投書が寄せられた。

「親善の意味において喜ぶべきであるが、当日全運動部は午前中に試合が完了したようであるが、午後の様子はどうだろう、一部の者は土足厳禁にもかかわらず下駄で上がり風紀が整いつつある本校で喫煙するという有り様であった。今後此のままで定期戦を行えば如何に風紀粛正を行えども何の益にもならない。先生方がもう一度考慮されることを望むものである。」

翌年から定期戦は行われなかった。

28（水）適性検査模試
29（木）模擬試験（英）
7・13（木）期末考査（～17日）
18（火）「川越高校新聞」創刊
20（木）終業式
8・28（月）始業式
9・4（月）自由作品展覧会（～5日）
10（日）松山高校との対抗戦
13（水）模擬試験（社理）
22（金）県民体育大会のため臨時休業
県民体育大会総合優勝
29（金）進学適正検査模試（二、三年一～二限に実施）
10・7（土）第三回秋季大運動会
11（水）PT会、後援会臨時総会
13（金）三年、修学旅行（～17日、関西方面）
20（金）中間考査（～23日）
27（金）二年、修学旅行（～29日、日光）
11・25（土）模擬試験（数英）
12・23（土）終業式
1・8（月）始業式
10（水）模擬試験（～13日、英国数理社）
31（水）三年、学年末考査
2・2（金）関東駅伝大会壮行会
10（土）予餞会
3・6（火）卒業式予行
7（水）第三回卒業式
24（土）終業式

昭和26年

1951

高6回

応援歌「奮え友よ」など制定。新入生歓迎マラソン始まる。

新制高校が発足し、全員で歌える応援歌が求められ、全校に応援歌を募った。その結果、一四作品の応募があり、審査委員九名（荒井校長、本橋教頭、佐々木（信）、那須、平、牧野、近藤の各教諭と生徒会長の高山俊雄、同副会長青木雄二郎）によって、3D山本明、2D大沢俊之・海野保人、2F高橋伸、田中正雄教諭、近藤鉄城教諭の五作品が選ばれた。さらにこの中から、

一等　該当作なし

二等「奮え友よ」　山本　明（賞金七〇〇円）

三等「生かせ伝統」　田中正雄（同四〇〇円）

三等「川越高校応援歌」（これは後に「とどろく凱歌」の題名になる）　近藤鉄城（同四〇〇円）

の三作品が正式に採用され、これらの詞に牧野教諭が曲をつけた。

新入生歓迎マラソン

マラソンは、戦後、五十周年記念行事の時以来行われていなかったが、この年「創立記念、新入生歓迎マラソン」と称して復活した。

目的は、「新一年生の入学を祝い全校生徒のマラソン競争を実施して士気の高揚を図り、堅忍持久の心身と体力に対する自信と反省の機会を与え、兼ねてスポーツマンシップを養う」というものだった。

四月二十八日(土)午前十時半に本校グランドを出発。以下氷川神社→芳野村→本校正門→盲唖学校裏→川越神明町→鐘撞堂→本校正門の全長六キロメートルのコースで行われた。服装は、足袋あるいはズック靴、胸に一年は赤、二年は緑、三年は黒のゼッケンをつ

4・9(月)始業式　入学式
12(木)一年、英語考査
17(火)清潔教育実践強調運動
28(土)新入生歓迎マラソン
5・11(金)模擬試験(～12日、数英国)
18(金)学徒総合体育大会壮行会
応援歌募集
28(月)開校記念日
6・5(火)中間考査(～7日)
6(水)二、三年、模擬試験
22(金)貞明皇太后大葬　授業午前四時間
23(土)適性検査　三年全員二年有志
紙筆検査　器具検査
29(金)シャツ着流し禁止
応援歌審査委員会
7・5(木)応援歌入選者発表
9(月)表彰　バレー　全日本予選準優勝、陸上　関東大会リレー二位

新入生歓迎マラソン風景

日本▶サンフランシスコ平和条約・日米安全保障条約調印。「羅生門」グランプリ。NHK紅白歌合戦始まる。
世界▶インドで第1回アジア大会。イラン、石油国有化法案可決。アメリカで初のカラーテレビ放送。

けた。

六〇九名の参加者があり結果は次の通りである。

クラス対抗　一位3C　二位3E　三位3D

個　人　一位　二杉誠一（3A）

二位　野口二三次（2F）

三位　東島太一（2E）

賞品は、優勝者にパン三個などであった。

一九五一年を第一回とする新入生歓迎マラソンは以後、五二年八・五キロメートル、五三年九キロメートル、五四年に一〇キロメートルとなり、一九六七年に中止されるまで続く。

物資不足で答案用紙代徴収

戦後の物不足は深刻であり、各種連絡、記録には使用済み答案用紙を使用していた。また生徒から答案用紙代を徴収していた。

一九五〇年度は一学期二、三年は二〇円、一年は一〇円。二学期も同様。三学期は一律一〇円。一九五一年度は学期ごとに一律一〇円を徴収した。

奮え友よ　山本　明作詞

奮え　友よ　奮い立て今
初雁の　校旗はためく
武蔵野に鍛えし我等
栄光の伝統守り
熱血の闘魂高く
今こそ誇れ
勝利の王座　勝利の王座
川高　川高　川高　川高
おお我が川越高校

生かせ伝統　田中正雄作詞

希望輝く　グランドに
今こそ競う　若人ら
みどりの空へ　眉あげて
誓う　ほまれの
誓う　ほまれの　優勝旗
白いラインが　目に映り
胸が高鳴る　腕も鳴る
歓呼の友へ　手を振って
尽くす　ベストの
尽くすベストの　新記録

とどろく凱歌　近藤鉄城作詞

狭霧ただよう古城のほとり
若き命の響きをきけば
鍛え　鍛えし　健児の胸に
躍り高鳴り　脈うつところ
雲紫の　旗飜る　旗飜る
ああ青春のうれいぞ夢に
湧きつ流れて意気高らかに
競い　競いし　健児の血潮
あふれたぎりて　微笑みかけぬ
轟く凱歌　母校の誇り　母校の誇り

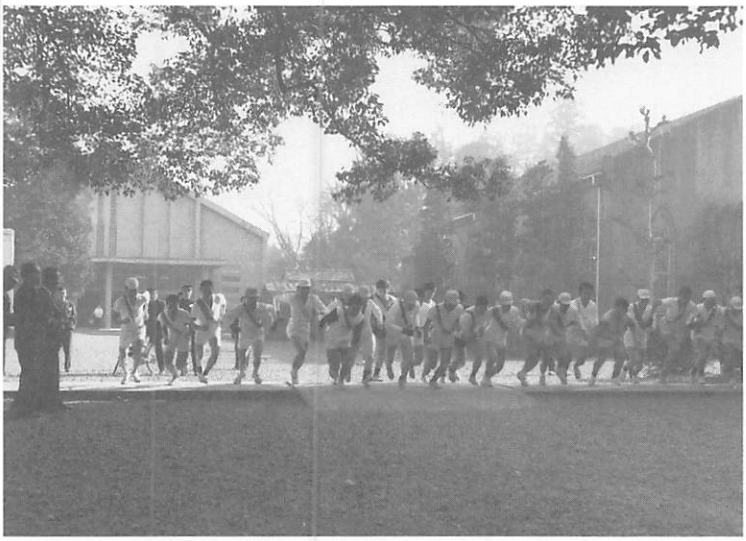
17(火)期末考査(～19日)
24(火)終業式
8・6(月)全校登校日
21(火)全校登校日
27(月)始業式
31(金)県民体育大会壮行式
9・3(月)自由作品展覧会(～4日)
14(金)模擬試験(～15日、国英数理社)
19(水)三年、適性検査
25(火)県民体育大会総合二位
27(木)三年、修学旅行(～10／1関西方面)
10・7(日)第四回秋季運動会
17(水)新校舎改築のため移転(～19日)
11・17(土)模擬試験(理社)
25(日)同窓会総会
12・8(土)期末考査(～11日)
18(火)全国駅伝、全国卓球大会　壮行式
24(月)終業式
1・8(火)始業式
12(土)模擬試験(～14日、理数英)
21(月)駅伝県優勝
2・1(金)三年、学年末考査
7(木)駅伝関東大会壮行式
3・6(木)第四回卒業式(川越会館)
11(火)入学志願者学力検査
25(火)終業式

川高フォト歳時記

校内駅伝・マラソン大会

川中時代から運動競技は盛んで、特に「走る」ことに関しては体育の授業はもとより、学校行事の中にも多く取り入れられた。

クラス対抗駅伝は今はないが、戦前の一万メートル競走は新入生歓迎マラソン大会、強歩大会と形を変えながら今に受け継がれている。

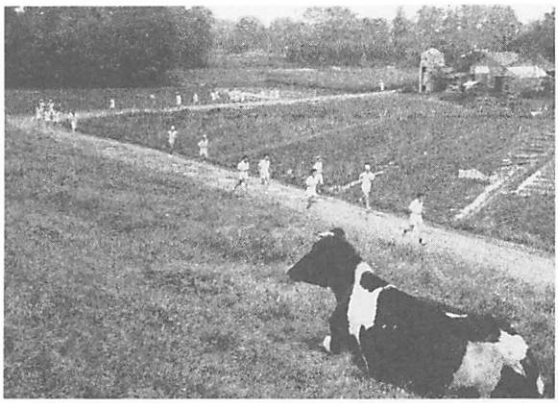


くすの木の下からクラス対抗駅伝のスタート（1963年）

伴走者とともに走る駅伝選手

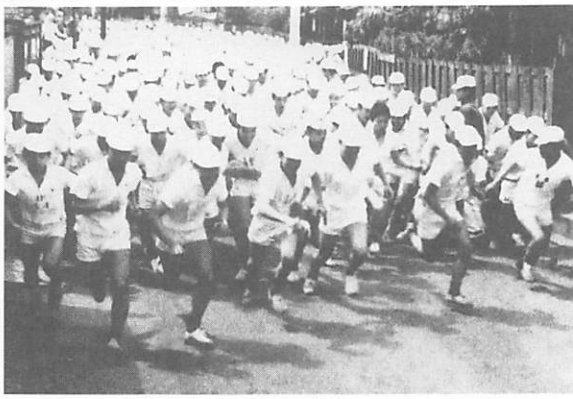
中継所でたすきを渡す

伴走者にはバイクに乗った生徒も



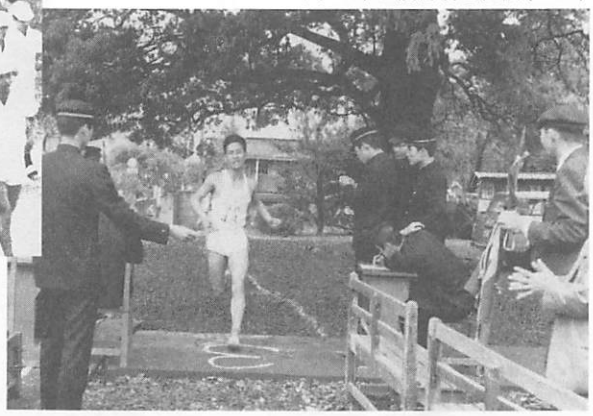
「モー疲れたよ」。まだまだ牧歌的光景が見られた(1965)

道を埋めつくして新入生歓迎マラソンのスタート(1963)



風物詩の一つとなった川高マラソン(1966)

ゴール！ くすの木が優勝者を祝福(1964)



1983年より強歩大会は奥武蔵グリーンラインで実施されるようになった

昭和27年

1952

高7回

新校舎が落成し、初めての「文化祭」が開かれる。

一九五〇(昭和二五)年六月、学区内市町村代表、PT会、後援会、同窓会、学校当局で川越高校改築協力会(会長奥平巧)が結成された。

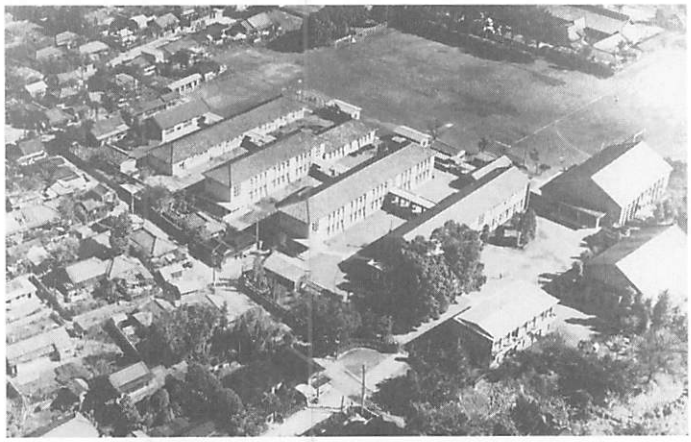
翌五一年二月、県会で予算二七八〇万円で校舎改築が承認された。全額県費支出ではなく、その四割の一一一二万円は地元負担であった。生徒一人あたり二〇〇〇円の寄付も集められた。

八月には、創立以来の旧校舎本館解体工事が始まり、生徒は講堂や武徳殿(現本丸御殿)などで授業を受けた。

朝鮮戦争の影響で諸物価が三倍近く暴騰し、鉄筋三階建の計画が木造二階建に変更された。

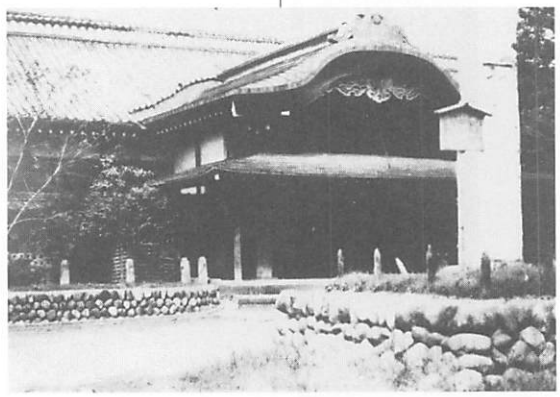
新校舎は本館～第四校舎の五棟。一九五一年十月に着工し、翌五二年十月に竣工。体育館は同年六月着工、十二月完成。

一九五三年二月十一日、新校舎落成祝賀式典および祝賀会が開かれた。



鉄筋三階建の予定が木造二階建となった新校舎

4・9(水)入学式
28(月)講和条約発効につきホームルームで伝達
5・2(金)全国戦没者追悼式のため黙禱
マラソン競争
10(土)模擬試験三年、二年希望者(英数国)
23(金)初雁球場開き
27(火)三年、三校時まで授業、後修学旅行に出発
28(水)開校記念日
6・9(月)中間考査(～11日)
13(金)バスケット、バレー関東大会出場　壮行式



武徳殿。校舎改築中に1、2年生がここで授業を受けた

日本▶もく星号墜落。血のメーデー事件。白井義男、フライ級世界選手権獲得。「君の名は」一世を風靡。
世界▶米、水爆実験。チャップリン、赤狩りを逃れスイスに永住。生きた化石、シーラカンス発見。

初めての「文化祭」開催

十一月十五～十六日、美術、書道、山岳、物理、図書の五つの部が参加して合同の展示発表会が行われ、一般にも公開された。この時初めて「文化祭」の名称が用いられた。文化祭の開催は、生徒の長年の夢の実現であった。

前年度の川高新聞第九号（一九五一・九・二〇発行）論説欄では、「学校祭を開こう」と、その早期開催を主張している。すなわち、一九五〇年の校友会座談会で「校友会各部がバラバラに発表会、展示会をやっている。まとめた方がよい」「学校祭をやりたい」という意見があったことを紹介したあと、おおよそ次のように述べている。

「文化部の活動は活発であるが、来年度予算獲得の実績づくりの為にやるという面がないか。部対部関係には敵視とはいえないまでも、反感に近い無関心がある。校内だけでなく川越の文化的たちおくれの克服、本校校友会の宗派心の一掃のためにも連合文化祭を開こう。戦前の学生の陥りがちだった非団結性が復活されるならば、権力を笠に着た非人間的団結が押し付けられるであろう。」

一九五一年九月十五、十六日には新しい試みとして、物理、化学、生物、放送の各部の合同展が開催された。川越の公民館、川越工場協会、川越市医師会、埼玉新聞社の後援を受け、会社、商店、市内小中学校の特別参加があり、一般にも公開されて好評であった。文化祭と呼んでもよい催しだが、まだ「文化祭」の名称は使われなかった。

駅伝、全国三位

十二月二十六日、大阪で行われた全国高校駅伝競走で、陸上部が堂々三位に入賞した。前年度全国六位を越える偉業達成だった。

一区木村昭夫、二区一萬田国彦、三区米山大恵、四区野口二三次、五区藤野隆司、六区東島太一、七区三上政雄のメンバーで熊本玉名高、長野松本深志高につぐ入賞であった。

大阪城を背景に全国駅伝三位のメンバー

7・6(日)同窓会総会
13(日)陸上(関東) 野球(県予選)
テニス(関東大会) 出場
8・6(水)全校登校日
22(金)始業式
9・12(金)模擬試験(数国英)
15(月)模擬試験(理社)
10・28(火)中間考査
11・8(土)第五回秋季運動会
15(土)文化部展覧会(～16日)
22(土)模擬試験(～24日、理社数国英)
12・5(金)表彰 県音楽コンクール二位、
駅伝県予選優勝
26(金)全国高校駅伝三位入賞
1・8(木)始業式
表彰 全国高校駅伝三位入賞
17(土)模擬試験(理社)
26(月)表彰 県下駅伝優勝
一年生武徳殿より引き揚げ
2・4(水)三年、学年末考査
7(土)予餞会
11(水)落成式(～12日、講堂)
23(月)関東駅伝優勝の報告
3・6(金)第五回卒業式
8(日)入学志願者学力検査
16(月)学年末考査(～17日)
25(水)終業式
23(月)二・三年、模擬試験(英数国)

昭和28年

1953

高8回

「進学生徒父兄会」が結成された。クラス対抗駅伝が始まった。

四月、PT会内に進学委員会を主体として「進学生徒父兄会」が準備され、五月、有志によって進学生徒父兄会が結成された。これは、大学進学実績不振への危機感によるものだった。一九五二年十二月の大学進学適正検査の成績は低下し、大学入試結果もおもわしくなかった。

旧制中学を経験している五一年、五二年卒業生はともに東大に八名合格。それが五三年には二名に減少した。しかも東大、一橋大などは、浪人生が優勢であった。浦和高の東大合格者も四二名から三四名、熊谷高も一四名から五名に減らしているとはいえ、その数は本校を上回っていた。

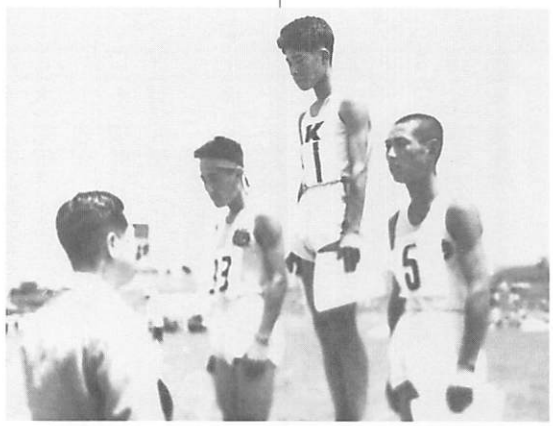
進学生徒父兄会を中心として、受験参考図書購入、模擬試験優秀者の表彰等の活動を行った。そのほかにも、夏季休暇課外授業を前年度より十日ほど増加し、一橋大学岩田助教授、早稲田大学高見教授を呼ぶなどしている。五月上旬より実施された課外授業は次のようであった。

一年　月曜英語三講座　水曜国語二講座
二年　月曜数学一講座　水曜国語一講座
　　木曜英語二講座　土曜英語一講座
三年　月曜数学三講座　水曜英語二講座
　　木曜国語二講座　土曜理科二講座
　　英語二講座

この年の入試結果は東京教育大学に一二名の合格者を出したものの、東京大学、一橋大学に各三名、東京工業大学に一名で、この三校への現役合格者はゼロという結果だった。私立大学でも、一〇名を超えたのは明治、中央、早稲田の三校だけであった。

以後一九五四年には同窓会が「向上賞」を与えるようになり、一九五五年度からは「特別クラス」が設置される。

4・8(水)始業式　入学式
9(木)対面式
16(木)三年、模擬試験(英数国)
21(火)三年、修学旅行(～25日)
5・2(土)新入生歓迎マラソン
10(日)同窓会総会
講演会「ソビエト平和攻勢の背景」NHK前田義徳氏
18(月)進学適性模試
6・9(火)中間考査(～11日)
7・15(水)期末考査(～17日)
24(金)終業式
8・7(金)全校登校日
15(土)全国高校陸上競技大会(～16



全国高校陸上競技大会5000㍍に優勝し表彰される木村昭夫(高6)

日本▶ NHKテレビ放送開始。伊東絹子、ミス・ユニバース3位。真知子巻大流行。奄美大島返還さる。
世界▶スターリン死す。エジプト共和国成立。朝鮮休戦協定。ヒラリーとテンジン、エベレスト初登頂。

駅伝で二年生上位独占

一九五一年全国高校駅伝六位、五二年同三位と県内敵なし。そして、この年八月には木村昭夫（高6）が全国高校陸上競技大会五〇〇〇㍍で優勝している。こうした勢いをうけてか、この年からクラス対抗駅伝大会が始められた。

めがね橋（現高沢橋）を元気に通過する選手たち

「寒さと困苦を克服して士気を高揚し協同責任友愛の精神を養い堅忍持久の心身を鍛える」という目的を掲げ、十二月二十一日、本校正門～武蔵嵐山往復六四㌔㍍のコースで行われた。コース明細は左記の通り。一九六四年に廃止されるまでの一一回、このコースで行われた。

一区、本校正門→名細中学校
二区、名細中学校→坂戸駅
三区、坂戸駅→高坂駅
四区、高坂駅→松山駅
五区、松山駅→唐子
六区、唐子→武蔵嵐山駅
七区～一二区は折り返しコース

競技方法はクラス対抗戦、各クラス一二名で競う。選手伴走付添は、自転車、自動車、ハイヤー等各クラスで自由に使用して気勢をあげてよかった。

結果は、優勝2E、二位2C、三位2Fと、上位を二年生が独占した。

＊

「大正元年特別大演習行在所」記念碑は、敗戦後玄関前に埋められていたが、一九五一（昭和二六）年に掘り起こされ、この年、現在地に移された。

日）五〇〇〇㍍で木村昭夫（高6）優勝
16（日）第一七代校長渡辺正紀氏就任
21（金）全校登校日
28（金）始業式
9・5（土）三年、二年希望者、模擬試験（数理社・英国、～7日）
10・13（火）第六回秋季運動会
23（金）中間考査（～27日）
11・1（日）文化祭、展覧会（～3日）
10（火）進学適性検査
29（日）斉藤栄三郎氏講演会
12・3（木）映画教室「世紀の祭典」
14（月）学期末考査（～16日）
21（月）学級対抗駅伝（川越～武蔵嵐山）
24（木）終業式
1・8（金）始業式
9（土）三年、二年有志、模擬試験
11（月）三年、二年希望者、模擬試験
25（月）早大高見教授講演会
29（金）熊谷女子高火災見舞（生徒五円、職員三〇円）
2・3（水）三年、学年末考査（～5日）
6（土）予餞会
28（日）入学志願者学力検査
3・7（日）合格者発表
10（水）第六回卒業式
15（月）学年末考査（～17日）
25（木）終業式

昭和29年

1954

高9回

生徒会会則が大幅改正された。

この年は生徒会発足から六年目、大きな変化があった。

まず四月二十八日代議員会が開かれ、生徒会規約の一部を改正し、第六条3項の校友会と生徒会の役員兼任禁止が撤廃された。

次いで生徒会会長、副会長選挙をきっかけに大きな改正が行われた。この選挙で二年B・E・F組から無資格立候補者があり（規約では会長、副会長は協議員に限られる）当選者一名が出た。選挙委員によれば、協議員会の推薦を疑わずにいたとのことである（川越高校新聞二四号）。また、立候補者の資格をチェックする学校側も、成績、欠席については行っていたが、協議員かどうかは見落としていた。

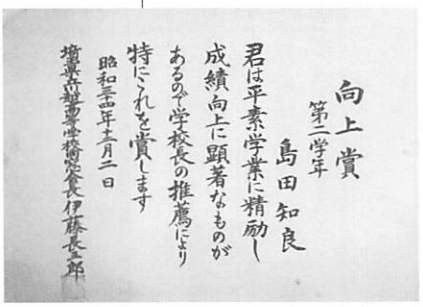
五月十七日、審査員会、協議員会は再選挙することを決めた。しかし、十八日の代議員会の協議の結果、次点繰り上げ当選に決定した。

十二月、協議員会に当選無効者を出した二年E組より「選挙に関する規約改正」要求が出され、生徒会規約改正委員会が設けられた。十七日第一回会合がもたれ、委員長、副委員長が選出された。原案作成に際し川越市内各高校・中学、浦和、松山、大宮、飯能高校等の会則を資料として収集した。第二回、第三回と討議を重ね改正案を決定し、一九五五年一月二十一日、生徒総会において承認された。

主な改正点は次の通りである。

第五条　会長、副会長の立候補資格が協議員のみから、全会員が立候補可能になった。

第六条　役員の資格制限、「前学年末の学科に欠点ある者、または欠席二十日以上の者は原則として役員になることはできない」はそのままで、「学校長が不適当と認



この年設置された向上賞の賞状
（写真は1959年度のもの）

4・8（木）始業式　入学式
13（火）一年、英語学力検査
19（月）アジア大会出場の斎藤博（高4）選手へ餞別（一人10円）
20（火）三年、修学旅行（～25日）
5・1（土）映画教室「山椒太夫」
9（日）同窓会総会
26（水）講演会　岩田一男一橋大助教授
28（金）開校記念日
6・8（火）中間考査（～10日）
7・2（金）壮行式　国体予選その他
10（土）期末考査（～13日）
14（水）家庭研修
15（木）壮行式　全国大会出場（テニス、陸上）
講演　浦和保護観察所横田所長
16（金）家庭研修
22（木）終業式

日本▶皇居一般参賀で死傷者でる。造船疑惑起こる。第五福竜丸ビキニ環礁で被爆。自衛隊発足。洞爺丸沈没。
世界▶ディエンビエンフー陥落。周恩来・ネルー、平和5原則宣言。プレスリー、デビュー。

めた者は原則として役員になることはできない」が新たにつけ加えられた。
第一四条　総会の開催が「代議員会が特に必要と認めた時および会員の過半数の要求があった時に開かれる」から、三分の一以上の会員の要求があれば開催できることが、協議員会にも認められ可能になった。
第二四条　審査員会は各学年より二名ずつ計六名選出が、第三、二学年より各三名ずつ計六名に変わった。
第三五条　会長、副会長、審査員の選挙を新学期四月末日までに行うというのが、前年度末（一月末）までに選出と変わった。これは選挙委員の総括の中で、「無効票が多く新入生などが学校になじめず、立候補者の性格も分からず投票が無理だ」という意見が多くあったための改正である。
新しい会則は「昭和三十年一月二十一日から実施する」とあり、会長、副会長、審査員選挙が一月三十一日に行われた。会長と審査員一名には前年無資格で立候補した者がそれぞれ当選した。

同窓会より成績向上賞

四月三日の同窓会常任幹事会で、懸案の「奨学金」問題が決着をみた。同窓会有志から会費を募り優秀生徒に奨学金を貸与する件は否決され、代わりに図書券と賞品を贈り、成績が向上した生徒を表彰することになった。
五月九日定期総会で一部、二部（定時制）生徒を対象にすることが決定された。全日制は二年生、三年生、定時制は二年生、三年生、四年生の中から、前年度の成績に比して、一学期の成績が著しく向上した者に「成績向上賞」として賞状、賞品（ノート）を与えた。人選は学校側に一任した。
第一回授与式は、体育館において山崎会長、北村副会長、岡村常任理事列席のもとに行われた。以後一九五五年度からノートに加えメダルが与えられた。メダルには「向上賞」「同窓会」の文字と年号を入れるようになった。
その後、一部に批判もあり、一九七一年が最後の向上賞授与になり、校長室前で授与式が行われた。
戦前には一九一五（大正四）年以来、校内に設置された大礼記念奨学資金によって、成績優秀な卒業生に優等賞や向上賞として硯等の賞品が贈られていた（76頁参照）。

8・8（日）全校登校日
21（土）全校登校日
30（月）始業式
9・16（木）国体、県大会出場者　壮行式
10・10（日）第七回秋季運動会
15（金）産業教育七十周年記念式典本校で開催（臨時休業）
25（月）中間考査（～27日）
27（水）映画教室「太陽のない町」
30（土）文化祭展覧会
11・4（木）講演会「文学を通しての良識」細田源吉氏
10（水）校内野球大会
12・21（火）校内駅伝（川越～武蔵嵐山）
24（金）終業式
1・10（月）始業式
14（金）地理映画（北大、井上修次教授解説）
28（金）一、二年、数学一斉テスト
2・2（水）三年、学年末考査（～4日）
3（木）講演　菅野力夫氏
5（土）予餞会
11（金）スキー教室出発（一、二年希望者、福島県沼尻）
15（火）二年、実力考査（数英国）
24（木）入学志願者学力検査
3・1（火）入学許可候補者発表
8（火）第七回卒業式
14（月）学年末考査（～16日）
24（木）終業式

昭和30年

1955

高10回

「特別クラス」が編成された。週五日制は六年間で幕。

この年四月の入学者より「特別クラス」が編成された。これは三一二名の入学者（六クラス）のうち、入試成績の上位者五〇名を選んで一クラスを編成するものである。このクラスと他の普通クラスの間には、授業時数や授業科目などの差はつけなかった。

大学進学が激烈を極める中で、旧制中学を経験した生徒たちが卒業するにしたがって、大学入試の成績もあまりかんばしくなくなっていた。

そこで、一九五三年には、三年生の生徒を持つ父母の間で「進学生徒父兄会」を組織して、進学生のために受験参考書を購入して図書室に備え、生徒の閲覧に供した。また、五四年、同窓会では「成績向上賞」を復活させ、全校生徒を鼓舞激励した。

学校側も対策に腐心しつつあった。有名大学への合格者数が、学校評価の基準とされるような時代の中で、五十年の伝統を持つ本校に対する地域社会の期待と要請は、しばしば重圧となって学校にかかってきたのであった。

こうした趨勢になかば同調しての新しい試みとして、「特別クラス」は設置されたのであった。だが、結果は必ずしも良好とは言えなかった。

「特別クラス」は学年ごとに入れ替えがあった。そのため、今度こそはA組（特別クラス）に入るぞと励みにする者もいた。しかし、クラスが孤立化したり、普通クラスとの対立の中で疎外感に悩む者も出て、学校生活に不快感をもたらすものとなった。父母の間にも微妙な対立感情が生まれた。

「特別クラス」は一九五七年度入学生まで続いた後廃止された。

4・8（金）始業式　入学式
11（月）三年、修学旅行（～16日）
22（金）一年、実力考査（英数国）
5・2（月）本日より日課表変更（八時十分始業）
7（土）新入生歓迎マラソン
8（日）同窓会総会
13（金）壮行式　学徒総合体育大会
16（月）模擬試験（～19日、国英数）
26（木）講演会「古代日本人の精神生活」國學院大学名誉教授植木直一郎氏
28（土）開校記念日
6・14（火）中間考査（～7日）
22（水）模擬試験（英国）
23（木）模擬試験（数）
29（水）壮行式　関東大会（体操、陸上）
7・8（金）期末考査（～11日）
12（火）壮行式　野球、陸上、テニス、卓球

この年の入学生が卒業時に贈られたバックル

日本▶砂川闘争起こる。初の原水爆禁止世界大会、広島で開催。日本住宅公団設立。石原慎太郎『太陽の季節』。
世界▶バンドン会議。ワルシャワ条約機構創設。アインシュタイン死す。ジェームス・ディーン自動車事故死。

週六日制に復帰

六年間続いた週五日制から週六日制へ復帰した。

週五日制は一九四八（昭二三）年度、実験的に浦和（大学進学を目指す）、久喜（家庭、職業、大学どこへもむく総合制）、杉戸（直ちに実業につく実業高校）の各高校で実施された。

同年十一月一日、埼玉県教育委員会が発足し、四九年新学期より本校をはじめ全県の高等学校に導入された。

五日制では、土曜日に授業を行わない代わりに、模擬試験、運動会、音楽会、映画鑑賞会などの学校行事を行ったり、学習およびクラブ活動などの計画を立てさせ、生活記録を提出させてこれを指導した。また、職員会議、教育研究会、学年打合会、校務分掌の部会等の会議を持ったり、生徒の家庭訪問にも当てられた。

しかし、一九五五年一月十七日、二月十一日の職員会議で五日制についての議論が交わされ、県からの指示もあり十五日に翌年度からの六日制への復帰が決定した。

二月十七日の朝礼で、校長から六日制への復帰について生徒への説明があった。そして、この日の放課後開かれた協議員会でも校長から補足説明が行われた。しかし、翌日の昼に各クラスの意見を持ち寄って開かれた協議員会でこの問題に関する生徒総会を二十一日に開催することが決定された。これを受けて、その日の三時から臨時職員会議が行われたが、生徒総会開催の必要はなしとされ、二十一日に学級主任から趣旨説明をすることになった。

六日制への復帰にあたって一部に反対署名もあったが盛り上がらなかった。逆に、六日制を実施するに際しての要望が二月二十三日、二十五日の協議委員会記録に残されている。

主なものとしては、土曜日のクラブ活動時間の保証と冬期の始業時刻を遅らせて欲しいというものである。

この要望を受ける形で、五五年四月二十六日の臨時職員会議で日課表の変更が議論され、夏の始業を早め冬の始業時刻を遅らせること（冬時間の導入）と、土曜日は朝のホームルームをなくして終業を早めることが決定し、五月二日の月曜日から実施に移された。

9・5（月）模擬試験（～9日、数理国英社）
19（月）壮行式　国体、県体出場者
20（火）二年、実力考査（数国英）
24（土）文化祭（～25日）
30（金）映画「暴力教室」の観覧禁止
10・3（月）能の解説と狂言鑑賞
9（日）第八回秋季運動会
11（火）台風25号で授業四限まで
11・8（火）講演会「気象と災害」
中央気象台予報部長　肥沼博士
16（水）模擬試験（英国数）
17（木）模擬試験（理社）
21（月）日課表変更（八時四十分始業）
25（金）新潟大火災に見舞金を贈る（生徒会総務費より）
12・22（木）クラス対抗駅伝
24（土）終業式
1・9（月）始業式
14（土）模擬試験（数社）
19（木）生徒会役員選挙
28（土）映画教室「佐久間ダム」（二年講堂、一年、ホームラン劇場）
2・4（土）予餞会（松竹館）
14（火）二年、実力考査（数英国）
24（金）入学志願者学力検査
3・1（木）三年、卒業式予行
映画教室「緑の魔境」
12（月）第八回卒業式
24（土）終業式

昭和31年

1956

高11回

運動場が拡張された。生徒の寄金で応援団旗作製。

体育館東側に陸上三〇〇㍍トラック、および一〇〇㍍直線コースを作り、バレーコート、籠球コート各二面を一〇〇㍍コースわきに新設。さらに野球のバックネットを約一〇㍍さげ、サッカーのゴールを移動式にする。その他運動部部室を新設するなど大幅な改良のための校庭整地が終わった。

野球部練習時の、陸上、サッカー部の不便が解消され、籠球部のアウトドア転出によって剣道、体操部の体育館使用の改善など、運動部の練習に関する不満解消に役立つ事になる。この工事で、濠埋め立て作業は、体育の時間に、生徒の労力奉仕によってなされた。

この運動場改良、拡張工事は、戦前の一九三六（昭和一一）年以来運動場（籠球コート二面、排球コート二面等）として使用していた土地を、地主から返還要求があったため、買収することから始まった。一九五四年五月、地主より返還要求があり、六月からPT会、後援会、土地買収委員会が交渉を開始した。七月、坪単価一三〇〇円で交渉が成立した。その後県教育長に買収申請書提出等、各方面への働きかけを経て、五五年八月、県費の支出をまたず地元寄付金と一時借入れ金で地主に全額支払いを終えた。

籠球部OB、五輪出場

この年十一月、メルボルンオリンピックが開催され、斎藤博（高4）がバスケットボールの代表選手に選抜され出場した。出場に際し川高から餞別をおくった。

斎藤博は旧制中学に入学し一九四九年、第一〇学年から籠球部に所属し、一九五一年度の部長だった。この間学徒大会で県優

4・9（月）始業式
10（火）離任式　新任式　対面式
11（水）一年、学力検査（～12日）
24（火）三年、修学旅行（～30日）
5・4（金）新入生歓迎マラソン
13（日）同窓会総会
14（月）模擬試験（～16日、英国数）
17（木）壮行式　バスケット（北関東大会）、体操（県大会）
23（水）進学激励会
28（月）開校記念日
6・2（土）中間考査（～5日）
9（土）進学激励会
18（月）進学講話赤尾好夫氏（川越女子

この年作られた、初代応援団旗

日本▶売春防止法公布。日ソ共同宣言。水俣病問題発生。日本の国連加盟承認。テレビ普及で「一億総白痴化」。
世界▶ナセル、スエズ国有化宣言。ソ連でスターリン批判始まる。グレース・ケリー、モナコ王妃となる。

勝二回と準優勝一回、県代表として北関東大会、関東大会出場、国体予選準優勝、インターハイ予選準優勝の成績を上げている。

卒業後立教大学に進み、在学中の一九五四年、フィリピンの第二回アジア大会に出場し三位に入賞した。その後日本鉱業に勤務しオリンピックはメルボルン、ローマ大会に選手として出場、東京大会ではコーチとして指導にあたった。

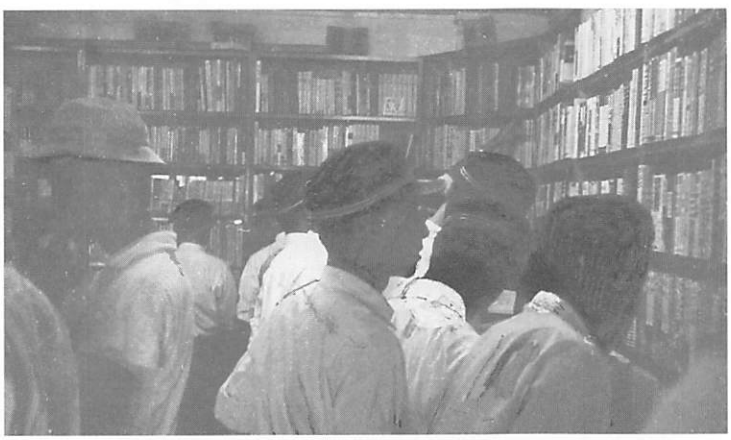
応援団旗作製

前年一九五五年に、応援団メンバーが校友会部長会議で推薦され、団長の3F大嶋吉康（高8）以下一〇名の団員で発足した。

この年生徒全員から、一人一〇円を徴収し応援団旗作製の費用にあてた。応援団は新聞部などと同じく生徒会総務に属し、応援団役員といわれていた。活動内容は、対外試合の際に生徒に応援のしかたを指導することなどだった。

図書館点描

独立図書館ができる前の本校図書館を見てみよう。文部省の「学校図書館基準」では閲覧室の収容定員を全生徒数の一割とし、面積は定員一人当たり〇・六六坪ということであるから、本校では約六〇坪が必要になる。ところが、実際は廊下、書庫を含めてわずか二八坪にすぎない。閲覧室だけだと一八・七五坪だ。六脚の閲覧用机と、三六脚の椅子を入れると通路の部分が狭すぎ、落ち着いて読書もできないという状態であった。


混雑を極めた狭い図書室

高講堂）
19（火）模擬試験（数国英）
27（水）講演会　学術会議議長茅誠司氏
7・2（月）二年、物理考査
9（月）期末考査（～11日）
20（金）終業式
9・1（土）始業式
5（水）模擬試験（～7日、英国数）
18（火）二年、実力考査（数国英）
28（金）三年、学力調査（国数）
29（土）文化祭（～30日）
10・15（月）第九回秋季運動会
20（土）中間考査（～23日）
25（木）壮行式　国体出場選手
11・15（木）模擬試験（～16日、英国数理社）
12・3（月）日課表変更（八時四十五分始業）
14（金）期末考査（～18日）
21（金）クラス対抗駅伝
1・8（火）始業式
14（月）模擬試験（英国理）
18（金）講演会　一、二年生、オリンピック報告と映画　中村体育課長、犬竹正雄（日本医科大学）氏
30（水）数学標準テスト
2・9（土）予餞会
24（日）入学志願者学力検査
3・7（木）卒業式予行
11（月）第九回卒業式
23（土）終業式

昭和32年

1957

高12回

映画「川高の一日」完成。川高生活見直しの議論高まる。

一九五三(昭和二八)年に映画部(内山啓司部長・高6)により映画撮影の計画がたてられた。内容は、校舎、体育館、講堂等の建物や、授業、課外学習状況、運動部、文化部の活動等、教職員生徒の学校生活全般にわたって撮影するというものであった。

予算は四万円程度、上映時間三十分(二巻)、サイレント、一六ミリフィルム使用。シナリオは教職員、生徒の希望を参考にして映画部でまとめ、撮影技師(製作会社から出張)に撮影依頼し、二学期早々生徒会が中心で制作を開始するものとし、制作費の一部は生徒全員の負担ということで、協議員会と職員会議の承認を得ていた。

この計画は途中で立ち消えになっていたが、この年の一学期中頃、映画部内で映画制作の話が再度具体化した。

安くあがる八ミリフィルムが出回るようになり、しかも市内カメラ店で撮影機を借りることができた。一学期の期末考査後に企画会議を開いた。内容は一九五三年のものとほぼ同じだが、事務職員、業務主事、パン屋等のシーンを加えることにした。

夏休み中にシナリオ・コンテを作り、二学期より撮影開始。九月二十日には現像所からフィルムが返送され、物理室でラッシュを見た。文化祭に間に合わせるため急いで編集し、二十六日終了した。

牧野教諭に選曲を依頼し、文化祭前日に録音が終了した。コーラスは音楽部。草稿なしのぶっつけ本番で渋谷教諭が解説をし、文化祭で上映した。

このときの映画部の顧問は小泉、渋谷の両教諭であった。部長は苗木盛二(高10)。副部長は栗原伸夫(高10)、秋葉俊雄(高11)だった。

4・8(月)始業式
10(水)三年、修学旅行(〜15日)
23(火)模擬試験(数国英)
5・4(土)全校マラソン
12(日)同窓会総会
13(月)三年、模擬試験(〜16日、数理社英国)
28(火)開校記念日
6・4(火)中間考査(〜7日)
8(土)進学激励会
19(水)三年、模擬試験(〜20日、数国英理社)
7・4(木)文化祭費 生徒一人一五円集金
10(水)期末考査(〜13日)
20(土)終業式
8・6(火)全校登校日
9・9(月)模擬試験(〜11日、英国数理社)
18(水)同窓会向上賞授与

映画「川高の一日」より、通学風景

日本▶南極観測隊、昭和基地設営。チャタレイ裁判有罪確定。愛親覚羅慧生、級友と心中。東海村原子炉稼動。
世界▶イギリス水爆実験。パグウォッシュ国際科学者会議。ソ連、人工衛星スプートニク1号打ち上げ成功。

予備校化を憂う川高新聞

この年は一九五五（昭和三〇）年から始まった一学年に一クラス「特別クラス」設置の三年目、つまり一年から三年まで特別クラスがそろっていた。「川越高校新聞」に、この問題も含め生徒会活動など学校生活見直しの議論が見られる。37、38、40号の記事を要約すると以下のようになる。

生徒会活動が不活発である。それは生徒が規約に無知であるだけでなく、様々な問題があるためである。HR活動は先生からの連絡時間になってしまい、HR長と、生徒会全体に関わる協議員が別のため、HR長が単なる「連絡係」になっている。協議員会も不活発である。生徒が関心をもつためには協議員会で決定するだけでなく、生徒総会を時には開催すべきだ。また、学校側も生徒側の提案を受け入れるべきで、拒否する場合は理由を明確にすべきだ。

生徒会役員は年度末まで三年生が活動の中心になっているため、受験などを理由に担い手がいなくなっている。クラブは二学期に一、二年生に交替しているのだから、生徒会も二年は文化祭、運動会を目指して活動を集中し、後期は二年に任せるか、都内進学校方式を見習って、役員選挙の時期を一月から十月へ繰り上げるべきだ。

校友会（部活動）には原則として一部以上加入であるが、実際は約二割が活動していない。入学直後の一年生も加入はしているが、勉強の妨げになると考えている。とくに、運動部には勉学軽視の傾向が見られ、練習が長すぎるため途中退部者が多くなる。運動部に入っても選手になりたい者ばかりではないのだから、専門にやる者と気の向いたときにやる者とに分けたほうがよい。

部に入らずに運動をやりたい者は多い。スポーツの校内対抗戦を多く行い、学校生活を活発化すべきだ。文化祭、運動会を一緒にして三日間の学校祭にし、最後の日は運動会にするのもよい。

特別クラスが、生徒会活動をある程度にぶらせている。特別クラスに反発して勉強しない者もいる。また、逆に特別クラスが萎縮している面もみえる。

そのほか、図書館利用が少ない、学年意識が低い等の指摘がある。放送施設充実の要望や、パン屋を生徒会運営にする、購買部を置く等の提案もある。

19（木）二年、実力考査（数国英）
21（土）映画教室「南極大陸」
27（金）全国学力調査、三年全員
28（土）文化祭（～29日）
30（月）テニス　関東大会優勝
10・10（木）「川高の一日」映写会
13（日）第一〇回秋季運動会
　関東合唱コンクール一位
16（水）戸田清氏講演会（三、四限）
19（土）中間考査（～23日）
　壮行会　国体出場選手
24（木）平岡忠次郎（中27）氏講演会（一年）
11・2（土）進学激励会
7（木）模擬試験（～8日、数国英理社）
12・2（月）日課表変更（八時四十五分始業）
13（金）学級増に関する懇談会
14（土）期末考査（～18日）
21（土）クラス対抗駅伝
1・13（月）模擬試験（～14日、英国数理社）
28（火）一、二年、実力考査（数国英）
　図書館上棟式
2・5（水）三年、学年末考査
13（木）予餞会（鶴川座）
14（金）数学標準テスト（一、二年）
3・2（日）入学志願者学力検査
11（火）第一〇回卒業式
14（金）学年末考査（～18日）
24（月）終業式

昭和33年

1958

高13回

独立図書館が完成し、開館した。

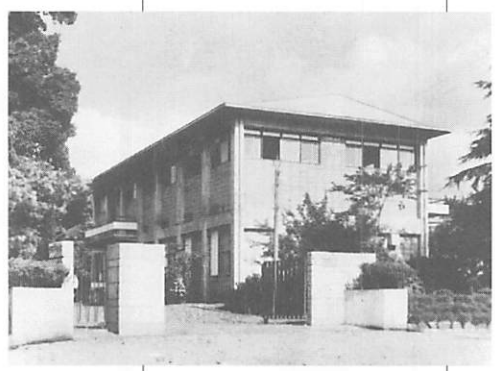
一九二一（大正一〇）年、第七代校長岡田恒輔（中1）によって創設された本校図書館「明治文庫」は、敗戦により大きな痛手をこうむった。占領軍総司令部（GHQ）の通達を受けた県民生部からの指令により、陸海軍諸学校関係書、武道関係の柔剣道書、修身・地理・日本史関係の生徒用参考書、教育勅語など皇室を中心とした書物等、およそ一〇〇〇冊が廃棄処分にされた。

図書館活動そのものは、戦後、本館の元忠霊室にて再開されていたが、狭くて不便な図書館であった。一九五一（昭和二六）年十月には校舎の改築が始まり、一九五三年二月には新築された本館二階の普通教室一教室分が図書室にあてられた。それでも、閲覧室におかれたのは机六台に椅子三六脚、書架に六三〇〇冊と書庫に二一二六冊の蔵書という小規模なものであった。開館は、土曜日が午後一時三十分まで、平日は一部（昼間）、二部（夜間）の運営が別々になされていた。

一九五三年八月には「学校図書館法」が制定され、すべての小・中・高等学校に図書館の設置が義務づけられた。これを機に高等学校の独立図書館設立運動に拍車がかかり、本校でも一九五六年四月に図書館建設委員会が設置された。委員会は豊岡高校や神奈川県立湘南高校などの先進図書館を視察し、準備を整え、翌五七年十一月二十九日に着工、五八年三月三十一日に待望の新図書館は竣工した。

総工費は七四四万九〇〇〇円（建物建設費六五一万三〇〇〇円、内部設備費九三万六〇〇〇円）であった。建物規模は鉄筋コンクリートブロック二階建、収容人数は、二階閲覧室が九〇名、一階は視聴覚室で一

4・8（火）始業式　入学式
15（火）三年、修学旅行（～19日）
22（火）一、二年英語テスト
24（木）模擬試験（数国英）
5・2（金）新入生歓迎マラソン
11（日）同窓会総会
15（木）三年、模擬試験（数英理社国）
27（火）図書館落成式
28（水）開校記念日
30（金）中間考査（～6／3）
6・14（土）進学激励会
17（火）模擬試験（～18日、数英国理社）
19（木）能楽教室
27（金）二年、実力考査（数国英）
7・2（水）映画一、二年鶴川座「アメリカ大陸横断」
9（水）期末考査（～12日）
14（月）数学講演会（二、三年）
15（火）進学激励会



最初の独立図書館

日本▶即席ラーメン発売開始。フラフープ大流行。一万円札発行。東京タワー（333m）完成。
世界▶アラブ連合共和国成立。EEC発足。ワールドカップ、ブラジル優勝、17歳のペレ大活躍。

〇〇名である（視聴覚室は教室不足のため、当分の間音楽室として使用された）。全館蛍光灯をつけて明るくモダンな図書館となった。蔵書冊数も一万三八〇〇冊で、名実ともに県下に誇る図書館となり、この年埼玉県学校図書館建築賞を授与された。

なお、この年新図書館とともに正門も改築された。

過渡期の修学旅行

この年の修学旅行は従来通り四月に実施された。翌年には四月に三年生が、また十一月には二年生が実施するという変則的なものであった。以後、大学受験を考慮し毎年二年生で実施することとなるのだが、ここで戦後の修学旅行を振り返ってみよう。

詳細は不明だが、戦後初の修学旅行は一九四七年に一泊二日で修善寺へ行った。

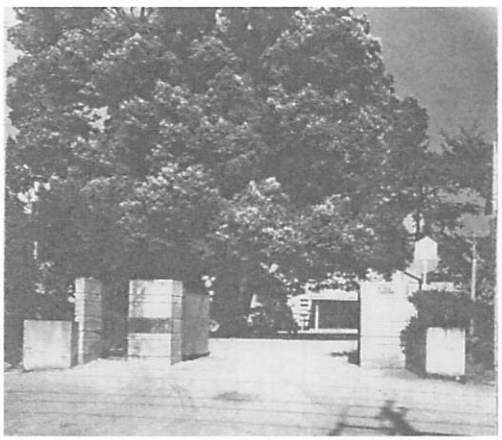
一九四八年度は、第十二学年が十月二十九日から一泊二日の日光修学旅行を行い、中宮祠に宿泊した。主食の米五合持参だった。

一九四九年度は、第十二学年の修学旅行が二班に分けて行われた。A班は奈良、京都方面。生徒九四名、付添教諭三名の参加で十一月二日から五日の三泊四日。費用は二〇〇〇円。B班は日光方面で十一月三日から一泊二日、費用は六〇〇円。米五合持参だった。生徒二一名、付添教諭二名が参加した。全員参加ではなく、A組からE組まで二〇五名中九〇名が不参加だった。

一九五〇年度は、二年生が十月に日光方面、三年生は十一月に関西方面に出掛けている。

一九五一年度の修学旅行は三年生が九月二十七日から十月一日まで関西方面へでかけた。

一九五二年度からは、一学期に早められた。


大谷石をつかった第4代目の正門

8・6（水）登校日
21（木）登校日
9・1（月）始業式
9（火）模擬試験（英国数理社）
18（木）台風のため臨時休校
19（金）一、二年実力考査（数国英）
27（土）文化祭（～28日）
10・12（日）第一一回秋季運動会
20（月）中間考査（～23日）
11・8（土）進学激励会
12（水）模擬試験（理社数）
13（木）模擬試験（英国）
24（月）講演会「インドの所見」榎一雄氏（東大）
12・1（月）日課表変更（八時五十分始業）
6（土）演劇鑑賞会　新制作座「青春」
16（火）期末考査（～19日）
22（月）クラス対抗駅伝
1・8（木）始業式
13（火）模擬試験（～14日、理社数英国）
2・6（金）三年、学年末考査（～10日）
11（水）予餞会（松竹館）
13（金）一、二年、数学テスト
14（土）一年、数学テスト（幾何）
19（木）一、二年、実力考査（数英国）
3・1（日）入学志願者学力検査
10（火）第一一回卒業式
13（金）学年末考査（～17日）
24（火）終業式

昭和34年

1959

高14回

野球部夏の甲子園初出場、創立六十周年を飾る！

六十周年記念式典が九月二十六日に行われた。式典は旧講堂において、栗原浩知事、田中重之教育委員長、綱島憲次教育長、染谷清四郎（中8）県議、伊藤泰吉（中17）川越市長、PT会、同窓会関係、岡田恒輔（中1）元校長、ほか多数が列席し挙行された。

式典の後、本館前で記念撮影をし、講堂わきに〝ゆずりは〟を植樹した。その後、講堂で教職員生徒一同、漫才、落語を鑑賞した。午後には、体育館で祝宴が開かれた。記念品として生徒職員全員に記念手ふきが配られた。

記念行事として、別に二十六日から二十八日まで三日間にわたって文化祭が行われた。川高生徒の作品展示、研究発表のほか、西部地区の小中学校の書道展参加もあった。

また、同窓生、山崎嘉七（中7）、岡田萬雄（中1）より図書の寄贈があった。

第41回甲子園大会に出場

一九三一（昭和六）年春以来二十八年ぶりに、野球部は甲子園に出場した。部長大久原秀雄（中44）教諭、監督家村相太郎（中34）、主将横田芳明（高12）のこのチームは、埼玉県大会の全試合に完封勝ちし、西関東大会に出場した。埼玉県内大会の戦績は次の通り。

一回戦	シード		
二回戦	対春日部	10	対0
三回戦	対大宮工	2	対0
四回戦	対川越商	2	対0
準決勝	対川越工	2	対0
決勝	対鴻巣	1	対0

西関東大会の決勝戦は、七月三十日山梨県の甲府球場で行われ、甲府工に2対1で勝ち甲子園出場を決めた。八月六日登校日

4・8（水）始業式
10（金）皇太子結婚　休校
11（土）三年、修学旅行（～16日）
14（火）一、二年、英語テスト
27（月）三年、模擬試験（数英国）
5・4（月）新入生歓迎マラソン大会
8（金）野球部関東大会出場（甲府）
10（日）同窓会総会
28（木）開校記念日
29（金）中間考査（～6／1）
7・8（水）期末考査（～11日）
14（火）映画教室「バイキング」（松竹館）
進学激励会
15（水）テニスコート作成作業（～17日）
8・6（木）登校日　甲子園出場壮行式
応援団結成（職員8、生徒60）
21（金）登校日
9・1（火）始業式
10（木）三年、模擬試験（～11日、数国英理社）

甲子園出場
必勝うちわ

日本▶尺貫法廃止。皇太子結婚。伊勢湾台風で死者5041名。安保改定阻止国民会議結成。レコード大賞創設。
世界▶キューバ革命。チベット、対中国反乱ダライ・ラマ14世インドに亡命。キャンプ・デービッド会談。

に職員八名、生徒六〇名の応援団（団長・鈴木実・高12）を結成、甲子園では、たいこ、笛、ラッパ等鳴り物入りで応援を行った。

代表二九チーム中ブラスバンドの無いチームは川越高校ほか一校のみで、さみしい思いもした。埼玉県下でもこの年からブラスバンドの応援が認められるようになっていたため、設置を求める声が上がり、三年後の一九六二年に吹奏楽部が誕生する。

八月十一日の初戦、鎮西高校には3対1で勝ったが、十五日の対高知商戦は0対1で惜しくも敗れた。

←入場行進

熱戦に応援にも熱が入る

甲子園大会出場選手

			学年
監督		家村相太郎	
部長		大久原秀雄	
主将		横田　芳明	
背番号			
1	投手	吉田　富保	3
2	捕手	高野　栄作	3
3	一塁手	飯島　　弘	3
4	二塁手	内沼　　稔	3
5	三塁手	横田　芳明	3
6	遊撃手	近藤育三郎	3
7	左翼手	宮根　七郎	3
8	中堅手	杉田　文男	3
9	右翼手	嶋本　正雄	2
10	控え	渡辺　文士	3
11	〃	山崎　　公	3
12	〃	高　　正保	2
13	〃	田中　誠治	2
14	〃	矢幅　宏至	2
15	〃	中島　栄紀	2
16	〃	並木　紀文	2
17	〃	成田　　純	2
18	〃	高松　康正	2

16（水）一年、実力考査（数国英）
20（日）県体会総合三位
26（土）文化祭（～28日）
創立六十周年記念式典
30（水）講演「学校一般について」
（九大　手塚氏）
10・3（土）伊勢湾台風見舞金一万円朝日新聞社へ（生徒会）
11（日）第一二回秋季体育祭
18（日）関東高校音楽大会優勝
23（金）中間考査（～27日）
11・9（月）三年、模擬試験（～10日、理社）
12（木）二年、修学旅行（～16日）
27（金）講演「現代の絵画について」
秋保正三氏（二紀会会員）
12・15（火）期末考査（～19日）
1・8（金）始業式
12（火）模擬試験（～13日、数国社英理）
2・5（金）三年、学年末考査（～9日）
給食室上棟式
11（木）予餞会（松竹館）「なぐりこみ海兵隊」「ホモーク討伐」
12（金）一、二年、数学標準テスト
（二年、数II　一年、代数）
16（火）数学標準テスト（一年、幾何）
3・1（火）入学志願者学力検査
5（土）映画教室「十戒」
10（木）第一二回卒業式　謝恩会
15（火）学年末考査（～18日）

昭和35年

1960

高15回

給食室が完成、うどん25円。

四月二十日給食室が完成した。スレート葺木造平屋、調理室一五坪、食堂および付属施設二六坪、計四一坪であった。内部備品費も含め工事総額は二〇八万円だった。調理室しか県費の補助対象にならず、一二六万円は地元負担に頼らねばならなかった。

ちなみに、うどん一杯二五円だった。

その後、定時制生徒の給食希望者が増加して食堂が手狭になり、給食実施を二回に分割してもなお収容しきれないため、一九六五年九月に工費六五万円で一五坪分の増築がなされた。

この給食室は、一九八六年に通称「谷間の新館」に移るまで存続した。

熊谷高校との定期戦始まる

六月十一日熊谷高校新聞部が来校し、定期戦の予備交渉が始まった。熊谷高校の生徒会長が「他校との交歓会をもつ」を選挙公約とし、それを実現するためだった。ついで六月二十七日熊谷高校から、生徒会代議委員会決議にもとづく正式な交歓会開催申し込みがあった。

七月一日熊谷高校生徒会顧問と幹部数名が来校し、食堂で定期戦の細部を検討した。

一、交通手段は訪問する側が考える。

二、開催費、たとえば物品借用費、破損修理、消耗品代などは、開催校がもつ。

三、士気を高めるため両校校長盾をつくる。

四、運動部は交流試合。文化部は活動紹介などの交歓を行う。その他、クラブ未所属者の扱いなども検討した。

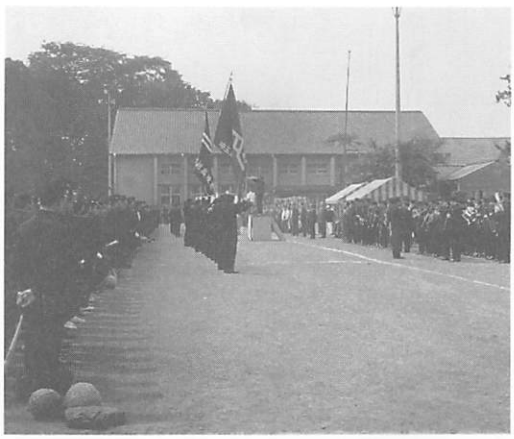
川越高校では七月十二日放課後、生徒総会を開き開催を決定した。

九月十二日、川越高校を会場に第一回交歓会が開かれた。当日は雨のため野球、庭

4・8(金)始業式　入学式
5・8(日)同窓会総会
17(火)PT会総会　理科教室建築について寄付金議決
28(土)開校記念日
30(月)中間考査(〜6／2)
6・13(月)給食室にてパン販売始める
20(月)二年、実力考査(数国英)
21(火)講演「南極観測」朝日新聞記者大塚堯氏
25(土)学校安全会法についての説明
7・8(金)期末考査(〜12日)
16(土)艦艇乗船についての希望調査
20(水)終業式
8・5(金)全校登校日
20(土)全校登校日
9・10(土)旺文社全国模試
12(月)熊高との交歓会
15(木)三年、模擬試験(〜16日、理社英)

新装なった給食室

日本▶安保闘争激化。山谷で暴動。浅沼委員長刺殺さる。チリ地震で三陸に津波被害。ダッコちゃんブーム。
世界▶フランス原爆実験。韓国反政府デモ、李承晩大統領辞任。アメリカで避妊薬ピル解禁。


第1回の定期戦を前にエールの交換をする両校

球、陸上が中止になった。排球、籠球、剣道、柔道、卓球、弓道、水泳、サッカーの試合が行われ、総合成績は4対4の引き分けだった。優勝盾は半年間ずつ川高、熊高の持ち回りとなった。

以後奇数回は川高、偶数回は熊高で第一〇回まで開催された。通算成績は本校の四勝五敗一分けだった。

クラブ活動が授業に

五月から二週に一度、正規の授業時間にクラブ活動時間を組み込むこととなった。放課後課外講習のために、クラブ活動ができないことと、クラブ未加入者をなくすという目的のほか、とくに文化部の部員と顧問の緊密化を図ること、週一回のロングホームルームが低調であるためその時間をうめるというねらいもあった。

校友会会則第三条には全員加入が義務づけられていながら実際の未加入者は二～三割もいた。未加入者が多い原因として、練習に耐えられない、友人関係がうまくいかない、受験勉強に専念したいなどを理由とした途中退部者が多いことがあった。

授業時間にクラブ活動を組み込む、いわゆる必修クラブは、一九七三年の指導要領改訂以降全国的になる。

海上自衛艦「ありあけ」見学

八月八日、生徒、教師、保護者五三名が横須賀の海上自衛隊基地に招かれた。自衛隊埼玉地方連絡部が県内の生徒などを招待したもので、二時間ほど房総方面を警備艦「ありあけ」で回り、その後横須賀に戻り、近くの馬堀海岸で海水浴を楽しんだ。

この前後、自衛隊の求人活動は活発で、川越高校でも自衛隊の講演会などが行われている。

10・16(金)一年、実力考査
1(土)文化祭(～2日)
5(水)海上自衛隊の講演「世界の航空機情勢と我が国の航空状況について」
9(日)第一三回体育祭
21(金)中間考査(～25日)
11・1(火)三年、模擬試験(～2日、国数英)
5(土)二年、修学旅行(～10日、関西)
17(木)校内対抗球技大会(各種)
21(月)日課表変更(九時始業)
12・12(月)学期末の生徒の家庭研修は今学期より廃止することを伝達
期末考査(～14日)
19(月)クラス対抗駅伝
20(火)映画教室「カルタゴ」(松竹館)
24(土)終業式
1・9(月)始業式
16(月)三年、模擬試験(社数英)
17日(国理社)
2・9(木)予餞会　映画「独裁者」(松竹館)
16(木)一、二年、実力考査(数国英)
3・1(水)入学志願者学力検査
10(金)第一三回卒業式
13(月)学年末考査(～16日)
24(金)終業式

昭和36年

1961

高16回

NHK「青年の主張」で全国優勝。三学年に文・理コース始まる。

第八回NHK青年の主張全国コンクールで、弁論部の二年、山川一陽（高15）が優勝した。

十一月十八日浦和市自治会館で行われた埼玉県予選を通過、十二月二日新潟県長岡市厚生年金会館で行われた関東甲信越大会で優勝し、全国大会出場を果たした。

全国大会は一九六二年一月七日午後一時から東京の産経ホールで行われた。全国各地区代表一〇名中、高校生は二人だけであり、山川は最年少だった。課題は「現代における青年の役割」「青春のよろこび」「あすの社会を築くため」の中から選ぶことになっていた。

山川は「あすの社会を築くため」を選び、修学旅行の問題を盛り込んだ「民主主義の原理」のタイトルで優勝した。

その模様は一月十五日午後一時からNHK総合テレビで放映された。

文・理コース作られる

旧制中学時代の一種・二種コースを除くと、川越高校では一九四八年の新制高校発足以降コース分けはなかった。この年初めて三学年に文・理コースが設けられた。

一九五六年の教育課程改訂の後、生徒のカリキュラムへの関心も高まり、一九五九年九月の「川越高校新聞」には、次のような投書（要約）も載った。

「僕の受験に関係あるのは英語、国語だけ。しかし、三年全員に数学六、理科五、社会五単位が必修科目である。調査書重視のため全教科に力を入れなければならないが、東大、京大は別にして、受験科目の少ない国立、私立もある。負担を減らすため文科、理科に分けてほしい。」

4・8（土）始業式
10（月）入学式
11（火）県下一斉新入生英語テスト
25（火）三年、模擬試験
5・2（火）新入生歓迎マラソン
14（日）同窓会総会
24（水）熊谷高校との交歓会（第二回）
28（日）開校記念日
30（火）中間考査（～6／2）
6・15（木）服装検査（～26日）
28（水）模擬試験（国英数）
29（木）模擬試験（理社）
7・7（金）期末考査（～11日）
20（木）終業式
8・4（金）登校日
21（月）登校日
9・1（金）始業式
5（火）一、二年、実力テスト（数国英）
15（金）模擬試験（国数社）
30（土）文化祭（～10／1）
10・3（火）第一四回体育祭

第8回 NHK「青年の主張」全国コンクール優勝の賞状

日本▶柏鵬時代幕開け。釜ヶ崎で大暴動。小児マヒ大流行。全国中学一斉テスト実施。「風流夢譚」事件。
世界▶ソ連ガガーリン少佐、有人宇宙飛行に成功「地球は青かった」。東ドイツ、「ベルリンの壁」を設置。

文・理コースの設置は、こうした声に対応する意味あいもあったのかもしれない。

文化祭で新しい試み

第一四回文化祭は九月三十日、十月一日の二日間行われた。このころは生徒会役員と文化部の部長が中心になって企画を立て、とくに文化祭実行委員会は設けていない。二学期の初めに本部役員会議、文化部部長会議、協議員会が開かれ、部屋割りその他の大枠が決定された。

プログラム作成、案内状作成・発送、暗幕調達などは本部役員が引き受けている。これまで無規則だった文化祭準備のための宿泊を一クラブ五名に制限し、名簿を提出させ、この年初めての試みとして、文化祭前日の夜と翌日の朝食を食堂に依頼した。夜はカレーライス六〇円、朝食は米飯とみそ汁で五〇円だった。また、この年初めて前夜祭で山岳部が中心になり、校庭でかがり火を焚き、参加者全員で合唱した。

女子高との交流会

音楽部は浦和第一女子高校音楽部の申し入れに応じて、夏季休業中の八月十八日長瀞「青年の家」で交流会を行った。

午前十一時浦和第一女子高校の合宿先に到着。挨拶、交歓合唱の後、浦和一女生徒の作った料理に舌鼓をうち、午後は卓球、庭球などや、室内ゲーム、フォークダンスを楽しみ夕方五時ごろ閉会した。

また、生物部は川越女子高と、これも夏季休業中に向原、中台山、大野原の各所で共同採集を行うとともに、コーラス、西瓜割りなどを楽しんだ。

長瀞「青年の家」で行われた浦和一女との音楽部交流会

9(月)自衛隊　映画と講演
19(木)講演「英国人気質」日経経済部次長黒川洸(中41)氏
24(火)中間考査(～26日)
11・1(水)模擬試験(数国理)
2(木)模擬試験(英社)
11(土)無帽、サンダルばき検査
12(日)修学旅行(～17日)
20(月)日課表変更(九時始業)
12・11(月)期末考査(～12日)
18(月)映画教室「オリンピック1960」(松竹館)
19(火)駅伝(川高～嵐山駅)
23(土)終業式
1・7(日)山川一陽NHK青年の主張全国大会で優勝
8(月)始業式
16(火)模擬試験(～17日)
2・3(土)三年、学年末考査(～7日)
6(火)一、二年、実力考査
9(金)予餞会　映画「ベン・ハー」(～10日)
14(水)数学標準テスト(一、二年)
16(金)数学標準テスト(一年、幾何)
23(金)流感のため十時始業(～27日)
3・1(木)入学志願者学力検査
9(金)第一四回卒業式
13(火)学年末考査
24(土)終業式

昭和37年

1962

高17回

鉄筋コンクリートの理科棟が完成。文化祭の全定合同開催定着へ。

旧第二校舎跡地に新理科教室（理科棟）が完成した。本校初の鉄筋コンクリート三階建。一階化学、二階物理、三階生物のそれぞれ講義室、実験室、研究室、準備室からなっていた。そのほか普通教室が各階に二教室あった。このとき要望の強かった校内放送施設もあわせてできた。十一月九日竣工記念式典が行われたが、二、三不備な点があり使用は半月程度遅れた。

一九五二年の校舎全面改築以来、特別教室改築と普通教室増設が必要とされていた。渡辺前校長の時、計画が立てられ、PT会役員の議決を経て県議会など各方面への要請運動が展開された。

一九五九年十二月県議会において「請願」は採択されたが、予算化するまでには至っていなかった。PT会役員中心に「理科教室建設促進会」を結成し、県議会議員などに働きかけた。

一九六一年の当初予算では見送られたが、九月県議会で建築予算四五三〇万円が議決された。そのうち地元負担として一六二〇万円が必要であった。最初は理科教室のみの予定で、銀行よりの借り入れ金一〇〇〇万円をあてるはずだったが、生徒急増対策として普通教室が加わったため、負担金が増え、関係市町村の協力を仰ぐことになったのである。

一九六一年十二月着工。第四校舎と校長公舎を撤去しその跡地へ第二校舎を移転させた。三学期、二年生の一部クラスが三年の教室を、一年の二クラスは講堂をベニヤで区切って仮教室とし使用した。

全定合同で文化祭開催

九月二十九、三十日の文化祭は定時制か

4・9（月）始業式
11（水）県下一斉英語テスト（一年）
25（水）模擬試験（国数英）
5・1（火）一、二年、実力考査（国数英）
2（水）新入生歓迎一万メートル競争
13（日）同窓会総会
25（金）熊谷高校との交歓会
28（月）開校記念日
6・1（金）中間考査（～5日）
15（金）一年、知能テスト半日実施
7・6（金）期末考査（～9日）
11（水）映画教室「駅馬車」「荒野の決闘」（松竹館）
20（金）終業式
8・8（水）登校日
21（火）登校日（進学激励会）
9・1（土）始業式
4（火）一、二年、実力考査（国数英）
6（木）第一回水泳大会（～7日）
17（月）模擬試験（国数理）

理科棟竣工記念の祝典で配布されたパンフレット

日本▶三河島事故。堀江謙一、ヨットで太平洋横断。サリドマイド販売中止。東京の人口1000万人突破。
世界▶マリリン・モンロー謎の急死。キューバ危機、ソ連のミサイル基地建設に対しアメリカ海上封鎖で応酬。

らの申し込みにより合同文化祭となった。

期間中授業ができないこと、定時制の文化部も発表に参加したいなどがその理由だった。これを受け、九月三日の協議員会で合同開催が決定された。全定合同は以前に五十周年記念の時と図書館建設時に行われ、これが三回めであった。開催時間については、全定間で意見に大きな開きがあった。定時制は午後八時半までを主張したが、第一日目は七時まで、第二日目は四時半までと決定した。定時制との連絡は文化部各部長がそれぞれ行った。

前年度から始まった給食も用意され、前夜祭が行われた。前年の山岳部単独指導から、JRC、応援部が加わり、かがり火、合唱を行った。

校舎建設中のため中央通路が使えず見学コースに混乱が起き、早めに終えたためか、定時制側の参加は少なかった。

合同開催スタイルは、現在恒例になっている。

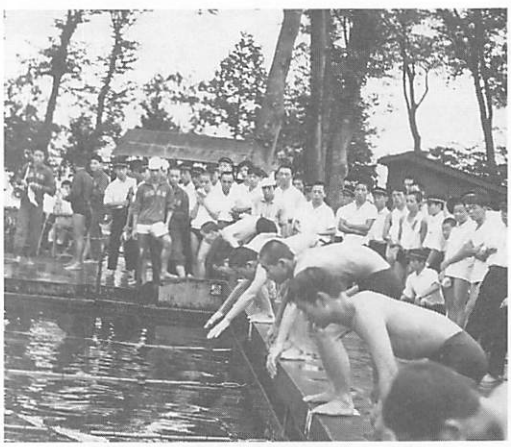
吹奏楽部、結成される

一九五九年野球部の甲子園出場を機に、結成が目指されていた吹奏楽部が十月三日誕生した。音楽教育促進のための県費三〇万円を得て、トランペット、トロンボーンなど一八の楽器を購入した。顧問は松本成二教諭。部員は一六名。ただしこの年度は生徒会からの予算はついていない。

第一回水泳大会開催

全校生徒が参加する本校初めての水泳大会が、九月六、七日に水泳部主催で市営初雁プールで行われた。

種目は二五㍍、五〇㍍の背泳、自由形、平泳ぎと四〇〇㍍リレーであり、クラス対抗は3Aが優勝した。


市民プールで開かれた水泳大会

29(土)全定合同文化祭(〜30日)
10・7(日)第一五回体育祭
22(月)中間考査(〜24日)
25(木)航空に関する講演と映画
26(金)自衛隊による体験飛行(二名)
30(火)学力調査(文部省)三年生全員(数学Ⅰ)
11・1(木)模擬試験(英数社)
7(水)球技大会
9(金)理科棟竣工式(記念手拭い配布)
12(月)修学旅行(〜17日)
16(金)日課表変更(九時十分始業)
12・11(火)期末考査(〜14日)
17(月)映画教室「禁じられた遊び」「若草物語」(松竹館)
19(水)校内駅伝大会
24(月)終業式
28(金)スキー講習会(於草津温泉スキー場、〜30日)
1・8(火)始業式
2・4(月)三年、学年末考査(〜5日)
5(火)一年、実力考査
8(金)予餞会映画「スパルタカス」(川越スカラ座)
3・1(金)入学志願者学力検査
9(土)第一五回卒業式
12(火)学年末考査(〜15日)
23(土)終業式

川高フォト歳時記

文化祭は今も昔も女子高生で華やぐ（1956）

大きなマイクで放送部の研究発表（1956）

日本映画全盛期。映画研究部の展示にも力が入る（1961）

「くすのき祭」の前身は「文化祭」（1958）

弁論部主催の関東高等学校弁論大会。文化祭にあわせて開催された（1963）

晴れて女子高生と手が握れるフォークダンス（1967）

郷土部の展示も手が込んでいる（1962）

文化祭・くすのき祭

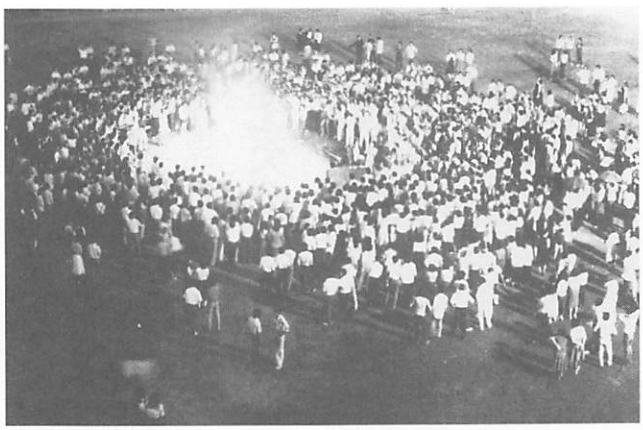
川中時代から盛んであった文化活動も、戦後しばらくして「文化祭」という形で発表、展示の場が与えられる。「くすのき祭」という名称は、第二二回（一九六九年）から使用しており、弁論部が高校生弁論大会を主催するなど硬派な内容であったが、一九七〇年代を境に次第にイベント中心のお祭的要素が増してくる。

最近では世界の建造物を模した門と水泳部のシンクロナイズドスイミングが呼び物となっている。

「くすのき祭」と銘うって２回目の文化祭（1970）

グループサウンズの影響が見られる（1968）

70年代中頃からのれん街が祭の雰囲気を盛り上げる（1975）



後夜祭。フォークダンスの輪がひろがる（1978）

のれん街とステージで賑わう中庭（1988）

中庭。後夜祭ステージの電飾も年々凝ったものに（1987）

昭和38年

1963

高18回

新一年生史上最多の五三九名、初めての10クラス編成となる。

第一次ベビーブームの世代が高校入学を迎えたため、第一学年の定員が、臨時学級増二クラスで、五〇〇名になった。実際の入学者は五三九名で、川高史上最多（第二次ベビーブームの一九八六年は、クラス定員四五名のため一一クラスとなったが入学者は五二九名）となる。

三年六クラス、二年八クラス、一年一〇クラス、全校生徒数一二七〇名。以後、一九六六年度まで一学年一〇クラス、全校三〇クラス体制が続く。

生徒増加のため、東武東上線の増発、増車陳情を行ったが実現しなかった。新入生歓迎マラソンのスタート地点も、本校近辺の三か所に分け、コースも、芳野農協前→入間大橋→芳野小学校→本校に変更された。

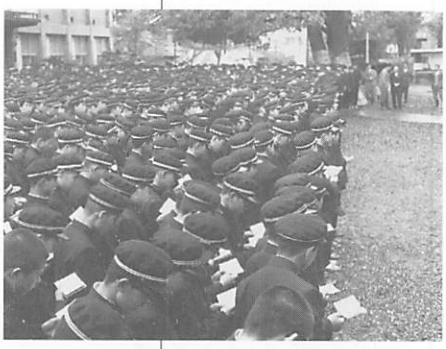
また、この年は川越市内でパーティー券の押し付け、恐喝などが頻繁に起こり、本校生徒も被害にあったりした。そのため警官と教員が付き添って生徒を下校させたり、街頭補導も実施された。十一月には暴力的不良行為防止条例が施行された。

校内でも盗難の記事が教務日誌に目立つようになり、職員室での盗難を含め一〇回前後の記述が見られ、一九六四年二月には職員朝会で問題にされている。盗難はその後も減らず一九六五年度には、予防のため貴重品袋の使用が始まった。

生徒会会則改正される

今回の生徒会会則改正は、一九六二年の吹奏楽部と航空部新設が発端になった。航空部が生徒の要請で、しかも一年間の同好会を経て部として承認されたのに対し、吹奏楽部はとくに生徒からの要請のないまま学校側提案で協議員会、部長会の承認によ

4・8（月）始業式　入学式
5・12（日）同窓会総会
16（木）PT会総会
28（火）開校記念日
30（木）中間考査（～6／3）
6・5（水）熊高との交歓会
22（土）春日部高校生徒会からの生徒会連絡会設置の申し入れを拒否
25（火）オリンピック募金一人一〇円
7・6（土）期末考査（～10日）
15（月）水泳訓練
20（土）終業式
8・1（木）一年、登校日
12（月）二年、登校日
21（水）三年、登校日
9・2（月）始業式



川高史上最多の新1年生
（校歌練習風景）

日本▶吉展ちゃん事件。力道山刺殺さる。狭山事件起こる。松川事件被告全員無罪。「草加次郎」世間を騒がす。
世界▶ケネディ米大統領、ダラスで暗殺される。世界初の女性宇宙飛行士テレシコワ、「私はカモメ」。

って成立した。そのため決定機関であるべき協議員会、総会のあり方が問題にされた。

十二月に各学年四名、計一二名からなる改正案起草委員会が作られ、翌年一月に草案がまとまった。三学期中、協議員会で数回にわたって草案審議がなされたが、学校側の改正案ができるまでの間、審議はストップをかけられた。

生徒会起草委員会の草案の概略は次のとおり。

一、協議員会を廃止する。常設の議決機関として代議員会をおく。代議員会は校友会総務と各クラスからそれぞれ三名選出される。執行機関としては、会長のもとにあらたにルーム長会を新設する。

二、定例生徒総会を年二回開催する。

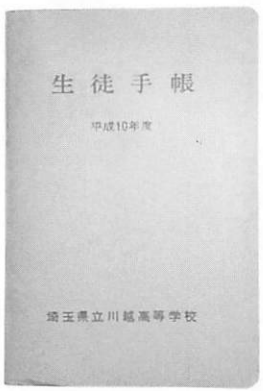
三、クラブ新設は、五名以上が会長へ申請し、代議員会、総会の承認によって成立する。合併、廃止については、部員の三分の二以上の賛成か、総会の過半数の賛成によって成立する。

四、審査員会は、学期末ごとに、部費使用状況を審査しなければならない。

だが、一九六三年十月二十四日の総会では学校側の提案になる新会則が成立した。生徒会草案と異なり、代議員会は置かず協議員会を残すことになった。最高の議決機関として定例生徒総会を年一回開催し、予算、決算、会則変更、改廃追加などを議決することとした。また、あらたに総務委員会を設け、年間計画を作り協議員会の承認を受けることとした。総務委員会は議決機関の議決にしたがって生徒会の運営執行にあたる（草案のルーム長会議にあたる）。

部の新設は発起人一〇名以上の署名申請書を会長に提出し、協議員会の承認により成立する。合併、廃止は部員の三分の二以上の意思表示を受け、協議員会が承認する。

新会則成立の生徒総会は拍手による議決だったため、以後の総会運営について、審査員会が審議することになった。



現在の生徒手帳には、生徒会会則はもちろん憲法前文ものっている

25（水）文化祭準備のため前日からの泊まり込み許可
28（土）文化祭（～29日）
10・6（日）第一六回体育祭
21（月）中間考査（～24日）
29（火）映画教室（講堂）
11・4（月）善枝地蔵（狭山事件）供養募金生徒分一万二四〇五円
9（土）修学旅行（～14日、四国、関西）
15（金）暴力的不良行為防止条例施行
16（土）能研テスト実施
18（月）日課表変更（九時十分始業）
12・11（水）期末考査（～14日）
13（金）生徒手帳作成委員会発足
16（月）校内球技大会
18（水）校内駅伝
24（火）終業式
1・8（水）始業式
11（土）学則改正を承認
30（木）保護者への連絡紙「川高通信」第一号発行
2・4（火）三年、学年末考査（～7日）
一、二年、実力考査（～5日）
7（金）予餞会
3・2（月）入学志願者学力検査（～3日、九科目）
10（火）第一六回卒業式
11（水）学年末試験（～14日）
24（火）終業式

昭和39年

1964

高19回

音楽部、NHK全国コンクール優勝。運動部、文化祭に初参加。

創部十四年目の音楽部がNHK主催全国音楽コンクールで優勝した。全部員九〇名のうち二、三年生から選抜した三六名が、七月二十四日、課題曲「曲り角」、随意曲「月の夜」を指揮牧野統教諭、伴奏小高秀一（高11）教諭で歌い、一五校中一位で県予選突破。次いで、八月二十三日、代表九校による関東甲信越大会へ出場。七回目の出場で初めて前年度全国優勝校を破り全国大会への出場権を得た。

九月十三日の全国大会は、関東甲信越大会と同じく放送によって審査が行われ、全国一〇地区から参加した代表校のトップになった。その模様は二十七日にテレビ、ラジオを通じて全国放送された。当日、結果を待っていた音楽部員は、正午のNHKニュースで「今年度の第一位は関東甲…」と告げると、一斉に歓声をあげた。

文化祭、全校規模となる

文化祭は、この年初めて、川越市民会館を第二会場として使用するようになった。弁論部が第二回初雁杯争奪全関東高等学校弁論大会、吹奏楽部が三部構成の発表、演劇部が「海の底の六人」を公演、応援団が定時制との合同演技を行った。

十月二日、本川越駅から市民会館まで吹奏楽部と応援団がパレードを行った。体育祭での仮装行列上位クラスのこのパレードへの参加は、前日になって中止とされた。

この年の前夜祭は運動部が計画をたてた。今までは、ほとんどが文化部のみの「祭り」であったが、運動部の参加により、全校規模の文化祭になってきた。十月四日のフォークダンスには川越女子高ダンス部を招き盛況だった。そのため文化祭展示、発

4・8（水）始業式　入学式
18（土）弁論部　音楽部　新入生歓迎会
24（金）三年、第一回模擬試験
25（土）新入生歓迎　演劇部公演
5・1（金）一、二年、実力考査
2（土）新入生歓迎マラソン
10（日）同窓会総会
19（火）第二回模擬試験
22（金）中間考査（～26日）
28（木）開校記念日
6・5（金）第五回熊高交歓会
7・8（水）期末考査（～11日）
20（月）終業式
8・1（土）一年、登校日
11（火）二年、登校日
21（金）三年、登校日
9・1（火）始業式
4（金）一、二年、実力考査
13（日）音楽部NHK全国コンクールで一位

音楽部全国コンクール優勝トロフィー

日本▶東京オリンピック開催。東京モノレール、東海道新幹線開業。新潟地震起こる。米原潜佐世保入港。
世界▶トンキン湾事件、米、北ベトナム攻撃開始。パレスチナ解放機構（PLO）結成。サルトル、ノーベル賞辞退。

表が閑散となったため、予定を早めてダンスを終わりにした。

ホームルーム交流会

九月十二日、三年H組がフォークダンス、討論会などの交流会を、川越女子高三年十組と行った。次いで三年B組も三年四組との交流会を行った。この後、多くのクラスが計画を立てたが、学校側はホームルームの時間が各校まちまちであるなどの理由でストップをかけた。翌年二月十六日川越市内高校の担当教員による協議が行われ、当面交流会は行わないことになった。

クラブの交流会は、音楽部が一九六一年浦和一女高と長瀞「青年の家」で交流会をもつなど、各部で行われていたが、ホームルーム交流会は今回が初めてであった。

その後、交流会の復活は一九七〇年まで待たなければならなかった。

川越女子高とのホームルーム交流会

オリンピックを見る

十月十日より東京オリンピックが開催され、埼玉県もサッカーなどの会場になった。本校では、バスケット、水泳、体操の競技など、授業短縮をして見学会を実施した。

オリンピック開催に合わせて郷土美化運動が展開され、捨てない、壊さない、汚さないの「三ない運動」が行われた。人文科学部を中心に「三ない運動促進委員会」を設置したが効果はあまりなかったようだ。

クラス対抗駅伝中止

一九六三年十二月十八日の第一一回をもってクラス対抗駅伝の中止が決定され、本年度は実施されなかった。交通事情が悪化したためである。次年度以降はコースを変えて行うか、「歩け、歩け」にするかが検討された。

その結果、一九六五年度は、新入生歓迎マラソンコースを一部変更して復活実施することとなる。

15(火)第三回模擬試験(～16日)
29(火)第一七回体育祭
10・2(金)市内行進　吹奏楽部と応援団(本川越～市民会館、三時から)
文化祭前夜祭(体育館)
3(土)文化祭(～4日)
8(木)一年、講演会(六限)吉田教頭
10(土)東京オリンピック開会式
期間中テレビを講堂に設置
11(日)オリンピック、サッカー見学(一年)
12(月)オリンピック、サッカー見学(二年)
18(日)オリンピック、バスケット、水泳、体操見学
26(月)中間考査(～29日)
11・2(月)第四回模擬試験
11(水)二年修学旅行(～16日)
16(月)日課表変更(九時十五分始業)
12・11(金)期末考査(～15日)
16(水)球技大会(～21日)
24(木)終業式
1・8(金)始業式
2・3(水)三年、学年末考査(～6日)
4(木)一、二年、実力考査
8(月)予餞会(市民会館)
3・1(月)入学志願者学力検査(～2日、九科目)
10(水)第一七回卒業式
12(金)学年末考査(～16日)
24(水)終業式

昭和40年

1965

高20回

HR（ホームルーム）活性化へ向けて努力。修学旅行に新幹線を初利用。

一、二、三学年ともに一クラス五〇人一〇クラス、全学年三〇クラス体制になり、学校生活に関してさまざまな努力、工夫が見られるようになった。

この年、ホームルーム活動の活性化を図り、生徒自身の手によって運営することを目指して、新たに増田、富樫、鈴木教諭を担当者にホームルーム委員会が発足した。ホームルーム活性化の努力のために、委員会が壁新聞を発行したり、レクリエーション費用を学校側が出したり、さまざまな努力がなされた。

川越高校ではすでに一九六〇年からホームルームの時間に、クラブ活動とホームルームを交互に行っていた。ホームルームの時間をA、Bと二つに分け、Aではクラス討論、レコード鑑賞、市内見学など本来のホームルーム活動を行い、Bではクラブ活動を行っていた。一九六三年四月から新教育課程になり、ホームルームが必修の一単位となり、活動の見直しが必要になってきた。一九六四年度、ホームルームAに関して、討論会を活発化する方向で議論が起こってきた。しかし、ホームルームの時間が木曜六時限目のため、A、Bともに途中切り上げ、放課などにしたため活動は不活発なままだった。

活性化の努力の一つとしてか、クラス活動を活発にするため、クラス対抗駅伝がコースを変えて復活した。十二月二十一日、新入生歓迎マラソンコースを一部変更し、一区二・二キロ、二区二キロ、三区二・四キロ、四区一・九キロのコースを四周、一六区一六人で実施した。

文化祭も、クラブ対抗のど自慢（台風のため実施されず）など、運動部参加のため

増築された理科棟

4・1(木)第一九代校長小久保宗平氏就任
8(木)始業式　入学式
10(土)新入生歓迎演奏会(講堂)
17(土)新入生歓迎弁論大会(講堂)
27(火)三年、模擬試験
一、二年、実力考査
5・1(土)新入生歓迎マラソン
9(日)同窓会総会
11(火)PT会総会
13(木)映画教室「東京オリンピック」(〜14日、市民会館)
26(水)中間試験(〜31日)
28(金)開校記念日
6・8(火)第六回熊高交歓会
18(金)盗難頻発　貴重品袋備える
7・8(木)期末考査(〜12日)
20(火)終業式
8・2(火)一年、登校日

日本▶「期待される人間像」中間草案。家永教科書裁判始まる。朝永振一郎ノーベル賞。第1回ドラフト会議。
世界▶カトリックとギリシア正教会歴史的和解。米、北ベトナム、ドンホイ爆撃開始。中印国境紛争。

の新たな試みがなされたが、文化部展示、発表へのマンネリ化批判が強く出された。

こうしたなかで、生徒会の文化祭担当者は都立北園高校の文化祭を見学、統一テーマ「安保―沖縄」のもとに、ホームルームの展示発表があることに注目している。

初の新幹線旅行

この年から修学旅行に東海道新幹線「ひかり号」を利用した。十一月十五日から二十日までの六日間、前年同様関西、四国方面に出かけた。乗車時間が短縮され滞在時間に余裕ができたが、その分多くの見学地を回り日程がきつくなった。とくに新たに設定された第一日目の見学は、きつかったようである。生徒の一部には運賃が高くなったことや、沿線の景色が単調であることなどに不満があった。

理科棟増築

前年度二月に着工された理科棟増築工事が九月に竣工した。かねてより定時制念願の調理室（全日制でもHRなどで使用）が一階に、被服室が二階に、三階には普通教室、四階に地学の実験室、準備室、研究室、講義室と書道教室、普通教室二室が作られた。一九六三年度から学習指導要領が改訂され、地学と地理が一年の必修科目になったこと、また第一次戦後ベビーブームによる生徒数激増のピークがこの年になり、二年前より六学級増になることから教室増が必要となり、それに対応する処置であった。

一回限りのスケート教室

一九六六年二月二十日、富士五湖国際スケートセンターで、一、二年生一三九名が参加してスケート教室が開催された。

しかしスケート教室はこの一回限りで中止となり、翌年度には、これにかわってスキー教室が開催された。

最初のスキー教室は一九五五年二月十一日、福島県沼尻で一、二年生有志が参加して行われた。その後しばらく開催されず、一九六二年になって十二月二十八日から三十日まで、群馬県草津温泉スキー場で一年生四五名が参加して開催された。翌年度から学校行事として定着させる予定であったが、実現しなかった。

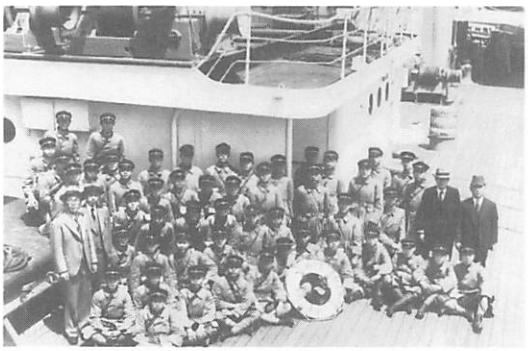
スキー教室が学校行事として定着するのは一九八一（昭和五六）年度からである。

11(水)二年、登校日
21(土)三年、登校日
9・1(水)始業式
4(土)一、二年、実力考査
9(木)水泳大会予選
10(金)新館増築　教室、給食室拡張事務室拡張落成式
12(日)音楽部NHKコンクール全国二位
18(土)文化祭(～19日)
28(火)音楽部、フジテレビ「モーニングショー」に出演(三六名)
10・10(日)第一八回秋季体育祭
22(金)中間考査(～26日)
11・15(月)二年、修学旅行(～20日)
12・11(土)期末考査(～14日)
16(木)球技大会(～20日)
21(火)校内駅伝大会
24(金)終業式
1・8(土)始業式
2・1(火)三年、学年末考査(～5日)
4(金)一、二年、実力考査
11(金)予餞会
20(日)スケート教室
3・1(火)入学志願者学力検査(～2日、九科目)
10(木)第一八回卒業式
11(金)学年末考査(～15日)
24(木)終業式

修学旅行

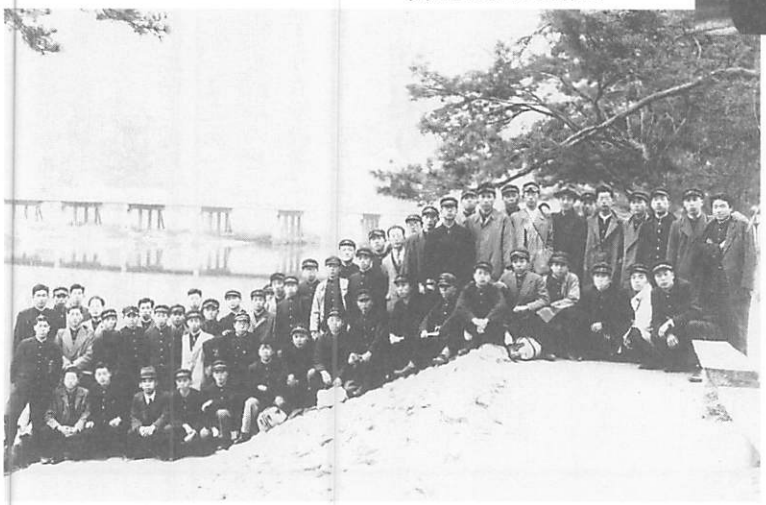
開校当初から実施されていた修学旅行であるが、戦時色の強まった一九四一年の「参宮旅行」を最後にしばらく中断。戦後は経済事情により、日光組、関西組に分かれて再開されている。

今では飛行機も利用できるようになった修学旅行であるが、変わらないのはバスガイドとの記念撮影であろう。



1941年、特別に実施された参宮旅行。（日枝丸船上で）

バスガイドと記念撮影（1950）



嵐山、渡月橋前で（1950）。費用2000円の京都組

日光組の費用は600円と米５合。陽明門前で（1950）

修学旅行列車内部（1960）

二見ノ浦の夫婦岩で（1956）